
嵐を呼ぶ園児、外史へ立つ

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嵐を呼ぶ園児、外史へ立つ

【Zコード】

Z0708V

【作者名】

M R Z

【あらすじ】

春日部に住む五歳児がある二人組の陰謀により外史へと送られる。そこで彼を待つのはかつての戦国に勝るとも劣らない乱世の嵐。一体彼はそこでどんな嵐を巻き起こすのか？ Arcadiaでも投稿していたものです。

第一話

時は紀元三世紀。日本は卑弥呼の時代。現在の中国はまだ漢王朝が存在していた。その力は衰退し、徐々に乱世の様相を呈し出した頃。大陸にどこからともなく広まつた予言があつた。

世乱れる時、天より御遣い現れり。その者、嵐を呼ぶが乱世を止める者なり。

この言葉を誰もが聞いたが、ほとんど信じる者はいなかつた。しかし、中には信じる者もいた。そう、そんなものにも縋りたい程にこの国を憂いでいる者達だ。苦しむ者達を救おうと動く者や、己が力の無さに涙する者。優しき故に、彼らは願つた。この大陸に平穏を、と。

その想いは力となり、予言を実現しようと動き出す。外史と呼ばれる世界。本筋ではない歴史。E.T.つまりあつたかもしけなかつた可能性の世界。そこへ、今まさに救世主が降り立とうとしていた……

場所は変わって、現代は春日都市。そこにある住宅地のとある一軒家。そこに住む家族達が、実は何気に何度も世界を救つた事を知る者は少ない。その家族の名は野原家。そして、主役はその長男。

「ふあ～あ……ヒマだぞ」

今日は日曜日。彼は寝坊したため、買い物へ出た両親と妹に置いていかれたのだ。仕方ないので、作つてあつたおにぎりを食べ、居

間で横になりながら普段の格好で覗いでいた。赤い上着に半ズボン。どこかにいそうでいない少年がそこにはいた。

彼の名は野原しんのすけ。チョコビと綺麗なお姉さんが好きで、納豆にはネギを入れるタイプの五歳児。憧れの人物はアクション仮面にカンタムロボ、そして救いのヒーローぶりぶりざえもんだ。

しんのすけはおにぎりを食べ終わると、する事がないとばかりにアクビをした。庭には彼の愛犬シロがいる。それを思い出し、散歩でもして暇を潰すかと考えた。

「そうだ。シロの散歩でもするだ」

自分一人で留守番にも関らず、家を空けようと考える所が子供、いや彼らしい。更に、本来毎日のようにしなければならない散歩を、暇潰しでしか思い出さないところに彼の彼たる所以がある。ともあれ、彼は玄関へ向かい靴を履こうとした。だが、ある事を思いついて再び居間へと戻った。

そして、おもちゃ箱を漁ると何かを取り出した。それはアクション仮面のヘルメットとカンタムロボのフィギュアだ。散歩がてらパトロールをしようとも思ったのだろうか。ともあれ、しんのすけはヘルメットを被り、フィギュアを片手に玄関へ。

「ほつほほ~い。シロ~、散歩に行くぞ~」

「キヤ……クウ~ン?」

しんのすけの言葉に嬉しそうな声を返そうとしたシロだったが、その姿に疑問を浮かべて首を傾げた。それにしんのすけは自慢げに胸を張る。

「世の中はぶつねーだから、これで身の安全を保じよーするだ。わ
つかまつまつまつー！」

「クウ～ン……」

高笑いをするしんのすけを見て、シロは頑垂れる。いつものように行動だが、やはり脱力するのは脱力するのだらう。しかし、散歩に連れて行つてもらえるのは嬉しいので、シロはすぐに立ち直る。そして、シロの首に紐を結び、それをしっかりと手にしてしんのすけは頷いた。準備は整つた。後は行くのみだ。そう言つようが、しんのすけはポーズを取つた。

「出発おしん!」～～

「キヤン～！」

そうして動き出すしんのすけとシロだつたが、何かに気付いたのかその足を止めた。地面に大きな影が出来ていたのだ。それを確認し、しんのすけとシロは視線を影を作つているものがある方向へ向けた。すると、そこには古そうな鏡を持った男性がいた。

その視線はしんのすけを品定めするかのようだ。それを受け、しんのすけは軽く息を呑んだ。そして……

「そんなに見つめちやいや～ん

身をよじるよじるに変な声を出した。それに相手も虚を突かれたのかやや体勢を崩したものの、即座に建て直し先程とは違つた視線をしんのすけに向ける。

「……干吉が言つていた通り、こいつなら確かにあの外史を終わら

セセツだ

「ゆきち? ゆきちなら母ちゃんが大好きだぞ。でも、すぐおサイフからいなくなっちゃうんだって」

「諭吉じゃない! 千吉だ!」

しんのすけの言い間違いに、男性は怒つて返した。その怒声を聞いていたしんのすけは驚くどころか、むしろ納得したというように頷いていた。日ごろから母親に怒鳴られている彼にとって、怒鳴られるのは慣れているのだ。

「ほ~ほ~。で、お兄さんはオラに何かご用? オラ、忙しいんだよね。すけじるが会議で遅刻しそうなんだ」

先程まで暇だからと言っていたにも関わらず、しんのすけは、まるで急いでいるビジネスマンのように腕を指差してそう告げた。当然だが、その腕に時計などはない。それを聞いて怒りを感じる男性だったが、それを何とか押し止める。相手は子供だと、そう言い聞かせていた。

そして、一度深呼吸をすると手にした鏡を見せて尋ねた。それは、しんのすけの性格を事前に知っていたかのような誘い文句。こう言えれば絶対にしんのすけが乗つてくるだろう聞き方。

「なあ、綺麗なお姉さん達に会いたくないか?」

「会いたいっ!」

即答だった。思わず尋ねた男性が戸惑つ程に。予想はしていたのだろうが、それでもやはり、五歳児が女目当てで行動するなどビックリ

かで信じられなかつたのだ。僅かに沈黙し、男性は氣を取り直して咳払い。

「なら、この鏡を割れ。そうすれば、お前の願いは叶う」

「おへ、お兄さんはインチキ商売の人？」

「違う！ その鏡はただでくれてやる！」

「おお、ふとももー！」

「それを言つなら太つ腹だ」

嬉々として鏡を受け取るしんのすけ。そして、それを一通り眺めて叩き割ろうと上に持ち上げた。それを見て密かにほくそ笑む男性。シロはその笑みに何か邪悪なものを感じ取り、しんのすけを止めようとした。

「キャンキャンッ！」

「ちつ！ 犬め！」

シロの声がしんのすけへの注意だと察し、男性はやや焦ったような表情を浮かべた。しんのすけはそんなシロの声に……

「おわつ！ もー、いきなり吠えないでよ

驚いて鏡から手を離した。その瞬間、シロと男性が揃つてずつこけたのは言つまでもない。鏡は地面に落ちて、見事に割れる。そして、そこから眩い光が溢れ出し、しんのすけとシロを包む。

その眩しさに目を瞑るシロ。しんのすけは、アクション仮面のヘルメットのおかげで特に強い眩しさを感じなかつたが、それでも驚く程の光だつた。

「おおっ！ これは何かが起きる予感！」

その言葉を最後にしんのすけとシロの姿は消えた。それを見届け、男性は不敵に笑う。しんのすけが送られた場所は、彼らが手を出せない場所。その基を作りし存在が彼らを排除したために、彼らは手を出す事が出来ない。

だから、彼らは考えた。その場所を終わらせるために、本来現れるだろう者を排除するように別の者を送るうと。そして、その相手にはその場所に愛着も縁もなく、守ろうと思つても守れない者を選んだのだ。この世界を何度も救つた存在である彼を。

しかも、ただそれでは面白くないとばかりに、彼らは可能性を抱かせる存在にしたのだ。自分達を排除した場所でのうのうと暮らす人形達を、とことん絶望させるために。故に、彼らはしんのすけを選んだのだ。この世界を何度も救つた存在である彼を。

精々足掻けよ小僧。お前の力は、絆は、そこにはない。

どこまでも広がる荒野。見渡す限り何もないそこに、しんのすけとシロはいた。気を失つたまま、仲良く倒れるしんのすけとシロ。そこへ三人組の男達が姿を見せた。長身の男を中心に、両脇には小柄の男と大柄の男がいた。

三人はしんのすけとシロを見つけ、特にそのしんのすけの格好に驚いた。

「あ、アニキ、あのガキ見た事もない兜つけてますぜー。」

「ほ、ほんとなんだな。あれ、珍しいんだな」

「……そうだな。よし、なら早いとこ奪つちまつぞ。さすがにガキを殺すのは気が引けるしな」

盗賊の彼らだが、その心中にもまだ僅かな良心は残っていたのか、リーダー格の長身の男はそう言つてしんのすけ達に近付いていく。それと同時にまずシロが田を覚ました。複数の足音を聞いて田覚めたのだ。

そして、まず周囲を確認しそこが自分の知る場所でない事を理解すると、隣のしんのすけに気付いた。倒れている事に多少驚きはしたものの、ただ氣を失っているだけと分かったのか、安堵するように息を吐いた。

「クウ？」

だが、そこでシロは三人組に気付いた。そして、その嗅覚で彼らから血の匂いがする事を察して、やや不思議そうに首を傾げた。平和な現代日本で生活しているシロにとって、血の匂いがする者は怪我をしている者だった。

だが、田の前の三人には怪我らしい怪我は見当たらないのだから。しかも、その匂いが強いので余計にシロは疑問を感じていた。そのままシロはしんのすけの傍に立ち、三人を見つめていた。

やがて、三人がもう後少しと言つ所まで来て、やつとシロはその異様な雰囲気に気付いた。更に手にした武器を見たのだから、さあ大変。しんのすけ起こすように、器用に一本足で立ち上がりその

体を揺すつた。

その行動に三人組は慌てる前に驚いた。そして、小柄な男が長身の男へある事を思いついたのか、こう提案した。

「アニキ、あの生き物捕まえて見世物にしましょうや！」

「あ、あの芸やらせたらつけそつなんだな」

「それはいいな。じゃあ、あれも頂いていくか」

その会話を聞き、シロは余計慌ててしんのすけを起しす。その必死さが伝わったのか、しんのすけはやつと起き上ると、大きくアクビをして周囲を見回した。その目に映る光景が先程までとまったく違う事に気付き、彼は一人頷いた。

そんな暢気なしんのすけへシロは前足で三人を指した。危機が迫つてゐる。そんな風な表情まで浮かべて。それにしんのすけも気付き、視線を三人へ向けた。そこにいる者達が手に武器を持つてゐる事にしんのすけは驚きを見せる。

「あ～っ！ 映画の撮影だ～！」

「「「えいが？」」

しんのすけの放つた聞いた事もない言葉に、三人は揃つて足を止める。シロはその発言に全身の力が抜けた。その間にもしんのすけは走り出して、三人の近くへ向かつた。その速さには、三人も驚くぐらいいに。

その手にした武器を見て、どこで買ったのやどんな映画などと尋ねるしんのすけ。三人はそれに困惑するも、普通ならば武器に怯えるはずの子供が、むしろ嬉々としている事に戸惑っていた。

「ど、どひするんだな？」

「アニキい、こいつおかしいですぜ」

「かもしだねえな。おい、坊主

「な、に？」

見た目と同じようにおかしな存在かもしれない。そんな風に感じた三人。長身の男は、リーダーらしくしんのすけへ声をかけた。

「これが何か分かってんのか？」

「？ 剣だぞ」

「分かつてんじゃね、か。なら、大人しくその兜を渡しな」

男の言葉にしんのすけはやや考え、何かを理解したのか手を叩いた。そして、どこか仕方ないといった表情になり、ヘルメットを外してこう告げた。

「もう、おじさんもアクション仮面じつしたいんだな。それならそうと誓つてよね」

「あく……何だつて？」

「仮面がどうのつて言つてました」

「い、いまいちよく分からんのだな」

しんのすけの言った内容に疑問符しかない男達。それでも、しんのすけが大人しくヘルメットを渡してくれそうなので、黙つて受け取ろうとした。だがその時だ。どこからともなく一陣の風が現れた。その風は、ヘルメットを受け取ろうとしていた男の手を跳ね除け、しんのすけを庇うように立ちはだかつた。

「そこまでだ！ 幼い者から物を奪おうなど、この趙子龍が許さんっ！」

白い服装の槍の女性は、そう力強く告げる。その威風堂々の声に、愚かにも男達は立ち向かおうとする。互いの力量を測れないその行動に、彼女はどこか哀れむような目を見せる。

だが、同時に自分の後ろにいるしんのすけの事を思い出したのか、男達へ向けた槍の刃を密かに返した。大柄の男は武器を斬られ、小柄の男は持ち手の部分で強打され、長身の男はそこで力量さを知り、慌てて逃げ出した。

それを見つめる女性。本当なら追い駆けたいが、それが出来ずにはいた。それは、先程から自分の服の裾を掴んでいる手があるからだ。

（悪を捨て置く事は出来んが、この幼子を置いて行くのはもつと出来ん。このように寂しがられては……な）

小さく笑みを浮かべ、女性はしんのすけの方へ向き直った。その視線を合わせると、しんのすけはやや驚いたような顔を見せる。

「お姉さん、びつじん！ カツコイイー オラとお茶しない？」

「え、遠慮しておこひ……」

「星、賊は追い払ったのですか？」

「おや～？　これはまた変わった物を持つてますね～」

予想だにしないしんのすけの反応。それに女性は普段の飄々さも無くし、微かに動搖した。まさか命を助けた幼子から、いきなり誘いを受けるなどと誰が思うか。そこへ、彼女の旅の連れが現れた。眼鏡の女性と頭に妙な物を載せた女性だ。それに女性としんのすけが同時に振り向く。そして、一人を見てしんのすけは、またもや感嘆の声を上げた。一人もまた綺麗なお姉さんだったのだ。

「ヘイヘイそこ」の眼鏡のおねいさん、ピーマン食べれる？？

「は？　ピーマン？」

「聞いた事のない名前ですね。食べ物のようですが、どこの物でしょ～？」

「私としては、その足元の兜のような物と、その生き物が気になるのだが」

その言葉に女性達の視線が一気にシロへ向けられた。それにシロは軽く首を傾げた。その仕草の可愛さに女性達に笑みが浮かぶ。中々賢そうだと誰かが言えば、愛嬌もありますと続く。そんな風にシロが三人に構われているのを見て、しんのすけは何かを思い出したかのように周囲を見渡し、三人へ尋ねた。

「ね、カメラはどう？」

「 「 「かめい？」」「」

しんのすけの言葉に揃つて首を傾げ、眼鏡の女性が代表してしんのすけへ尋ねた。それは、カメラの事やピーマンの事だけではなく、しんのすけ自身の事にまで及んだ。そこでしんのすけは庭で会った男性と、鏡の事を話した。

その内容は俄かには信じられないものがあつたが、しんのすけの存在とヘルメット、そしてフィギュアなどがそれを渋々ながら納得させた。そうして、しんのすけが話し終わつた時、ふと気付いたのだ。まだ三人の名前を聞いていないこと。

「ねえ、お姉さん達の名前は？ オラは、野原しんのすけ五歳」

「……野が性で、名が原。字がしんのすけでしょうか？ この歳で字は珍しいですね」

「性？ 名？ オラ、苗字が野原だぞ。名前がしんのすけ

「……どうやら本当に別の場所から来たようだ。では、真名も知らないだろ？」

そう告げて、白い服の女性はしんのすけへ軽く真名の説明をした後、笑顔で名乗る。

「私は性が趙、名は雲、字は子龍だ」

「私は性が程、名は立、字は仲徳ですよ」

「私は、性が郭、名は嘉、字は奉孝です」

そう眼鏡の女性が名乗った時、他の一人がやや驚いた表情を見せた。そう、彼女は偽名を使っていたはずだつたのだ。それを使わなかつた事に驚いたのだろうと、彼女も分かつたのだろう。やや苦笑しながらこう言つた。

子供相手に名を隠す必要はない。それに、どうも田の前の相手は物覚えがあまりよくなさそうだからと。それに一人も納得。しんのすけは自分が馬鹿にされたと思わず、どこか嬉しそうに手を頭に置いていた。

「あは～、それほどでも～」

「～～～誉めてない（ですよ）」

「クウ～ン」

見事に突っ込みが一致する三人。しかも、普段ならば突っ込みをされる程立まで突っ込むという有様。だが、しんのすけはそれに感心したように頷いた。何故か、郭嘉と程立が仲の良い友人達を思い出させたのだ。

（眼鏡のお姉さんは風間君に似てる気がする。こいつの……飴のお姉さんはボーチャんだぞ）

唯一趙雲だけ当てはまる相手が友人ではないが、ある人物がしんのすけの脳裏をよぎる。それは、彼が好きな正義の味方。颯爽と高笑いと共に現れるヒーロー。

（槍のお姉さんは、アクション仮面だ！）

先程の出来事を思い出し、しんのすけは一人頷いた。ここがどこ

かは知らないが、アクション仮面と一緒になら怖いものはないだろうと。だから、しんのすけはシロの体を抱き抱え、三人へ視線を向けた。

「ね、オラ、お姉さん達と一緒にいたい」

その声には寂しさはなかった。代わりに込められたのは、純粹な願い。それに三人は揃つて悩む。確かに子供であるしんのすけをして行くのは忍びない。だが、子供を連れて行ける程楽な旅路でもない。

それに、いつまでこの三人で旅をするかも分からないのだ。正直、趙雲がいなくなれば、しんのすけは完全に邪魔者となる。だが、それでもしんのすけを置いていこうと決断出来る者はいなかつた。

互いに視線で見つめ合い、誰ともなく苦笑混じりに頷いた。この大陸を憂いでいる三人にとって、子供は次代を築く希望。故に見捨てるなどは有り得ない。更に、自分達の知らない事を知つてているしんのすけは、下手をすれば見世物にされる可能性もない訳ではない。

「辛い旅ですよ？」

「オラ、平氣」

「怖い思いをするかもせんよ～？」

「オラ、男の子だぞ」

「ならば共に行くか、しんのすけ」

「ブツラジャ～」

「キャンキャン」

「ひしてしんのすけは、趙雲達と共に大陸を歩く事になる。これが、後に始まる風雲の幕開けとは知らないまま。多くの出会いと別れ、そして戦いを経験し、少年はまた大人への階段を昇る。かつての様々な思い出を胸に……」

色々と未熟な点が多いかと思いますが、寛大な心で見てやってください。

第一話

「そうか。しんのすけは妹がいるのだな」

「そうだよ。ひまわりって言って、すうじく元気なんだぞ」

あれからしばらく経ち、日も暮れ始めた頃、しんのすけ達は森の中の川が流れる場所にいた。野宿するためだ。そこで焚き火を囲みながら、しんのすけの家族の話を聞いていた。最初はシロの事を話していた。そこから派生し、家族の事になつていったのだ。

父のひろしと母のみさえ。その一人の話を聞いた三人の反応は様々だった。だが、揃つて根底には同じ気持ちがあった。それは、しんのすけが愛されているのだろうという想い。どこでも親の気持ちは変わらないのだと、そう感じて三人は微笑みを浮かべたのだから。

そして、最後は妹であるひまわり。その行動力を話すしんのすけは実にイキイキとしていて、尚且つどこか嬉しそうだった。兄だからなのかもしれない、三人は思った。しんのすけには、幼くして守りたい者がいる。そんな事を思い、三人は笑みを見せると共に、複雑な表情を見せた。

そう、しんのすけが元居た場所に戻れるのかと、そう考えていたからだ。聞けば、しんのすけがここへ来たのは妙な鏡のせいらしい。となれば、その鏡を見つけるのが一番早いのだろうが、しんのすけ自身もあまり鏡の詳しい形状や装飾は覚えておらず、手掛かりはないに等しかったのだ。

だからだ。そんな不吉な考えを振り払つかのように、郭嘉は笑みを見せて尋ねる事にした。

「それにしても、聞いた事のない名前ですね。何か意味はあるのですか？」

「ひまわりって言つてお花があるんだ。お日様みたいな形で、二～三
に大きいんだぞ」

「おお、太陽の花ですか。それは一度見てみたいですね~」

「成程な。しんのすけの両親は、娘に日輪のような大輪の花を咲か
せて欲しいと願つたのだろう」

しんのすけの世界の名付けにもちゃんとした理由がある。そう感
じ取つた趙雲。それにしんのすけが驚いた。彼にとつては、ひまわ
りの名前はただ花の名前と同じでしかなかつたのだ。そこにそんな
意味が込める事が出来るなど、考えもしなかつた。

そう、ひまわりの名前はしんのすけが名付けたのだから。星のよ
うに、ひろしやみさえが思つているのかもしぬれない。そう考えた。
故に感動して、視線を趙雲へと向けた。そこには、驚きと感心、そ
して尊敬の念が込められている。

「お~、星お姉さんは父ちゃんや母ちゃんみたいな考え方が出来るの
かあ」

「いや、そうではないかと思つただけだ」

しんのすけの言つ方に星はどうか違和感を感じるも、笑みと共に
そう返した。そう、しんのすけに真名を呼ばれても、星は何も怒り
はしない。そう、既に三人はしんのすけへ真名を預けたのだ。それ
は、時は遡る事数時間前。あの後すぐの事……

荒野を歩くしんのすけ達。何故か趙雲がヘルメットを被っている。ただし、子供用のためややきつそうではあったが。その理由はただ一つ。そう、しんのすけだ。

最初、邪魔にならないようにしまって郭嘉が言ったのだが、しんのすけがそれを嫌がった。その目的は、趙雲にそれを被つてもうつため。

これはオラの大好きな正義の味方の仮面だぞ。お姉さんは正義の味方だから、これを被つて欲しいんだ！

そんな風に言われて、趙雲が被らぬはずはない。ならばと、しんのすけからヘルメットを受け取り、それを装着。その光景に何か感動しているようなしんのすけ。そして趙雲へ、しんのすけがあのポーズをして見せる。それはアクション仮面の決めポーズ。勝利の高笑いをする際のもの。

そして、そのポーズのままこう言つたのだ。正義の味方は、悪を倒したのなら必ず勝利の高笑いをしなければならないと。その際の決まり事として、しんのすけはそのポーズを義務付けた。それを少しも嫌がる素振りもなく、むしろ望むところとばかりに趙雲も真似をした。

「いひか？」

「も少し上だぞ」

腕の角度を指摘するしんのすけと、それに頷いて腕の位置を変える趙雲。それを見て、頭を抱えたくなる郭嘉と楽しそうに笑う程立。そしてシロは、何となくではあるがしんのすけの影響力を感じて、

諦めたように頃垂れていた。

やがて、ポーズが決まり、しんのすけが軽く打ち合わせをする。それに頷き、しんのすけの声を合図にそれは始まった。

「わっはっはっはー！」

「わっはっはっはー！」

「「わ～つ、はっはっはっはっはっはっはーーー！」」

最後には共に声を合わせる一人。それに郭嘉は頃垂れ、程立は心から笑顔を見せ、シロはノリノリの趙雲の姿に脱力感を感じて地面に伏した。その高笑いはたつぱり一分は続き、それを終えた趙雲は実にイイ笑顔だった。

「つむ、気に入った。しんのすけ、機会があれば是非またやろう」

「いいよ。槍のお姉さんとなら大歓迎だぞ」

そのやり取りを聞き、郭嘉がやや不思議そうに尋ねた。

「しんのすけ、星の名を呼ばないのはどうしてですか？」

「お姉さん達の名前、難しいや。オラ、まだ五歳だし、聞いたの一回だし、そんな期待されても困っちゃう」

最後にはやや困った表情で告げるしんのすけ。そんな答えに苦笑する趙雲と程立。郭嘉はそれに成程と頷いて、ふと思つた事を告げた。それは、しんのすけの真名。確かに色々と違いはあるが、もしかすると真名に似たモノが存在しているかもしねりない。

そう判断し、郭嘉は出来るだけ早くそれを片付けようと思つた。自分達からすれば、真名が持つ意味は大きい。それと同じようなものをしんのすけが持つていて、知らずそれを呼ぶ事があつたとしたのなら許される事ではないと。

「しんのすけ、一ついいですか?」

「何? しかじかお姉さん」

しんのすけの言ったしかじかは、郭嘉の名の響きを覚えていたから呼び方だ。かくかくときたらしかじか。そういう事だ。

「しか……ま、まあいいでしょ? 貴方の国には、真名はないのですよね?」

「まな? まな板胸のみさえならこるよ」

その答えに今度こそ郭嘉は脱力。趙雲が軽く説明したはずにも関らず、真名の事を綺麗に忘れていたからではない。自分の母を呼び捨てにし、尚且つ手酷い事を言つたからだ。そんな郭嘉に代わり、程立が説明と質問を続け、しんのすけは確かに真名はないと否定した。だが……

「でも……」

「でも?」

しんのすけのないとの答えに、郭嘉は少し安堵した。しかし、続けてしんのすけが告げた言葉に少しの不安が生まれる。しんのすけはそれに気付かず、こう二人へ告げた。真名はないが、自分の名前

は両親が付けた自分だけのもの。ならそれは、三人の真名みたいなものだから、自分にあると。

それに三人は、納得すると同時にしんのすけの考えに感じ入った。真名の持つ重さは、しんのすけもおぼろげではあるが理解していた。何せ、郭嘉や程立が趙雲を星と呼んだり、逆に彼女達を稟や風と呼ぶのを聞いても、しんのすけがしたのは、どうして別の名前で呼ぶのかと尋ねる事。しかし、それを直接呼ぶ事は無かったのだから。

「……そうだな。確かにお前の名前には、我らの真名に近いものが
あるのかもしれん」

「そうですね。どこでも親がまず直面する難関は名付けです。であ
れば、しんのすけとの名にも、深い想いや考えがあるはず」

郭嘉は知らない。彼のしんのすけとの名前は、考えていた名前を書いた紙が雨で濡れて残った文字の組み合わせだと。しかし、だからこそ思い出深い名前とも言えるので、あながち間違つてもいいだろう。

真名とはその者を表す名。であれば、しんのすけの名は紛れも無く彼を表す名前だ。ともあれ、そんな一人の考え方聞いた程立がどこか意外そうに告げた。

「では、風達は知らず」の子の真名を呼んでいたと……そう考
るのでですか？」

最後の程立の言葉に一人が黙つた。文化が違うと言えばそこまでだが、それでも自分達に置き換えて考えれば、しんのすけ達の態度は実に凄い。本人達にその気はないだろうが、自分の名を誇りに思うからこそ、それを誰にでも呼んで欲しいとしているように思えるのだから。

それは、真名を許した者以外は呼ぶ事を許さない趙雲達からすれば、賛同は出来ない。しかし、それでも理解は出来る。それに、いつまでも槍のお姉さんやしかじかお姉さんでは呼ばれにくいし、少々気まずい。

「しんのすけ、お前に預かつて欲しいものがある」

「何？」

「私の真名だ。受け取ってくれるか？」

「いいの？ それ、大切なお名前で、大事な人にしか教えちゃいけないんでしょ？」

趙雲はそんなしんのすけの深刻そうな声に、小さく苦笑した。五歳でありながら、いつも見知らぬ環境に順応している事と、真名を預かる事の持つ意味を感覚で感じ取っている事に。だからこそ、こう思う。今でこれなら、成長すればどれ程の男になるのかと。

きっと、優しく他者を思いやる強い男になつていただろうにと。その時であれば、この真名を預けるのもまた違う意味を持つただろうに。そんな風に考え、趙雲は優しく笑みを浮かべてしんのすけへ告げた。

「ああ。お前にならいい。何、この仮面を貸してくれた礼だと思つてくれ。私の真名は星だ」

「お～、キレイなお姉さんにぴったりだぞ。ね、真名を預けた記念にオラとお茶でも……」

「誉めてくれたのは嬉しいが、誘いは受けんぞ？」

微笑ましくしんのすけを見つめる星。それを眺め、程立が小さく頷きしんのすけへと近付いた。

「では私も預けちゃいますね～。飴のお姉さんは少し恥ずかしいのですよ」

「う～ん……じゃ、眠そうなお姉さん？」

程立の言葉にしんのすけは少し考え、そう告げた。真名は呼び方に照れるからで預けていいものではない。そう思つたからこそその提案だったのだが、それに怒りを見せる者がいた。

「おわ～おわ～。誰が居眠りしてるので？」

「おわ～！ 飾りが喋った……」

「俺の名は宝？。以後お見知りおきをつてな」

「これ、宝？。あまりしんちゃんを驚かせていけませんよ」

どこからどう聞いても程立の一人芝居。しかし、それをしんのすけは指摘する事もなく、感心したように頷いていた。そんなしんのすけの反応に、程立は笑みを見せて告げる。

何も自分が真名を預けるのは呼ばれ方だけが理由ではない。幼いながらもしっかりと自分の意見を持ち、それで他者を納得させる事が出来たしんのすけだからこそ、自分は真名を預けるのだ。そう言って程立は、その言葉に嬉しそうにしているしんのすけへ真名を名乗つた。

「私の真名は風と重複の重複ですが、 shinちゃん」

「風お姉さんかあ。ん? 今オラの事、 shinちゃんって……」

「駄目ですか? その方が呼び易いのですが~」

風の問い合わせに、 shinのすけは首を横に振った。益々風が友人に重なつたのだ。呼び方や雰囲気、それにどこか只者ではない印象。故に shinのすけは風へこう頼んだ。それは、自分も風の事をちゃん付けで呼んでいいかとのもの。

それに風はどこか意外そうな表情をするが、構わないと許可を出した。それに shinのすけは喜びを見せて、早速とばかりに風を見つめた。

「風ちゃん」

「はーい」

「おー……何か不思議

「風もですよ。まさか子供に真名を預けて、 駄目ひんな風に呼ばれるとは~」

弟が出来たようだと、 そう思に風は笑う。そして同時にまた一つ shinのすけの凄さを再確認していた。それは shinのすけの物怖じの無さ。誰であろうと意見を言う事が出来る。子供だからと、 そう言つてしまつのは容易い。しかし、それでも大人へはつきりと自分の言葉で考えを言えるのは、 風からすれば凄い事だった。

そんな事を風が考えている中、 郭嘉は shinのすけへ真名を預ける

事を躊躇っていた。確かに一人のようにしんのすけの事を買つて、ある部分はある。幼いにも関わらず、この状況に途方に暮れるのではなく、あらう事か笑っている。その心の強さと逞しさに、郭嘉は意外と大人物かもしれないと思つぐらいだ。

だが、それでも真名を預けるに足る相手とは言えない。そんな風に郭嘉が考えていると、しんのすけがそれに気付いて首を傾げた。

「あれ？ しかじかお姉さんどうしたの？」

「か・く・か・です… どうしてこれが覚えられないのですか。余計な事は覚えているよくな」

「いやあ～、それ程でも～」

「誉めていません！」

完全に漫才の様相を呈する一人。郭嘉が何か言う度にしんのすけがそれをからかう、或いは本当に間違える。それに郭嘉が反応して……というのを繰り返し、そんな事をたつぱり五分はしていただろうか。

やがて郭嘉が疲れたのか、もうしんのすけの言葉に取り合わなくなった。無視する事にしたのだ。それに星も風も苦笑する。あの郭嘉が子供相手にある意味で屈したのだ。言葉では止められないと。

「ね～、どうしたの？ 何でもつお話してくれないので？」

「…………」

「オラ、何かしかじかお姉さんを怒らせた事した？」

先程までは必ず修正してきた言葉にも無反応を返す郭嘉。そこにきて、しんのすけもやつと郭嘉を怒らせたのだと理解した。なので、悲しそうな表情を浮かべて郭嘉へ視線を向けた。その日は、見ている者の良心に訴えてくるような眼差しだ。

「ごめんなさい。もう怒らせるような事をしないからお話して。そんな声が聞こえてくるような眼差し攻撃。郭嘉はそれに心を痛める。大人である自分が幼い少年にそんな顔をさせてしまった。その良心の呵責が彼女を襲う。

しかし、これをしんのすけの母が見たのならこう言つたはずだ。相変わらず嘘が上手いわね、と。そう、これは彼の得意技の一つ。その名も、眼差しキラキラ。見る者的心に訴えかけ、自分の状況を改善するために使われる攻撃だ。

これに耐性があるのなら、このしんのすけの眼差しを平然と受け止め、逆に、そもそもお前が悪いと眼差し返しが出来る。だが生憎とそれが可能なのは彼の母であるみたえのみ。

「……っ！ 分かりました、分かりましたからー。許してあげますので、もうそんな顔をしないでください」

「ホント？」

「ええ。本当です」

しんのすけの窺うような言葉に、郭嘉は苦笑混じりに頷いた。どこかで、しんのすけの態度は偽りだと感じているのだろう。その証拠に、それを見た瞬間、しんのすけの表情は喜色満面になる。

「ほっほーいー！ お姉さんがお話してくれたぞー」

そんな豹変振りに、郭嘉は先程のしんのすけがやはり演技していと理解するも、そこに怒りや悔しさはない。むしろ微笑ましかつたのだ。自分と話するためにそこまでする事に。

そして、郭嘉は自分からある意味で一本取ったしんのすけへ、褒美を与える事にした。そう、それは真名を預ける事。考えてみれば、自分もしんのすけの真名を呼んだようなもの。それに、しんのすけは真名の持つ重さを理解している。

(初めて真名を預ける異性は誰だるうと思つていましたが、まさか子供になるとは……ふふ、不思議なものですね)

内心で微笑みながら、郭嘉は視線の先で喜びを爆発させているしのすけを見つめた。そして、しんのすけを手招きし、真名を預けると告げた。それにしんのすけは驚くも、それに郭嘉が嫌なういと言つて預けるのを取り消そうとしたので、慌ててそれを引き止める。

無論、それは郭嘉のちょっとした反撃だ。それにしんのすけは気付かず、郭嘉が預ける事を止めないでくれた事に、心から安堵したよつに息を吐いた。

「えっと……じゃ、稟お姉さんだね」

「ええ、お願ひですから、もうしかじかと呼ばないでくださいね、しんのすけ」

姉の如き笑みを見せる稟。その美しさにしんのすけは軽く魅入る。だが、頼まれ事をされたと氣付いてしつかりと頷き、小指を差し出した。それに首を傾げる稟。だが逆にしんのすけは、稟が小指を出してこない事に疑問を浮かべた。

「？ 真お姉さん、指きりしてられないの？ お約束でしょ？」

「指きり？ ああ、いひすればいいのじょつか」

しんのすけの小指に自分の小指を絡ませる真。それにしんのすけが嬉しそうにやけた。

「あは～、真おねいさんの指、スベスベ～」

だらしなく顔を緩めるしんのすけに、真はやや呆れながらため息を吐いた。しんのすけがこの歳にして女好きなのは理解していたが、それでも未だに違和感が拭えない。誰が五歳で異性に興味を持ち、尚且つ積極的に交渉してくると考えるものか。

真はしんのすけの異常性の一につい、この異性への関心を挙げていた。しかも、どこで知ったのか知らないが、どうやら口説き文句なども使っているのだから。

「……はあ～、それでしんのすけ、これでいいのですか？」

「駄目だぞ。ちゃんとお約束しないこと。指きりげんまん、嘘吐いたら針千本の～ます」

指きりの歌を口ずさむしんのすけ。対する三人はその内容にやや驚いたような表情。約束を破つた時は針を千本も飲まねばならない。そんな厳しい掟を自らと相手に課す。そう捉えたのだらう。

そしてしんのすけが指を離そうとしたのを感じ取り、真もそれに合わせて指を離した。直後に真は少し戸惑つようになしんのすけへ尋ねた。今の言葉は本当なのかと。それにしんのすけが若干不思議そうに首を傾げた。

しんのすけにとつて、これはある意味での恒例行事。約束をした際、守つて欲しい時や守りたい時はするだけの事。そう告げると、三人が一様に息を吐いた。本当に針千本飲むのかと思つたと、そう星が楽しそうに告げると、風はそれぐらい真剣に考えてくれという事だろうと返す。

稟はしんのすけへ視線を向け、風の言つた通りなのかと尋ねると、しんのすけは力強く頷いた。綺麗なお姉さんとの約束は絶対だ。そう断言してみせたのだから。

「綺麗、ですか……本当に貴方は単純ですね」

「え？ キレイな人にキレイって言つちゃ駄目？？」

「いえいえ、違うのですよしんちゃん。稟ちゃんは照れているのです」

「ふ、風？！」

「成程。確かに、女に面と向かつて綺麗と言える男は多いが、それを下心も無しに言える男は少ないだろうからな」

しんのすけの言葉にやや嬉しそうに笑う稟だが、それに対しても風が告げた内容にやや慌てる。そこへ追い打ちをかけるように星がそう言つと、稟は返す言葉を無くした。しんのすけの言葉には、確かに下心がない。

子供らしい純粋さ。どこかマセているのだろうが、その行動に下衆な感情はない。綺麗な女性にすぐ『レーベル』するのは些か問題かもしれないが、それもしんのすけとしては正しい姿なのかもしない。少なくとも、邪なものを隠して近付く大人達よりも、人としては好ましい。

「もう勝手に言つてください。とにかく、これでもう真名の事も叶付きましたね」

そう稟が周囲の空気を変えるようつづけた。すると、それにシロが一聲鳴いた。

「キヤン」

「シロが、自分もお姉さん達を真名で呼んでもいいかって聞いてるぞ?」

「ふつ、やうか。そつこえはシロちゃんの名は真名だつたな」

「そりですね~。まさにシロちゃんの名は真名なのですよ」

「ふふつ、確かにこれ程まで自身を表した名もないでしょ?」

しんのすけの言葉に三人は微笑むと、口々にそつ告げていく。誰もしんのすけの言葉にそんな馬鹿なとは言わない。子供故の解釈の仕方だが、意外と本当にシロもそつ言つてゐる気がしたのだ。だから、三人はシロへも真名を預ける。犬相手にと思う事は無かつた。それは、しんのすけがシロを家族のように接しているから。單なる飼い犬ではないだろう関係。それを三人はそこはかとなく感じていた。こつして、しんのすけとシロは三人の真名を預かる事になつたのだ。

日も完全に暮れ、辺りを闇が包む。その暗さにしんのすけは秋田

の祖父の家に遊びに行つた事を思い出した。周囲に灯りが少ない田舎暮らしの祖父達。そこで泊まつた時経験した夜。それに近いものを感じたために。

そして、そこから付隨して思い出されるは愛する家族達の顔や友人達の顔。その笑顔と声を思い出し、しんのすけは何かこみ上げてくるものを感じた。しかし、それを何とか抑え付け呟く。

「父ちゃん達、元気かな？」

「くう？」

シロをカイロのように抱き抱え、しんのすけはそう呟いた。この世界がどこかをしんのすけは知らない。古代中国は漢王朝の時代。しかし、稟や風からそんな説明を聞いても、五歳のしんのすけがそれを理解出来るはずもなく、ただ自分の知る様々な物がない事から、どことなくここが昔だとは思っていた。

かつて行つた事がある戦国時代。それに似た雰囲気を感じたのもある。なのでしんのすけとしては、ここから元の時代に戻る事が難しいだろうと察していた。あの時も不思議な力や未来人の手を借りて帰還したのだから。

そう考えた途端、しんのすけの心を強烈な恐怖が襲つた。いつもより暗い夜の闇もそれを助長したのかもしれない。腕の中のシロを強く抱きしめ、しんのすけは震える声で問いかげた。

「オラ、お家に帰れるかな……？」

何か暖かいものがしんのすけの頬を流れていく。そして、しんのすけの不安感を感じ取つたように、それをシロが舐める。その瞬間、しんのすけに何かが聞こえた気がした。大丈夫、一人じゃないよ。

僕もここにいる。だから元気を出して shinちゃん。そんな風に、いつか聞いた声で言われた気がして、しんのすけはシロを優しく抱きしめる。それにシロも応じるようにしんのすけの頬へ顔を摺り寄せる。

そんなしんのすけとシロの横で、星達は何も言えなかつた。辺りは静かで、しんのすけの涙ながらの呴きさえはつきり聞こえたからだ。いくら普通の子供とは違う性格とはいえ、まだ五歳の子供には変わらない。それが突然見知らぬ場所に現れ、こんな風に夜を過ごす。その不安感はいかほどだろう。

そんな風に思い、三人はそれぞれにしんのすけへと視線を向けた。そこには、泣いた事で疲れが一気に出たのか、背中を向けて眠るしんのすけの姿がある。

「……何とかして帰れるようにしてやりたいな」

「ええ。情報は少ないですが、諦める訳にはいきません。子供一人助ける事出来ずして、救国など出来ましょうか」

「風達はまだ未熟ですが、しんちゃんとシロちゃんぐらには守れるはずです。星ちゃんは力で、風と裏ちゃんは知恵で」

互いに抱くは決意。大陸の情勢を憂う三人にとつて、子供一人助けてやれないようでは、とてもではないがこの難局を乗り越えるなど無理だ。そう思つからこそその言葉。しかしその根底には、出会つてから今までの時間、気丈にも笑つて話をしていたしんのすけへの思いもある。

大人であろうと混乱し、取り乱してもおかしくない状況。それに僅か五歳の少年は適応しようとした。見知らぬ場所、聞き覚えのない文化。それを子供ならではの柔軟性で受け止めた。だからこそ、

三人はしんのすけを助けたかった。

（芯の強い子だ。最初会った時は些か面食らつたが、やはり子供なのだな。平和な時代に生まれ、暖かな時間を家族と過ごしていたのだろう。出来るならば、早めに帰してやりたいものだ）

（頭の回転が鈍い訳ではなく、理解力がない訳でもない。それが本人の才能なのか両親の教育の賜物かは知りませんが、一つ言えるのは、彼のいた環境こそ私達が目指すもの。しんのすけは私に希望をくれた。いつか、人はそんな時代を築けるのだと。そのお礼に、必ず帰れるように手を尽くしますよ）

（お家が恋しいのですよね。確かにまわりちゃんはまだ立つ事も出来ないとか。それに、ご両親も心配されているでしょう。しんちゃんもシロちゃんも安心してください。風達がいる間は、絶対守つてあげます。それが先に生まれた者の務めなのですよ）

しんのすけとの会話で、三人もまた彼が天から来た者、つまり未来の人間だと察していた。あまりにも多くの聞いた事のない言葉や物の名前を知っているのだ。更に、彼が告げた平成との年号に日本にアメリカなど国の名もそう。しんのすけが挙げた国の名は、一つとして聞き覚えのないものだつたのだから。

故に、彼らは揃つて希望を得た。いつか人は争いのない平和な時代を築いていけるのだと。この乱世もいつか終わりがきて、誰もが笑えるそんな時代に出来る。しんのすけの語る話とその存在は、三人にとって大志を強くする要素となつた。そして、それと同時に思い出す事があった。それは、あの予言。

「やはり……しんのすけが天の御遣いなのだろうか」

「有り得ない、と言いたいですが、やりよつによつては彼の異常性は誰でも分かります」

「あの兜。へるめつとでしたか？　あれは確かにそれを示す一つの道具ですね～」

「そしてあのからくりを模した人形」

「更には、まつたく聞いた事のない名前の物や考え。これだけ揃えば、人によつては民達にそう信じ込ませる事は可能でしょう」

稟の締め括りに、誰も言葉を発しない。信じる者は少ない予言だつたが、それでもどこかで期待している者は多い。その御遣いがまさか子供だとは誰も思つまい。だからこそ、それを話せば揃つて誰もが希望を無くす。しかしそれは、しんのすけの話をただ聞かせるだけではだ。普通に聞いても理解出来ない者や信じない者達もいる。だが、その者達にも分かるように話せば、しんのすけの話は大きな希望だ。

それを誰よりも理解している三人だからこそ、どうするか迷つていた。この広い大陸には聰明な者もいる。そういう相手ならばしんのすけの言葉から眞実を見抜き、希望を強くするだろう。今の三人のように。

それは必ずこの乱世を終わらせる力になる。だが、それはしんのすけを利用する事になる。更に、元の場所へ帰してやる事を遅らせる事にもなりかねない。それは、出来ない。確かにこの乱世を正す事は大切だが、そのために子供を利用するなど、三人には出来るはずがない。

「仮に天の御遣いがしんのすけとして、私には一つだけ言える事が

ある「

星の言葉に一人は視線を向けた。星は傍に置いてあつた槍を手にし、立ち上がった。そしてそれを天へと突き上げ、静かに、だが力強く告げる。

何者であらうと、しんのすけを利用しようとするのなら、この槍で貫こう。

星の言葉に稟と風は互いを見つめ合い、頷いた。そして、立ち上がりて星の両脇へ近付き、その槍を掲げる手に自分達の手を重ねた。

ならば、私はこの知恵を以つて、しんのすけを助けましょう。

風も同じなのです。必ずお家に帰してあげましょうね。

三人は静かに誓つ。安らかな寝息を立てる少年を起さぬように。その寝顔を失わぬように。例え、いつか自分達が別れる事があつても、この誓いは消えないとばかりに。幼い命。それを利用などさせたくない。故に誓つた。誰にも、そう、天であらうとそなはさせないと。

そして三人はそのまま視線を眠るしんのすけへと向けた。丁度寝返りを打つため、その顔が焚き火に照らし出される。その微笑まさに三人は笑みを浮かべた。しんのすけとシロは揃つて幸せそうな寝顔だつたのだ。

それを見つめ、三人もまた幸せそうに笑顔をみせる。願わくば、この安らぎが永久に続けと思いながら……

真名回。地味に shinちゃんの再現とシロの出し方が難しい。

「んっ……？」

その朝、稟は妙な手触りを感じて目を覚ました。寝惚ける頭で眼鏡を手に取り、それをかけて周囲を見渡す。風はまだ安らかに寝息を立て、星は姿が見えないので、おそらくごつものようにどこかで体を動かしているのだろう。

そして、昨日から増えた旅の連れである少年と犬が寝ていた位置には、何故か白い犬しかいなかつた。それを確認し、稟は何となくだが自分の手が感じているものの正体を察した。

(……寝相が悪いのですね、しんのすけは)

見れば、しんのすけが自分の腕にくつついでいる。それにため息を吐きつつも、どこか嬉しそうに稟は笑みを見せる。

「まつたく……これでは今後が思いやられます」

そう弦きながら、稟はしんのすけの頭を優しく撫でた。

「うへん……むちゅ～ん……」

その感触に、しんのすけがくすぐったそうに微笑みを浮かべて寝言を返す。稟はその言葉と反応に優しい笑みを見せる。そして、視線を上へ向けた。そこには気持ちのいい青空がある。それに頷き、稟は小さく思う。今日もいい日でありますよつと…

それから少しして全員が起床し、食事をする事になった。そのため、星が川から魚を取るため槍を構えている。その横で、しんの助けは期待に満ちた眼差しを星に送っていた。稟は魚を焼くための火を熾そりとしていて、風はシロと共に魚を刺すための枝を集めていた。

「はつ！」

魚影を見つめ、星は槍を突き出した。それが見事に魚を捕らえ、槍先に刺さっている。それにしんの助けが感動し、自分もやりたいと言い出した。星はそれに苦笑して、試しに手にした槍を持たせてみた。

その重量にしんの助けは案の定ぶらつく。それに星は楽しそうに笑うが、仕方ないとばかりにその手を支えてやる事にした。そして、星の助けを受けながらしんの助けは川へ視線を向ける。そこに見える動く影目掛けて、しんの助けは槍を突き出した。

そのタイミングに星は内心驚いた。実に見事な見極めだったのだ。自分でそもそも槍を突き出すと感じたのだから。槍に刺さる魚を見て、しんの助けは喜びを表情で表した。

「わ～い！ オラにも出来たぞ～！」

「キャン！」

「お～、しんちゃんもやりますね～」

シロと風は驚きと共に笑みを返す。それに稟も視線を向けて柔らかく笑みを浮かべる。だが、それと同時に思う事があるので、その

まま視線を星へと移した。

「武術の才があるかもしませんね。星、どうです？」

「ふむ、確かに可能性はあるな。少し試してみるか」

「ふう……お？」

槍から魚を外すしんのすけ。まだ少し跳ねる魚におつかなびっくりしながら、それを風へと手渡した。そこで星と裏の会話に気付いたのか、視線をそちらへ向けて小さく首を傾げた。その微笑ましさに三人が笑みを浮かべる。

そして、星がしんのすけを手招きして自分の前に立たせた。何をするのかと不思議そうなしんのすけへ、星は軽く攻撃するから避けてみて欲しいと告げた。当たつてもいいように、槍の持ち手部分を突き出すと。

「ではいくぞ？」

「ほーい」

どじか互いに適度な脱力感を見せつつ、それは始まった。星の繰り出す突きをしんのすけは軽々とかわした。その動きに星は若干目を細め、やや突きの速度を上げた。それは流石に軽々とはいえないが、それでもしんのすけは避けてみせた。

それに風や稟さえ驚きを見せた。シロはどじかそれを信じていたのか、しんのすけを応援するように声をかけていた。星は少しづつ突きの速度を上げていく。最初は余裕が見えたしんのすけも、その顔に焦りが混じり出す。そして、星がその限界を見極めたのか、それ程までとは違う鋭さの突きを繰り出した。

(これならば避けれまい)

しんのすけの動きを見切り、星はやや本気を見せた。それは、しんのすけに対する賞賛を込めたもの。予想以上の才を見せた事に喜びを感じた故の、返礼。趙子龍の真髓。その一端を見せる事こそ、武人としての彼女の最大の贊辞だつた。無論、それは掠らせる程度に済ませるつもりだつた。しんのすけが避ければ、だ。

しかし、その突きが繰り出された時、しんのすけは疲れから動きを止めて星から視線を逸らしていた。つまり、その突きを見ていいなかつたのだ。それに稟と風の表情が焦りに変わる。星もさすがにこのタイミングでとは思わなかつたのか、その顔には驚きが浮かんでいる。

「「「しんのすけ（しんちゃん）っ！」」

「もう駄目だぞ~」

気付いてくれと、切迫した声で叫ぶ三人。それにしんのすけは反応しようとするも、やはり疲れていたのかぐつたりと体を地面に横たわらせた。そこに迫る星の突きだつたが、しんのすけが地面に伏したため呆氣なくかわされる。

「「「は……？」」

想像の斜め上を行くしんのすけの動き。某宇宙一ラッキーな正義の味方ばかりの避け方に、三人は揃つて固まつた。それを見て、しんのすけは状況が理解出来なかつた。ただ自分は、疲れて倒れただけなのだから。

(お？ 何を風ちゃん達は驚いてるんだ？……？)

自分がかなりの運の良さを見せた事に気付かないしんのすけだった……

あの後食事を済ませ、簡単な身支度を整えたしんのすけ達は歩き出した。星はしんのすけの動きには才があると告げ、少しずつが鍛えていく事にした。しんのすけも強くなれる事は嬉しいのか、喜んでそれに応じた。

そこに込められた星と稟の狙いはしんのすけの安全性を向上させる事。いざとなつた時、しんのすけが戦う事は出来ずとも逃げる事は出来るよつこと。そう考へての鍛錬なのだ。

そして、その道中で話した内容の一部に、昨夜三人が水浴びをした事が出た。すると案の定、しんのすけがどうして起こしてくれなかつたのかと文句を言つて、三人が苦笑する場面があつた。拗ねるしんのすけに三人が揃つて微笑みながらも、その機嫌を直す事に意外と苦労したりという事があつた以外は、概ね何事もなく時間は過ぎていつた。

やがて日も高くなつた頃、しんのすけ達の視界に村が見えてくる。そこで今日は泊まり、糧食などを確保しようと考へていたのだ。しんのすけはその村の外観に、やはりここが時代劇のような世界と確信する。だが、それよりも彼には気になる事があつた。

「ね、ビーブしてあそこから煙が出てるの？」

その言葉に星達が足を止めた。しんのすけが指差す方向。それは村からそこまで離れていない場所。そこへ視線を向けると、確かに

土煙が見える。それは多くの者達が動いているだろう証拠。その数は百もないだろうが、それでも数十は下らないだろうと感じるものだ。

「……不味いつ！ 盗賊だ！」

そう叫ぶや否や星はその場から走り出す。見えたのだ、何か光る物を。あれが軍であれば、こんな場所で抜刀しているはずがない。であれば残る可能性は一つだつたのだから。まだ間に合うかと思いながら、星が向かうは土煙ではなく村。その入口目指して走り出したのだ。それに続けと風と稟も走り出す。星が何を考え村の入口へ向かつたのかを理解したからだ。

しんのすけはそんな三人の動きに疑問を感じるも、置いていかれてはいけないと思い急いで追い駆ける。シロもその後を追う。星は入口に到着すると村の者達へ盗賊が近付いている事を告げ、念のために身を守る物を持って隠れるよう指示を出す。そして自身はそのままそこに残った。そう、村に来る賊を相手取るためにだ。

風と稟が星に遅れて入口に到着する。しんのすけとシロは、その俊敏性で一人よりも微かに遅れただけで済んだ。全員来たのを確認すると、星は手にした槍を構える。そして視線で風と稟へしんのすけの事を託すと、一人迫る土煙を睨む。

その雰囲気から、しんのすけは何か只事ではないと感じ、自分の事を抱きしめている風へ尋ねた。

「ねえ、何か来るの？」

「盗賊ですよ」

「自分達の事しか頭にない者達です」

風の声にも稟の声にも怒りが滲んでいる。そう、盜賊達の多くは元は農民だ。朝廷の腐敗によって貧しく苦しい暮らしを強いられ、止むに止まらず卑しい行いに手を出した者達。だが、最初はあつただろう罪悪感を無くした時点で彼らは人ではない。そう稟も風も考えていた。

何せ、彼らが襲うのはかつての自分達と同じような弱者なのだから。弱い者が束になり、より弱い者を叩く。それが乱世を形作る一つの要因だ。しんのすけは一人の言い方から何かを感じ取ったのか、何度も無言で額ぐと視線を遠くなつた星へと向けた。

「……じゃ、悪い人達なの？」

「ええ」

「そつか。だから星お姉さんは、それを懲らしめるんだ」

「そうですね。まあ、あの数ならば平氣でしょ～」

懲らしめる。その言葉の意味する事が、自分と星達では大きく違う事をしんのすけが知るのは、この後の事だ。どれ程待つたかはしんのすけには分からない。だが、その間稟や風が話をしてくれたおかげで、しんのすけは恐怖を感じる事も退屈する事もなかつた。

本当ならば隠れるべきなのだろうが、風も稟も星の実力を知っている。それに、この村人には悪いが、いざとなつたら自分達だけでも逃げるために入口に残つているのだから。

三人の足元にいるシロも、その落ち着きを感じ取ったのか、あまり不安を表す事もなく、ただひたすらに星が向かった先へと視線を向けていた。そして、その目が星を捉えると、嬉しそうに声と共に

走り出した。それに気付き、しんのすけもそちらへ視線を向ける。そこには無事な姿の星がいた。しかし何故かシロは、その傍に近寄らうとしない。それどころか、星に怯えるように距離を取つている。それに疑問を感じながらも、しんのすけは星へ手を振つて出迎えた。

「お～、おかえりん！」ジュースは百パーセント～

「？ りんごじゅーすとは何だ？」

聞き覚えのない単語に星は足を止める。それと同時に手にした槍を地面に突き立てた。それにしんのすけの視線が動く。何故ならば、その槍から地面へ血が流れたのだ。

「星お姉さん、お怪我でもしたの？」

「ん？ いや、ここの通り無事だ」

「じゃ、ここの血は？」

不思議そうに首を傾げるしんのすけ。それに星は平然と答えた。

盗賊のものに決まっているだろ？

な～んだ、盗賊さんの……え？

その言葉を聞いて、しんのすけは笑つて答えようとした。しかし、その内容を理解した途端、その表情が固まつた。それに気付かず星は稟と風にもう盗賊は全滅させたから心配はないと告げていた。それに二人も安堵の表情をみせる。そんな二人にもしんのすけは

言葉が無かつた。彼が知っている正義の味方とその仲間は、決して人を殺す事はしなかつた。どんな悪人であろうと、命を取らずに改心させていたのだから。そう、しんのすけにとつて懲らしめるとはそういう事。

だが、しんのすけは星が告げた全滅との言葉から、ある事を想像した。故に、それを否定するために急いで村の外へ向かう。それに三人が気付き後を追う。震えるシロが見つめる先を見て、しんのすけは愕然となつた。

そこには、物言わぬ存在となつた多くの男達が倒れていた。一面を赤く染める血。あちこちに残る武器の数々。あの戦国世界でしんのすけが見る事の無かつた乱世の現実がそこにはあつた。

そんな惨状を眺め無言のしんのすけ。そこへ三人が追いつき、同じ光景を見る。そして、子供に見せるものではないと考えた風がしんのすけを連れ戻そうと近付くと、しんのすけは星も来た事に気付いたのだろう。そのまま振り向かずに後ろの星へ向かって問い合わせた。

「……これ、星お姉さんがやつたの？」

「やうだが？」

心なしかしんのすけの声がぐぐもつてゐるよつた気がして、星は不思議そつに声を返す。それにしんのすけが手を握り締め、一度だけしゃくじ上げたかと思うと、勢い良く振り返り、叫んだ。

「どうして殺したの！？ 死んだら、『ごめんなさい』だつて出来ないんだぞっ！」

その涙ながらの叫びに、誰も言葉が返せなかつた。正論を告げ、しんのすけを黙らせる事は出来る。しかし、しんのすけの訴えは人の心に強く響いていた。死んでは何も出来ない。例え改心しても、後悔しやり直そうとしてもそれは叶わない。そんな風に聞こえたのだ。

無論、非情にならなければ危ない事を星達は知つてゐる。故に星は盗賊の頭らしき者と対峙した際、最後に確認したのだ。仲間はないかと。それに相手はいないと答えた。だが、念のために仲間がいても連絡出来ないよう、そして一度と悪事を出来ないようになたのだから。

平和な時代を生きていたしんのすけ。だが、彼も幾度にも渡る冒険で知つてゐる。平和ではない場所があり、そこでは自分が話の中でしか知らないような恐ろしい現実が存在する事を。それ故に、時には誰かの命を奪う事さえある事も……

それでも、それでもしんのすけは星達だけは違うと思つていた。友人達や憧れのヒーローのような三人なら、きっとどんな相手だろうと勝利して許し、更生させると。それを裏切られたように思いながらも、しんのすけは想いよ届けと告げる。

「父ちゃんが言つてた！ 本当はみんな優しいんだぞ！ 母ちゃんはいつもお便秘で怒ると凄く怖いけど、買い物行くとチヨゴビ買つてくれるし、ひまも時々イタズラしてオラのせいにするけど、大切なビー玉くれたりするし、父ちゃんは足臭くてなさけないけど、オラ達のためにいつしょ~けんめい働いてくれてるんだぞ！」

涙を流し、しんのすけは叫んだ。誰だつて本当は優しい心を持っている。悪い事をしたからといって殺すのは間違つてゐる。それは、彼もまた問題児だからこそその言葉。しんのすけ自身、何度も悪い事をしては注意され直すようにと言われ続けている。

それにしんのすけは応える事が中々出来ないが、それでも素直にその時は謝り、改善すると許して許しを得ている。悪い事をしたら謝る。そして同じ過ちをしないようにする。それで解決してきた生活しか知らないしんのすけ。それは、この時代では甘い。だが、甘いからこそ理想になる。

「……しんちゃん。しんちゃんの言いたい事はよく分かるのですよ。でも、この人達が同じように何度も人を殺してるとしても、しんちゃんはそう言えますか？」

しんのすけの言葉の意味を感じ取り、風は優しく抱きしめて声をかけた。それはまさに姉が弟を諭すような雰囲気がある。

「それは……」

「言えないですよね？なら分かってください。星ちゃんは、風達の事を守るために戦つてくれたのですよ」

それでしんのすけが納得してくれた。そう風は思った。すると、しんのすけが真剣な眼差しでこう答えた。

でもそれじゃ……いつか誰もいなくなっちゃうだ……

風の言葉を理解し、しんのすけはそう返した。殺したから殺してもいい。守るためなら仕方ない。そんな理論をしんのすけはそう解釈した。殺し殺されが拡大すれば、待っているのは人の滅び。その感受性と想像力に風は思わず声を失った。

子供だからこれで納得するだろうと、そう考えていた。しかし、しんのすけは理解した上で更に言葉を返してきた。極論だが、可能性がない訳ではない。無論、風も裏もこれを否定する事は出来る。

それでも、これは子供が辿り着く考えではなかつた。

風が驚きから沈黙したよう、稟と星もまた沈黙した。平和な世界にいたから、子供だからとこう事で、しんのすけの言葉を処理しようとしていた事に気付いたからだ。彼は決して平和な世界しか知らない訳ではない。多くの困難や試練を乗り越え、その上で笑っているのだ。

幾多もの冒険で彼が知った現実。とても五歳の子供が見るような光景や聞くような事実ではないそれら。しかし、それでもしんのすけは変わらない。いや、本質は、だらう。だらしなく、スケベでマセているが、優しく素直で勇気を持っている少年。彼はもう”本当の強さ”の意味を感じ取つてゐるのだから。

しんのすけは風の腕からすり抜けると、何も言わない三人に再び背を向けて、盗賊達の遺体に近付いた。そしてしゃがむと、その手を合わせた。その口からは、安らかに眠つてくれるようことの願いを述べて。

（死者には、もう何の罪もない。故に、死後は静かに眠れ……か。本当に平和な時代、いや良き時代に生まれたのだな、しんのすけは）

（じめんなさい……ですか。どうしてそんな言葉を……？ そうか。しんのすけはきっと、改心の機会を与えたかったのでしょうか）

揃つて考える事は違えども、抱く気持ちは同じ。しんのすけの考えは、この乱世では中々抱いても貫けぬ想い。悪人であろうと、改心しようとするのなら許そつとする気持ちだと。そう星も稟も考え、しんのすけへ視線を向けて思つ。どこまで優しい子なのだろうと。何故ならその足元には、いくつかの水滴が落ちている。それを見て、二人だけでなく風も思う。しんのすけは、誰であろうと他者の

死を悼む事が出来る優しさを持っていると。三人が揃つてしんのすけの背中を見つめる。それに気付いたシロがしんのすけへ近付いて、その顔をすり寄せた。

その温もりにしんのすけは田元を拭い、頷いて立ち上がる。それを見て、三人はしんのすけの言葉を待つた。何かが先程までと違う。そう感じたからだ。

「……ね、ここに悪い人達は沢山いるの？」

「ああ、あちこちにいる。もっと多くの者達を擁する盜賊や山賊もいるだろ？」

「何でみんな、それをどうにかしないの？」

「残念ながら、賊を増やすよりする事が今の朝廷……国には出来ません」

「じゃあ、どうするの？」

「ですから、風達はそんな世の中をどうにか出来て、お助けしたくなる相手を捜しているのですよ」

しんのすけにも分かるようにと、稟と風は難しい表現を避けるよう告げた。それを聞いて、しんのすけは振り向いた。その目は赤く腫れているものの、表情は真剣なもの。何かを決意した男の顔だ。それに三人は小さく驚くも、次のしんのすけの言葉に心から驚く事になる。

なら、オラもお助けするぞ。もうお姉さん達がこんな事しないでいいように。誰かが悪い人にならなくていいように。

それに込められたのは、紛れもない覚悟。ただ共に居るのではなく、星達を、ひいてはこの世界を助けたいという言葉。帰る事が難しいとしんのすけは感じているからだけではなく、この星達が住む世界をどうにかしたかった。いつか帰る方法が見つかるとしても、その時まで自分が無事でいられるか分からぬ可能性もあるし、星達に助けてもらうだけは嫌だつたのだ。

しかし、そのための方法をしんのすけが知るはずもない。だから決めたのだ。星達の手伝いをしようと。それが一番の方法だと。そして何よりも、自分の恩人で正義の味方である三人に、これ以上悪人であれ誰かの命を奪つて欲しくはなかつたのだ。

そんなしんのすけの宣言を聞いて、三人は揃つて予言は本当だつたと感じていた。しんのすけには大きな力はない。しかし、その存在が与える影響力は馬鹿に出来ないものがあると。そう、三人は揃つて今のしんのすけから”何か”を感じていたのだから。

幼く、この国に何の縁もないしんのすけ。それがここまで言つてくれた。子供でさえこの状況を憂いでいる。そして、その微々たる力でも役に立てたいと思つてくれた事に、三人はこみ上げるものがあつた。

「いいのか？ 帰る方法を探さないでも」

「それも探すぞ。でも、まずオラが『無事じゃないと意味ないぞ』

「風達と一緒にいる間は大丈夫ですよ～？」

「でも、ゼッタイじゃないぞ」

「では、しんのすけは本当にこの大陸を助けたいと？」

「たいりぐじやなくて、みんなだぞ。悪い事した人達も、ちゃんと謝つたら笑つて暮らせるようにするんだ」

しんのすけはそう告げると、片手を空に突き上げて叫ぶ。

かすかべ防衛隊、ファイヤーつ！！

それは彼と友人達の合言葉。弱気な自分を励まし、押し寄せる苦難を乗り越えるための鼓舞だ。故に、これを口にした後の行動が世界を救うキッカケになつた事は多い。もう一つ、彼には同じように逆境を跳ね除ける言葉があるのだが、それはここには相応しくない。それは、彼の家族と共に叫ぶものだから。

しんのすけにとつて、星達は家族ではなく友人。ならば、ここで叫ぶのはこちらだと。そう思つたからの叫び。そんなしんのすけの叫びに、星達はどこか圧倒される。

「……しんのすけ、それは？」

「合言葉だぞ。」これをみんなで言うと、ピンチを乗り越える事が出来んのだ

「ひんち？」

「霧囲気から察すると、危機とか危険ですかね？」

しんのすけの言い方からその意味を察する風。しんのすけもそれに頷いたので、稟も星もそういう言葉なのかと理解した。そして、しんのすけが星達に言った。全員で力を合わせて頑張るために、一緒にこれを言って欲しいと。

それに星は即座に応じ、風も構わないと告げた。稟はやや躊躇いがあつたが、しんのすけの考えは分かるので頷いた。この難局を乗り越えるために一致団結したい。その思いは、痛い程分かるのだから。

「さ、ではやるか

「いいですよ~」

「号令はしんのすけがお願ひしますね」

「ブツ、ラジヤー」

全員で手を重ね合わせる。シロもそこにはいる。掛け声に関して稟からある変更要請があつたが、それをしんのすけは快く同意し、星と風にもその事を伝え、もう準備完了していた。そして、しんのすけが大きく息を吸い込み……

たいりく防衛隊、ファイヤー！

ふあいやーっ！

キャンキャンー！

青空に響き渡る五つの大きな声。その力は、あまりにも小さい。しかし、その絆はもう小さくはない。あの男性が呴いた言葉。この世界には、しんのすけの力も絆もない。それは確かにそうだ。たださう。ここには、彼の家族も友人もいないのだから。

だが、あの男性も一つ肝心な事を見落としていた。しんのすけの力とは、人との絆。そして絆とは、誰かと心を通わせる事なのだ。

絆はないのではなく、結ばれていないだけ。現に、彼はもう三人の英傑と心を繋ぎ出しているのだから。

今、大陸に静かな風が吹く。それはまだ、そよ風でしかない。

その勢いが激しくなり、嵐となつて大陸に吹き荒れる時、彼らは知る。

本当の英雄とは、どういう意味かを

……

覚悟回。 shinちゃんならこういつ結論かなと思つて書きました。

正直、今回の話はかなり迷いました。まだ早いのではないかとか、 shinちゃんの歳では耐え切れないのではないかと。

でも、優しい彼だからこそ、そしてあの冒険を乗り越えてきた彼だからこそ、こここの現実からも目を逸らす事はしないと思いました。故に、ここで乱世の現実を見てもらいました。

……大人帝国やアッパレで見せた、子供らしくも大人のような雰囲気は絶対忘れません

木々の中を歩くしんのすけ達。星を先頭に、次の目的地を目指してただひたすらに歩く。あの村を発つてもう数日経つが、しんのすけにとつてはつい昨日の事のように感じていた。野宿にも慣れ、食べられる木の実やきのこなどを稟や風から教えてもらつたり、星との鍛錬は少しづつではあるが確実に動きを良くさせていた。

あの後、しんのすけは星とシロと行動を共に事になり、稟と風の二人といずれ別れる事が決まった。しんのすけとシロが増えた事により、路銀が心許なくなつたためだ。なので、路銀を稼ぐために星はそこから近い幽州へ行く事にした。しんのすけ達は自分を守れる星と一緒にいる方がよいとなり、稟と風はしんのすけが大陸へ来る原因となつた鏡を探す事になつたのだ。

そんな彼の現在の生活は、朝に星との鍛錬。昼は旅を進めつつ、自分の世界の事や星達の世界の事を話し合い、夕方は稟や風を先生に、簡単な読み書きや雑学などを教わるといった流れだ。

そして夜には空へ向かつて家族達への報告をし、翌日に備えて眠る。そんな生活にも次第に慣れ、しんのすけは微かにではあるが、逞しくなつていた。

「……で、そこでオラが風間君の耳にはむつとしたんだ。そしたら、風間君があは～つてなつて……」

「お前は男色の氣もあるのか?」

「だんしゃく? オラ、おイモじやないぞ」

「しんのすけ、星は男の人も好きなのかと語っているのです

星の言い方が難しく、聞き間違いをするしんのすけ。それに気付く、稟が分かり易く言い直す。それを聞いて、しんのすけは理解したと頷いて、首を横に振った。確かに風間の事は好きだが、それは友人としてであつてそういう対象ではないと。

自分としては、ちょっとしたからかいと触れ合いのつもりなのだから。だが、しんのすけの行動を聞いていると、そう取られてもおかしくない。そう判断し、風があまりそういう事をしない方がいいと告げた。せめて、それは女性 しかも自分と思いを通じ合わせた相手にするべきだと。

「まあ、しんちゃんの性格なら、そういう相手にこそ奥手になりますがー」

「どうしてですか？」

風の発言が信じられず、稟は聞き返す。しんのすけは女性関係に滅法強い印象があつたからだ。それが、自分を好きでいる相手に対して奥手になる事は想像出来ないと。そう思つたからの言葉。どうも星も同じ事を思つたようで、その表情は疑問を浮かべている。それに風は、ならばと思い、しんのすけへ問い合わせた。

「しんちゃんは今のような事を風達に出来ますか？」

「えつ？！ エツと…… その……」

風の言葉にしんのすけは驚き、どこかもじもじしながら二人を見る。それに星も稟も軽く驚いた。きっと出来ると即答すると思ったのだ。だが、実際は戸惑いと躊躇いを表情に出し、やや恥ずかしが

つてさえいるのだ。

そんなしんのすけを見て、風は言つた通りだらうといわんばかりの視線を二人へ向けた。それに二人も意外そうに頷き返す。一方、しんのすけは風の言葉に考え込んでいた。

(オラにはななこお姉さんがいるし……でもお~風ちゃん達も美人だし……あ~つ! 決められないぞ~…~)

真剣な表情でいたかと思えば、次にはにやけた顔になり、最後は自分の頭を強く手で押さえるようにしながら、苦渋の決断を迫られている表情になるしんのすけ。そんな百面相に三人は驚き、呆れ、そして笑う。

シロはそんな雰囲気に嬉しそうな声を出す。どこから見ても樂しげな光景。とても乱世の旅路とは思えぬやり取りがそこにはあつた。絶えず起ころる笑み。それは全てしんのすけが原因。きつと三人では、ここまで笑う事はなかつただろうと星達は感じていた。

こうしてこの日も危なげなく時は過ぎていく。日が暮れたのをキッカケに、野宿の準備をし始めるしんのすけ達。昨日とは違い、今日は近くに川がないため、星が一人で水を探しに出て、しんのすけと風は周辺から枝を集めてながら、何か食べられる物はないかを探す。稟はシロが見つめる中、火を熾す。

そうして色々と準備を終え、稟が荷物から食料を取り出し、それをそれぞれに手渡していく。シロには骨が与えられ、それに嬉しそうに駆け寄つた。そこへ星が戻り、比較的水源が近くにあったと嬉しいように告げる。

更にその日は、しんのすけの口からあの戦国時代へ送られた思い出話が語られた。それを聞いて星達はある推測を立てた。それは、

しんのすけを元の場所へ帰すには、予言通り乱世を止める必要があるのではないかと。

それも含め、色々な情報を手に入れる事を視野に入れての別行動。鏡を手に入れられるならばそれでよし。手に入れる事が出来なくても、せめて情報だけでもと。た이리く防衛隊として、三人は今出来る事をやろうとなつたのだ。

「ではな」

「ええ。 せちらりも氣をつけて」

笑みを見せ合つて背を向けて歩き出す両者。その離れていく姿を振り向きながら見て、しんのすけは大声で叫ぶ。

「稟お姉さん！ 風ちゃん！ またね～！ おみやげよろしく
～！」

「キャンキャン！」

「はいはーい。 でも、あまり期待しないでくださいねー」

それに答えるは、どこか楽しげに聞こえる風の声だ。稟と星もそんな風の言葉に笑みを浮かべていた。それもそのはず。その心に悲しみはないのだ。また会えるだろうと感じているからだろうか。しんのすけはそう考へているからこそ、気楽でいる。いや、きっと全員そうなのだろう。例え何があろうと大丈夫だと、そう感じているのだ。あのたいくつ防衛隊の誓いがある。それが彼らの心を強く結びつけたのだから。

しかししんのすけ達はそれに歩き出す。しんのすけ達は幽

州は公孫贊の下へ。稟達は袁紹が治める南皮へと、互いの果たすべき事を胸に彼らは一時の別れを経験する。それが本当に一時的なものとなるようにと願いながら……

そして、幽州で開かれている武術大会に星が出場し、優勝して主催者である公孫贊の興味を引く事に成功した。それをキッカケに仕官しようとする星の思惑通り、しんのすけ達はその前へ呼び出されたのだが……

「え？ 残念さん？」

彼女の名乗りを聞いてのしんのすけの第一声はそれだった。無論、周囲が一瞬呆気に取られたのは言つまでもない。そこから真っ先に我に返つたのは、当然ながら名前を間違えられた本人だ。

「私の名前は公孫贊だつ！」

「ほーほー、見事なツツコミですな。芸人さん？」

「んな訳あるかつ！」

「おー、お姉さんやるね。わつせよつもキレがあるだ」

「そ、そつか？ つて、ちが~う~」

「おおつー、今度はノリツツコミー？ やつぱり芸人さんでしたか

あ

しんのすけと漫才を繰り広げる公孫贊。そんな彼女へ平然としているしんのすけに苦笑しながら、星はやや不敵な笑みを浮かべてその間へ割つて入る。

「ひひ、いい加減にしろしんのすけ。せめて残念さん殿と呼ばぬか」

「もうもう残念さん殿なら……つてお前もかつ！」

「はっはっは！ 何を怒つておられるのです、公孫贊殿。私は残念との言葉に親しみを込めてですな」

「そりと残念言つたな！ その親しみで私に殺意が湧くわっ！」

「クウ～ン……」

公孫贊の名前をネタに完全な漫才を繰り広げる三人を見て、シロは疲れを感じて床へ伏せる。それでも彼女は、太守である自分へ物怖じしないしんのすけと星の事を気に入つた。シロは、一人と違つて自分を癒してくれる事で気に入つたのが実にらしい理由と言える。こうして客将となり、彼女の下で働く事になつた星。しんのすけもそれに伴い、公孫贊傍付きの雑用係として職を得る。まあ、主な仕事は庭の草むしりなどだつたがそれでさえたまにサボつたりする始末。

「おいしんのすけ。庭掃除が終わつたのなら、次はお茶をもらつてきてくれるか？」

「ほんじつのえーぎょーはしゅーりよーしました。またのこ来店を

おまちしております

「さうかあ、もうそんな時間か……ん？ おいつ…」

「お？ さすが残念さん。気付かれましたか」

「当然だつ！ 後、残念さん言つな…」

「ほ～ほ～。なら、じつをもさんですな」

「せつぱつ！ つて、違つだろ！」

そんな風に漫才しながら、しんのすけは公孫贊に呆れられつつも氣に入られていく。不真面目でもあるが、真面目な時もありどこか憎めない性格。それもあつてか、そうしている内に彼女とも親しくなり、しんのすけがその真名を預かる頃には大陸に不穏な空気が漂い出していた。

だが、それは北の幽州にはまだ薄つすらでしかなく、しんのすけはのほほんとしていた。白蓮に天の御遣いであると知られた後も、特にその周辺に変化が無かつたのもある。そう、星が白蓮ならばそれを話しても大丈夫だらうと踏んだのだ。

その読み通り、白蓮はしんのすけが天の御遣いだと星から聞いても、特に驚く事も呆れる事も無かつた。何故ならば、彼女には薄々そんな予感がしていたのだ。しんのすけの言動がそれを感じさせていたのだから。

「あー、道理でな。いや、時々聞き覚えのない言葉を使うし、礼儀なんかもいい加減だからさ。でもそうか……しんのすけがねえ」

「驚いた？」

「少しな。で、どうする？ 天の御遣いって扱われたいか？」

「どーして？ オラはオラ。おつかいなんかじゃないぞ～」

白蓮の問いかけに平然とそう返して、シロと一緒にになって庭を走り始めたしんのすけ。彼は天の御遣いとの名前にこだわりも無ければ、執着もない。子供故の感覚でむしろかつこ悪いとさえ思つていたぐらいなのだ。

そんな事を知らない白蓮と星。だが、その顔は揃つて苦笑していた。眼前を楽しそうに走るしんのすけとシロを眺め、白蓮は少し呆れながら隣の星へ静かに告げた。

「聞いたか？ 自分は自分だつてさ。大人でさえそつ考えて言える奴がどれだけいるか。ホント、あいつは馬鹿なのか大物なのか分からぬいな」

「ですな。しかし、白蓮殿はそつ言える方と私は見てありますぞ？」

「どじか茶化すような言い方だけど、まあいいや。そういう星は違うのか？」

一人はそう話しながら、庭を楽しそうに走り回るしんのすけとシロを眺め、小さく微笑む。子供が何も怯える事無く遊べる世の中。それが早く当然となるようにと願いながら……

ある日、白蓮を頼つてある三人組が幽州の城を訪れる。彼女達は桃園の三姉妹と呼ばれる事になる者達。劉備、关羽、張飛の三人だ。劉備が白蓮の同門で親友だつたため、その縁を頼つて姿を見せたのだ。

三人で村々を賊から助けたりしながら世を正そうとしていたが、それも既に限界に来ている。そう強く感じ取つた三人は、まずは力を得ようと幽州太守である白蓮の下で働くことを考えたのだ。

そこで彼らは、白蓮から紹介されたしんのすけが天の御遣いとふとした事から知る。彼がいつも調子で天の言葉を使つたためである。そのため、劉備は彼へ懇願した。大陸を救つて欲しいと。だが、しんのすけに当然ながらそんな力はない。それを本人と星から告げられ途方に暮れる劉備だったが、そんな彼女へしんのすけはこう告げた。

「お姉さんは一人？ 違うなら、オラと同じだぞ。みんなで力を合わせれば何とかなるよ。だいじょーぶ」

「一人じゃない……みんなで力を……そうか！ そうなんだね！ 大事なのは誰かを頼るんじゃないくて、私がみんなの力を集める事なんだ！」

しんのすけの言葉から「己がすべき事を自覚し、劉備は奮い立つ。それを見て関羽達もまた思いを新たにする。

「この乱世を止めるのは一人の英雄ではなく、この大陸に生きる一人一人か。成程、天の御遣いはそれを我らに教えるために降り立つたか」

「よく分からぬけど、みんなで頑張ればいいって事だけは分かったのだ！」

姉である劉備が告げた言葉を聞いて、关羽と張飛も自分なりにすべき事を考へ始める。そんな二人を見て、星は愉快だとばかりに笑つた。しんのすけにそこまで深い考へはない。だが、勝手にそう考へて納得している劉備達を好ましく思つたのだ。

「ははっ、劉備殿達は素直だな。だが、それがいいのかもしれん」

「キヤンキヤン！」

星の言葉に賛同するように声を出すシロ。そんな彼らの一番後ろで忘れられたように佇む女性が一人。白蓮だ。劉備はしんのすけと楽しげに話していたし、关羽と張飛は星やシロと語らい始めたのだから。

そう、誰も彼女を見ていなかつたのだ。まるで最初からいなかつたのではないかと言わんばかりの空氣感。それをヒシリシと感じ、彼女は瞼み締めるように呟いた。

「なあ、私の影が薄い気がするんだが……」

それは誰かに告げたものだつたのか。それとも自問だつたのか。それは彼女にしか分からぬ。こうして、しばらく白蓮の城で働く事となる彼女達。しんのすけはその能天気さで次第に打ち解け、それぞれから真名を預かる事となる。

特に平和主義者の桃香とは彼女の性格などもあり、仲良く接する事が多かつた。まあ、スケベな目を向けて愛紗に怒られる事も多かつたが、そんな彼女をその被害に遭わせたりしたので、しんのすけ

としては満足だった。

桃香とは共に護身のための早朝鍛錬をするようになり、それに付随して彼女を鍛えるために張り切る愛紗や鈴々などからも教えを受ける事が出来るようになった。

精神年齢が近い鈴々とは親友となり、どこか世話焼きな愛紗は母みさえのような存在として恐れながらも、しんのすけは楽しく日々を過ごす。白蓮や桃香へ茶を運んだり、鈴々とシロと共に遊んだり、愛紗と星から武術を教わったりしながら。

そんな中、ある日の全員でした雑談で、桃香はしんのすけがどうして大陸を救いたいと思ったかを知る事となつた。村を襲つた盗賊達。それに関する話を星が乱世の象徴として語つたのだ。

最後にはしんのすけの抱いた理想の世界を聞いて、桃香はその心に大きな衝撃を受ける。自分も抱く乱世の不条理。それを天から来た少年も感じた。にも関わらず、子供のしんのすけが難しい事を抜きとはいえ救国の信念を抱いたと知つたからだ。

それは、それだけ今の大陸が乱れているといつ確かな証拠。子供でさえ、どうにかしなくてはいけないと思つてしまふ世の中。それがどれだけおかしいかは桃香も強く理解出来たのだから。

「そつか。しんちゃんは悪い事をした人でも、反省して謝れば笑つて暮らせるようにしたいんだ」

「うん。オラ、嫌なんだ。星お姉さん達が……ううん、誰かが誰かを殺さないとダメなんて正義じゃないぞ。だから、誰も殺さないでもいいようにしなきやつて、そう言つたら星お姉さん達も……今は白蓮ちゃんもきょーりゅーしてくれるので言つてくれたぞ」

「それを言つなら協力だよ。でも……うん、そうだね。誰かが誰かを殺さないといけないなんて間違つてるよね」

しんのすけの話す言葉。それを聞き桃香は言い間違いを指摘しつゝ、心から頷いた。彼女が目指すもの。それこそそういう世界だと。愛紗や鈴々もしんのすけの願う世界に桃香の理想を見て、はつきりと頷いた。しかし、それに白蓮が少しだけ真剣な声で告げた。

「だがな、しんのすけ。それを無くす事は本当に難しいんだ。現に今もどこかで賊は生まれているかもしね。なら私達は」

「白蓮ちゃん、それだからこそだよ。難しいって諦めたら何も変わらない。悪い事をする人達だって、最初からそうなりたかった人ばかりじゃないよ。こんな状況から助けてつて言つてる人がいるなら、例え無理としても手を精一杯伸ばすべきじゃないかな。私達が一番しちゃいけないのは、現実だけを見て、理想を夢物語だつて思つて諦める事だと思つんだ」

「現実に囚われ過ぎず……けれど理想だけを追わず。それは確かに肝要ですが……桃香様、それは困難で険しい道です」

桃香の言葉に愛紗はそう告げた。だが、それは不安を感じているのでも、無理だと思っているものでもない。それは桃香への覚悟を問いただすものだ。自分が仕えると決めた相手へ、義姉と慕う相手へ、もう一度その決意を示して欲しい。そんな思いからの言葉。

それに桃香は迷う事無く頷いた。分かつていて。そう力強く返したのだ。それでも自分はその道を歩きたいとまで言い切つたのだから。それに鈴々が嬉しそうに笑顔を見せた。

「やつぱりお姉ちゃんは強いのだ！ 鈴々はそんなお姉ちゃんにつ

いくのだ！」

「おおっ！ なら、みんなでがんばるー！」

しんのすけはそう言ひとあの高笑いを始めた。それに周囲も感化され笑い声を上げる。青空に響く複数の笑い声。それを聞きながら星はふと思つ。

（悪人を正すだけではなく、それを生み出す世の中を正す、か。桃香殿のその気持ちこそ、乱世を止めるに真として必要なものかもしれないな）

心からの笑顔で笑う桃香を見つめ、星はそう考えた。桃香が持つ根底の気持ち。それは正義感と言う名の強さだらう。誰かを憎むのではなく、悪事を憎む。誰も最初から悪人だった訳ではない。だが、自分にはそれを止める力が無いからこそ支え合ひ。

強い誰かを頼るのではなく、全員で頼り合ひ。そんな助け合いの精神。桃香は弱さを強さに変えられる人だ。自分を非力と感じるからこそ、他者を求める。だが、きっと無力とは思っていないだろう。故に桃香は、自分がみんなの力を集める事を決意したのだから。

星はそう思つて、小さく笑う。自分が槍を捧げるに値する相手を一人見つけた。だが今はまだその時ではない。この広い大陸を見て回つてからでも遅くはない。そう思ったのだ。

だが、もしこの大陸を見て回つた時に桃香以上の相手がいなければ、自身の槍を躊躇いなく捧げよう。そう決めて星は視線を上へ向けた。そこに広がる空に、今はいない二人の仲間の顔を浮かべて彼女は小さく告げる。

稟、風、私は仕えるべき相手の候補を見つけたぞ。お前達は今どうしている?

願わくば、あの二人にも桃香達と会つて欲しい。もしかすれば、たいりく防衛隊の仲間となつてくれるかも知れないからだ。今は少しでも多くの仲間が欲しい。そう思いながら、星はある事を思い出して苦笑する。

そう、既にしんのすけと自分は桃香達から真名を預かつていたのだ。それはつまりそれだけ親しくなつてゐる事。愛紗などはしんのすけの母親のように世話を焼いているぐらいだ。それを思えば、もう仲間と言えない事もない。そう判断し、星は楽しげに笑う。

「意外としんのすけの御遣いとして役目は、こうして人の縁を取り持つ事かもしけんな」

言いながらそれが正解のように感じられ、星はまた一人小さく笑う。出来ればその力で全ての者達が平和的に縁を結んでいけばと、そう願いながら……

やがて大陸へ大きな動きが起きる。後に黄巾の乱と呼ばれる集団決起が起きたのだ。それを受け、桃香達三人は白蓮の下を去る事を決意する。それを白蓮自身も勧めたのだ。桃香が目指す理想。それを実現するために乱世へ名乗りを上げ、戦功を立てろと。

それに感謝し、桃香達は義勇兵を募った。その結果が出る日の朝、しんのすけは城の中庭でいつものように星と一緒に鍛錬を行おうとした。だが、そこには桃香達だけでなく白蓮もいた。

彼女達はしんのすけが来た事を確認すると、桃香が鈴々を前に押し出すよひこした。

「ほひ、鈴々ちやん」

「う、うん……しんのすけ、今日は鈴々と勝負なのだー。」

「お？ 鈴々ちやんと？」

突然の申し出に軽く疑問を浮かべるしんのすけ。すると、愛紗は星の前へ歩み出た。それだけで星は何かを理解し、小さく笑みを浮かべて一步前に出る。

「私の相手はお前か、愛紗」

「ああ。これでしづらへ出来なくなるだらうからな」

互いに笑みを見せ合ったのはそこまで。そこからは武人の顔となり、無言で見つめ合ひ。桃香も白蓮の前に立ち、真剣な眼差しで告げる。

「白蓮ちやんは私の相手をお願い」

「だと思つたよ。いこか。本氣で行くからな」

同門の者として、一人は領き合ひて歩き出す。星と愛紗も同じように動き出す。しんのすけと鈴々だけがそこに残された。しんのすけは四人を見送り、その雰囲気から何か今日は違うと感じ取つていた。

故にそれを聞き出そうと思い、鈴々へ視線を向けた。だが、それを尋ねる事は出来なかつた。鈴々の表情はどこか悲しそうだつたのだ。その原因が分からず、困惑するしんのすけ。そんな彼へ鈴々は無言で構える。そして、小さく息を吸い込み、告げた。

「しんのすけ、これが鈴々からの餓別なのだ」

「え？ セんべい？」

「行くぞっ！ なのだ！」

蛇矛がしんのすけへ突き出される。それを上体をそらす事で避けるしんのすけ。それに鈴々は若干驚きを見せるも、嬉しそうに頷いて攻撃を続ける。しんのすけはそれらを避け続ける。だが、徐々に押し込まれるように後ろへと下がり始めた。

鈴々は本気を出していない。だが、ある意味で本気だ。それは倒すという気持ちではなく、しんのすけへの惜別の思いを込めているから。今日、桃香達はこの城を出る。その後は、おそらくしんのすけと再会する事は難しいと、鈴々は感じている。

だから、この時間が最後になるかもしない。そんな思いが鈴々を突き動かしていた。蛇矛を動かしながらも、脳裏にしんのすけとの日々が思い出される。初めて遊んだ時、色々な天の遊びを教えてくれた事。初めてのアクション仮面^{ごつこ}で自分に主役をやらせてくれた時、後から聞いたら、しんのすけはその主役が大好きだと知つた。なので、どうして自分へと尋ねた際、まずは楽しさを知つてもらいたかったと告げられた事。

昼食を共にし、他愛もないシロの仕草を見て一人で笑つたり、休みが重なつた時は一人で庭で疲れ果てるまで遊び、汚れた互いの顔を見て笑い合つた事。思い出せば、この短期間でもしんのすけとの

（しんのすけと別れるのは嫌だ！　でも、そのせいでしんのすけの帰りを遅くするのはもつと嫌なのだ！）

蛇矛を振りながら、鈴々はどんどん視界が滲んでいくのを悟り、片手で目元を慌てて拭う。だが、それでも滲みは酷くなる一方だつた。その度に手で拭う。拭う。拭う。それでも止まらない。涙はまるで堰を切ったダムのように止めどなく流れ出す。

いつしか鈴々は足を止め、両手で目元を拭っていた。蛇矛は地面に転がり、足元にはいくつもの水滴が落ちている。嗚咽を漏らし、しゃくり上げる鈴々。そこへしんのすけが静かに近付き、鈴々に対して軽く首を傾げて問いかけた。

「鈴々ちゃん、どうして泣いてるの？　どこか痛いの？」

「ヒック……痛く、なんか、ない、のだ」

「そつか。鈴々ちゃんはオラよりも強いもんね。そんな事じゃ泣かないか」

そのしんのすけの言葉に鈴々は完全に堪え切れなくなつた。自分は強くない。しばし別れるだけで泣いているのだ。しんのすけは家族達と知らない間に別れているにも関わらず、今はこうして笑つている。それを思い、鈴々は大声で泣いた。

強くなんかない。別れたくない。そう涙混じりの大声で叫ぶ鈴々。それに星達も手を止め、視線を向けた。そこには、燕人張飛はいなかつた。親友との別れを嫌がる一人の少女がいるだけだつた。

「鈴々……」

「星よ、あの気持ちは私も同じだ。鈴々は我らの代わりに泣いてくれている」

「……やうこいつ割には、目が潤んでるんだ？」

「う、うなじに… いつは分かっていても言わぬものだろ
う…」

星の返しに愛紗はそう言い返すと顔を背けた。その顔は耳まで真っ赤だ。しかし、その星の言葉が自分を気遣つてのものと理解し、愛紗は内心で礼を述べる。軽くからかう事で泣き顔を見せずに済むようにと。そう思つて星が言葉をかけてくれたのだから。

愛紗もしんのすけの事を弟のように思つていた。色々とからかいや悪戯もされたが、それでも憎めず、微笑ましく思う時さえあつた。鍛錬も思つた以上に励み、その成長を感じる度に強い喜びを覚えたものだ。時折、星から冗談交じりに母親のようだと言われるぐらい、愛紗は世話を焼いたのだから。

一方、桃香と白蓮は二人と違い、完全にもらい泣きしていた。そ
う、今日別れる桃香だけでなく、白蓮もどこかで知つてはいる。いつ
かしんのすけと星が自分から離れていくと。だからこそ、いつか來
るだろう別れを考えまいと、白蓮は首を左右に振つた。

そんな白蓮の横で桃香は涙を流しながら、改めて決意を固めていた。彼女は、しんのすけから希望を見つけたのだ。辛い現実を見て
も挫けず、それを変えていこうと強く思い続ける心。それがあれば、
人はどんな時でも笑い、誰かを笑顔にする事が出来るのだと。
自分はそれを胸に生きていくこと。辛い現実に屈する事無く、誰か

の笑顔を守る事が出来るよう。決して理想だけを追いかけるのではなく、まずは自分に出来る事を少しずつしていく事で現実を良くしていきながり。

（私は……もう迷わない。）大陸を誰もが笑顔で暮らせるようになる。偽善でいい。私は私に出来る事を一生懸命やる。）

手にする靖王伝家を握り締め、桃香は小さく頷く。力を振るわずかに誰かを助ける事が出来ないのなら、それを躊躇いなく振ろう。だが、その前に言葉を尽くして止める事が出来るならそうしたい。武器を振り降ろす前に事態を收拾出来るのなら、それが一番なのだ。そう思いながら、桃香は田の前の光景を眺めた。未だに鈴々は泣き続けている。それに桃香は再び涙が流れるのを感じた。

「ぐすり……鈴々ちゃん、泣こいや駄目だよ」

「桃香あ、言いながらお前もまだ泣いてるや」

「白蓮ちやんだったて……」

「うるさいな。私はああいうのに弱いんだ……」

一人の視線の先では、しんのすけが泣き止まぬ鈴々を心配して、汗拭きようにと持ってきた手拭いを無言で手渡していた。その行動を指して白蓮はそう言ったのだ。桃香もそれに納得し、小さく微笑む。そう感じる心がいつかきっと乱世を終わらせる力になる。そう信じて……

「す、じ……」

「キヤン……」

「こんなに集まるのかよ……やっぱり許可するんじゃなかつた

「おー、人がたくさんいるぞ！ ねえねえ、お祭りか何か？」

城壁の上から城門前を見つめているしんのすけ達。ちなみにしんのすけは見えないと言つたため、星が持ち上げている。シロはそんなしんのすけの腕の中だ。一方、義勇兵を募つた桃香達も予想以上の数に驚きを隠せなかつた。

「うわ～、凄いねえ……」

「よもやこれ程とは……」

「いや～、たくさんなのだ」

桃香達としては、精々三千いけば良い方だと思つていたのだが、それを楽に超えるとなれば驚きもある。その原因は、白蓮の下で将をしていた愛紗と鈴々の武勇を聞き及んだ者達がこそつて参加したからだ。

そのため、これだけの者達がいる。白蓮が募つてもここまで集まらないだろ？ やはり名を上げている者がいるだけで、これ程の差が出るのだ。白蓮はそう思い知つたのか、ため息を吐いて桃香達へ近付いた。

そして、約束通りに鎧など一式を用意すると告げた。それに桃香達も戸惑つも、白蓮が苦笑しながら告げた言葉に有難く甘える事にした。

いこや、あれが全部平和のための力になると思えば。

それにしんのすけを除く全員が苦笑した。すると、しんのすけが星に何かを言って、自分を下ろしてもらう。そして、桃香達の元へ近付き、シロを下ろして手を差し出した。それに桃香達が疑問符を浮かべる。

しかし、星だけはそれで全てを悟った。なので、しんのすけの隣へ歩き、同じように手を差し出して、その手に重ねた。それに桃香達が益々疑問を強める。

「ね、桃香ちゃん」

「何?」

しんのすけの声に視線を動かす桃香。すると、星も彼女の傍へと歩み寄っていた。

「これで我々はしばらくなえなくなるでしょ!」

「だから、オラ達とお約束しよ」

そんな二人の言葉に白蓮は合点がいったとばかりに手を打つて、微笑みながら桃香達へ近付いて告げた。

「大陸防衛隊の誓いだろ!」

「キャンキャン」

白蓮の声に反応したのか、シロはそう肯定するよつた声を出す。それに桃香達は笑顔を見せ、しんのすけ達と共に城壁の上で手を重ね合わせた。これが最後にならなによつこと、そつ心から願つて。

「じゃ……お願いね、 shinちゃん！」

「天の言葉による誓いか……些か慣れん言葉だが」

「鈴々は無問題なのだ！」

星の口から説明された内容を聞いて、思い思ひに笑みを浮かべる桃香達。笑顔の桃香。苦笑の愛紗。元気な鈴々。表情は違えども、根底の気持ちは同じだ。

志を同じくする者がいるといつ嬉しさ。それだけで心が強くなれるのだから。しんのすけはそんな三人の言葉に力一杯頷き、大きく息を吸い込んだ。

たいりく防衛隊、ファイヤーッ！

ふあいや～～！

キャンキャンッ！

そして、幽州の空に彼らの声が響き渡る。「の日の誓いを決して忘れない」とばかりに。天まで届けどばかりの大聲で。絆は消えない。そつ宣言するかのように。

これがしんのすけと桃園の三姉妹との出会いと別れ。これがこの乱世を止める力の一つとなり、本来あるべき流れを大きく変える一

つの要因となるのだが、それはまだ先の話……

中編を意識している故に駆け足展開。次回は白蓮との別れから始まる諸侯との闘争をお送りします。

書いて思ったのは、これだとしんのすけらしいけど描写薄いなって事です。……極端しか出来ない自分に絶望。

大陸で猛威を振るう黃巾賊だったが、曹操などの有力諸侯が本格的に動き出したのを契機にその勢力は歯止めがかかった。更に飛将軍呂布が一人で三万もの軍勢を蹴散らすという快挙を成し遂げ、その勢いに翳りさえ生じる始末。

そんな中、桃香達は徐々にではあるが名を上げていた。愛紗や鈴々の武勇は一騎当千と知れ渡つていて、それと同時に聞こえる名があつた。孫吳である。彼らも袁術の密将でありながら、その主人よりも有名になる程の戦振りを示したのだ。

こうして大陸に新たな時代の風が吹き始めた中、しんのすけの周囲もまた動きが起きようとしていた。

「わ～っ、はっはっはっは～！」

「お～っ、ほっほっほっほ～！」

大空へと響く二つの高笑い。それに頃垂れる白蓮と顔良。一方、星と文醜はどこか呆れ顔だ。ここには白蓮と袁紹の領地境。黃巾賊の討伐をしていた白蓮達だったが、それを元々追っていた袁紹達がそこへ現れたのだ。

そして、現状となつた。しんのすけが勝利の高笑いを始めると、負けるものかと袁紹が対抗したのだ。実に一分以上も高笑いをしている一人に、周囲の反応がそうなるのも無理はなかつた。

「なあ、斗詩。麗羽の奴、イキイキしてるな」

「ですねえ。あの子、麗羽様と気が合つのかもしれません」

疲れた声で話す苦労性の一人。その視線を上げて見つめるは、満足そうにしているしんのすけと袁紹だ。今は互いに高笑いについて褒め合っている。そんな光景に再びため息を吐きながら頃垂れる二人。

一方、星は文醜と一人で呑氣に世間話をしていた。しんのすけと袁紹。その二人の事をよく理解している彼女達は、もう既に眼前の光景から意識を逸らしていたのだ。

「そりか。文醜殿も色々と大変ですね」

「まあな。でも、斗詩がいるから平気だぜ」

「ふむ、であれば顔良殿が一番苦労していそうだな」

「あー、それは間違いない。何せ麗羽様のわがままって、大抵斗詩へ向けられるからさ」

互いに笑みさえ浮かべながら話す二人。まるで周囲の事などお構いなし。それに白蓮と顔良が恨みがましい目を送るも、それに気付かぬ振りをして星と文醜は話し続けるのだから大したものだ。

この後、袁紹達はしんのすけと星を気に入ったのか、一度訪ねに来いと言い残して戻つて行つた。それを手を振つて見送るしんのすけ。一方、星はそれをキッカケにある決意を固めるのだった……

それから少しして、黃巾の乱は終結した。首魁張角は曹操軍によ

つて討ち取られ、大陸に一時の平穏が戻ってきたのだ。それを持っていたとばかりに星は白蓮へ職を辞する事を告げた。

その理由は再び大陸中を見聞したいため。白蓮はついにこの時が来たかと思い、星を強く引き止める事はしなかつた。その事に星は感謝し、しんのすけとシロを連れて翌日城を出た。

その見送りに来た白蓮へ、しんのすけは一つの竹簡を渡した。それは、彼が白蓮への気持ちを書いた物。慣れぬ漢字を苦労しながらも書き、したためた物だ。

そんな彼の背には一本の木刀がある。鍛錬用として白蓮が用意してくれた物だ。しんのすけが竹刀をイメージして意見を出し、それを職人が出来る限り再現した一振りで白蓮からの贈り物である。

「これ、白蓮ちゃんにあげるわ」

「竹簡？　ああ、昨日くれと言つてきたから渡した奴か」

「白蓮殿、それは寝る前に読む事ですな。私も少し感じ入るものがありましたので」

どこか不思議そうな白蓮へ星はそう告げて不敵に笑う。それにどこか嫌そうな顔をするも、白蓮はこんなやり取りも今日で最後かもしれないと思つたのか、特に何か言う事は無かつた。

だが、シロの事を抱き上げてその温もりを忘れまいとしたり、しんのすけの頭を軽く撫でながら体の心配をしたりと彼女なりに別れを惜しんでいた。星へは良い主君と出会えるといいなど告げ、苦笑されたのが白蓮らしいと言えた。

「じゃ、さうゆーことで」

「キャンキャン」

「短い間でしたがお世話になりましたな」

「気にしないでいいわ。しんのすけ、シロ、星……元気でな。またいつでも来いよ」

互いに笑顔で別れるしんのすけ達。見送る方も見送られる方にも悲しみは強くないように見えた。遠ざかるしんのすけ達を白蓮はずっと見送った。その姿が見えなくなるまで、その場で見つめ続けた。やがて完全に見えなくなつたのを確認し、白蓮は静かに城へと足を向ける。その背中にはどこか哀愁さえあつた。密将でありながら自分を密かに支えてくれた星。執務で疲れた時にそつと癒してくれたシロ。そして、子供らしい振る舞いと時に見せるそれらしくない行動で自分を振り回したしんのすけ。

そんな彼らとの日々は、白蓮にとって中々忘れる事の出来ないものだった。それをもう一度噛み締め、白蓮は足を止めて振り返る。そこには当然誰もいない。それに軽い喪失感を覚え、白蓮は思わず呟いた。

凄いもんだな。たつた一人と一匹になくなつただけで、こんなにも寂しくなるんだ……

そう思つて白蓮は再び歩き出す。彼らの存在感を改めて感じ、どこか感心したように思いながら白蓮は行く。心なしかその歩みは少しだけ遅かった。この日、白蓮は執務室を一步も出なかつた。

昼食も夕食も執務室で取つた。それは、廊下に出たくなかつたら。そこから見える中庭にはしんのすけとシロとの思い出が沢山ある。それだけではない。星も含めてした他愛ない雑談なども思い出

すのだ。

桃香達がいなくなつた事。しんのすけ達がいなくなつた事。自分の元から居て欲しい者達がいなくなる。そう思い、白蓮はやや自分の人望の無さにため息を吐いた。しかし、きっとそれが原因ではないと理解もした。

（あいつらは私を主君として最初から見てなかつた。でも、私を太守ではなく白蓮として見てくれた。だから気にするだけ無駄だな。また会う事があれば笑顔で会えるや）

そんな風に自分を励まし、白蓮はその日の仕事を終えた。だがその夜、白蓮はしんのすけからの竹簡を読んで声を失う。そこには辛うじて読める字でこう書いてあつた。“謝々 再見”と。

それは感謝と再会を願うもの。汚い字で何とか読めるぐらいのそれ。しかも少し間違えたのだろうが、それをそのまま強引に書き終えたその文字を見て、白蓮はしばし呆然となつていた。

しかし、白蓮は徐々に視界を滲ませながら笑い出した。嬉しくもあり悲しくもあるような笑いだ。理由は複雑なのだろうが、強いて一つを挙げればこれに因る。それは彼女の竹簡を見つめての咳き。

つたく、間違えたのなら書き直せよな。ま、確かにあいつらしいか。

しんのすけらしさをそこに見たからだ。出来る限り丁寧に書こうとして、逆に力を入れすぎて失敗したのだろう。そう判断し、白蓮は自元を拭いながら竹簡を大事に抱きしめる。次に会った時は色々と言つ事が出来たと思つて。

ふと窓へと視線を動かす白蓮。そこから見えるは綺麗な星空。き

つとこの空の下で、あの少年は大いびきをかいしているのだろう。そう考えて、白蓮は愛おしさを込めて小さく告げる。

しんのすけ、私も同じ気持ちだからな。でも、これはないだろ。今度は、機会があれば勉強させてやるから覚悟してろよ。

そう言い終わると、白蓮は楽しそうに笑う。それを聞いて嫌そうな顔をするしんのすけの顔を思い浮かべたのだ。そして、その口が音を発する事なく動く。謝々、再見と……

それから少し時間が経ち、南皮にある袁紹の城へしんのすけ達は来ていた。あの誘いに応えるためだ。念のため、白蓮の書いた書状を門番へ手渡し待つ事少し。案内を受けて通された部屋でしんのすけ達は袁紹達と再会した。

初めて見るシロの姿に顔良が喜び、嬉しそうにその頭を撫でる横で星と一度手合せをしたいと告げる文醜。そんな親しみを増している一人とは違い、真剣な表情で互いを見つめるしんのすけと袁紹がいた。

「では……いきますわよっ！」

「ほーっ！」

まるで試合でもするかのような雰囲気だが、本人達にとってはそうなのだ。一人は一度大きく息を吸い……同時に構えた。

「わっはっはっはー！」

「おひほひほひほー！」

「わ～っ、ほつほつほー！」

「お～っ、ほつほつほー！」

満面の笑みで高笑いを上げる一人。それに全員が呆気に取られた後、苦笑する。そう、これはあの時の再戦と理解したのだ。シロは初めて見る光景だったが、袁紹からしんのすけと似た匂いを感じたのか、星達と同じ気持ちでそれを眺めていた。

そんな四対の視線を受けながら、二人は楽しそうに笑う。自由奔放を地でいくしんのすけと袁紹。故に互いは理解しているのだ。自分達は似た者同士だと。だが、それを頭ではなく感覚で察している辺りが彼ららしいところだ。

(やつぱつよいしょーさんはスゴイぞ。オラも負けないようにじよつと)

(やりますわね、しんのすけさんは。子供ながら大したものですね)

互いに相手へにやりと笑い　いや、しんのすけはヘラヘラという感じだったが　その高笑いを称える一人。ちなみによいしょーさんとはしんのすけが袁紹との名前を聞いた響きからつけたものだ。

そんな一人の様子を眺め、顔良がシロへ小さく問い合わせた。

「ね、シロちゃん。しんちゃんっていつもああなの？」

「……キャン」

「ふふつ、確かにそうだな

「あはは、何だよ。やっぱりあいつも麗羽様と同じか」

認めたくないがその通り。そんな声を返すシロに顔良だけではなく星と文醜も笑った。本当ならば袁家の家長である袁紹相手に、しんのすけのような振る舞いは許されないのでう。だが、そんな事を気にする袁紹ではない。

いや、今は気にしていいだろうか。子供と接する事自体彼女にとっては初体験に近い。親戚である袁術も確かに子供に近いだろうが、一応彼女は普通の子供とは違うのだから。

正直に言えばしんのすけも普通とは言い難い。だが、礼儀を知らないという点では子供だ。だが、それを一々気にする程袁紹は小物ではない。悪く言えば神経が細くない。こうして二人は互いがむせるまで高笑いを続け、星達を大いに呆れさせる。

その後、まだ仕事が残る袁紹達と一旦別れ、しんのすけ達は客室へと案内された。星は早速袁達と連絡が取れるかやまだここに滞在しているかを調べるために街へと向かった。しんのすけはそれを見送り、シロと一緒に遊ぶ事に。

「じゃ、オラがつまづいて転んだ時に頭打って死んだ人やるから、シロは道草食べて食あたりして死んだ犬ね

「クウーン……」

選ばれた遊びは彼の十八番とも言える”死体ごっこ”だ。それに

不満そうな声を出すシロだが、それをしんのすけは当然のよつに勝手な解釈をする。

「えへ、もつとマシな理由がいいの？ んもう、ワガママだぞ

「キャンキャン！」

しんのすけの言葉に「違う。そうじやない」とばかりに声を出すシロ。だが、当然そんな声は届かず、彼の死因は散歩していたら飛んできたボールに当たって死んだ犬に変更された。

正直、まだ最初の方が現実味があるとシロは思つたが、もう何を言つても無駄と思ったのかそのまま廊下へ伏せる。それを見てしんのすけも廊下へ伏せた。そのままぴくりともしなくなる両者。見事な死体役が出来上がつた瞬間だ。

やがて、そこへ仕事を終えた文醜が現れた。暇潰しがてらしんのすけと遊ぼうと考えたのだろう。だが、そんな陽気歩いていた彼女が見たものは、廊下でうつ伏せに倒れるしんのすけとシロの姿だった。

「なつ？！」

即座に周囲へ警戒心を示す文醜。賊が侵入したのかも知れない。そう考えたのだ。袁家も敵がいない訳ではない。そのため、彼女は少しずつ少しずつしんのすけ達へ近付いていく。

息はある事を感じ取り、死んではないと安堵する文醜。真剣な表情のままで倒れているしんのすけへ軽く蹴りを当て、意識を取り戻させようとする文醜だったが、当然彼は起きる事はない。

それにやや焦りを感じる文醜。彼女の中では賊が侵入した事にな

つていい。つまり相手の事を少しでもしんのすけから聞き出したいのだ。故に内心で謝りを入れながら、文醜は強めに蹴りを入れた。さすがにそれにはしんのすけも堪らず声を上げて怒りをあらわにした。

「ちよつとー 痛いぞつー」

「悪い。で、しんのすけ。刺客はどんな奴だ？」

「しかく？ …… おおつー 四角ね。こんなのだよ」

しんのすけはそう言つて指で四角形を作つて文醜へ見せた。それに文醜は突つ込む事無く頷いた。刺客の顔がそういう顔だと受け取つたのだ。そこから詳しい事を尋ねていく文醜。服装や武器などだ。それに対し、文醜が聞いているのは四角の事だと思っているしんのすけは、服はないと返し、武器もないと告げた。

それに戦慄する文醜と何故そんな事を聞くのだろうと不思議に思うしんのすけ。そこへ袁紹の執務手伝いから解放された顔良が姿を見せる。彼女は疲れをシロで癒そうと考えたのだ。

「お、がんぢゃんだ。ほつほーい」

その姿を見たしんのすけは、どこか嬉しそうに手を振つて呼びかけた。そんな言葉に顔良は苦笑しつつ手を振り返す。そこが律儀な彼女らしい。

「くすつ、元気だね、しんぢゃんは。あ、文ちゃんもいるんだ」

「斗詩つー、賊がいるから氣をつけろー」

そんな呑氣な彼女へ、文醜が鋭い声で警戒をするよう呼びかけるのは当然と言えた。顔良はその言葉に驚きを見せて周囲の気配を探る。だが、一向にそれらしいものは感じない。

「ね、文ちゃん。気配感じる？」

「それがさっぱりだ。腕の立つ奴だろうから氣い抜くなよ、斗詩」

額から汗をえ滲ませて答える文醜。そんな彼女とは違い、顔良はどこか疑問符を浮かべながら小首を傾げた。武将である顔良と文醜。そんな一人が揃って気配を微塵も感じない事などあるのだろうか。

そう思つて顔良はどうして賊が侵入したと文醜が理解したのかを問い合わせ。そこから出た言葉に彼女は一つの可能性を見い出した。そつ、もし賊が侵入したとすれば始末した死体を放置するはずはない。それに、子供相手とはいえ加減などするはずもないのだ。

(これ……もしかして文ちゃんの卑とちり?)

そう思つもまだ口には出せない顔良。そして警戒心を表情に出す文醜と横田に、彼女はしんのすけへ問い合わせた。それは、どうしてここでシロと一緒に倒れていたのかと言つもの。それに文醜は意味がないと言おうとして、その耳を疑つた。

死体じりしてたんだぞ。オラの好きな遊びの一つなんだ。

田を点にする文醜と安堵と呆れの息を吐く顔良。そこでシロがゆっくりと起き上がった。彼は彼なりに空気を読んで今まで伏せていたらしい。顔良はそのままそこでしんのすけへ説教を始める。紛らわしい事しないように。そして、あまり周囲に心配をさせな

いようにと厳命したのだ。それにいつもの調子で返事を返すしんのすけを見て、内心苦笑する顔良。彼がまったく反省もしていないし、堪えてさえいないと気付いたのだ。

文醜はしんのすけへ言葉ではなく、軽く小突く事で説教に変えた。だが、そんな彼女へ顔良は少し苦い顔で確認を怠つたからだと指摘する。それに痛い所を突かれたのか、文醜は小さく呻くと顔を背けるように拗ねたのだつた。

「とにかく、今回の死体」つごだつけ？ それはこれでおしまい。代わりにしんちゃんにお願いがあるんだ。白蓮様のところにいた時の話をしてくれないかな？」

「お、それあたいも聞きたい」

「ほ～ほ～。では、立ち話もなんですから中へどうぞ」

「キャンキャン」

案内するように歩き出すしんのすけとシロ。そんなしんのすけの言い方に小さく苦笑する一人。それが玄関先で会話している庶民を想像させたからだろうか。どこか楽しげな笑みを浮かべていた二人を眺め、シロは静かに頷く。

あの最初の三人組以降、出会う者達はみな良い者達ばかりだと改めて実感していたのだ。これなら無事に帰れるかもしね。そんな事を思いながらシロはしんのすけの横を歩く。

そして、そのまま客室へと入ろうとする一人だったが、そこでのすけが更に告げた言葉には素直に笑つた。

せまいとじやだけどかんべんしてね。

まるで自分の家のような言い方なだけではない。その内容が軽く客室への不満に感じられたのだ。勿論一人はしんのすけがそれを心から思つていると考へていらない。だが、子供がそんな事を言つた事が面白かった。

その後、二人はしんのすけから白蓮や桃香達との思い出話を聞く。しんのすけ達があの黄巾の乱で名を上げた桃香達と親しい事を知り、意外そうな反応を見せる顔良と文醜。

特に一騎当千と名高い愛紗と星が同等と聞いて、試合が楽しみだと文醜が笑う。顔良はそんな彼女に苦笑しながら、怪我をしないよう注意をしていた。それに嬉しくなった文醜が顔良へじやれるように抱きついたのは、最早お約束みたいなものだろう。

「えへへ、斗詩が心配してくれるなら氣をつけないとな~」

「ちよ、ちよっと文ちゃん！ しんちゃんがいるからっ！ いるからっ！」

手が妙な位置へ動いているのを悟り、顔良は慌ててそれを止める。そんな様子を眺め、しんのすけはシロへ尋ねた。自分がいるから何なのだろうと。それにシロはやや困った反応を返すのだった……

夕方になり、しんのすけ達は袁紹達と共に夕食を食べていた。場所は街で一番の高級店。支払いは当然だが袁紹持ち。だから星もこ

の店で食事をしているのだ。星と明日試合をする約束を取り付け、満足そうな文醜。そんな彼女を見て微笑みを浮かべる星とシロ。

一方、袁紹と顏良はしんのすけから家族の話を聞いていた。ひろ
しひとみさえの喧嘩の様子を物真似しながら語るしんのすけに、二人
は笑い声を上げていたのだ。

「あなた、この口紅は何？ 違うんだみせえ。これはせつたいでしかたなく……。キイー！ この浮氣モノーっ！ ……で、父ちゃんが母ちゃんでいねんなでこする」

身振り手振りを交えての熱演に楽しげな声を上げる袁紹と頗良。実に分かり易い力関係だと思ったのだ。この世界は基本女性が強い。それでも庶民の暮らしまでそうではないのだが、しんのすけの家庭は完全に力カア天下だと理解出来たからだ。

「ふふっ、しへりちゃんの家はお母さんが一番強いんだね」

「庶民の生活は話に聞いた事がありますけど、しんのすけさんの家は楽しいようですね」

笑顔で口々に意見を述べる一人。生まれが名家の袁紹は未知の世界にやや意外そつた反応を。顏良は自分と比べているのかどこか懐かしそうだ。

「うん、オラの家は楽しいぞ。いつかよいしょーさん達も遊びに来るといいよ」

「ですからつー、よいしょーではなく袁紹ですわ！」

「……すっかりその突つ込みが板につきましたね、姫」

しんのすけの呼びかけに即座に反応する袁紹。それを聞いて苦笑するように呟く顔良。そう、もつこやり取りを何度も見た事か。その後、しんのすけが袁紹の事をそう呼んでいると知った顔良は、何かそれを訂正させようとしたのだが、結局断念。

見事袁紹へ直接その呼び方を使って今のよつな指摘をされたのだ。しかし、しんのすけがその程度で直るはずもなく、何度も何度もよいじょーさんと呼び続けているのだ。

しまいには、袁紹から覚え難いなら無理に名前を呼ばずともいいとまで言われたのだから、それがどれだけ根強いかは分かるだろう。白蓮さえ真名を預けるまでひたすら残念さんと呼ばれたのだ。

そんな賑やかな時間。星と文醜はすっかり酒盛りの様相を呈し、シロは顔良とそれを横目に楽しく食事をしている。袁紹はしんのすけから更なる話を聞いていた。彼は、既に家族ではなく幼稚園の友人達の事を語っていたのだ。

「アイちゃん言つてた。いつも誰かいるからつひとつーしーつて

「傍付きが常にいるのは確かにそうですわね。私も同じですからその気持ちは分かりますわ」

それも袁紹と似ている酢乙女あいの事を話していた。彼女も自分と共通点があるからだろう。何度も頷いては、同意するよつな言葉を返していたのだ。今も常に護衛がいる事へ不満を述べている。しかし、袁紹はそう言しながらも寂しがりやな部分もある。なので、一人となつてもしばらくすると必ず誰かを呼びつけるのだ。ワガママで自分勝手。だが、根は素直で優しい袁紹。だからこそ、文醜も顔良も傍にいるのだ。

「それにしても、時折妙な言葉を使いますわね。しんのすけさん、今お話しで出て来たすべりだいとは何ですか？」

「えつと……オラの住んでるところにある遊ぶ道具だぞ。上からほつほつといつてすべるの」

「…………まあいいですわ。そういう物がある事だけは分かりました。で、他にはどんな話がありますの？」

しんのすけの要領の得ない説明にやや苦笑しながら、袁紹は次の話を催促する。だが、どこかで彼女は疑問を抱いていた。しんのすけが使う聞きなれない言葉。それは本当にこの大陸にある物なのだろうかと。

しかし、何故そう自分が考えるのか分からず、袁紹は内心小首を傾げつつしんのすけの話へ耳を傾けるのだった。それがある推測を導き出す事になると知らぬままに……

翌朝、訓練場にしんのすけ達の姿があった。袁紹は顔良が持つてきた椅子に腰掛け、しんのすけとシロはその横で地面に座り、顔良は星と文醜の間に立ち、審判をしている。そつ、これは二人の試合なのだ。

一人の手には、それぞれの得物が握られている。当然だが、それは下手をすれば相手を殺しかねない物だ。それでも、両者に恐怖も不安もない。自分を信じるよつて、相手の事もまた信じてるのだ。

「しんのすけが言つには、かなり強いらしいけど……あたいも負けねえぞ」

「それは楽しみですね。では……」こより言葉は不要つ！」

「おうつー。」

互いに得物を構え、相手を睨む。それを見て頬良が告げた。

「試合、開始つー。」

「おりやー。」

「何のつー。」

文醜の大剣をかわしつつ、突きを返す星。それを文醜は手にした大剣を動かす事で受ける。剣であり盾。そんな使い方も出来るのが、文醜の所持する斬山刀だ。星はそんな文醜の防ぎ方に、少し感心したような表情を見せる。

ただ考えも無しに大剣を使つている訳ではないと理解したのだ。そして、自分が思つてゐるよりも文醜は強いとも。まだ自分も見る目がないと思いながら、星は一寸距離を取る。そうはさせじと文醜が星に迫る。

大剣と槍では、圧倒的に槍の方が有利だ。大剣は大勢を相手にするには有効だが、一対一には向いてないと言わざるを得ない。そう、小回りが利かないのが大きな欠点。自分よりも実力が劣る相手ならばいい。だが、それが自分よりも動きが速い相手となると途端に不利になる。

だが、それでも文醜は大剣を使う事を止めない。自分が自信を持

つて使える武器。それがこの斬山刀だったのだから。不利も何も関係ない。強い相手に通用しないとしても、その事実を捻じ伏せてでも通用させようとするのが文醜だ。

「文ちゃん、頑張れっ！」

「キヤンキヤンッ！」

「何をやつしますの、猪々子さん！　早く倒しておしまいなさいっ！」

「星お姉さんも、ぶんちゃんもガンバレ～！」

それぞれに声援を送るしんのすけ達。その声を受けながら、互いの力量を正しく測っている両者。その表情は対照的だ。やや焦り気味の文醜と意外そうな星。互いに事前に思っていた以上の強さを感じているからこそその表情だ。

(くそお、やつぱ速いな……でも、諦めねえぞ!)

(猪突猛進だな。だが、荒削りながらも何かしらの輝きがある。文醜殿もまた才の持ち主か……)

星は文醜の戦い方をそう分析し、小さく頷くと反撃に出た。相手に合わせる事無く槍の利点を使った戦法で、連続して放たれる神速の突き。それを文醜は時に大剣で受け、時にかわす。だが、そこから攻撃する事が中々出来ないでいた。

間合いで言えば互角に近いが、攻撃速度で言えば槍。大剣が有利なのはその威力と頑丈さだけだ。文醜もそれは分かつていて、それでも、この戦いを挑まずにはいられなかつた。武人である以上、他

者から「己よりも強いと言われた相手を倒したいと思わぬはずがない。」

（しんのすけ、見てろ！　あたいだつて強いんだかんな！）

昨日、ほんの出来心で文醜がしんのすけへ尋ねた事がある。それは、自分と星はどちらが強いとの問いかけ。それにしんのすけは迷う事無く星と告げたのだ。それを思い出し、文醜は絶対に惨めな負け方だけは出来ないと気を引き締め直す。

そう、防戦一方になりながらも文醜は勝ちを諦めていなかつた。星の方が自分よりも実力が上なのは、悔しいが文醜も理解した。それでも、良い所無しで終わる訳にはいかない。そんな武人としての誇りがあつた。

仮に勝つ事が出来ないでも、相手に一矢報いてやる。そう、目に物見せてやるとの思いが文醜を動かしていた。格上の相手と認める事が出来る星。それが自分と戦ってくれた事に対する礼と喜びを込めて、文醜は自身の全てを出し切ろうとしていた。

「行くぞおおおつーー！」

「つ？！」

文醜の動きに星の表情が変わる。そして、それを見ていたしんのすけ達も同じように。

「「「えつーー？」」

そう、文醜は星の繰り出す突きを敢えて体に受けた。脇腹を狙つた突きだったが、それは際どく致命傷を避けている。真剣勝負の試合とは言え、まさか自分から一步間違えれば死ぬ真似はしないだろ

う。 そうどこかで考えていた星は、 そんな文醜の行動に一瞬ではあるが動搖してしまった。

「しまつた！？」

「つおおおおつ！」

その隙を見逃す程、 文醜は凡将ではない。 痛む体が上がる悲鳴を無理矢理捻じ伏せ、 手にした大剣を星へ突き出す。 星はそれを回避しようとするも、 ある事を悟ったため動かず立ち止まつた。

星の腹部へ当たる直前で停止する大剣。 祈るように顔を伏せている文醜。 大剣を見つめ無表情の星。 静まり返る訓練場。 袁紹でさえ、 声を発しない。 誰もがその光景に言葉を失っていた。

「……お見事」

そんな静寂を破るように、 星がどこか悔しそうだが嬉しそうな声を出す。 それに文醜がはつとして顔を上げた。

「趙雲……でも、 今のはつ！」

「確かに試合としては些か考え方無しの行動かもしれないが、 今のが戦場ならば文醜殿が正しい。 己が命を賭け、 相手を倒そうとするその執念。 この趙子龍、 感心致した」

文醜の言いたい事を察し、 星はそう遮つて告げた。 試合であれば、 死んでしまうかもしない行動はするべきではない。 だが、 これを戦場での一騎討ちと考えれば、 文醜の行動は理解も納得も出来る。

星はそう思ったのだ。 そして己の慢心にも気付いた。 試合だからと、 どこかで心構えが緩んでいた。 試合であろうと何が起きるか分

からない。何事にも動じない心。それを常に心掛けなければいけない。そう改めて思はされた。だから、あの時動かなかつた。自分の弛んだ気持ちを気付かせてもらえたと思つた故に。

一方、文醜もまた気付いた。星が最後に敢えて避けなかつた事に。それは情けなどではないと分かつてゐる。そつならば、星の出した声に悔しさなどあるはずがない。つまり、自分の行動に星が動きを止める何かしらの理由があつた。

そう考へ、文醜は痛む脇腹に手をやつた。そこからは血が滲み出し、服を汚してゐる。重傷ではないが、掠り傷で片付けるには少々問題がありそうだ。すると、そこへ顔良が血相を変えて慌てて走り込んで來た。

「ふ、文ちゃん、大丈夫！？」

「おひ。。って、言いたいけど……ちよつと辛いかも」

「すぐ手当てをした方がいいだろ。それと、顔良殿は念のために医者を。私は文醜殿を部屋まで連れて行こ！」

「お願ひします！」

星の言葉に頷き、顔良は急いで走り去つて行く。それを見送りながら、星は文醜へ肩を貸す。

「わらい」

「気にするな。それに、これは当然の事だ。まあ、悪いと思つたのだから……後で美味しい酒でも買つてもらおう」

文醜の詫びる声に星は普段の口調で答える。それに文醜が一瞬呆気に取られ、笑い出す。だが、笑うと傷が痛むのか、どこか苦笑のよつにも見えた。それに星が楽しそうな笑みを返し、歩き出す。

しんのすけはそんな様子を見つめ、視線を袁紹へ向けた。袁紹はどこか不安そうに文醜を見つめている。その表情を見たしんのすけは、袁紹の手を軽く引いた。それに袁紹が意識を戻し、しんのすけへ視線を向けた。

「何ですか？」

「だいじょーぶ。ぶんちゃんは強いぞ。あんな傷なんかに負けないよ」

しんのすけの言つた負けないとの言葉。それが意図した事を察して袁紹は返す言葉に詰まる。それは自分を安心させるようだったのだ。しんのすけは袁紹の手を軽く引っ張り、自分達も行こうと声を掛けた。

それに袁紹は小さく笑みを浮かべて立ち上がった。自分へ指示をするだけでなく、励ます事さえしてくる相手に。それが庶民の子供なのだから、袁紹としては楽しくて堪らない。

(不思議ですね。本来なら腹立たしくなつてもいいはずなのに、どうしてこんなにも心和むのかしら……？ まあいいですわ。まあは猪々子さんの勝利を祝つて差し上げましょっ)

そんな事を考えながら歩く袁紹。だが、その動きをしんのすけとシロが止める。しんのすけは手を引き、シロは軽く声を発して。それに袁紹が疑問符を浮かべると、しんのすけとシロが揃つて椅子を指した。

「こす、忘れてるわ」

「キヤン」

「お～っ、ほつほつほー、そんな事を何故……」

「オラだけじゃ持つて行けないぞ?」

袁紹の言葉を斬つて捨てるように遮るしんのすけ。それに袁紹が高笑いの姿勢のまま固まつた。シロはそんな袁紹に脱力するよつにため息を吐き、しんのすけはそれを見て楽しそうに笑う。

やがて袁紹は仕方ないとばかりに椅子を持ち上げ、歩き出す。しんのすけはその反対側を一応持つよつにしてついていく。シロもそれに合わせて歩き出した。

しんのすけさん。私にこんな事をさせたのは、貴方が初めてですわ。

おおっ！ オラ、おねいさんの初めての人ですかあ。照れますな～。

……何やら妙な感じがする言い方ですけど、やうですわ。この事、決して忘れませんわよ？

ほ～ほ～。なら、オラも忘れないぞ。

そんな風に話しながら歩くしんのすけと袁紹。シロはそんな一人の傍を駆け回るように走る。こうして、星と文醜の手合わせは終わりを迎えたのだった……

文醜の怪我は、しばらく安静にしていれば心配ないとの事だつた。それに顔良が安堵し、星と袁紹は気付かれない程度に息を吐き、文醜は最初から分かつていていたのか、そんな三人に苦笑。しんのすけだけは、文醜と同じで信じていたのか平然としていた。

しかし、問題が一つあつた。そう、文醜の担当する調練だ。自主的な訓練でもいいし、顔良が引き受けてもいいのだが、文醜が星へ頼んだのだ。自分の代わりに引き受けてくれないかと。

理由は、星が白蓮の下で客将をしていた事もあつた人間だからだ。しかし、その意見に星は兵士達が心から納得しないと返す。それに顔良が、自分がついて行き文醜が認めたと説明すると返した。だが、それでも不満が残るのではないか。そう星が言おうとした時だ。文醜が真剣な眼差しで告げた。

心配ねーよ。あたいの真名を預けるから。

その文醜の言葉に、星だけでなく全員が驚きを見せた。だが、文醜はそんな周囲に構つ事無く星へ視線を向けて告げた。

「あたいの真名は猪々子。あたいが心から強いって認めた趙雲に、受け取つて欲しいんだ」

「……分かつた。私の……」

星は文醜の声に込められたものを受け、真剣な表情で頷いた。そ

して、それに自分も応えようとした星だったが、それを文醜は遮つた。

「いや、いい。お前の真名は、あたいへ本当に預けたくなった時に預けてくれよ」

「猪々子……」

にかりと笑う文醜に、星は呆気に取られる。しかし、少しの間を置いて頷き返して立ち上がった。そして、顔良へ視線を向けて無言で頷く。それに顔良も我に返つたように頷きを返し、部屋を出るために動き出す。簡単に食事を済ませ、調練に行くためだ。

それに続くよつに星が部屋を出ようとした時だ。何かを考えていた袁紹が、その背に向かって声を掛けた。

「お待ちなさい、趙雲さん」

「……何か？」

「貴方、いのまま私の手下になりません」と、今ならかなりの待遇を約束しますわ」

それに顔良と文醜の表情が驚きに変わる。星の表情も驚いてはいるが、二人に比べると少しだけだ。袁紹の視線を受け止め、星はちらりと視線をしんのすけへ動かしすぐに戻す。

「有難い申し出ですが、今はお断りさせて頂きます

「なつ！？…………いえ、そうですの。残念ですわ」

星の返答に驚きを見せて、一呼吸置いて残念そうに返す袁紹。それに顔良と文醜は不可解な印象を受けた。声を掛けた事も意外ならば、それを断られてしまうに引き下がつたのも意外だったからだ。そのまま星は部屋を退出し、顔良はその後をやや慌てるよう追い駆けた。

それを見送り、文醜は袁紹へ視線を移す。袁紹はもう視線を動かし、しんのすけを見つめていた。その視線はどこか不思議そつだ。それが益々文醜の中で疑問を強めしていく。

「あの、姫？　どうしてあいつ引下がつたなんですか？」

「少し気になつた事があつたのですわ」

「は？」

袁紹の答えに思わず間抜けた声を返す文醜。それに袁紹は答える事なく、しんのすけへシロと共に朝食を食べてきること告げる。おそらく今から行けば顔良がいるだらうし、居なかつたとしても食堂にいる者へ自分が許可を出したと言えればいいと。

それにしんのすけが嬉しそうに頷き、シロと共に部屋を出て行く。それを見送る袁紹と文醜。そして、その足音が遠ざかつたところで、袁紹が大きくため息を吐いた。

「まあ、本当は趙雲さんが欲しいと嘗つより、しんのすけさんが欲しいと思つたのですけど」

「しんのすけを……？」

益々分からぬ。そう思つて文醜。そんな彼女へ袁紹はこう告げた。星はしんのすけの面倒を見ていいだけと思つた。だが、どうもそれ

だけではないような気がした。だから、確かめた。自分の臣下になると声を掛ける事で。

もし自分が感じた予感が正しければ、それを受けないだろうと。しんのすけの面倒を見ているだけならば、待遇がいい自分に仕えるだろうが、もし他の目的があればおそれべ断る。やつ袁紹は考えたのだ。

「それに……」

「それに？」

「いえ、何でもないですわ。とにかく、猪々子さんは体をお休めなさいな。それと、中々良い試合でしたわよ。ま、最後に優雅さが足りませんでしたけども」

袁紹の言葉に苦笑いの文醜。そして、袁紹はそのまま部屋を後にする。去り際に一言、此度の勝利、大儀でしたと告げて。それに文醜は呆気に取られるものの、それからしばらくして嬉しそうに笑みを浮かべ、部屋の中から出来るだけ大声で返した。

あらがとうござります、麗羽様っ！

食堂へ向かって歩く袁紹。その表情は疑問を浮かべている。その原因は言つまでもなくしんのすけだ。

(あの時……氣のせいかもしだせませんが、趙雲さんはしんのすけさ

んへ視線を向けた気がしましたわね）

それが先程文醜へ言わずにいた事。もしそれが見間違いでないのなら、それは何を意味するのだろうかと袁紹は考える。名族たる自分の破格の待遇を簡単に蹴り、子供と犬を連れて旅をする。その目的は何なのだろうと。

そんな事を柄にでもなく考える袁紹。直感や運だけは優れる彼女。故に、何となくだがしんのすけの異常性を感じ取っていたのだ。自慢の武将である文醜が強いと認める事になつた星。それが何故か面倒を見ているしんのすけ。

庶民だから礼儀もなく、常識も知らない子供。だが、何故かそれが不愉快に感じない。そして、時折話す聞き覚えのない言葉。しんのすけは自分の住んでいた場所の言葉だと言つていたが、それにしてもあまりに聞き覚えがなき過ぎるのだ。

「よつちえんにぼでいがあぢ……すべりだいにひまわりぐみ

昨夜のあいの話を聞いていた時に出た言葉だけでも、これだけあるのだ。これでは袁紹だろうと疑うというものだった。自分達が知る言葉に似てもいない。地方の言葉であれば、どこか似た響きや聞き覚えのある言葉があつてもいいはず。

しかし、どれ一つとしてそういう言葉がなかつた。袁紹はただ生まれだけで名族と名乗つてゐる訳ではない。この時代では、受ける事が中々出来ない教育をきちんと受けているのだ。

いくら周囲から馬鹿と思われていても、それは行動においてはだ。知識面だけは、袁紹は決して劣つてなどはない。朝廷での作法や礼仪などを理解している事からも、それは明らかなのだから。

そんな事を考えている内に、袁紹は食堂に辿り着く。そこに袁紹が顔を出す事など滅多にない。だが、今日ここへ来たのは目的があつたからだ。

「……いましたわ」

視線の先では、しんのすけがシロへ料理人からもられたのだろう骨を与えていて、自分は肉まんを口にくわえている。星と顔良は簡単に摘める物を受け取り、今は今日の事での打ち合せを別の場所でしているのだ。

本当は食堂でしてもよかつたのだが、星がその話から周囲に文醜の怪我の原因を探られるのは良くないと判断したためだ。文醜は袁紹の懐刀。そんな人物が一介の武芸者となつた自分に傷を負わされたとなれば、周囲に与える影響は少なくない。なので、文醜の受け持つ兵士達のみで留めておこうとしたのだ。

「おいひい？」

「キャン」

行儀が悪いと一喝されるようなしんのすけの行動だが、周囲はそれを見ても苦笑するだけで怒鳴りはしない。誰もが優しく注意しているのだ。それにしんのすけも頷き、椅子に腰掛けて食べ始めた。それに周囲が微笑みを浮かべ、また仕事に戻るべく動き出す。その様子を見て、袁紹は声を掛けるなら今かと判断した。

「ちよっと、しんのすけさん……」

突然現れた袁紹に驚く周囲の者達。それに意識を欠片として向かず、袁紹はたどしんのすけへ視線を向けていた。それに気付き、し

んのすけは咀嚼していた肉まんを近くにあるお茶で流し込んだ。

「ん？……つぶは。何？ よこしょーのお姉さん」

「よこしょーではなく袁紹ですわっ！ 間違えるべからざる、無理に名を呼ばずともいいと言いましたのに」

周囲がしんのすけの言つた言葉に笑いを必死に堪えていた事に気が付かず、袁紹は彼だけを見つめていた。

「それで何か」用？」「

「一つだけ教えて欲しい事がありますの」

袁紹がやや真剣な眼差しを向けた事に気付き、しんのすけは肉まんに伸ばしていた手を止めた。それに袁紹が別に手に取つてもいいと視線で告げる。しんのすけはそれに頷き、肉まんを手に取ろうとして片手ではなく両手を伸ばして一つ取つた。

それに不思議そうな表情を浮かべる袁紹。すると、そんな袁紹へしんのすけは肉まんを差し出した。それに周囲が息を呑む。袁紹は高級な料理しか食べない。庶民が食べるような物は口にした事がないからだ。

「……何ですの、これは？」

「肉まんだぞ。知らないの？」

「勿論聞いた事ぐらいはあります。で、これをどうぞ」とへ

「一緒に食べよ。おにしじぞ」

しんのすけはそう言つて自分の分を一口で入れる。その大口に袁紹が軽く驚きを見せた。そして、そのままもぐもぐと咀嚼していく。袁紹はそれを黙つて見つめた。やがてしんのすけはそれを飲み込むと、お茶を静かに啜りほつと一息。

そこで手を合わせて、歯み締めるよつにこつ告げた。おじしゅう「じぞこましたと。それに袁紹が頷き、ならばと軽く湯気が立ち上る肉まんへかぶりつく。その柔らかな饅頭へ歯を立てるとき、中から熱めの肉汁が溢れ出す。それにやや戸惑いながらも、袁紹はその味に及第点を出す。

(あら? 意外といけますわね)

そして、咀嚼していく。中の具材の旨味と歯応えの妙、そして饅頭のほのかな甘味に少し顔を綻ばせる袁紹。その笑みにしんのすけが気付いて見とれる。普段のお嬢様然としたものではなく、どこか優しい笑みがそこにはあった。

それに気付き、袁紹がしんのすけへ不思議そうに視線を向ける。それでしんのすけも我に返り、袁紹へ何でもないと手を振った。それにやや疑問を抱くも、袁紹は納得したように頷き、肉まんを食べ続けた。

こうして二人は用意してあつた肉まんを全て平らげ、共にお茶を啜つてほつと一息。

「「おじしゅう」じぞこました(ですわ)」

手を会わせてそう言つたところで、ニヤニヤと笑つしんのすけ。一方の袁紹は高笑い。互いに、同じ言葉を言つた事に対して微かな恥ずかしさと不思議な嬉しさを感じたのだ。そのため、それを誤魔

化すような反応がそれという訳だつた。

それが落ち着いて、再び袁紹がしんのすけへ尋ねた。それは、しんのすけの故郷。それにしんのすけは、特に考へる事もなく普通に答えたのだ。春日部と。

それに袁紹は不思議そうな表情を返したが、若干の間の後、何かを悟つたような表情に変わつた。そして自分を納得させるように小さく頷く。それに疑問符を浮かべるしんのすけへ、袁紹は気にする事はないとだけ告げ食堂を去つた。

「……何だつたんだううね、シロ」

「クウン?」

「だよね。分かんないぞ」

しんのすけは袁紹が去つていた方向へ視線を向け、そう言ひ事しか出来なかつた……

それから数日後、しんのすけと星は文醜が仕事に復帰すると同時に袁紹の城を出た。星が掴んだ情報によれば、稟と風は黄巾の乱の直前に南皮を発つたらしく、商人への最後の伝言は陳留へ向かうとの事だつた。しかし、それ以降の連絡は途絶えているらしく、星はそれを受け陳留に向かう事にしたのだ。

それを星が袁紹に告げると、頗良に言ひて墨と紙を用意させた。

それに戸惑つも用意する顔良。それに袁紹は何かを書き込み、星へ告げた。陳留を治める曹操とは古くからの友人。故に紹介状を書いてやるから持つていくといふ。

それにしんのすけ以外が呆気に取られた。まさかそこまでするとは思わなかつたのだ。そんな周囲へ袁紹は高笑いをし、感謝するようになると告げる。それに星達三人がため息を吐いて納得した。

つまり、袁紹は自分の凄さを理解させ、有難みを感じさせるために紹介状を書いたのだと。だが、それでも礼を言わねばと思い星が感謝を告げた。すると、それに袁紹は微かに笑みを見せてこう言つた。

出来るのなら、しんのすけさんをしつかり守つてみせなさい。

それに顔良と文醜が苦笑い。星を軽く皮肉ついているのだろうと思つたのだ。文醜に負けた事を暗に言つていると、そう捉えて。だが、星は違つた。袁紹の笑みが小馬鹿にしたものではなく、遠回しの激励に見えたのだ。

そして、それが意味する事を考へ、星はまさかと思い心の中で首を振る。気持ちを整理し、袁紹に言葉を返す星。こつして紹介状を手に、星はしんのすけとシロを連れてそこを後にした。

「これから行くのはどこの？」

「陳留だ。稟と風がそこに向かつたらしい。出来るのなら一度会つて相談するべきかと思つてな」

南皮の城下町を歩きながら話す一人。シロはしんのすけの隣をついて歩いている。田指すは陳留。そこにはいるだらう一人の仲間に再会するために……

「それにしても……姫、紹介状を書くなんてどうしたんです？」

「そうですよ。まあ、趙雲もしんのすけも良い奴らでしたし、ちょっと優しくしたくなるのは分かりますけど……」

顔良の言葉に同意して文醜も続く。それを聞いて、袁紹は心底呆れたような表情を返す。それに一人が不思議そうな顔に変わった。何もそんな風に思われる理由に心当たりがなかつたのだ。

すると、袁紹は大きくため息を吐いて首を横に振つた。自分しか気付いていなかつたのか。そう思つて袁紹は益々戸惑う一人へこう告げた。

貴方達は何も分かつていらないんですね？　しんのすけさんは、おそらく天の御遣いですわ。

そう、袁紹は春日部との出身地に聞き覚えはない。それは、この大陸ではない事を意味する可能性が大きい。少なくとも彼女にとつては。五胡かとも考えたのだが、それであればこちらに対しての態度に納得が出来ない。それに、しんのすけは幽州で白蓮の保護下にいた。書状にはその白蓮と同じように扱つて欲しいとまであったのだ。

そこから袁紹はそう結論付けたのだ。物的証拠は何もないに等しい。全て状況証拠と憶測でしかない。それでも、しんのすけは天の御遣いだろうと袁紹は確信した。そう、だから態度が誰に対しても

同等だったのだ。礼儀や世間知らずなのもそれで全て説明がつく。
袁紹の告げる説明に一人は言葉がない。

「じゃ、じゃあ……」

「私達、天の御遣い様を……」

「ええ。庶民の子供として扱っていたんですね」

「「ええええええつ?...」」

大声で驚く二人を無視し、袁紹は楽しそうに高笑いを上げた。しんのすけが天の御遣いとしても関係ないのだ。だからこそ、単純に日々が楽しかった礼として、袁紹はしんのすけ達に曹操への紹介状を書いて渡したのだから。

そこにはこう書いてある。礼儀知らずの子供だが、袁家縁の者のため多少は大目に見て欲しいと。それならば曹操もあっさり門前払いをする事はないと思つたのだ。

しんのすけさん、忘れませんわよ。私に椅子を運ばせ、庶民の食べ物と共に食した事は……

しかし、その文面がただの礼だけではない事を知るのは彼女のみ。慌てふためく一人を他所に、袁紹は一人嬉しそうに笑みを浮かべるのだった。またいつか高笑いで勝負をしようど、そう内心で思いながら……

こうして、微かにではあるが袁家の者達と縁を作ったしんのすけ達。次に向かうは、曹操が治める陳留。そこに稟と風がいるはずとの情報を頼りに彼らは行く。そこで、また新たな出会いが待つと

知らずに……

白蓮との別れと袁家三人組との出会いと別れ。次回は曹魏の者達との出会いを予定。

魏軍と呉軍はおそらく分量的に一話必要となりますのでご了承ください。

魏の後は洛陽でのちょっとした事件とあの少女とのニアミスを考えています。

第六話

「お～ひー。」

「さすが陳留だ。賑わっているな」

「キャンキャン」

南皮を発つて数日。しんのすけ達は無事陳留に到着した。南皮とはまた違った活気を感じ、しんのすけは田を輝かせ、星は頷き、シロは嬉しそうに声を出す。道行く者達の表情は明るく、影が少しも見えない。あちこちから威勢のいい声や元気な会話が聞こえてくるのだ。

それが何からくるものかを星は理解し、視線を町から城へと向けた。そこに住む曹操が自分の領地内の治安を安定させ、流通の安全を確保しているのだ。ここに来る途中出会った商人から、星はそんな話を聞いた。

「さて、早速城へ向かうぞ」

「え？ もう、そーそーさんご会いに行への？ お宿は？」

まずは宿の確保ではないのか。そう思つたしんのすけ。旅をするよになつて、まず何を確保るべきかを覚え始めているのだろう。だが、星はそれにやや考え、頷いてこう返した。

今回は袁紹からの紹介状がある。それで上手くすれば、前回のように客人として部屋を貸してもらえるかもしれない。それに、おそらくこの賑わいからすれば宿も一軒や二軒ではない。故に、急いで宿を確保する必要はないだろうと。

「何しろ、あの袁紹殿の紹介状だ。おそらく曹操殿も無碍には出来まい。宿の確保は、謁見が終わってからでいい」

「ブツ、ラジヤー」

「キヤン」

星の声に了解との返事をし、しんのすけとシロは動き出す。往来を行く人波に飲まれぬよう気をつけながら、しんのすけ達は曹操の住む居城へと向かうのだった。

星は、この後宿を確保しなかつた事を少し後悔する事になる。そう、それは部屋が与えられた事が素直に歓迎出来ない状況になるが故に……

袁紹の時と同じく門前で待つしんのすけ達。違いと言えば、星が門番と会話をしている事だろう。町の様子から始まり、曹操の人となりなどを聞いてているのだ。門番も自分が住む町や主君の事を褒められれば嬉しくないはずがなく、星へ饒舌に話していく。

しんのすけはそんな星とは違い、シロと戯れていた。南皮の時は袁紹達が招待してくれたため、シロを連れて平気だった。しかし、今回はそれと状況が違うにも関わらずだ。それは星が、犬連れでも袁紹からの紹介であれば問題ないだらうと判断したからだ。

「さうか。曹操殿は噂通りの名君のようだな」

「ああ。曹操様程の方はいないだらう。世が世なら、今頃は朝廷の重鎮になつてただろうさ」

星の言葉に嬉しそうな声を返す門番。丁度そこへ紹介状を持つて、伺いを立てに行つていた方が戻ってきた。そして、星へやや畏まつたような言葉遣いをし、案内を始めた。それに星は自分の予想が間違つていなかつた事を悟つた。

袁紹からの紹介状には、扱いに関する事も書いてあつたのだと。しんのすけへ声を掛け、星は門番の後ろをついて歩き出した。歩きながらも、城内の様子を見るのを忘れない。調練の様子に城内で働く者達の表情、文官達の様子に女官達の雰囲気など全てが曹操の情報だ。

（ふむ……やはり評判が良い者が治めているだけはある。誰も不安や恐怖も抱かず、イキイキとしているな）

星はそう考えながら周囲へ視線を動かしていた。同じように横を歩いていたしんのすけも視線をあちこちへ動かしていたのだが、その視線があるものを捉え、足を止めた。それは中庭をよたよたと歩く大量の本。いや、本を運ぶ誰かだ。

おそらく書庫から持ち出したのだろうが、本の量が多く些か不安定。それを見たしんのすけはその人物を手伝おうと思い、そちらへと歩き出す。シロは星の傍を歩いていたため、それに気付けなかつた。

しんのすけが中庭へ向かつて、遅れる事数分。星は自分以外の視点も聞いてみるかと思い、歩きながら横にいるはずのしんのすけへ声を掛けた。

「しんのすけ、お前から見てこの城をどう思つ?」

だが、当然ながら星の問いかけに返事はない。嫌な予感を感じて視線を横に向ける星。そこにしんのすけが居なかつた。シロも星の反応からそれに気付き、周囲の匂いをかき出す。その横で立ち止まり、周囲を見渡す星だつたが、しんのすけの姿は見当たらない。

歩いている時に女性が通り過ぎたかと思い出す星だつたが、そんな事はなかつた。確かに周囲に女官はいたが、それらは全て自分も見ていた。ならば、それを追い駆けて行つたとは考えられない。

「シロ、しんのすけはどこに行つたか分かるか？」

「……クウーン」

「そりが……」

鼻を地面に向け、匂いを辿りつとしたのだろうが、既に距離が開いてしまつたためにそれも出来ず、シロは申し訳なさそうに頃垂れた。それに星は気にしなくていいとばかりに優しく頭を撫でる。すると、星がついてこない事に気付いた案内役がそこへ戻つてきた。そしてその様子から何があつたのかと思い、問いかける。

「どうかしましたか？」

「あ、いや……連れの子がはぐれてしまつたのだ。少し待つてもらう事は可能だらうか？」

しんのすけを見失つたままでは少し不味いかと思い、星は案内役にそう言つた。だが、それに相手が困つた顔をした。何でも曹操は忙しい身のため、少しでも時間を無駄にしたくないと考えているのだ。それを聞いて、星は仕方ないと歩き出す。

しかし、相手へこう頼む事にした。しんのすけを案内が終わつた後で搜してもらえないだろうかと。それに相手は苦笑し、分かりましたと引き受けた。星はそれに感謝し、シロを預ける事にした。しんのすけの匂いを辿る事が出来るだらうと考えて。

「ひして、星は一人で曹操との面会に向かつ事になる。一方、しんのすけはと言つと……

「ね、オラが少し持つぞ。だから、それ一度下に置いて欲しいんだ」

「どうしてこんな所に子供がいるのよ……？」

猫耳のようなフードを被つた少女 荻?は抱えた本の重さに表情を少し歪めながら、隣で声を掛けているしんのすけへ視線を向けた。そもそもは、曹操に頼まれた資料を運ぶついでに、自分が使おうと思つた資料も運ぼうと思つたのが間違つた。

量を見てさすがに厳しいとは思つたものの、戻すのも時間の無駄だと判断し、何とか今のように抱えて歩き出したのだが、正直腕が辛いのだ。今もブルブルと震えている事からも限界が近い。それをしんのすけも感じ取つていた。

「腕がブルブルしてるし、お顔もたいへんつて顔して。オラ、こう見えてもけつこ一力あるぞ。毎日たんれんしてるから

「鍛錬？ あんたが？」

「ほい。ね、だから少し持つぞ」

しんのすけの言つた内容に若干驚きを見せる荀？。そして、しんのすけがどこまでも素直に手伝いを申し出るので、荀？も仕方ないかと思つたのか、本を持つ手をゆつくりと下げる。だが、地面にはつけようとはしない。それにしんのすけが軽く疑問を浮かべると、荀？はやや急かすように言つた。

「大事な本を土で汚す訳にはいかないの！ 辛いんだから早く取りなさいっ！」

「あ、やつやー」とね

しんのすけは納得したとばかりに返事をし、上方の本を数冊持ち上げて抱えた。たつた数冊だが、それでもかなりの重さを軽減した。荀？はそれに息を吐き、しんのすけへ視線を向けた。

「一応礼は言つておくわ。ありがと」

「どういたまして。で、これどこに持つてくの？」

「華琳……曹操様のお部屋よ。ついてらっしゃい」

「ほーい」

子供相手に真名で言つても分からぬだらうと思い、荀？は名で言い直した。だが、それにしんのすけは大して思つ事もないのと、平然と返事をするだけ。

荀？の後ろを追つように歩き出すしんのすけ。歩きながら、荀？

からしんのすけは様々な質問を受ける。どうしてここにいるのかとの問い合わせから始まって、何故助けようと思ったのかを聞かれた。

それにしんのすけは簡単に経緯を話した。この陳留に来たのは、別れた二人の仲間を捜しての事。この城に来たのは袁紹からもらった紹介状があつたから。助けよつと思つたのは、荀?が困つていうだつたからだと。

「それだけ？」

「そーだよ。オラ、困つた人をお助けするつて決めたんだ」

「子供のくせに……」

「ネ」「//」のくせに……」

「煩いっ！ 別にそれは関係ないでしょ！」

「ひるむきこ、そつ！ 別にそれは関係ないでしょ！」

しんのすけの返しに言葉に詰まる荀?。その反論内容にではない。その一連の言い方が自分の真似だと気付いたからだ。下手な事を言うとこのまま真似ばかりされる。そう思つた彼女は、その後一切口を開かず黙つて歩いた。

そして、一枚の扉の前で荀?が止まり、しんのすけもそれに続くよつに止まつた。すると、荀?が中へ向かつて声を掛けた。華琳様、頼まれた物を持つてきましたと。それに対しても返事はなく、荀?は不思議に思う。だが、しんのすけは何となく部屋に誰もいない気がした。

「……ね、いないみたいだぞ」

「そんなはずは……あ、そつか。あんた達は袁紹の紹介状を持って来たのよね?」

荀? がそう問い合わせると、しんのすけはそれに頷いた。それだけで荀? は理解した。おそらく自分が運ぶのに手間取っている間にそれを誰かが知らせに来て、曹操はそちらを優先したのだろうと。なので、二人は部屋へ入つて本を机に置いた。しんのすけのは全て曹操の頼まれ物だつたのでそれで良かつたのだが、荀? は自分の方もあつたのでそこから選別し、再び本を持とうとした。しかし、その動きが止まる。

(腕が辛いわね。さすがに少し休みたいけど……)

文官である荀? は、今までの負荷で腕がかなり疲労している事を理解した。だが、それでも時間を無駄には出来ない。そう思い、小さくため息を吐きながら本を抱えようとしたのだが……

「よつと」

「えつ……?」

「腕疲れたでしょ? オラが持つぞ。次はどこに持つてくの?」

「私の執務室だけど……」

「おむつじつ? 赤ちゃんでもいるの?」

「執務室! 仕事をする部屋よつと!」

怒る荀？にしんのすけはニヤニヤと笑う。それに彼女がやや苛立ちを込めた視線を向けると、しんのすけは「」と言つた。

知つてゐる。だつて白蓮ちゃんもそこでお仕事してたもん。

もう告げて慌てるよひに部屋を出るしんのすけ。それに少し沈黙する荀？だが、すぐに自分がからかわれた事を理解し怒りを露わにそれを追う。そこで叱るうとした彼女へ、しんのすけがある事を思い出してそれを止めた。

そう、曹操を待たせているのではないかとの言葉だ。それに荀？も言葉に詰まり、仕方ないとばかりに怒りを抑え込んだ。しかし、それならば余計早く行けと告げ、本を奪おうとしたのだ。

しかし、それにしんのすけは星がいるから急ぐ必要はないと返し、本を渡そとはしない。結局荀？が折れ、しんのすけを連れて仕事部屋向かつて歩き出す。

そこで再び会話が始まるのだが、そこで二人は同時に同じ事をした。互いの名前を聞いたのだ。しんのすけは、荀？が鈴々と同じぐらいに見えた事もあり、友達になれるかもと思い名前を聞こうとした。

一方の荀？は、あの袁紹から紹介状を貰つたしんのすけの事を少し探ろうと思つた。なので、まずは名前を聞こうとしたのだ。結果、こつなるのが決まつていたようなもので……

「「ねえ……」「

重なる声。それに互いが軽く驚き、しばし沈黙。視線は相手を促している。しんのすけは単純に相手の方の話を聞きたくて、荀？は

大人として相手を優先させようとしていた。だが、それでは埒が明かないと思ったのだろう。仕方ないとばかりに荀？がしんのすけへ問いかけた。

「……はあ。あんた、名前は？」

「オラは野原しんのすけ。名前がしんのすけだぞ。あざなつていうのはない」

「セツ……変わった名ね」

「みんなそーゆー」

しんのすけの名乗りに荀？は驚きを感じるも、それを表情に微かにしか見せない。そして、しんのすけが今度は荀？へ名前を尋ねる。それに荀？が名乗りの返礼とばかりに胸に手を当てて告げた。

「私は荀？。字は文若よ」

「お～、カッコイイ……けど覚えにくいや」

最初こそ、しんのすけの声に白慢げな表情を浮かべていた荀？だったが、最後の一言にその姿勢を崩す。それにしんのすけが大丈夫かと声を掛けるが、誰のせいでこうなったと返す荀？。そんなやり取りをするも、しんのすけは軽く謝つただけですぐに話題を変える。荀？の事をどう呼べばいいかとのものだ。それに荀？はどういうものなら覚えられると聞き返す。子供相手だからか、幾分かその声は本来男性に向けるものより優しい。

「そうだなあ……じゅんちゃんは？」

「はあ～。」

「お？ それがダメなら……ネコひやん

「また猫か！ でも、それは絶対却下よ。それなら、まだ荀ちやんの方がマシじやない」

「じや、じゅんちやんとホーロード」

「これで話は終わりとばかりにしんのすけは言い切った。荀？ はそんなんしんのすけに軽い眩暈を感じるが、それでも気付いている事がある。それは、子供にしてはちゃんと自分の言つている事を理解して、言葉を返している事。

「」の陳留には、將軍でありながら彼女の言つてている事を理解出来ない者もいるのだ。それに比べれば、しんのすけがどれだけマシかが分かるものだらう。

(春蘭は子供にも劣るのかしら？ ま、あいつは猪だから当然かも
しれないけど……)

荀？ はそんな事を考えながら、しんのすけを導くよう歩く。やがて荀？ の執務室に到着し、彼女はしんのすけから本を受け取った。少しとは言え腕を休める事が出来たので、もう少しの間なら本を持つ事が出来るようになつたからだ。

「」今までいいわ。」を真つ直ぐ行けば応接室よ。早く行きな
セー

「お～、教えてくれてありがとう、じゅんちやん

「別にいいわ。ここまでの礼みたいなものよ。ほら、急ぎなさいしんのすけ」

「ほーい」

教えられた通りの方向へ走り出すしんのすけ。それを見送り、荀？はやや疲れたように部屋の中へ。そして机に本を置き、ため息一つ。

「どうして子供の癖に厄介なのかしら……？」

しんのすけの言動を思い出し、荀？はそう心から呟いた。この時の彼女は知らない。しんのすけのその厄介さを味わう事になるのは、大抵自分のような人間だと。そして、彼女の事を大人と思わず、自分に近い年齢と思っている事を。

そんな事とは知らず仕事を始める荀？。そこへしんのすけの匂いを辿ったシロと共に、彼女のもつとも嫌う大人の男性が現れるのはそれから少し後だった……

しんのすけと荀？が曹操の部屋へ辿り着いた頃、星は一人曹操達と対面していた。そう、そこにいるのは曹操だけではなかった。夏侯惇と夏侯淵の姉妹も同席していたのだ。

星は、その理由を曹操の護衛と考えていた。だが、実際は違う。夏侯惇は仕事が休みだつたためにここに来て、夏侯淵は姉が何か粗相としないように監督するために自主的にやってきたのだ。

「……そつ。不思議な鏡を、ね」

「ええ。何かご存知ないでしょつか？」

簡単な自己紹介を終え、陳留の様子から感じた事を軽く話し、今はしんのすけ帰還のために必要と思われる鏡の情報を尋ねていた。曹操は最初から何故そんな物をと言わず、特徴などを聞き出す事で星に話を続けさせる。その時の表情は、どこか興味を抱いたというような印象を星に与えた。

特徴は何も分からず、不思議な力も秘めているとだけしか情報はない。そう星は答え、鏡を求める理由は、袁紹の趣味だと告げた。それに三人は納得したように頷いた。袁紹の事をよく知る三人としては、星の告げた理由はそれだけしかったのだ。

（鏡、ね。あの麗羽が欲しがりそうな物だけど、この趙雲という者が麗羽に従つようには思えないのよね）

曹操はそう思い、星を見つめる。直感が訴える。この者が欲しいと。何せ、夏侯惇が星を袁紹の使者と思い、最初に軽く睨むように向けた視線を受け、平然としていたのだ。それどころか、そんな夏侯惇へこんな事を言つてのけたのだから。

そんな風に睨まれますと、眉間に皺が出来ますぞ？

飄々とそう告げられた言葉に、夏侯惇は慌てて目つきを戻したのだ。曹操と夏侯淵は、そんな星に軽く感心をした。夏侯惇の睨みを受けて平然としているだけでなく、余裕さえ浮かべてそれを嗜めた事に。

そんな星が袁紹のような者を主君とするはずがない。絶対ではな

いが、曹操にはそんな確信めいた自信があった。故に、この鏡の話は袁紹が言い出したのではなく、星が元から探している物ではないかと考えていた。

「ねえ、趙雲。一ついいかしら?」

「何ですかな?」

曹操は楽しそうな笑みを浮かべて星へ問いかける。その笑みに嫌な感じを受けながらも、星は平然と構えた。

麗羽はその鏡の話をビックリで聞いたのかしら?

その言葉に星は内心で舌打ちをした。曹操が自分の話を疑つていると悟つたからだ。その問い合わせは勿論用意している。だが、目の前の曹操の表情は、明らかに自分の話が袁紹の告げた話ではないだろうと確信しているものだった。

やはり悔れない。そう思い、星はあまり得意ではないが、頭をいつも以上に使う事にした。どこかで、それでも目の前の者には通用しないと悟つている。だが、それでも万に一つでも可能性があれば賭けてみよう。そう考え、星は口を開いた。

「夢のお告げだと、そう言つていきました」

「夢、ね……」

「袁紹殿は、どこか我らと違う場所を見ておられますからな。寝惚けて天の声でも聞いたのでしきつ」

それに付き合う方の事も考えて欲しい。そう馬鹿にするよつて星

は締め括った。それに夏侯惇だけが同意するように笑う。曹操と夏侯淵は笑いこそしたが、その質が夏侯惇とは違う。そう、曹操は楽しそうにしているのだ。夏侯淵は冷ややかな笑み。共に、星が言つ事が嘘だと思っているのだ。

それでも星はついたえない。自分自身に言い聞かせる。自分の話す言葉は全て真実だと。そうしなければ、自分ではなくしんのすけが危なくなるのだと思い込ませて。曹操がしんのすけを天の御遣いと知れば、必ず利用するだらうどこかで察しているのだ。

その後も曹操による星への追求は続いた。夢で見た不確かな物をどうやって探すのかと聞かれれば、それらしい話や言い伝えがある物を用意すれば、納得させる事が出来ると返し、気紛れな袁紹はそんな物で納得しないかもしれないと言わわれれば、根は単純故に、物と話さえあれば何とでもなると返した。

「……いいでしょ。趙雲、まだ宿は決めていないのではなくて？
とりあえず、しばりへこの城に滞在しなさい。その間に出来るだけ調べてあげるわ」

「寝床だけではなく、そこまでして頂けるとは……感謝しますが、曹操殿」

「いいのよ。麗羽からも良くしてくれとあつたし、私自身もそつするに相応しいと感じた。また暇を作つたら話を聞かせて欲しいしね」

星の話を聞いて、曹操はどこか満足そうに頷いてそう告げた。
一方の星は、そんな申し出に内心ため息を吐いた。曹操の興味を嫌な意味で引いてしまつたと感じたのだ。きっとまた必ず機会を設けて追求してくるだろうと。

宿を取つていれば少しは違つたかと思う星だつたが、それでもきっと結末は同じかと思い直し、再び内心でため息。そんな星の内心を読んでいるのか、曹操はどこか獲物を捕らえたような笑みを浮かべていた。

そうして、話が終わつたと誰もが思った時だ。応接室の外から二つの声が聞こえてきた。一方は、星が良く知る声。もう一方は曹操達が良く知る声だ。

「駄目だよ。今、大事なお話の最中なんだから」

「だから、オラはそのお部屋にお呼ばれしてるの」

「嘘吐いたら駄目だぞ。大体、どうしてここに子供がいるのや?」

「じゅんちゃんも同じ事聞いてきたけど、オラ、よいしょーさんからのお手紙を星お姉さんと一緒に届けに来たんだぞ」

桃色髪の少女 許緒は午前の仕事を終え、ここで夏侯惇を待つていた。昼食と一緒に食べに行こうと思っていたのだ。まあ、退屈だったので部屋の中を覗き見ていたのだが。そこへ、しんのすけが現れて普通に応接室に入ろうとしたので、現状のように止めたといつて詰だ。

だが、そんなしんのすけの最後の言葉に、許緒は次々と疑問符を浮かべた。一つ目はじゅんちゃんとの名前。次によいしょーさん。最後は星お姉さんだ。それらが理解出来ない名前ばかりだったため、許緒は一つずつそれを解明していくとした。

まずじゅんちゃん。それは誰と聞かれ、しんのすけは荀?の特徴を告げた。そう、猫耳のような特徴を持つ頭巾を。それで許緒は誰

かを理解し頷いた。

「桂花ちゃんの事かあ。でも、よくそんな呼び方許してくれたね？」

「お名前覚えにくいから、じゅんちゃんかネコちゃんだとどつちがいって聞いたんだ。そしたらじゅんちゃんがいって」

しんのすけの言葉に許緒は小さく笑つて頷いた。それなら確かにじゅんちゃんを選ぶだろうと。そして、続いてよいしょーさん。それはしんのすけが袁紹の特徴を伝えたのだが、生憎許緒は袁紹と会つた事はない。そのため、しんのすけがどれだけその真似の高笑いをしても、許緒には理解してもらえなかつた。

「ぜえ……つ……ぜえ……これでも分かんない？」

「うー、ごめん。僕が知らない人みたい」

高笑いのしそぎで疲れているしんのすけを見て、許緒は少し申し訳なく思つてそう返した。それにしんのすけも仕方ないと想い、頷いて気を取り直して次の人物の説明をした。そう、星だ。

白い服装の女性。それだけで許緒には心当たりがあつた。そう、今曹操達が話をしている相手も同じ格好だつたのだ。そこで、更にしんのすけが髪の色などを告げる。それで完全に許緒は、しんのすけの言つている相手が部屋の中の人物だと理解した。

「それ、華琳様達とお話してる人だよ。本当に呼ばれてたんだ」

「うん」

「そつか……疑つてごめんね。ちょっと待つて。今、華琳様達に

聞いてみるか？」

しんのすけの言つた事を最初から疑つてかかつた事に謝罪し、許緒は応接室の中へ伺いを立てようとする。しかし、その瞬間扉が開いた。

「話は聞いていたわ。季衣、『苦勞様』

「え？ あの、華琳様。僕、何もしてませんけど？」

曹操に労を労われるも、その理由が分からぬ許緒。曹操は素性の分からぬ者を通さず、丁寧にその者を確かめていた事に満足していたのだ。だが、それを意識せずして許緒には曹操の喜びが理解出来なかつた。

「しんのすけ、どこへ行つていたのだ」

「じゅんちゃんがご本たくさん持つてて、大変そうだつたからお手伝いしてた。そしたら、こここの場所教えてくれたんだぞ」

星の問い合わせにしんのすけはそう答えた。じゅんちゃんが誰を意味するかを室内で曹操達から聞いた星としては、それだけでも色々と思つところがあるのだが、今はそれよりも言つておく事があつた。

「どうか。人助けは立派な事だが、それで私やシロに心配を掛けるのは感心せんぞ？」

「えつと……『めんくさ』」

「分かればいい。それと一応言つておくが、正しくは『めんなさい

だぞ、しんのすけ」

素直に頭を下げるしんのすけへ微笑みを浮かべ、星は柔らかくそう注意した。それに頭を上げて頷くしんのすけだったが、その目が星の後ろにいる曹操達を捉える。そして、曹操の両隣にいる夏侯姉妹へ視線を向けた途端、その目が輝いた。

無言で立ち尽くせば黒髪の美人に見える夏侯惇。姉が絡まない限り、知的で冷静な美人の夏侯淵。どちらもしんのすけからすればキレイなお姉さんだった。故にしんのすけは見慣れたにやけ顔になり、二人へ近付いた。

「ヘイヘイ、おねいさん達。オラと一緒にヤムチャしな~い？」

「「は？」」

子供に口説かれるという珍しい経験に、思考が停止しかかる一人。これが一般男性だったのなら、一人はそれぞれらしい反応を返しただろう。だが、初対面で子供から口説きを受けるなどは、誰でも予想出来るはずがない。

しかし、しんのすけは戸惑う一人に構わず、口説き続けていた。それを見て楽しそうに笑う星。一方、許緒は呆気に取られ、曹操は微かな怒りを抱いていた。しんのすけがお姉さんと扱つたのは、夏侯姉妹。自分はそう扱われなかつた。それが密かに身長や容姿に劣等感を持つ曹操を刺激したのだ。

(私は大人じゃないって言つのね、この子供は……いい度胸じゃない)

「ちょっと、そここの子供！」

一喝。並の者であれば、それだけで動く事が出来なくなりそうな威圧感。それを曹操はしんのすけへ放つた。だが……

「ね～、オラと夕焼けの下でドウエッショ～」

「あ、あのな小僧……」

「華琳様が呼んでいるのだが……」

曹操の一喝などじに吹く風とばかりに口説きを止めないしんのすけ。みさえの激しい怒りは曹操のそれと同等だったのだ。それを受け続けたしんのすけに、曹操の一喝は聞き慣れたものといえたのだろづ。

そんなんのすけに困惑する夏侯姉妹。曹操はしんのすけの様子に一瞬呆気に取られるも、すぐにわなわなと震え出した。だが、それがスッと治まった瞬間、曹操は優しく声をかけた。

ねえ、私の話を聞いてくれないかしら？

その声にしんのすけがびくっと震えて背筋を伸ばす。そう、それは優しい声だつた。だが、同時にとても恐ろしい声だつたのだ。しんのすけが知る限り、その声は相手の怒りが頂点に達した後、それを突き抜けた時に出る声だから。

ゆつくりと顔を曹操の方へ向けるしんのすけ。そこには、にこやかな笑みを浮かべる曹操の姿があつた。見れば、その異様な雰囲気に入呑まれたのか、許緒と星が完全に固まつていて夏侯姉妹も身じろぎ一つしない。

「まあ、貴方の名前を教えてくれるかしら？」

「あ、野原しんのすけ……五歳」

「あ。名がしんのすけでいいのね？」

曹操の問いかけに無言で何度も頷くしんのすけ。それに曹操は満足そうに頷き、笑みを深めて告げた。

「ではしんのすけ。貴方、春蘭と秋蘭をお姉さんと呼んだわね？」

「ほ、ほい」

「じゃあ、季衣はどう呼ぶの？」

その問いかけに、しんのすけは視線を許緒へ向けた。丁度、相手もしんのすけへ視線を動かしたようで、視線が合つた。

「え？　と……お、お名前は？」

「あ、僕は許緒。字は仲康って言つんだ」

「…………なら、きょーちゃんかな？」

お見合いの出だしのような会話。それに少しだけ緊張が解れたのが、許緒がその呼び名に頷き返した。構わないという事なのだろう。それにしんのすけも頷き返し、視線を曹操へ向けた。曹操はそんなやり取りに少しだけほだされたのか、その恐ろしい雰囲気を若干和らげていた。

星や夏侯姉妹はその事に安堵し、揃つて息を吐いている。それで、未だにしんのすけへ向く視線は鋭いままだつたが。

「季衣はやつ呼ぶのね。なう……」

そこまで言って曹操は何かに気付いたのか、口を閉じた。そして同時に一瞬恥ずかしそうな表情に変わる。だが、それをすぐに引っ込んだ。それでも、そこに先程までの怒りはない。それに全員が気付き、視線を曹操へ向けた。

（つい怒りに任せて言い出してしまったけど、これで自分の呼び方を聞いたたら、私が子供扱いされた事に腹を立てた事を認めるしかないわ……）

ゆっくりと怒りが収まってきたためか、曹操は自分が余計に墓穴を掘っていた事に気付いたのだ。しかし、ここで止めるのはおかしすぎる。でも聞く事が出来ない。何か上手い纏め方はないかと曹操は考え始める。

そんな曹操を見て、疑問符しか浮かばないしんのすけと夏侯惇に許緒。夏侯淵は何かに気付いたのか、密かに苦笑しているし、星も曹操の様子から何となく察しをつけたようで、不敵な笑みを浮かべていた。

そして、星はしんのすけへ静かに近付き耳打ちをする。それにしんのすけが頷いて、考えを纏めようとしている曹操へ告げた。

ね、お姉さんがそーそーさん？

それに曹操が思考を切り替え、しんのすけへ視線を向けた。そして、視界の隅で不敵に笑う星を見て、急にしんのすけがそんな事を聞いてきた背景を察した曹操。だが、それに乗るしかないかと思い、至つて自然を装つて答えた。

「ええ、私が曹操よ。字は孟徳」

「ほ～ほ～。ん～、じゃあ……もつちやんかな？」

「あ～、どうして私は字なのかしら～。」

「その方が可愛いし、もつちやんってどこかみんなと違うから。うんと……」

可愛いと評された事に曹操が軽く驚き、少しではあるが楽しそうに笑みを浮かべる。そんな曹操に気付かず、しんのすけは違う点を思い出しながらしていた。

(確かみんなから”かれー様”って呼ばれてたっけ？　かれーかあ……あー、カレー食べたいぞ。お家にならあれがあるので。えっと、何て言つたっけ？)

周囲からの呼ばれ方を思い出して、しんのすけはある物を連想していく。それは彼の好きな食べ物、カレー。そんな彼のために、家には常備されているレトルト商品がある。そう、その名もカレーの王様。それを思い出した事こそ、ある意味での運命の分かれ道。

「おおっ！　王様だあ！」

やつと思い出せたとばかりにしんのすけが言った言葉。それに曹操だけでなく星達も驚いた。今はまだ地方の諸侯でしかない曹操。それと接して、しんのすけが告げた王様との言葉。それが持つ衝撃は大きい。何も知らない者が感じた曹操の印象。それを王者の風格と言つたと思ったのだから。

勿論、しんのすけは既に自分が何を話していたかなど忘れている。しかし、その発言が見事に流れに合つてしまつたのだから恐ろしい。ともあれ、その言葉で真っ先に反応する者がいた。

その人物。曹操はやや愉快そうな笑みを浮かべると笑い出した。それに周囲の視線が集まる。だが、それに構わず曹操は、ただしんのすけだけを見つめて告げた。

面白い！ この曹操を王と評するか、しんのすけ。

お？ うんと、よく分かんないからそれでお願いするぞ。

ふふつ、お願いするつて……いいでしょう。気に入つたわ。

今夜趙雲と一緒に夕食を共にしなさい。

ほーい。

物怖じせず、曹操へ自分の意見を告げるしんのすけ。その態度が子供らしくもあり、どこかそれらしくもないと感じた曹操は、もつと話をしてみたいと思いしんのすけを食事へ誘つ。

一方、星はしんのすけの告げた王様との言葉に息を呑んでいた。曹操こそが乱世を止める者なのだろうかと、そう考えたのだ。しんのすけの直感が王と感じた存在。桃香や白蓮には言わなかつた表現。それが持つ意味は、星にはこの上なく大きい。

夏侯姉妹と許緒は、その王様との言葉に違う意味を感じていた。主君曹操は、何も知らぬ子供から見ても王者たる風格を持っている。それは彼らにとつては喜びでしかない。やはり自分達の主君は凄いと、そう強く思う事が出来るのだから。

そこへシロを連れた兵士が現れ、星はしんのすけを捜し続けてく

れた事に感謝した。曹操達はシロとじゅられ合い、楽しそうにしているしんのすけを見て笑みを浮かべ、兵士に密室へ案内するように告げて別れた。

そしてそのまま、しんのすけ達はその兵士につれて行き、密室へ。すると、部屋に入った途端、星はしんのすけへ先程の曹操とのやり取りを確認した。そう、星にとってはそれは見過しす事の出来ない話だったのだから。

「しんのすけ、曹操殿を王のよひに感じたといつのは間違いないか？」

「それなんだけど、オラ、もひちやんを王様だつて思つたなんて言つたつけ？」

しんのすけの言葉に星は呆気に取られた。それがあつての曹操からの誘いだから。しかし、しんのすけはそれにカレーの話を聞かせた。それを聞いて星は脱力。しんのすけが曹操と他者との違いを言おうとしていた事を、完全に忘れていたと理解したからだ。それを星が簡単に説明してやると、しんのすけはそこでやつと会話の流れを思い出したのか、手を打つて頷いた。

「あ、そつか」

「あ、そつか、ではない。まったく、お前といつ奴は……」

「うへん……でもちづき言われると……」

「何だ……？」

不思議そうにしんのすけを見つめる星。最初の言葉が直感から来

たのかと思ったのだが、そうではないと星は理解した。だが、急にしんのすけが何かを思い出すように考え込んだ事に、星はその先が気になったのだ。

「寂しそうだつたから、王様かも」

「何?」

予想外の答えに星は戸惑つた。何故寂しそうなのが王なのだろうと、そんな疑問を抱く星。それに気付かずしんのすけは自分が感じた事を話していく。曹操には友達がないだろつと思つた事をだ。そつ、白蓮と桃香は友達。更に白蓮には星と自分という仲間が、桃香に愛紗や鈴々という義姉妹がそれぞれいる。

しかし、曹操にはそんな存在がいないと思ったのだと、しんのすけは語つた。それに星は、曹操にも夏侯姉妹を始めとする者達がいると返す。しかし、それにしんのすけは首を横に振つた。

「違うぞ。あのお姉さん達はオラ達みたいなお仲間じやないよ。えつと……部下じゃなくて、し、し……何て言つたけ?」

「もしや臣下か?」

「おおつー、それだ!」

それで星はしんのすけの言いたい事を何となくだが理解した。白蓮や桃香は同等と思う存在がいた。自分を偽る事もなくさらけ出せる相手が。だが、曹操にはそういう相手がいないのだろつと星は思つた。

それは、曹操の周囲への態度や言葉遣いから感じたものだつたが、それだけではない理由がしんのすけにはあつた。それは……

(あの時のもうちゃん、田が寂しそうだった……)

別れる前、自分と許緒が名前を呼び合って遊ぶ約束をしているのを見て、誰もが笑みを浮かべていたのだが、曹操だけはそこに微かな悲しみがあつたのだ。まるで、何も考えずに自由に振舞えるしんのすけ達が羨ましいとでも言わんばかりに。

星は、そんな事を思い出し妙な表情をしているしんのすけを見て、抱いた疑問をぶつけた。どうして寂しそうだと王なのかと。それにしんのすけは、自分が絵本や紙芝居などで見た王様の事を思い出して告げた。

「王様って、みんな一人ぼっちなんだぞ。だつて、王様は一番エラいんだもん。だから、友達が欲しくなつたり、みんなと仲良くなりたいって思つたりするんだ」

「……そうか。王とは孤独なもの。故に、孤独さを感じさせた曹操殿は王らしい。そういう事か」

「それにみんな、もうちゃんの事、ぜつたい様つて付けて呼ぶし」

「お前は、意外と周囲に気を配つているのだな。いや、それでこそか」

しんのすけの最後の結論に苦笑した。白蓮も桃香も様を付けずに呼ぶ者がいた。だが、確かに曹操の周囲にはそんな呼び方をする者がいない。それを指摘したしんのすけの觀察眼に、星は感心した。

そして、星はそれを聞いて曹操を主にする事を保留にした。しんのすけが王と感じた理由を聞いて、それが天命によるものではないと判断したのだ。

次に話は別の事に移つた。そつ、稟と風の所在を調べる事についてだ。星は街へ出かけ、聞き込みなどをして足取りを追うつもりだった。それについてくるか否かをしんのすけに尋ねたのだ。無論、それにしんのすけは即座に頷いた。

そんな話を終え、どうするかと星が思つた時だ。それまで床に伏せていたシロが突然起き上がり、尻尾を振り出したのだ。それと同時に星も部屋へ近付く気配を感じ、笑みを見せた。

「しんのすけ、許緒殿が来たよ」

「お、さよーちゃんもつ來たんだ。早いね」

許緒が食事を終えた後に軽く遊ぶ約束をしていたしんのすけ。本当なら一緒に食事へと誘われたのだが、星が先程の事を確かめたかったため、遠慮したのだ。しんのすけとしては星がそう言つのならと思い、残念そうにする許緒へまたの機会と言つたのだから。

「しんちゃん、いる？」

「ほつほーい」

許緒からの呼びかけにしんのすけは元気よく返事をし、扉を開ける。そこには笑顔の許緒の姿があつた。その視線が部屋にいる星を見て、少し意外そうなものに変わる。

「あ、趙雲さんもいたんですね」

「ああ。これから少し街へ行こうと思つてな」

「そうですか。じゃ、僕が案内しますよ。それにしんひやん達、ご飯まだよね？」

許緒はそう尋ねる、それに星は頷くが、ふと思つた事があつたので尋ね返した。そう、許緒には仕事があるのではないかと。それに許緒は苦笑して答えた。夏侯惇が、自分としんのすけが思つ存分遊べるよつこと、午後からの仕事を代わってくれたのだ。

それを聞いて、星は夏侯惇の優しい面を見た気がして軽く驚きを見せた。しんのすけは夏侯惇の計りに感嘆の声を出し、嬉しそうに頷いていた。しんのすけの反応が夏侯惇を褒めたように見え、許緒も嬉しそうに笑みを見せる。

「えへへ、春蘭様は優しいんだよ。と言つて、趙雲さんも一緒にみんなで街へ行きましょつ。僕がオススメのお店教えますか？」

「やつか。なれば、お言葉に甘えるとじよつ」

「きょーちゃんのオススメかあ。楽しみだぞ」

「キャンキャン」

ひつして許緒に連れられ部屋を出るしんのすけ達。向かうは陳留の街。そこでしんのすけは、更なる出会いを得る事になる……

食事を終えて、星と別れたしんのすけとシロは許緒の案内で街を歩いていた。そこで出会ったのは、オシャレなオープンカフェのよ

うな店で話す于禁と李典だつた。彼女達を軽く紹介されたしんのすけだつたが、二人を口説く事はしなかつた。

その理由はそれをする前に邪魔が入つたため。そう、二人は仕事をサボつていたのだ。それを同僚で親友でもある楽進に見つかつたために、二人は強襲されたのだ。

今もしんのすけの目の前では、楽進に説教される一人の姿がある。それを眺め、自分もよく愛紗に説教をされた事を思い出すしんのすけ。シロもその光景を思い出しているのか、どこか懐かしそうな目をしていた。と、そこでしんのすけはふと気になつた事を尋ねた。

「ね、きょーちゃん。あのキレイな髪のお姉さんもお知り合いで？」

「屁ちやん？ うん、そうだよ」

「後でしょーかいして」

「いいよ」

しんのすけの申し出に笑顔で頷く許緒。言われなくともそうするつもりだつたのだ。そんな風に和む一人の前で、楽進は説教を終えたのか息を軽く吐いた。そして、許緒の呼びかけに反応して振り向き、しんのすけへ名乗りを始めたのだ。

「私の名は樂進。字は文謙だ」

「オラは野原しんのすけ。名前がしんのすけだぞ。それとあざなはないぞ。で、こつちはシロつて言つて、オラの……家族？」

「クウーン……」

「 shinichaya-san、シロがそこには言いつて言つてゐるよ」

しんのすけの疑問での終わり方に、シロは脱力するよつて地面に伏した。それを見て許緒は苦笑い気味にシロの心境を告げた。そんなしんのすけとシロに三人は小さく笑みを浮かべる。その後、許緒はしんのすけが曹操を王様と呼んだ事を告げ、三人を驚かせた。

そして、しんのすけは三人へどんな呼び方をすればいいかを尋ねた。覚えられない訳ではないが、やはり簡単な呼び方を決めておくに越した事はないのだ。そう、袁紹にもそれをしていれば間違える事も無かつたのだと、しんのすけが考えた事もある。

三人はしんのすけの言つて分にやや考え込み、まず于禁が表情を明るくして告げた。

「ひつちやんはどう? なのー。

それにしんのすけがお笑いの人みたいだねと告げるが、当然誰もその意味が理解出来ない。しんのすけば、そんな周囲の反応に自分の言つた事が通じない類の物だった事を思い出し、やや照れたように忘れて欲しいと告げた。その反応に許緒達が笑つた。何かと間違えて照れたのだろうと思つたのだ。

「じゃ、ひつちやんね。えつと……」

「わうなるとウチはひつちやんやろか?」

「お? それでもいい?」

李典はしんのすけの言葉にやや楽しそうに頷いた。初めての呼ば

れ方だと言つて、笑つてさえいたぐらいだ。それにしんのすけも頷きを返し、最後に楽進へ視線を向けた。それに楽進は、自分も流れから言つてがつちゃんだらうと思つていた。

正直その呼ばれ方には抵抗がある。なので、彼女はしんのすけへ別の呼び方を考案してもらえないかと告げた。しかしそれに干禁と李典から不満が出る。一人は楽進だけ呼び方を変更する事に文句を言つたのだ。

自分達も心からそれを望んでいるのではない。それを言われ、楽進は言葉に詰まる。子供であるしんのすけが、難しいから簡単な呼び方をさせて欲しいと言つたからこそ、二人も先程の呼び方を認めたと分かつたからだ。

そんな会話を聞き、許緒がしんのすけへどうすると問いかける。それに彼は”がくちゃん”との呼び方を提案。楽進はがくちゃんよりはマシかと思い、それで妥協する事にした。こうして、呼び方に關する事は片がつき、楽進は早速とばかりに同僚一人へ厳し目の視線を向けた。

それだけで一人には何かを理解し、真剣な表情で答えた。それはもうサボつたりしないとの約束。それに楽進が当たり前だと返すと、その重圧から逃げ出すように干禁が走り出した。それを追うように走り出す李典。その後ろ姿を見送り、手を振るしんのすけ。楽進はそんな一人にやや呆れたようなため息を吐き、許緒は苦笑していた。

シロは去つて行く一人を見つめ、視線を楽進へ向けて苦労しているだろうなと思い、小さくため息を吐いた。どこにも苦労をしている者がいるのだなど、そんな風に考えて……

しんのすけと許緒は午後の仕事をする樂進と別れ、シロと共に城へと戻った。そして、そこで許緒はしんのすけから天の遊びを教わる。無論、それはしんのすけの故郷のものだと誤魔化して。それを通してしんのすけは鈴々の事を思い出した。その懐かしそうな表情から、許緒はその理由を尋ねてその時の話を聞き、意外に思ったのだ。

そう、許緒と鈴々は既に顔見知りだった。黄巾の乱で一緒にいた事がある。そう聞いて、しんのすけは許緒から桃香達の話を聞き、お返しとばかりに自分の知る思い出を語る。それを聞いて、許緒は鈴々に抱いていた印象を少しではあるが変えていく。

「え？ しんちゃんの親友で、お別れの時に泣いた？」

「うう。白蓮ちゃんのお城を出てく時、オラの前で泣いてくれたよ

強くない。離れたくない。そう言つて大泣きした鈴々。その話を聞いて許緒は、不思議と鈴々の事を弱虫とか情けないなどとは思えなかつた。自分でも仲の良い友人ともう会えなくなるとしたら、それぐらいの事を言いそうだつたからだ。

しかも、親友ともなれば余計に。故にその気持ちが理解出来ると共に、許緒は抱いた親近感から密かに鈴々の事を見直していた。やたら共にいた時は張り合ってきた生意気な鈴々の姿を思い出す許緒。

(あいつ、意外と優しいんだ。……今度会う事があつたら、しんちゃんの事を教えてやるか)

今度会う事があつたら話をしてみよう。もしかしたら、少しは互いの事を話して仲良くなれるかもしない。しんのすけという共通の友人を得た今なら……と、許緒はそう思えたのだ。

もし鈴々に会うとしたらいつになるのだろうと、そう考える許緒。それと同時に、故郷の村に残してきた親友の顔を思い出す。手紙を送つて陳留に来るよう呼んでみようか。許緒はそんな事を考えて笑みを浮かべた。

（そうだ、流琉を呼ばづー 手紙書いて、お城で働いてるんだって教えて……きっと驚くだろうなあ）

自分でも未だに少し信じられない時があるのだ。親友も同じようない信じないかもしれないと思いながらも、微かに再会を計画し、胸躍らせる許緒であった……

次回で魏は終了予定。稟と風については、次回で明らかに。

「じゃ、とんのお姉さんとえんのお姉さんね」

「う、うひむ……」

「姉者、それでいいではないか。桂花はじゅんぢゃんだぞ?」

「わづね。春蘭、それが嫌なら貴女は惇ちゃんになるわよ?」

「あー、それちよつと可愛いですよ、春蘭様」

「いいんじやない? お似合いよ、子供みたいなあんたにはね」

食堂に響く多くの声。しんのすけと星を招いての夕食。卓に並ぶのは全て曹操と夏侯淵の手作り料理だ。許緒が樂進達も誘つたのだが、三人は恐れ多いと断り、現状の顔ぶれとなつていた。本当はどこかの店にしようと考えていた曹操だったが、自分を満足させる店があまりない事を思い出し、自分が腕を振るつ事にしたのだ。

既にその食事は粗方片付き、今は雑談時間となつていた。だが、しんのすけが夏侯姉妹の呼び方を決めていなかつたため、こうして決めている最中だつたのだ。星は先程から話題が自分ではなく、しんのすけへ振られている事に若干の不安感を覚えていたが、思ったような内容ではなく、しんのすけと自分の人となりを理解しようとしている内容ばかりだつたため、少し安堵していた。

今は夏侯惇と荀?が言い合いを始め、それを眺め曹操と夏侯淵は笑みを見せ、しんのすけは許緒から、一人はいつもこいつなのだと教

えられていた。星はそんな周囲を眺め、いつ話を切り出すかを迷っていた。

それは稟と風の事。宿で仕官すると言っていたのなら、仕官先はこの陳留しかない。であれば、曹操が何か知っているはず。だが、それを言い出す事が中々出来ない。星が懸念しているのは、そこから自分が仕官するように仕向けられる可能性だ。

（曹操殿は無類の人材好きと聞く。自分が欲しいと思つた相手は何が何でも手に入れようとするとか。私も目をつけられたようだし、下手な事は聞けないな……）

星はそう判断し、切り出すとしても曹操本人ではなく、軍師をしている荀？にしようと決めた。曹操本人に言つよりも、仕官の誘いを受ける可能性が低いだろうと思つたからだ。その相手である荀？は夏侯惇との毎度の言い争いを終え、しんのすけが差し出したお茶を受け取り飲み干していた。

それにしんのすけがいい飲みっぷりと褒め、それを聞いた周囲が酒ではないと笑つていて。言われた荀？は多少照れくさうだつたが、しんのすけの言葉が盛り上げるためのものと理解していたのだろう。それに小さくため息を吐き、言うのなら自分のような者ではなく、大酒飲みにしろと助言していた。

「じゃ、星お姉さんだね」

「ん？」

急に名前を挙げられたため、星はやや意外そうな表情を見せた。そんな星を曹操達が見つめ、楽しそうに笑みを見せる。

「趙雲、貴女お酒は強い？」

「まあ、それなりには」

曹操の問いかけに星は素直に頷いた。別に何か誤魔化す類ではないと判断したからだ。それに夏侯惇が嬉しそうに頷き、杯を差し出した。

「そうか。なら、飲め」

「姉者、もつ少し言い方があつ

「そうですよ、春蘭様。もっと飲みたくなるような言い方しないと」

夏侯惇の言い方があまりに直球すぎるため、夏侯淵と許緒が揃つて苦笑した。そんな一人の言葉に夏侯惇はキヨトンとした顔をし、そんなものかと問い合わせていた。どうも彼女的にはそれで飲みたくないようだ。

そんな三人を他所に、荀?はしんのすけから桃香達の事を聞き出していた。先程から、星があまりその事を喋らないようにしていると気付いたためだ。しんのすけはそんな事に気付くはずもなく、荀?の質問に素直に答えていく。

「で、劉備達とは公孫賛の城で共に過ごしていたのね？」

「ほい」

「そう……で、諸葛亮達はその頃からいた？」

「お? 誰?」

「諸葛亮よ。後は鳳統ね。どちらでもいいけど知らない？」

「そだね。オラ聞いた事無いぞ。そんな名前の人人が桃香ちゃん達と一緒にいたの？」

「そりよ。でも、しんのすけが知らないか。そうなるとあの二人は城を出てから劉備に出会い、すぐに軍師になつたのね」

自分達が桃香達と出会つた時期を思い出し、星が話した城を出た時期を擦り合わせ、荀?はそう結論付けた。そこから分かるのは、桃香の運の良さと諸葛亮と鳳統の頭の巡りの良さだ。きっと、桃香は一人が才能の持ち主だとは知らなかつたはず。そう荀?は断言出来た。

直接会つた際、その人物は把握したのだ。とてもではないが、人の才を見抜く力はなさそうだと。そう、一言で言うのならお人好しだが、それがただのお人好しではなく、どこまでもそれを貫こうといふ明確な意思を感じさせたのが意外だつたが。

(現実を見ない夢想家と思えば、意外と見てたのよね……)

黄巾の乱の際、協力する事になつたために荀?も桃香達と話す事はあつた。そして初めての打ち合わせの時、乱を起こした者達を出来るだけ助けたいと言い出した際、曹操が余計な混乱や無用の揉め事を起こすと注意した事があつた。

それに、桃香は確かにそうかもしれないと返した。だが……

でも、そりやつて全てを悪い風に考えていつたら何も変わらないと思うんです。まずは信じる事。悪い事を悪いと思って、考えを改めてくれる人はいるって。そういう希望を捨てない事も強さだ

と、私は思います。

そう言い切つて、桃香は更に曹操へ問い合わせたのだ。それは間違つていいと言えますかと。さしもの曹操も、その桃香の言い分を絶対に間違つているとは言えなかつた。だが、こう反論した。今の状況では、相手へ武器をちらつかせながら助けると言つてはいる事と同意だと。

それに桃香は迷いもなく頷いた。それしか今の自分は出来ないからと。相手を無防備で助ける事が出来ない。でも、心から出来るだけ助けたいとは思つてはいる。今は無理でも、いつかはそれを可能にするんだと努力し続けよう。偽善でいい。それで少しでも助けられる人がいるのなら。そう桃香は曹操へ語つたのだから。

(珍しく華琳様も楽しそうに笑つっていたものね。自らの行いを偽善と言い切つた劉備に)

その歩む道は曹操とは違う。曹操は最初から全てを助けるなど考えていない。自分へ刃向かう者を倒し、従う者を守る。それ以外の括りは曹操にはない。故に桃香の考えとは真つ向から対立するのだ。桃香は自分に従わない者だろうと、悪事をせず平和に暮らすのならそれでいいと言つからだ。

荀?はそんな事を考え、視線をしんのすけへ向けた。桃香がそんな風に言えるようになつた原因が、しんのすけにあるような気がしたのだ。その要因として、しんのすけから聞いた桃香達との思い出話がある。

それを聞き、軍師として思つた事があるのだ。それ故にしんのすけはある意味で危険だと勘が告げている。そのしんのすけは既に彼女から視線を外し、今は夏侯惇と話をしていた。

「関羽と趙雲は互角だと？」

「そうだぞ。とんのお姉さんはどれぐらい強いの？」

許緒から桃香達と曹操達が共にいた事を知っているしんのすけは、夏侯惇からも話を聞こうとした。当然ながら、根っからの武人である彼女が話すのは、同じ武人である愛紗や鈴々。

そこで夏侯惇が星はどうぐらい強いのかと思い、尋ねた事に対するしんのすけの答えが愛紗と互角。それに意外そうな表情を返す夏侯惇。何せ星は飄々としていて、強いと欠片と感じさせる事が無かつたからだ。

そこへ返されたしんのすけからの問いかけ。それは夏侯惇の誇りを刺激した。愛紗とは手合させをした事はない。それでも、遠田で見た限りかなりの強さだと感じた相手だったのだ。それと星が同じとなれば、自分の強さを示す簡単な手段は一つ。

それをどこかで悟ったのか、星は夏侯惇へ機先を制して告げた。自分は文醜に遅れを取つたと。それに周囲が驚きを見せる。文醜を知る曹操達は星の言った事の意味に。一方、文醜を知らない許緒は、星が躊躇いもなく自分が負けたと告げた事に。

「ちょ、趙雲？ それは本当か？」

「ええ。いや、私もまだまだ未熟でした」

「……ふむ、嘘ではないようだな。しかし、お前と関羽は同等としんのすけは言つているが？」

星の表情に少しも悔しさがない事に疑問を感じながらも、夏侯淵

はそう判断した。だが、ならば余計にしんのすけの言葉が浮いてしまつ。愛紗の強さを知っている彼女としては、星が互角ならば文醜に負けるはずないと考えたからだ。

星はそんな夏侯淵の言葉に何かを思いつき、苦笑しながら答えた。愛紗と手合させたと言つても明確な決まりもなく、ただ鍛錬の一環としてやつていただけ。故に、どこかで加減されていたのかもしない。それで互角でも実戦ではどうかまでは分からないと。

それに夏侯淵だけでなく曹操や夏侯惇も納得しつつ、どこか疑問符を浮かべた。一応理屈は通つてゐる。だが、何故か腑に落ちないと感じたのだ。星はそんな三人の反応を見て、夏侯惇への評価を改めていた。

頭の巡りは悪いかと思つたが、戦闘になるとそうではないらしい。良くも悪くも武人なのだろうと思い、星は一人納得した。星が自分を低く見られるように言い出したのは、無論曹操の興味を薄れさせるためだ。

(猪々子に負けたとなれば、袁家を良く知る曹操殿だ。さぞ正確に私の力量を見誤つてくれるかもしれん。それが確認出来れば、稟と風の事も安心して聞けるのだが……)

しかし、星の田論見を曹操はどこかで見破つているのだろう。微かに楽しそうな笑みを浮かべ、夏侯惇へ視線を向けた。それに気付き、夏侯惇は不思議そうに曹操へ視線を向ける。

「春蘭、趙雲はああ言つてゐるけど、一度手合させしてみたら? しんのすけは趙雲は強いと言つてゐるのだし、貴女の力をしんのすけに見せて、本当の強さを教えてあげるのもいいと思うのだけど」

「曹操殿、それはつまり私に夏侯惇殿と戦えと?」

「あら、嫌なの？ 貴女も武人なら強い相手と手合わせしたいと思うでしょ？」

「趙雲、私は一向に構わんぞ。文醜に負けたらしいが、私はお前がそんな奴には見えんしな」

曹操は雰囲気から、夏侯惇は感覚的に、それぞれ星の実力を感じ取っていた。周囲もそれに同調するかのような視線を向けている。夏侯淵は微笑を浮かべ夏侯惇を見つめているし、荀？はどうか疑うように星を見つめ、許緒は素直に興味を持つて。

それでも、どこか頷くのを躊躇う星。それに曹操が何かを思いつき、視線を荀？へ向けた。それに頷き、彼女はしんのすけにある言葉を告げる。それが星を頷かせる決め手となる。

「しんのすけ、趙雲は春蘭に負けると思つ？」

「お？ 誰が相手でも星お姉さんは負けないぞ？」

しんのすけの中では、星はアクション仮面もあるのだ。故に、負けは無い。しんのすけの思う敗北とは、ヒーロー達が見せなかつた姿。つまり諦める事を言うのだから。しかし、それを周囲が知るはずはない。星は、しんのすけが迷いもなく断言した事に内心で嬉しく思いながら、表情は仕方ないとばかりにため息を吐いた。

そこまで言われては受けない訳にいかないと思ったのだ。きっとしんのすけは気にしないだろうが、これで受けずに逃げれば彼の言葉が嘘になつてしまつ。星はそう考へ、一度目を閉じた。

（お前はどこまで私に苦難を『えるのだ？ だが、純粋に信じてくれ

れるその想い……応えねば武人ではないか）

そういう思い、誰にも気付かれないように小さく星は呴く。

私は、決して負けない……か。

そう呑み締めるように咳き、星はゆっくりと目を開く。その表情に曹操達は息を呑んだ。先程まで試合を渋っていた者のそれではなかったのだ。それだけではない。その眼光は静かに、だが激しく輝いていたのだから。

「では夏侯惇殿、一手お相手願えますかな？」

「う、うむ。なら、明日の朝に中庭でどうだ？」

「承知した」

夏侯惇が僅かに気圧される程の眼力。それに曹操は、自分の目が間違つていなかつたと確信していた。そして、同時にしんのすけがどれ程星の中で大きな存在になつてゐるかも。

それは星を入れようとするならば、しんのすけを手に入れなければならぬと曹操に思わせた。そこまで考え、曹操は何故星がそこままでしんのすけに入れ込むのかを疑問に思う。

（最初は本当に麗羽の縁者かと思つたけどそつではなさそつだし、趙雲の縁者でもなさそうね。ふむ、旅と共にしている理由……それは一体……？）

そう考へ、曹操は久々に面白くなつてきたとばかりに笑う。星と夏侯惇の試合。しんのすけと星の関係。鏡を求める訳。どれも自分

の好奇心を満たすには十分だ。そう思い、曹操は酒を軽く煽つて窓へ視線を向ける。明日は楽しい一日になりそうだと呴きながら……

翌日、城の中庭には曹操を始めとする主だった者達が揃っていた。樂進達三人もそこにはいる。李典が簡易的に作った観客席に座り、夏侯淵と許緒は何かを話しているし、荀？は曹操と共に特別製の観客席に座り、隣で侍女のような事をしている。

樂進は于禁と李典と星の実力がどれ程かを話し合い、予想を言い合っていた。しかし、李典が周囲に賭けを持ちかけようとして樂進の目が鋭くなる。それに李典が軽く怯み、于禁が樂進を宥めていた。

そんな者達から少し離れ、しんのすけは星と夏侯惇の一人と話をしていた。

「ああ。心配するな、しんのすけ」

「星お姉さんも、とんのお姉さんもお怪我しないようにね」

「そうだぞ。趙雲はともかく、私は決して怪我などせん。まあ、その気持ちは嬉しく受け取つておくがな」

しんのすけの子供らしい言葉に一人は笑みを返す。そんな二人の返事にしんのすけは頷いて、ふと何かを思い出したように表情を変えて、夏侯惇へ視線を向けた。

「あ、とんのお姉さんに一つお願ひがあるんだ」

「ん？ 私にか？」

星ではなく自分が指名されるとは思わなかつたのか、夏侯惇はどこか意外そうにしんのすけを見つめた。

「星お姉さんが勝つても怒らないでね」

「何かと思えばそんな事か。ああ、いいぞ。私も武人だ。そうなつた時は、潔く負けを認める」

「ほう……では、負けを認めてもらひますかな？」

「言つていろ。華琳様の前なら私は無敵だ！」

そう言つて夏侯惇は星から距離を取るために歩き出す。しんのすけはそれを見て試合が始まると理解し、星へ頑張つてと告げて観客席へと歩き出す。その背中を見送り、星は笑みを浮かべる。

そして、それを消して夏侯惇へ視線を戻す。先程夏侯惇が告げた宣言。それに対し、星も返す言葉がある。だが、それは今言つべきではない。そう思い、星は槍を握り締める。あの文醜との試合を思い出し、星は一人頷く。もう、何事にも動じないと。

一方、しんのすけは曹操に呼び止められ、許緒達の座つているのとは違う観客席にいた。曹操が少し聞きたい事があるし、ここの方が眺めもいいと言つたためだ。だが、そこは曹操と荀？の分しか場所が無かつたため、しんのすけは意外な場所に座つていた。

それは、曹操の膝の上。荀？は最初それを自分が代わると言つたのだが、しんのすけは子供とは言え、それなりに重い。それを膝に乗せ続けるのは文官の彼女には辛いと曹操は告げ、自分の膝に乗せ

たのだ。それにしんのすけは曹操を心配し地面でいじと返したのが、それには荀？も呆れた。

つたく、子供がそんな事心配すんじゃなにわよ。

『氣にしないでいいわ。貴方くらい平氣よ。

「一人にやう言われたため、しんのすけは嬉しそうに頷いて現状に至る。

「ねえしんのすけ、貴方は趙雲が勝つと思つているの？」

「勝つかはわからないけど、負けないって事はわかるぞ」

「あのね、負けないなら勝つしかないじゃない」

しんのすけの言葉に荀？は呆れるように言葉を返す。だが、それにしんのすけは不思議顔。それを見て、曹操は何かを理解したのか意外な表情を見せた後、小さく微笑む。それに荀？が気付き、疑問符を浮かべた。曹操の笑みの理由が今一つ理解出来なかつたのだ。

そんな彼女の心境を察したのだろう。曹操は笑みを浮かべたまま、しんのすけの考えを説明した。しんのすけの負けは自分達が考える勝ち負けとは違う感覚なのだと。

「しんのすけの考える負け。それは相手に屈する事よ。どれだけ惨めにならうとも、負けたと思わない限り負けない。そういう事でしょ？」

「おー、もうひりゃんつてH……スゴコイね」

危なくエスパーと云いそうになり、思い留まるしんのすけ。その間の思案を見て、曹操は言いたい言葉が出てこなかつたのだろうと思ひ、少し苦笑。

「成程……にしても、あんた本当に子供?」

「あれ? 五歳つて大人だつけ?」

「歳の事言つてんぢやないわよ! はあー、いいわ。あんたはやつぱ子供よ」

しんのすけの考え方が子供らしからぬ気がした苟?だつたが、その対人対応は未熟な事を痛感し、呆れるようにそう言い切つた。それに曹操は苦笑するものの、しんのすけの考え方には共感出来るものがあつた。

相手を完全に負けさせる事は難しい。圧倒的な力で叩こうと負けを認めない者は認めない。或いは、どれだけ絶望的になろうと諦めず抗う者達もいる。それが良い意味でならばいい。しかし、曹操は知つている。それを悪い意味でしている存在を。

(朝廷がそななのよね。どう考へてももう死に体。それでも、権威にしがみ付き無様に生き恥を晒し続けながらも負けを認めない。厄介なものだわ……)

そんな事を考へ、曹操は意識を切り替える。試合が始まつたからだ。視線の先では、夏侯惇の斬撃を星がかわしながら槍を振るつている。その様子に、夏侯淵達は感心したような眼差しを星へ向けていた。

星が文醜に負けたという事を既に知つてゐる夏侯淵達。だが、それならば目の前で繰り広げられる光景は何なのだろうか。曹操軍で

一番の武を持つ夏侯惇相手に、一步も引かぬ戦いをしている星。それが意味する事は、ただ一つ。

()(趙雲の話は嘘か、或いは何か事情があつて文醜に負けた……)()

文醜を知る曹操、夏侯淵、荀？は揃つてそう判断した。特に、かつて袁紹の元に居た荀？は強くそう思った。一方、星と直接戦つている夏侯惇はそんな事さえ忘れてているようだ……

「やるな、趙雲っ！」

「まだ未熟な身ではあります、褒めて頂けるとは光榮ですな」

夏侯惇の斬撃を槍で払い、即座に突きを返す星。それを上体の動きだけでかわす夏侯惇。そこから蹴りを放ち、槍を上に叩き上げる。しかし、そこから星も夏侯惇の蹴り足を蹴る事で、相手の体勢を崩し反撃を鈍らせる。

そこから互いに、もう一度距離を取り構える二人。その表情は笑みだ。そう、星も夏侯惇も理解していた。目の前の相手は自分と全力で戦える存在だと。それがどういう事かを考え、両者は同じ表情を浮かべる。

そして、再び動き出す。夏侯惇は七星餓狼という剣を使う。だが、その長さは星の持つ龍牙に負けていない。間合いがあまり大差ないのなら後は使う者の力量次第とばかりに、星の速度に夏侯惇は負けずついていく。一進一退の攻防。攻め手と守り手が瞬く間に入れ代わるそんな光景。

それを見つめ、周囲も徐々に熱くなつていく。故に観客席から声援が出るのは当然と言えた。それが、夏侯惇を応援するものばかり

になるのも当然。ここは曹操の城だから。

「春蘭様、頑張つてくださいーー！」

「ヤレヤーー！」

「いけいけなーー！」

許緒の言葉に続くよつよつと声を張り上げる李典と于禁。だが許緒は敬愛している上の応援に対し、一人はとりあえずの雰囲気から応援しているに過ぎない。

「強い……春蘭様相手に趙雲殿は少しも負けていない」

「つむ、姉者相手に五分とはな。この大陸にまだあるような者が埋もれていたとは……」

一方で樂進と夏侯淵は星の実力に感心し、その挙動を見逃さないよつとしていた。遠い幽州の地で戦っていた星。その名はそこまで轟く事は無かつたため、一人にとつては思わぬ存在として目に映つたのだ。

「ちょっと春蘭！　いつまで時間かけるのよー。やつれと終わらせなさいよつー！」

声を張り上げる荀？。それは応援と言つよつは苦情だったが、その根底には夏侯惇の武への信頼がある。それを感じ取り曹操は小さく笑うも、視線を試合ではなく膝の上のしんのすけへ向けた。しんのすけは、一度として声を出さずに試合を見つめていたのだ。

それが曹操には意外だった。てっきりしんのすけも、他の者達と

同じで星に声援を送ると思っていたからだ。曹操がそんな事を思い、しんのすけにそれを問い合わせようとした瞬間だった。しんのすけは小さく頷くと拳を握り締め、息を吸い込んで叫んだ。

「星お姉さんもどんのお姉さんも負けるな～っ！」

その言葉に込められた意味を知る曹操と荀？はそれに軽い反応を示す。あの文醜との試合で心構えを固めた星はその言葉にも平静としていた。

だが、その三人以外がその声に揃って戸惑いを見せたのだ。つまり、夏侯惇もある。

「「「「「は？」」」」

「どういつ意味だ、それはつ！？」

更に夏侯惇は思わず視線をしんのすけへ向けたのだ。星だけの応援であれば何とも思わなかつた。だが、自分にまで負けるなどはどういう意味か理解出来なかつたためだ。彼女の失態はそこ。声が聞こえてしまつたが故に考えてしまつた。

夏侯惇が視線を動かしたその瞬間、しんのすけ以外が呆気に取られた。試合の最中にそんな事をすればどうなるか。それを誰もが理解していたからだ。

星はそんな夏侯惇に情けも何もかけず槍を動かす。あの文醜との戦いで決めた心構え。何が起きても動じない事。それが星を動搖させることなく、しんのすけの言葉と夏侯惇の突然の行動にも対処させた。

星の動きに気付き、夏侯惇が動こうとした時にはもう勝負はついていた。夏侯惇の喉元に突きつけられる槍先。しかし、星はどこか

驚いていた。

「……やりますな」

「ふんっ！…………」それが精一杯だつたがな」

星の視線の先には、自分を斬り上げようとする夏侯惇の剣があつた。そう、星が夏侯惇を仕留めようと一歩踏み込めば、その剣が体を襲う。つまり、これが実戦であれば夏侯惇は星に命を絶たれているが、最低でも星へ痛手を負わせる事が出来ただろう。

更に、上手くすれば相討ちにさえもつていけるかもしれない。あの瞬間でそんな動きを夏侯惇はやつてのけたのだ。それに星は感心したという訳だが、それは最後の悪あがきと理解している夏侯惇はどこか不機嫌だつた。

その理由は簡単。曹操の前なら無敵と言つたにも関わらず、何とか引き分けにもつていくのが精一杯だつたからだ。

（くそつ！　華琳様の前で無様な姿を晒してしまった……）

そんな事を考え、自身へ苛立つ夏侯惇。その彼女へ星は声を掛けた。

「夏侯惇殿……」

「何だ！」

思わず不機嫌な声を返す夏侯惇。勝ち誇られるとでも思ったのだろう。だが、そんな思惑をどこか外すよつて星は不敵に笑つて告げる。

私はしんのすけの前なら負けませんぞ？

それが試合前の自分が言った言葉に対するものだと気付き、夏侯惇は怒りを覚えた。だが、すぐに何かに気付きそれを鎮めた。それに星は意外そうな表情を浮かべた。これで必ず怒るだろうと踏んでいたのだ。それをキッカケにからかおうとも思っていたのだから。

そんな星へ夏侯惇は視線を向け、その心情を読み取ったのだろう。呆れたように「うう」と言つた。

お前にとつてのしんのすけが私にとつての華琳様なら、その言葉に怒る事などない。その気持ちは誰よりも分かるからな。

そういう事だ。そう言つて夏侯惇は曹操の前へと歩いていく。その背中を見つめ、星は呆気に取られる。しかし、すぐに立ち直り楽しそうに笑つた。その言葉は、どこか愛嬌も言にそうなものに思えたからだ。どこにも忠義者はいるのだなと、そう思い星は笑みを浮かべる。

（主君への忠心が強い者はどこにでもいるものなのだな。いや、名を上げる者の下には必ずそういう者がいるのだろう）

星の視線の先では、曹操から最後の余所見を指摘され反省する夏侯惇の姿がある。しんのすけは、そんな夏侯惇へ何かを言って怒鳴られていた。だが、荀？がしんのすけに賛同しているようなので、きっと正論を言つたのだろう。そう思い、星もそちらへと歩き出す。

「春蘭、何を言われても動じないでいなさい」

「はこ……」

「もー、しつかりしてよね」

「申し訳ありません……つて、お前が言つたなー。」

「でもしんのすけの言つ通りでしょ。あんな事、試合中に普通しないわよ」

「あんな言葉を言われたら気になるのが普通だー。」

そこから始まる一人によるこつもの言い合い。それを聞きながら苦笑する許緒や夏侯淵。樂進は、しんのすけの言つた言葉の意味が気になつていいよつて、先程から考え込んでいた。李典と于禁はまさかの結末に賭けなくて良かつたと言つて安堵の息を吐いていた。曹操はそのやり取りを聞きながら、視線をしんのすけへ向けた。しんのすけは既に膝から下りて、星の傍で何かを話している。その表情はどこか嬉しそうだ。それに曹操はふと思つた事があった。

「趙雲、ちょっとこいかしり」

「何ですかな?」

「しんのすけは貴女の何なの?」

その問いかけに星は躊躇つ事無く答えた。夏侯惇にとつての曹操だと。それにさしもの曹操も呆気に取られ、やがておかしくて仕方ないとばかりに笑い出した。周囲も星の答えが面白かったのか笑い出し、星はそれに不敵な笑みを返すのみ。

しんのすけはそんな周囲に不思議そうに黙つものの、それに呼応

するよつていつもの高笑いを上げた。その様子にまた違う笑いが起
る、じつて星と夏侯惇の試合は終わりを告げた……

その日の夜、曹操の部屋に荀?は呼び出された。その理由は聞か
されなかつたが、何となく彼女は悟つていた。

「お話とは何ですか、華琳様」

「桂花、趙雲を手に入れるにまづいたりいかしら?」

そんな曹操の突然の言葉にも、荀?は驚く事もなく答えた。

「今は諦めるしかないかと思こます」

「どうして?」

「趙雲の目的はおそらく主君探し。であれば、全ての諸侯を見ない
内は納得しないでしょ?」

「……やつ。つまり、全ての可能性を潰さないと私に心から従わな
いといふ事ね」

「御意」

曹操はその答えに納得したように頷いた。自分の考えと同じだつ
たからだ。星は自分が仕えるに相応しい者を探している。だからこ

そ、あちこちを旅していく。つい、話を聞く限りは思っていたのだ。
しかし、曹操にはもう一つ聞いてみたい事がある。なので、荀？
へ次の質問をぶつけた。これに関してはどういう考え方を持っている
のか。それが曹操としては非常に興味深かつたのだ。

「では、しんのすけはどう？」

「それは……止めた方がよろしこかと」

その問い合わせに荀？はそう返した。曹操としてはそんな彼女の反応が面白い。自分とは違う意見を持つていると感じたからだ。故に聞いてみようと思い、無言で先を促した。

「しんのすけは子供です。ですが、趙雲はしんのすけをこう例えました。春蘭にとつての華琳様だと。つまり、しんのすけを主君がそれに近しいような存在を考えています。季衣達はあれを[冗談か何か]と取つたでしょうが、私はあれが眞実と考えています」

「その根拠は？」

「一人の現状です。この時勢に子供を連れて旅をする。趙雲の目的からとしても、どこか腑に落ちません。親類でもない子供を連れて行く必要性がありませんし」

「でも、しんのすけを主君のよひに考えていれば納得出来る……」

「はい。それに……しんのすけの異常性には、華琳様も気付いていらっしゃるかと」

その荀？の言葉に曹操は頷いた。名前の響きの珍しさ。更に許緒

の話では真名もないとの事を彼女は聞いている。それらが示す事は、少なくともしんのすけはこの大陸の者ではないという事。それだけでも妙なのだ。

何よりも曹操が感じた異常性。それは、その考え方。子供らしからぬ部分が時折見えるのだ。それをおそらく苟？も感じたのだろう。しかし、曹操はしんのすけを得るのはそこまで難しいとは思つていなかつた。

「でも桂花、それならしんのすけを手に入れる事は趙雲を手に入れると同義ではなくて？」

「確かに普通ならそうでしょう。しかし、あの二人はどこか異質な関係と思われます」

苟？は語った。しんのすけと星の関係は主従のようで対等。であれば、どちらかが従わないのなら片方もそれに追従するだろう。つまり、しんのすけを引き止めようとも、星を引き止められないのならそれは不可能。

そして、逆もまた然り。星が主君を見つけようとも、それをしんのすけが認めなければ仕える事はないだろ？と。そこまで言つて、苟？はこう締め括つた。

「華琳様がどうしてもあの一人を欲しいと言うのでしたら、今は善意で協力する方が良いかと思います。下手に仕官の誘いをするより、二人にはその方が有効です」

「……成程。趙雲はともかく、しんのすけは単純なものね。確かに今は恩を売る方がいいか……」

「ですが華琳様、一つだけ忠告を」

曹操の思案を遮るよつて」荀?は声を発した。それに曹操は不思議そうな表情を返す。何か他に注意するような事があつただろうかと。曹操がそれを尋ねる前に、荀?はこう言い切つた。

趙雲はともかく、しんのすけは華琳様の敵かもしません。

その言葉には、明確な警戒心が込められていた。その理由を詳しく曹操は聞き出す事にする。そこで荀?は語るのだ。しんのすけから聞いた桃香達の話を。

あの思い出話から彼女が感じた事。そう、桃香の思想にしんのすけが与えた影響力だ。それを聞き、曹操がむしろ余計に興味を覚えるとは思はずに……

それから数日後、しんのすけと星は陳留を後にすることになった。星は一度たりとも仕官の誘いを受けなかつた事を疑問に思いながら、ならばと稟と風の事を尋ねる事が出来た。しかし帰つてきた答えは、二人が仕官したという報告はないとのもの。

それに星は愕然となつたが、それを隠し調べてくれた事に感謝を告げた。鏡の情報も特になく、星は収穫なしと思いやや不満そうだつたが、連絡に使つていた商人と出会い、もし稟と風に会つた時ための伝言を預ける事は出来た。それに、しんのすけは許緒や樂進達といつた友人を得た。そう思つ事にし、無駄ではなかつたと考えるようになつた。

「では、夏侯惇殿、夏侯淵殿、お体にお気をつけて」

「うむ、また顔を出せ。お前との再戦を楽しみにしてるぞ」

「お前も達者でな、趙雲。それと今度は姉者と戻だけではなく、眞桜や沙和も相手をしてやってくれ」

「そうですね。特に李典殿は私と同じ槍使いですし……昨夜のメンマ餃子をまた作って頂ける事で手を打ちましょう」

「この数日で何度も手合わせをし、互いを認め合い始めた星と夏侯惇。夏侯惇は、夏侯惇との繋がりで星を気に入り、最後の日には彼女の好物であるメンマを使っての餃子を作り、最後の夕食に華を添えた。

夏侯淵が星の最後の言葉に頷きながら笑い、夏侯惇はそれに食い意地の張った奴だと返す。そんな雰囲気でも、三人が武人として笑顔を向け合っている横では、しんのすけは許緒達と別れの挨拶を交わしていた。

「しんちゃん、また遊びにおいでよ。今度はもっと色々な遊びを教えて」

「うん、いいよ」

「しんのすけ、趙雲殿をあまり困らせないようにな。それと、今度は趙雲殿を手こびすりせるといつ動きを見せてくれ」

「元氣でね、しんちゃん。今度来た時は、もつと安全な街になつてるのでー」

「しんのすけ、あのからくり話はおもうかつたわ。今度はじっくり

聞かせてな

「がくちゃんもうつちゃんもりつちゃんもお元気でね。オラ、みんなの事忘れないぞ」

許緒とはあれからも数回共に遊ぶ事があった。鈴々とも盛り上がりあつち向いてホイなどは、かなりの熱戦となつたのだ。樂進とは星絡みで接する事が多かつた。早朝鍛錬にも何度か参加し、しんのすけの動きを見て感心した樂進。だが、星からもつと速く動く事もあると教えられ、それを見たくてしようがなかつたのだ。

まあ、それを星は敢えてしんのすけへやるなと告げていた。樂進の性格を考え、再会した際の楽しみにしようと思つたのだろう。

于禁は一度休みにしんのすけと共に街へ出かけた。その際、二人は盗みの現場に遭遇したのだ。その際ふと漏らした警邏の愚痴に、しんのすけが告げた言葉が警備隊の効率化への道を作り出していた。おまわりさんはいのとの言葉がそれ。

それを詳しく聞き、交番などの要素を知つた于禁はその日の内に樂進や李典と相談。三人で草案を作り、荀？へ提出して指摘を受け、更に練つた物が昨日曹操に提出されたのだから。

李典とは昼食を共にした際にしたからくり話。しんのすけは簡単な仕掛けのからくりを見せてもらつた際、カントムロボのおもちゃの話を聞かせたのだ。その時は、しんのすけの思いついた話として李典は捉えた。バネを使って腕が飛ぶ仕掛けやボタンを押すと作動する点等、李典の発明家精神を大いに刺激する内容だつたのだ。

そんな風に一人と別れを惜しむ夏侯惇達を見て、曹操と荀？は笑みを浮かべていた。無論、その質は同じではなかつたが。曹操は夏

侯惇達の様子に微笑み、荀?はまるで仲間を見送るぐいりこの雰囲気にやや呆れていた。

それでも、彼女もどこか寂しそうだったのであまり人の事は言えないだろ。しんのすけと星はそれに別れの言葉を告げ、最後に曹操の前に歩き出て声を掛けた。

「曹操殿、荀?殿、お世話になりましたな」

「わいわいやん、お部屋貸してくれてありがと。じゅんけやんは……何となくありがと。オラ、楽しかったぞ」

「わよー、何となくって何よ! 他に何かあるでしょ、何か!」

しんのすけの言葉に怒る荀?。それを横目で見て微笑む曹操。しんのすけはそんな荀?の反応に嬉しそうな顔を返し、ならばといひ告げた。

あはー、セーラームキになつてゐじゅんけやんが好きー。

それに荀?が言葉に詰まり、周囲が笑う。苦笑する者、微笑む者、呆れる者と様々だが、誰もが楽しそうな笑みを浮かべていた。やがて荀?の怒りが収まったのを見て、曹操は一人へ返事を返す。

「別に礼を言われる事ではないわ。それに、楽しめたつもりは無かつたわよ。しんのすけも趙雲も達者でね」

「趙雲、あなた達がこれからどうへ行くか知らないけど、少ししんのすけの言葉遣いに気をつけさせなさい。相手によつては酷い目に遭つわよ」

曹操は一人の言葉を思い出し苦笑していた。心からそう思つていたからだ。世話したのは自分がしたかったから。滞在中に楽しんだとすれば、それはしんのすけが自分でそう思つただけなのだから。

一方、荀?はしんのすけを心配して星へ忠告した。数日とはいえ、しんのすけの利発さには密かに感心していたので、彼女個人としてはその行く末をどこか若干楽しみにしていたのだ。まあ、曹操の軍師としては少々複雑な心境ではあつたが。

荀?の言葉に星はしつかりと頷き、しんのすけは少し嬉しそうに頷いた。荀?の言葉が心配してのものだと気付いたのだろう。そんなやり取りを終えた二人へ、曹操はこう告げた。

もし恩義に感じたのなら、いつか返しに来いと。それに星は苦笑し、しんのすけは分かつたと声を返した。そして、最後にこう星へ言った。

一度洛陽に行つてみなさい。貴女としんのすけは今の都を見た事がないでしょ？

その言葉に星はふむと呟き、目的地を与えてくれた事に感謝して、シロを連れてしんのすけと共に城を去つた。

こうして、しんのすけと星は次の目的地へ向かう。それは、大陸の首都である洛陽。そこではどんな出会いが待つのだろうか。そんな事を思いながらしんのすけは歩く。

田町の二人に会えなかつた事だけが不満ではあるが、しんのすけも星もその無事を疑つてはいない。いつか会えると、そう信じているからだ。

「次はみやこですかあ。一番大きい街つてホント？」

「そつだ。些か不安もあるが、私も楽しみにするか。如何なるメンマがあるのだろうか……」

「クウーン

青空の下を歩きながら笑みを浮かべるしんのすけ達。次に訪れる先が都と聞き、期待に胸を膨らませるしんのすけ。星はそんな様子に笑みを見せながら、好物のメンマに思いを馳せる。シロはそんな星にやや呆れるように声を出し、頃垂れながら歩く。

三者三様の表情を見せながら彼らは行く。ここで得た縁と思い出を胸に次の街へと……

「それにしても、趙雲が捜している者達の情報も無かつたとはね

二人が去った後、執務室で仕事しながら曹操はふと呟いた。それを聞き荀?も頷いた。星から聞いた名前の者達はいなかつたのだ。黄巾の乱の最中やその後に仕官した者の中から、文官として採用した者限定で捜したのだが、該当する者が見つからなかつたのだから。

「はい、戯志才と程立と言ひつ者はいなかつたものですから。ただ……

…

「ただ?」

荀?の言葉に不思議そうな表情を浮かべ、曹操は続きを尋ねた。それに荀?はため息混じりに告げた。似た名前の者が一人だけいた

と。ただ、同時に仕官した者の名前が余りにも違うので、その者も別人だと判断したのだと。

星は一つ思い違いをしていた。一人が仕官するなら仕方なくしたのだろうと考え、稟の名前を正しく伝えなかつたのだ。そう、偽名を使つているだろうと。更にそこにある出来事も加わり、再会は果たせなかつたのだから。

そんな荀？の報告を聞いて、曹操は興味を抱いたのかその者達の名を尋ねる。それに荀？は調べた際見た記述を思い出し、告げた。その名は……

郭嘉と程？です。

じつして運命はすれ違う。再会の日は遠ざかり、しんのすけ達は二人の近くに来ていた事を知らないまま離れていく。絆が再び絡み合つのはいつの日か。それは、誰にも分からぬ……

- - - - -
これにて魏軍との出会いは終了です。次回は洛陽へ。

しんのすけと星は言葉を失っていた。シロさえも眼前の光景に声さえ発しない。期待を抱きながら訪れた洛陽。首都という事もあり、どれ程賑わっているのかと思つていたしんのすけにとって、その実情は絶句するに相応しいものだった。

道行く者達はどこか生氣がなく、胸を張つて歩いている者は見渡す限りいない。いや、いるにはいる。そう、兵士だ。やたらと威張り散らすかのように我が物顔で歩いているのだ。

「……しんのすけ、一先ず宿を探すぞ」

「ほい」

今まで訪れた中でもかなり酷い部類に入ると思いながら、星はしんのすけを促すように声をかける。星はどこかで洛陽が廃れ始めているとは知つていた。それでも、ここまでとは思わなかつた。立つているだけで疲れる。見るに堪えない。そんな気にさせられる光景に、星は改めて朝廷の現状を見た気がした。

星はしんのすけへ、ここでは言葉遣いに細心の注意を払えと真剣に言い聞かせていた。苟?から言われた指摘。それがここでは身近で起きそうだと思ったからだ。しんのすけも周囲の雰囲気から何となく今までと違う事は感じ取つたのだろう。神妙な表情で頷いた。星が町人から宿の場所を聞き出して歩くしんのすけ達。シロも、これまでと違う異質な空氣からか、あまり一人の傍を離れないようになっていた。宿に辿り着き、星は宿の主人から疑問に思つた事を聞き出そうとした。その原因をどこかで察している星としては、主人に迷惑をかけるつもりないので、比較的軽く尋ねる。

「主人、最近の景気はどうだ？」

「へえ……」覧の通りで

宿からはあまり人の気配がなく、活気もない。星はその答えからやはりと思い頷いた。

「そうか。あちらの方が理由かな？」

「……大きな声じや言えませんけどね」

星が言葉と共に視線を向けたのは、王宮のある方角。それに主人は微かにため息を混じさせて返す。そこから星は話が長くなると判断し、しんのすけへシロと共に部屋へ行つていると告げる。それにしんのすけも頷き、シロと共に部屋へと向かつ。

その背中を見送り、星は内心で曹操がどうして洛陽へ行くよう薦めたかを理解していた。この大陸の頂点に君臨する朝廷。それがどんな存在となつていてるかを教えるためだと。だからこそ、曹操はこう言つたのだろ？

貴女としんのすけは今の都を見た事がないでしょ？

(何故今のとつけたのかと思つていたが、やはりこいついう事か。曹操殿は知つていたのだな。洛陽が腐敗した朝廷の影響を受け、衰退している事を)

嫌な情報の教え方だと思いながら、星は小さく息を吐く。南皮や陳留といった都市を見てきた後だと余計にその酷さが分かる。これは、たといいく防衛隊としては見過ごせないものだ。よりもよつて、

朝廷のお膝元が一番活氣のない街になつてゐるなどとは。

しかしそれを正すのは今は無理。そう思い星は主人と話を続ける。愚痴を聞きながら、少しづつではあるが現在の洛陽の事を知つていく星。しかし、その表情は時間が経つにつれて険しさを増していくのだった……

(怒りを通り越して呆れるしかないとは……)

主人との話を終えた星は、部屋に入り寝台の上に座つて強烈な疲労感を感じていた。聞けば聞くだけ朝廷の腐敗振りを嫌と言つ程に感じたのだ。しかし、それが怒りだつたのも途中まで。頂点を過ぎると怒りさえ湧かなくなり、どんどん無気力になっていくのだ。

呆れ果てて物も言えない。最後には星も主人も同じ顔をし、大きくため息を吐くしか出来なかつたのだから。

「ね、どうしたの?」

「いや、長話に少し疲れただけだ。もう少ししたら食事に行くぞ。先程主人から美味しい店を教えてもらつた」

「おー、それは楽しみだぞ」

「キャン」

しんのすけの変わらない雰囲気に、星は少し癒されたように笑みを返した。しんのすけは星の告げた言葉に嬉しそうに返事を返し、

シロへ視線を向けて軽くじやれ合いを始める。その光景を眺め、星は小さく笑う。

ゆつくりと鬱屈していた心が解されしていくような感覚。安らぎと呼べる気持ちをその光景から得ていく。静かにだが、確かにある幸せ。それを噛み締めるように星は微笑む。

「しんのすけ、シロ、」星は明日にでも発とう。あまり情報も期待出来んしな」

「ほい」

「キヤン」

星の意見にしんのすけとシロも反論などなく、むしろ今すぐにでも立ち去りたいぐらいだった。しかし、疲れているのも事実。それに、どこかで少しだけ期待している事があった。旅の醍醐味の一つ、食事だ。

しんのすけも星もそれだけをどこかで楽しみにしている。それから星は今後の行き先の相談となつた。星としては黄巾の乱で名を挙げた孫策の事が気になつてるので、この後は江東に行きたいと考えていた。しんのすけはそれに構わないと言つた。

「星お姉さんが行きたいとこ行けばいいよ。オラ、それについてくだけだし」

「やうか。だがしんのすけ、今の内に言つておくが……」

星のその言葉にしんのすけは不思議そうな表情を見せる。星の表情が真剣だったのだ。何かそんな重要な話があるのだろうかと、そう思いしんのすけはその続きを待つ。シロも星の雰囲気からお座り

の姿勢になり、静かにその言葉を聞いていた。

星はそんな光景に頷き、はつきりと告げた。それは自分の決意であり覚悟。ある意味での臣下の礼。

この旅が終わった時、出会った者達の中からお前が助けたい者を決めてくれ。私はそれに従う。その相手が誰であろうと、だ。

その言葉にしんのすけは声が無かつた。出会ってから今まで、自分は星達についていくだけだった。何かを言うとしても参考程度に過ぎず、決定権などは無かつたからだ。しかし、星の言った意味はしんのすけでも理解出来た。

以前聞いた星の旅の目的。その答えを自分に決めて欲しいと言われた事を。世の中を救う相手の選別。それを任されてしまったと。そこまで考え、しんのすけは混乱した。

「お、オラが……決めるの？ それで星お姉さんはいいの？」

「ああ」

「えつと……じょーだんだつたり……？」

「しない」

「……だよね」

そこでしんのすけは星の覚悟が本物だと確信した。故に頃垂れた。それは決して面倒だと思ったからではない。その責任感の重さを分かつてしまつたからこそ行動だつた。今まで彼は、明確に誰かの人生の大きな選択を自分の判断で決める事などなかつた。

だが、今回の星の言葉はそれだ。星とて、子供であるしんのすけ

にこんな事を任せるのは、正直心苦しい。しかし、星はしんのすけに決めて欲しかつたのだ。するいとは思つてゐる。だが、しんのすけは感受性が豊かだ。きっと、自分の気持ちを感じ取り考えてくれると信じていた。

（許してくれとは言わん。私はある意味でお前を利用しているのかもしれん。あの日の誓いを自分で破つてゐるのもしれない）

それでも、星は躊躇はない。しんのすけが告げたあの日の決意。それを支えると決めた以上、主体を自分ではなくしんのすけに置きたかったのだから。稟や風が聞けばどう思うだらうと考えながら、星は黙つてしまふのすけを見つめた。

「星お姉さん……」

「……何だ？」

どれ程沈黙が流れたのだろうか。一刻のようにも、一瞬のようにも感じる間の後、しんのすけは顔を上げて、いつもの表情でそう切り出した。

それがどこか星には意外に思えた。てっきり真剣に取り合い、表情もそれらしくなると思ったのだ。そんな風に星が内心疑問を抱いていると、しんのすけは平然とこう返した。

今は、いいよもやだも言えないけど、ちゃんとオラ考えるぞ。
で、答えるまでけっこー待つて欲しいんだけど……ダメ?

その最後の小首を傾げての言葉に、星は呆気に取られる。そしてしばらくしてから笑い出した。重大な問題と考へたからこそ、即答を避けたしんのすけ。その返事の仕方に星は心から嬉しく思えたの

だ。それと同時に、自分もどこかで性急に事を進めようとしていたと思い、内心苦笑。

しんのすけは星が笑い出した事に最初こそ面食らっていたものの、自分の言葉に答えてくれていないと気付いて抗議した。

「ちよっと、オラへのお返事は…」

「くくく……いや、すまん。そうだな。それでいい。むしろそういうてくれ。お前が納得するまで考えてくれる方が、私としても嬉しいからな」

怒った顔のしんのすけへそう謝罪し、星は言い切った。その言葉にしんのすけも納得し、怒りを静めて頷く。そして、この話は終わりとばかりに星が食事をしに行こうと立ち上がって、しんのすけとシロもそれに倣うように立ち上がる。

洛陽に着いた時から先程までの陰鬱な空氣はもう既になく、しんのすけ達はいつも和やかな雰囲気で歩き出す。時折笑みさえ見せながらどんな店だろうかと話すしんのすけと星。そのはつらつとした表情は周囲から浮いていたが、それを気にもせず彼らは洛陽の街を行くのだった…

訪れた店内はそれなりに賑わっていた。そこまでは街中には比べれば、やや活氣があるようには感じられるぐらいには。星はその原因を兵士がない事だろうと察し、一人頷いた。しんのすけはシロと共に空いている卓へ近付き、星を呼ぶ。

菜譜

メニューを眺め、しんのすけは見た事のない料理がな

いかを探す。星はそんなしんのすけが見つける料理名を答えたり、時に共に考えたりするのが外で食べる際の決まり事だった。

そんな恒例行事も終え、一人はそれに注文する。洛陽は都。だが、宫廷料理などを日常的に庶民が食べるはずもなく、そこも庶民的な料理ばかりを取り扱う店だった。しんのすけはチャーハンを、星はラーメンを頼み、ついでにいらない骨があれば一つ分けてくれないかと告げる。

星の視線を追い、シロの姿を見た店主は少し不思議そうな顔をした。真っ白の犬が珍しかったのだろう。それを悟り、しんのすけがシロへわたあめと声をかける。それに呼応しその場で丸くなるシロを見て、店主や客達が揃って面食らつた後笑い出す。

「面白いもんを見せてくれた礼だ。一番いい骨をやるよ」

「キャンキャン」

久々に笑ったと言いながら、店主は言葉通り見た目からして上物の骨をシロへ手渡した。周囲の客達もシロへお代とばかりに食べている物を少し分けてくれ、しんのすけと星はそんな周囲に笑顔で礼を述べる。

そんな和やかな雰囲気のまま、しんのすけ達は食事を終えた。そして、宿へ戻ろうと歩いていると大通りが騒がしい事に気付いた。何か揉め事かと思い星は道を変えようとするのだが、しんのすけは興味本位から覗きに行こうと提案した。

「ね、ちょっと見ていい? よ」

「お前は、~~相子~~危うきに近寄らすといつ言葉を知らんのか?」

「知らない！」

「威張るな。まあ、私とて興味がない訳ではないが……何やら嫌な予感があるのでな」

星の告げた教えに胸を張つて即答するしんのすけ。それに苦笑しながら、星は自分が感じた事を告げた。しんのすけはそんな言葉に頷くも、やはり気になるのだろう。少しだけと言つて星の手を引っ張つた。

そんな子供らしい行動に、星はどこか仕方ないと想い歩き出す。シロもそんな星と同調するかのように息を吐いていた。大通りに出たしんのすけ達は人垣に遭遇した。それを搔き分けながら出た先で見たもの。それは兵士二人に睨まれ怯える幼い兄妹だつた。

「どうゆー」「ト？」

「おそれらぐぶつかつたのだらうな。それであの兵士達がその事に対して怒りをぶつけているのだ」

しんのすけのやや疑問符を浮かべた言葉に、星は自分の予想を告げた。すると、それを聞いていた周囲の者達が小声でそれを肯定した。しかも、これは珍しい事ではないらしい。だが、誰一人として兄妹を助けようとはしない。その理由を星は理解しているため、何か言う事はない。

相手は官軍の兵士。つまり、朝廷の兵だ。それに刃向かえればどうなるかなど誰にも分かる。故にこうして、誰も手を出さないで見つめる事しか出来ないので。それを兵士達も知っているのだろう。それが悪循環となり、この街から活気を失わせていると星は悟つた。

(――)今まで腐つていいのか、この街は。いや、街ではない。朝廷が

腐っているのか

おそれらくこのよつたな事は日常茶飯事なのだろう。だからこその街の者達はみな生氣がないのだ。兵士達に怯えながら暮らす日々。それのどこに活力が見出せる。あるのは、恐怖だけだ。

そこまで考え、星は拳を握る。盜賊よりも性質が悪いと。官軍である事を良い事に私利私欲のために民を迫害して暮らす。それがどう程腹立たしいか。星は湧き上がる怒りを抑えていた。

(相手は腐つても官軍……迂闊な事は出来ん。しかし、これを見逃す訳にはいかないっ！)

理性が叫ぶ。止めると。だが、それと同じ大きさで魂が叫ぶ。行けど。そんな相反するせめぎ合いが星を襲う。その争いにけりをつけたのは、やはり彼だった。

星お姉さん、どうしてお助けしないの？

しんのすけの声に込められた疑問と悲しみ。それが星の心に響く。正義の味方であろうと思つた事や、しんのすけの憧れの存在と同じだと言われた事などが浮かび、星はゆっくりと拳を開いた。

そして、静かにしんのすけの頭に手を乗せると、そこで大人しく待つていろと告げる。その雰囲気が鍛錬の時と同じ事に気付き、しんのすけは黙つて頷いた。人垣の中から歩み出る星。手には愛用の槍がある。

もう、星に迷いはなかつた。理性も魂も凌駕する程の心の声が吼えたのだ。"正義" あれど！

そこまでだつ！

大通りに響き渡る大声に誰もが視線を動かす。星はその視線を受けながら手にした槍を構えた。この事がどれ程危険な事か分からぬ星ではない。それでも、やらねばならない。ここで眼前の兄妹を見捨てては、救国どころかしんのすけと共に居る資格無しと考えたのだ。

驚く兵士達を見据え星は告げる。そう、正義の味方としての宣言を。彼女が趙子龍たるため。そして、あの優しい少年の正義の一口一であり続けるために。

「幼い者達を脅かし、己が立場を利用するその行い。例え天が許そとも、この私が絶対に許さん！」

「何だあ？ 今何て言つたんだ、この女」

「許せないとか言つたな。誰を相手にしてるか分かつてんのか？」

兄妹から視線を外し、兵士達は星を見た。その表情は馬鹿にするような下衆な笑みを浮かべている。それに星は無言で槍を構える。その気迫、まさに龍が如し。その迫力に兵士達も呑まれる。だが、それでも自分達に手を出せないと考えたのだろう。腰が引けていながらも、星へ強がりを見せる。

「へ、へへっ、中々様になつてるじゃねえか。でもな……」

「や、やれるもんなりやつてみろっー。」

半ば捨て鉢になつて星へ襲い掛かる一人の兵士。それに星が一步踏み込んだかと思うと、次の瞬間には相手が地に伏していた。それを見て残つた方が逃げていく。それに目もくれず、星は幼い兄妹へ

静かに告げた。

早くここから離れなさいと。そして、周囲へ告げる。早く離れ、自分に巻き込まれないようだと。その意味に気付き、誰もが素早く去っていく。兄妹は星へ視線を向けた後、互いを見合い力強く頷き合つて走り去る。しんのすけとシロは周囲の行動を不思議そうに見つめ、立ち尽くす。

(何でみんな逃げてくれんだろ？ 悪い奴は星お姉さんがやつつけたのに)

星のした事の大きさを理解出来ないしんのすけ。やがて人垣が消え開いていた店々は閉めて大通りは閑散となつた。そこに残つたのは、星としんのすけにシロ。そして倒れた兵士のみだ。すると、やや離れた場所から大勢の足音が聞こえてくる。

それに星は小さく呟く。こういう時は早いのだな、と。そしてしんのすけとシロへ背を向けたまま、星はどこかに隠れていろと告げた。その意味を分からぬしんのすけだったが、星の声が鋭い事に気付き何も言わず近くの物陰へと隠れた。

大通りに現れる大勢の兵士達。その中には先程逃げた者がいる。星は表情を変えず、大勢の兵士達を睨みつける。そして、ゆっくりと槍を構えると歩き出した。その威圧感にたじろぐ兵士達。それでも、何人かは星へと向かつていく。

それを一振りで倒し、星は一步ずつ一步ずつ進んでいく。その表情を一切動かす事無く星は行く。無表情。だが、その纏う雰囲気は憤怒だ。静かにだが深く怒る心。それによる怒気が星の周囲から漂つていた。

一人、また一人と倒れていく兵士。初めは三十人程度いたそれも、今や五人にまで減っていた。

「つ、強い……おい、じつになつたひ……」

「じつした！　官軍の兵士は賊一人倒せんのかあ！」

自分を見て怯え竦む兵士達。その一人が何かを言い出した瞬間、星は初めて感情を発した。それでも言わなければ逃げ出しそうだつたからだ。洛陽を守る立場にありながら、そこに住まう物達を迫害するかのような振る舞い。しかも、おそらく少數ではなく大半がそうしているだろう事。

そんな事をしていながら、こざとなつた時に役目を放り出そうとしかねない事に星は心底怒つていた。せめて意地を見せて自分を捕まえようぐらいすれば、少しさ捨てたものでもないと思えた。だが、倒れた者も自棄になつて向かつてきた者だけ。残つているのは、怖くて逃げているだけの者となれば救いようがない。

(この者達も権威に笠着る事でしか自分を守れないのかもしれんな。だが、田頃の行いを少しほ悔いてもらひそ！)

微かに兵士達に同情するも、因果応報と思い星は槍を持つ手に力を込める。だが……

動くなつ！

その時、後方から声がした。その声が最初に倒した者の声と気付き、星は嫌な予感を感じながら振り向いた。そこには、しんのすけを捕まえた兵士の姿があつた。

「しんのすけつーー？」

「へへへ、やつぱりこのガキは知り合いか。お前の事をずっと見てるからね」「いやないかと思つたんだ」

その言葉から、星は相手の要求を察し槍を持つ手をゆっくり下げていく。だが、それを見たしんのすけが叫んだ。

「星お姉さん、オラにかまわざ戦つて…」

「うーー？」

「黙れ、ここのガキつ！」

「悪い奴はこらしめるのがオラ達たいりく防衛隊だぞ！ それに、星お姉さんは正義のヒーローなんだから負けちやダメーっ！」

自分を押さえる兵士の腕をもがくよにして抜け出そうとするしんのすけ。その必死の言葉と行動に星は再び槍を握り締めた。そして、力強く頷くしんのすけ向かつて走り出す。

それに兵士は慌てた。さすがに子供を殺す程の覚悟はなかつたのだろう。自分の脅しにも屈する事無く向かつてくる星を見て、兵士はどうしようかどううたえた。

それを感じ取つてしんのすけがその腕を噛む。同時に隙を窺つていたシロも足に噛み付き、兵士の拘束が弱まつた。少しでも力が弱まれば、柔軟性の高いしんのすけなら逃げ出せる。見事に兵士の腕から抜け出し、星の元へと走るしんのすけ。シロもそれに合流するよう追い駆ける。

「星おねいちゃんつー！」

「キャンキャンー！」

両手を伸ばして走るしんのすけと並走するシロ。その一人の前に星は駆け寄ると、すぐに一度だけ強く抱き締めて背後の兵士達へ視線を向けた。

「しんのすけ、シロ、あの兵士を任せてもいいか

「ブツ、ラジヤーー！」

「キャンー！」

星の言葉に答え、しんのすけは背中の木刀を手に取った。シロは兵士相手に騒りを上げる。それをちらりと見て、星は頬もしく思い頷いた。

「では、行くぞーー！」

「ほいっー！」

「キャンーー！」

声と共に走り出すしんのすけ達。兵士は子供と犬相手にしてやられたためか、ならばと威嚇ではなく本気で剣を引き抜く。それで多少怯えると踏んだのだろう。

だが、それを見てもしんのすけは慌てない。真剣は確かに恐ろしい。だが、星や愛紗などの英傑から受けた鍛錬を思い出しその動きを見つめた。

相手の動きから決して目を逸らさず、しんのすけは立ち向かう。

予想に反して止まらないしんのすけに違和感を覚えつつも、兵士は剣を振り下ろした。その動きは、星の突きを毎朝受け続けている彼にとって田に見えて遅かった。

(星お姉さんの方がもつと速いぞー。)

もう思いながらしんのすけはその攻撃を見事にかわし、相手の死角に回り込み手にした木刀で兵士の急所を思いつき突いた。

「ほーっー！」

それだけで兵士は剣を取り落としうずくまる。更にしんのすけとシロはそこから追い討ちをかけた。足へシロが噛み付き、しんのすけが頭を叩く。その容赦ない攻撃の前にやがて兵士は氣絶する。そして、星が残った者達を全て倒したのもそれと同時だった。

「……これで片付いたな」

「星お姉さん……」

「クウ～ン……」

倒れた兵士達を眺め、星は開き直ったように笑顔を浮かべた。そじくしんのすけとシロが近寄った。その声に星は振り向き、しゃがんでしんのすけとシロを優しく抱き締める。それにしんのすけは強く抱き返した。

その行動に星は悟る。涙こそ流さないが怖かったのだろうと。なので星は片手でその頭を静かに撫でた。勇敢に信念を叫んでみせたしんのすけを褒めるよつこ。そして、次は主人を助けたシロの忠心を褒めるよつこ。

「予定変更だ、しんのすけ」

「えっと、今からお宿戻つて街を出るんだね?」

「そうだ。急ぐぞ」

星の言葉に無言で頷いて、しんのすけとシロも動き出そうとした時だ。どこからか馬の足音が聞こえてきたのは、それに星は小さく舌打ちをした。街中で馬を走らせる者など限られているからだ。そして、この状況ならそれはもう一つしかない。星はそう考え、しんのすけとシロを庇うように後ろへやりその相手を待ち構えた。馬相手に逃げても無駄だと思ったのだ。やがて、しんのすけ達の前に一人の武将が現れた。

「……おー、これは大したもんや」

「ふんっ! 所詮何進の兵などこの程度だ」

「気持ちは分かるけど程々にし。聞かれたらどうする気や? ま、全員氣絶しとるみたいやけど」

二人の女性はしんのすけ達へ目を向ける事もなく、周囲の状況を見てそんな言葉を交わす。星は田の前の二人から感じる気配から、やや焦りを抱いていた。

訛りがある方は偃月刀を持ち、確實に自分と同等か下手をすればそれ以上の腕前。もう一人は戦斧を持ち、自分と同等かそれより少し劣るぐらい。つまり、自分で勝ち目がない状況だった。

と、そこで星はふと気付いた。相手の女性達は中々の美人。つまり

り、それを見て動く存在がいる事を。まさかと思い振り向く星。そこには力無く頃垂れるシロの姿があるのみ。

ねえねえおねいさん達、オラと一緒に勝利の高笑いしよ。

星の背後から聞こえてくる声。それは紛れも無くしんのすけのものだった。

(遅かつたか……)

そんな風に思いながら振り返る星が見つめる中、しんのすけは馬上から倒れる兵士達を眺める一人へ口説き文句を並べていく。それに一人は目を点にした。幼い子供からよもや口説かれるなどとは思わなかつたからだ。

しかも、武将として名高い二人を口説こうとする男など今までいなかつたから余計だろう。そんな異常な存在であるしんのすけに、二人は我に返ると互いの顔を見合せた。

「な、なあ……どないする? この子供、ウチら口説いとるで」

「そ、そのようだな」

「くつはぐ時どっちから足入れる? オラ右足派」

困惑する一人を他所に、しんのすけは自身の事を告げて質問する。それに一人はやや呆れた後、揃つて笑い出した。

「靴履く時はどっちの足が先か、なあ。いや、そないな事考えた事無かつたわ」

「まつたぐだ。お前はかなり変わった奴だな」

「いやあ、それほどでも～」

「「壊めどりん」」

最早しんのすけとしてはお決まりの流れ。それに喜びを感じてその顔を緩ませる彼を見て、益々笑う一人。と、そこで二人はここへ来た目的を思い出したのか、しんのすけへ耳を塞いでいるように告げると頷き合って息を吸つた。

それが何を意味するかを察し、星もシロへ耳を塞ぐよう告げる。その次の瞬間、空間を振るわせんばかりの大声が大通りに響き渡つた。

「いつまで寝とんねん！　このド阿呆共つ！…」

「わっわと起きろー　首を刎ねられたいかつ！…」

怒号。そこに居る者の全身を振るわせる程のそれは、氣絶していた兵士達を全て叫き起こした。そして、その中の隊長格へ揃つて二人が視線を向けた。

それに気付いてその兵士は恐怖に震え出す。それはそうだ。目の前の相手が目を吊り上げ、自分を見据えているのだから。その雰囲気も誰が見ても上機嫌には見えない。

「ちょ、張遼將軍に華雄將軍……」

「貴様達、何を勝手に持ち場を離れている。何進様の指示か？」

「あ、いえ……その……」

「何にせよ、見事に全員大通りで寝るとま……ええ、身分やな」

「け、決してそのようなつもりは……」

「イイワケは聞いてないぞっ！」

「は、はい！」

二人の言葉と表情に怯えるような反応しか出来ない兵士達。しんのすけも、ちゃつかり一人と同じように兵士達へ文句を言っているのだから性質が悪い。

しんのすけのそれに反論出来ないのも仕方ないのだ。二人の威圧感は、星であっても多少気圧される感があるぐらいなのだから。そんなものを直接浴びているのだから、兵士が声に詰まるのも当然だろう。それでも何とか言葉を紡ごうとはするのだが、やはり中々出来ない。

それを見ながら、星は一人の名を思い出して驚いていた。張遼に華雄。それは、官軍の中でも名を轟かす勇将だったのだ。特に張遼は”神速”と渾名される存在だったのだから余計に。

一人はその後も少し兵士達を威圧した。すると、兵士が思い出したように星の方を見て何かを言おうとした瞬間、それを遮るよつて張遼がこう告げた。

もつええ。この事は何進様には黙つていたる。ウチらが我慢しどぬ内にさつさと持ち場に戻らんかいつ！

次はないと思えつ！

一人の吐き捨てるような言葉。それを聞いて兵士達は理解したのだろう。これ以上何か言い訳をしたり、次回何か事を起こせば自分達の命がないと。なので一目散に去っていく。

それを眺めてしんのすけはあるの高笑いをした。それに張遼と華雄が一瞬驚きを浮かべた後、楽しそうに笑い出す。星はその笑いを聞いて安堵した。二人はおそらくしんのすけだけは見逃してくれるだろうと思えたからだ。

そうして兵士達が全ていなくなつたのを確認し、張遼と華雄がゆっくりとしんのすけを促して星へ近付いていく。星は特に何かするでもなく、静かに一人を見つめていた。

そして一人は星の前に馬を止めると、揃つてすまなさそつな表情を見せた。それだけで星には分かる事があった。おそらく一人は兵士達を止めるために来たのだろうと。そんな風に考えている星へ、まずは張遼が口を開いた。

「堪忍な。この街の兵はない奴らばかりぢやうねん」

「確かにああいつた者がいるのは認めるが、全てと言ひ訳ではない。
氣を悪くせんで欲しい」

それに安堵する星だったが、何故そんな事をと疑問に思った。すると二人も星の疑問に気付いたのか、笑みと共にその理由を教えてくれた。星が最初に助けた兄妹。それが、兵士の詰め所に必死の表情で駆け込んだのだ。

それを取り合つたのが華雄の部下。そこから報告を受け、華雄とその猪つぶりで問題を起こさないと張遼が出張つたのだ。実は以前から街の警備兵が横暴な態度を取つていいという噂はあった。しかし、証拠がなく大將軍である何進の兵という事もあり、中々

取り締まる事が出来なかつたので今回の報告は願つてもない機会だつた。それ故に華雄はどこか喜び勇んで出て来たという訳だ。そんな説明を聞いて、星はどうしてこの騒ぎに一人のよつな大物が出張つてきたのかを理解した。

一方二人は説明を終えて星を見つめた。その表情はどこか楽しそうだ。

「聞いた時は信じられへんかつたけど、ほんま大したもんや。ある意味朝廷相手に喧嘩売るなんてな」

「経緯は簡単にだがその兄妹から聞いた。中々見上げた根性をしているようだが、名は何と言つ?」

「我が名は趙雲。字は子龍」

「オラは野原しんのすけ。あざなはないぞ……ほら、シロも

「……キャンキャン。キャン」

星に続けと名乗るしんのすけ。その彼に促され、シロもどこか仕方ないとばかりに声を出す。それを聞いて呆気に取られる二人だが、少し間を空けて笑い出した。それにしんのすけも乗つかるようにあるのポーズをし、視線を星へ向ける。

その意味を悟り、星は小さく笑うとしんのすけと同じポーズを取つて高笑いを始めた。久しぶりの悪を倒した状況。故に、正義のヒーローとして勝利の高笑いをしよう。そうしんのすけは考えたのだ。星もそれを理解し、心から笑つた。シロもそんな二人に脱力する事もなく、嬉しそうな声を出す。そんな風にしばらく大通りには笑

い声が響いたのだった……

あれからしんのすけ達は張遼と華雄に礼がしたいと宿を告げ、一旦戻った。星のした事については、二人の配慮で問題にはならないようになると告げられた。何せ、街を守る兵士がたつた一人にやられたのだ。しかも賊紛いの手まで使って。

それを公にされれば、兵士の上司である何進の失態に繋がる。それを張遼がそれとなく仄めかして、お咎め無しにするからと。その提案に星は感謝しそれに対して張遼は気にしなくていいと返した。

うちもスカッとしたわ。中々うらうら星尾出さんようじつとつたからな。

警備兵達が街で狼藉を働いているとは聞いていたが、その証拠を掴もうにも街の者達へ圧力を掛け自分達の前では大人しくしていたらしく、張遼や華雄としてもやはり苛立つていたらしい。

それもあって、二人は天の配剤に感謝した。まず星があの兄妹を助けなければ、次にその兄妹が知らせなければ、今頃どうなつていたか分からなかつたからだ。そして、今後はもう同じような事を誰も出来ないだろうと二人は断言した。一度でも実態を掴んでしまえば、後はこちらで御してみせると張遼は笑つたのだから。

そして今は一人と共に昼食を食べた店に来ていた。そこで、先程の礼も兼ねた夕食を共にするために。

「へえ、主君探しついでの見聞の旅なあ」

「それは分かるが、何故子供連れで……」

「奇妙な縁とでも言えばいいのでしょうか……まあ、私ぐらいしか頼る者がいないのですよ、しんのすけには」

星がそう答えると一人は納得がいったとばかりに頷いた。戦乱で親を失つたとも思ったのだろう。そして、視線をしんのすけへ向ける。

「アロハ～オエ～」

「わはは、面白いぞ小僧」

「綿犬を落とすなよ～」

頭の上にシロを乗せ、しんのすけは店の中央で半けつフラダンスをしていた。その奇妙な踊りを見て、客達は酒が入った事もあつてかやんややんやと声を掛ける。そんな様子に一人は意外な印象を受けた。

とても戦災孤児と思えない程明るいからだ。そんな事を考える一人を見て星は笑みと共に告げた。しんのすけは悲しんでいると周りも悲しむと知つていて、ああして明るく振舞つているのだと。

それに一人は小さく驚きどちらともなく笑つた。それは大人物だと言いながら。そんな一人には星も笑う。二人は軽い冗談にも近い雰囲気だが、星自身は本当にそう思つているからだ。

そこへしんのすけがシロを頭に乗せたまま戻ってきた。その見事なバランス感覚に張遼と華雄が少しだけ関心を示す。それが星にも分かつたのだろう。自分がしんのすけを鍛えている事を告げた。そ

れを聞いた瞬間、張遼が何かを思い出したかのよつて星へ告げた。

「な、趙雲言うたな。見た感じ結構強そりやしそうだね、明日ひつりと一手打ち合つてみる気はないか？」

「それは嬉しいお言葉ですな。ですが、生憎明日にはいいを発とうと思つておりますので」

星の言葉に張遼と華雄が表情を曇らせた。旅の目的を聞いた今、その決断は正しいものだと思ったからだ。この洛陽は朝廷の街。皇帝を主君とするのならいいのだろうが、今の時勢を一人も理解している。

既に皇帝の権威は地に落ち、朝廷も形骸化して久しい。であれば朝廷は星が仕えようと考える相手ではないのだ。それに力無き民を救おうと兵士に立ち向かった星が、その元凶を作り出している朝廷に仕えるはずはないと思つたのだ。

「そうか。お前の判断は理解出来る。張遼、残念だが諦めろ」

「しゃーないか。久しづりに強そうな奴と思たから、結構楽しみにしどつたんやけど……」

「お？ じょーくんも強いの？」

華雄の言葉に悔しそうに返す張遼。それを聞いてしんのすけが思つた事を尋ねた。その中のじょーくんとの名前に張遼が苦笑。星は少し困り、華雄は笑つた。

「じょーくんやなくて、張遼や。呼びにくいかもしれんけど、堪忍な

「ほーほー、ちょーりょーですか。えつと……じゃ、ちゅーのお姉さんって呼んでもいいーい?」

「おー、しんのすけ……」

星は張遼の性格を大まかにではあるが捉えた。明るい雰囲気に頼りになる姉御肌。しかし、それでも相手は官軍の将軍。それを考え敢えて少し注意するように告げた。それを聞いた張遼がどう反応するかを悟っていたために。

案の定、張遼はそのしんのすけの呼び方に構わないと返す。下手に間違えるより余程いいと笑いながら。華雄はそのままでもいいのではないかをからかうように告げる。すると、それに張遼は不敵な笑みを返してしんのすけへじつ尋ねた。

「な、うちの隣の奴の名前言つてみ

「え? おかゆさんでしょ?」

「なつ! ? 誰がおかゆだ!」

しんのすけの返しに爆笑する張遼。星もつい笑ってしまい、華雄はそれに顔を真っ赤にしながら叫ぶ。それでも拳を振るわないのは相手が子供だからだろう。しかもその怒声を聞いても、しんのすけは平然としていた。

だが、名前を間違った事だけは理解したので素直に謝罪。頭を下げ、もう一度名前を教えて欲しいと告げる。それに華雄も仕方ないともう一度名乗り、しんのすけの目を見て言った。

「いいか? もう間違えるなよ

「ほー、おかねさん」

「お前ー、今言つた」

「じょーだんだぞ」

華雄の言葉を遮るよつに平然と告げるしんのすけ。その表情に華雄は湧き上がつた怒りを何とか押し留めた。

「ぐつ……」

「ちやんとかゆーのお姉さんつて呼ぶから、怒りやいやい……」

「やせりからかつてゐだり、お前はー。」

「そんな事なによ。マジメにふざけてるだけだよ」

「なお悪いわー。」

「かゆーのお姉さん、ダメだよ。怒りっぽこと早くおこるつて母ち
ゃんが言つした」

「誰のせいだー。」

華雄を翻弄するかのように話すしんのすけ。そのやり取りを聞き、
張遼はずつと笑い続けていた。星もまつ抑える事もせず、張遼と一緒にになつて笑い続けていた。その会話を聞いていると白蓮の事を思
い出すからだ。

華雄とは違ひ怒りから突つ込みではなかつたが、ここまで見事
に翻弄される様はどこかそれに近いものがある。そう思つた星は隣

で笑う張遼にその事を話した。余計笑うだらうと踏んでだ。予想通り、張遼は白蓮の話で更に苦しそうに笑い出した。

白馬長史と名高い白蓮。騎兵として名を馳せている張遼としても、その名はよく聞いた事がある相手だったのだ。そんな相手の笑い話。張遼は星へ止めてくれと言いながら、腹を抱えていた。

しんのすけと華雄もそんな張遼達に気付き、漫才のような会話を切り上げてそちらへと意識を向けた。そして聞こえてくる星の語る白蓮の笑い話。それにしんのすけが懐かしいと補足をしたり、白蓮の関連で袁紹の事も話し出す。それには華雄も一緒にになって笑い出した。

「へへへ……お、お前達は袁家とも繋がりがあるのか？」

「せうだよ。よいしょーさん達ともお知り合いでぞ」

「よ、よいしょー？ もしかして、それは袁紹の事か？」

しんのすけの呼び方に華雄は少し戸惑いながら問いかける。それにしんのすけは迷いもなく頷いた。それに華雄はやや驚きを浮かべるも、聞いた事のある噂の類から推測出来る性格を思い出してどこか納得。それで袁紹は怒らなかつたのかと尋ね、しんのすけがそれに答えていく。

だが、張遼はそんな呼び方が想像する性格と一致した凄さに感心すると同時に、実際に呼ばれた際の袁紹の話などを聞いて小刻みに震えだしていた。

「よ、よいしょー……あ、あかん。また笑いそつや……」

よつやく収まってきた笑いが再燃するかもしないと思い、張遼

は慌てて耳を塞ぐつとある。だが、星がそつねやじと耳元へ近付
き咳く。

白馬長史が残念さんで名門袁家はよいしょーですぞ。

それに張遼が堪らず再び大笑い。星はそれに不敵な笑みを見せ、華雄へと近付く。しんのすけから曹操との思い出話を聞いていた華雄だったが、その耳元で星が先程と同じ事を言つと大笑いはしなかつたものの吹き出させる事には成功した。

しかし、すぐに華雄が立ち直つて星へ笑わすなど反論。それに星は楽しそうと思つたとさうりと返す。そして不機嫌そうな華雄へひづ告げた。

失礼ですが、こんなに簡単に怒るよつでは将としていかがなものかと思いますぞ？

その言葉に華雄は一瞬答えに詰まるが、言われなくとも分かつていると返してその話題を終わらせた。星はそれに内心苦笑し、しんのすけはそんな華雄の反応を見て可愛いと告げた。

その発言に華雄が反応。今まで女性らしい褒め言葉など言われた事がなかつたからだ。その顔は完全に動搖を示していて、頬には微かに朱が混じつていた。

「な、何つ？！ 今、何と言つた？！」

「え？ カわいいつて。だつて、星お姉さんに言われた事が恥ずかしかつたんでしょ？」

「ふんつ！ ……別に恥ずかしくなど思つていない」

「あ、その言い方愛紗お姉さんみたいだ」

華雄の照れ隠しの言葉に、しんのすけは思わずそう答えた。星はそれに感心したように頷き、確かに似ている部分があると思つた。一方、華雄は愛紗との名前に反応した。それは誰かと尋ねたのだ。親近感でも抱いたのだろう。

しんのすけはそれに答えていく。いつの間にか張遼もその話を聞いていて、愛紗の正体を知ると興味深そうに視線を星へ向けた。

同じ偃月刀使いであるため、張遼もその噂は聞いていたらしい。腕前などを詳しく聞きたいと言われ、星は出来る限り武人としての腕前のみを語つた。人柄や性格などはあまり言わない方がいい。そんな風に思ったのだ。

明確な理由はない。ただぼんやりとこいつ考えたのだ。性格などは接する者によつて違う印象を持つ事もある。下手な先入観を与えない方がいいだろう。そう結論付けたのだ。

「でも、かゆーのお姉さん」

「何だ？」

話も終わつてそろそろ解散するかと思い始めた矢先、しんのすけが華雄に声を掛けた。それは純粹な疑問。將軍と呼ばれる者がどういう立場かをおぼろげに感じているからこそ、しんのすけが思った事。

かゆーのお姉さんって、エライ人なのにそんな簡単に怒っちゃうの？

それに華雄はそんな事はないと返す。しかし、それに張遼が軽い

指摘を入れた。挑発の類には滅法弱いくせにと。それに華雄は誇りを傷付けられて黙っているのは武人ではないと言い切った。それは張遼も苦笑ながらも頷いた。

しかし、しんのすけにはそれが分からぬ。何故誇りを傷付けられると黙つていられないのか。そう思い、もう一度尋ねた。どうして我慢出来ないと。

「あんな、しんのすけ。うちらは武に生きる者や。その……まあ、生き甲斐みたいなもんを馬鹿にされて黙つとる訳にはいかへんのや」

「そうだ。多少の事なら我慢はするが、度を過ぎればそらもいがん。武人とはそういうものだ」

一人の言葉に星も同意するように頷き、しんのすけへ視線を向けた。これで少しほは理解出来たかと思って。だが、しんのすけは心底理解出来ないという表情でこう返した。

でもそれで他の人達まで巻き込むのはダメだぞ。だつて、お姉さん達はしょーぐんさんでエライ人だもん。

その言葉に二人は返す言葉が咄嗟に出なかつた。傍で聞いている星でさえも同じく。しんのすけがそう言つた裏には、勿論あの戦国での戦が関係している。

春日の城へ攻め入つた相手。その者が偉く多くの兵士を動かす権力を持つていたからこそ、しんのすけは戦が起きて又兵衛を失う事になつたと知つたのだから。

偉い者が戦を起こす。それがしんのすけの中での事実。偉い者が平和を望み正義を行えば、世界はそうなつていくのだ。そんな子供の考え方しか彼にはない。それが厳しいのは風から言われた。それで

も、しんのすけにとつてはそれが事実だと思つてゐるのだから。

(偉い者なのだから他まで巻き込むな、か。この小僧、戦の起きた方を知つてゐるとでもいうのか？ いや、それはどっちでもいい。確かに戦場で私が将軍として動けば部下達も動く……大勢の命を犠牲にしてでも、誇りとは守るべき物か否かと問われた気がするな)

華雄はしんのすけの言葉からそう結論を出し、どこか意外そうな表情を浮かべた。武人として動くのは構わない。だが、その際は完全に個人でなければならないのだ。そう言われた気がして華雄は小さく笑つて呟いた。

生意気な、と。だが、それがどういう気持ちから生まれた言葉かを理解している華雄は、その笑みを隣の張遼へと向けた。丁度張遼も華雄と同じように考えているところだった。

(偉いから巻き込むなとはなあ。しんのすけはどこぞの将の息子か？ いや、それにしても中々鋭いとこ突いてくるな。どんな時でも戦を起こすんは偉い奴や。それを子供のくせに知つとるちゅうだけでもおもろい奴やで)

張遼は戦争の起きた方を知るような口振りのしんのすけに興味を抱いた。彼女が知る中でそんな事を言う子供は当然ながらいなかつた。大人は言い出さなかつた。戦争が起きた時、その責任を誰もが他者へ押し付けるからだ。

起きた者は相手に非があると主張し、起きた側は相手が攻めてくるからだと返す。そこに至るまでにいくつもの出来事があつたのは隠したままで。偉い者達は戦を正当化する。それが当然なのだ。義は我にあり。そう言わなければ誰が命を賭けて戦おうとするだろう。

だが、張遼はしんのすけのよつたな考え方をする者ならばそつは言わないだろつと思つた。どんな理由があるにしづ、他者を巻き込んで戦う以上それは悪い事でしかない。

きつとねう言つて彼のよつたな者達は「いつづり」のだ。戦を起こす者も起こされる者も悪いのだと。相手と心を通じ合わせていれば、ちゃんと仲良く平和に暮らそうとすれば戦争など起こす必要はないのだ。まあ、それでも起きてしまつ事もあるのが戦争の恐ろしさところであるのだが。

そんな風に張遼は考えを纏めると隣の華雄の視線に気付いた。その視線は面白い者に会つたと言つている。それに張遼も同じ視線を返して笑みを浮かべた。

「しんのすけ、今度はもつとゆづくつ話をしよか。やから、またいつか来い」

「おおつー、ちょーのお姉さんからお誘い受けたぞー!」

「私もだ。待つているぞ」

「おー、かゆーのお姉さんまで……オラ人気者ですなあ

にやけた顔で頭に手を置くしんのすけ。その姿を見て楽しそうに笑う張遼と華雄。星とシロはそんな三人を見て小さく頷く。そして、互いへ視線を向けると小声で告げる。

「また妙な縁が生まれたな」

「キャン」

こうして楽しかった時間も終わりを告げ、しんのすけ達は一人と別れた。去り際に、また来る事があれば自分達の名を出すといいと教えられ、更にいつか必ず会いに来いと言われた時には、しんのすけも星も心からそれに頷く事が出来たのだった……

「……張遼」

城へ戻る道すがら、華雄は隣の張遼へ声を掛けた。その声が妙に真剣みを帯びている事に気付き、張遼は何事かと思って視線を向ける。

「どないした？」

「いや、お前に頼みたい事がある。今後、もし私が怒りに我を忘れ、将としてあるまじき行動を取ろうとしたら……」

華雄のその言葉に、張遼はしんのすけから言われた言葉が相当効いたのだなど悟った。子供に言われた事で自身の頭に血が上り易い事を真剣に考えたのだろうと。故にそこから先の言葉を聞かずとも、張遼には理解出来た。

なので、それを遮るように手を振った。安心しろと。もし華雄が大局を見失い自分の感情に流されそうになつたら全力で止めてやる。それこそ、意識を刈り取つてでも、と言つて。その言葉に華雄は一瞬嬉しそうな表情を浮かべたが、すぐにそれを消してこう返した。

ふんっ！ 意識を刈り取る程度で私が止められると思つた！

はあ……よつしゃ分かつた。なら殺してでも止めたるわ。
それでええな？

その呆れた声に華雄は満足そうに頷いて歩く速度を速めた。それ
ぐらいの気概で來い。そう言わんばかりに。その後姿を見つめ、張
遼はどこか呆れるような、それでいて楽しそうな表情で呟く。

ヤー、いとこやと思つて。可愛い思われるんわ。

翌朝、しんのすけは星とシロと共に大通りを歩いていた。大都市
にたつた一日の滞在はしんのすけにとっては初めての事だったが、
それも仕方ないと思つていた。張遼や華雄と出会えた事は喜ばしい
事だし、昼食と夕食を食べた店は氣のいい者達ばかりで楽しかつた。
それでも、やはりこの街は長く居たいと思える部分が少なすぎる。
もし、昨日の事件がなければここまで思う事はなかつただろう。しかし、今のしんのすけ達には共通した思いがある。

「……次に来る時は、堂々と戦える事を願うのみだ」

「悪い奴をオラ達がじらしめるために？」

「そうだ」

しんのすけの言葉に星は力強く頷いた。今は、大將軍である何進
が十常侍と呼ばれる者達と権力争いをしているらしく、張遼と華雄

はその点からも昨日の争いは大きくしないだろつと言つていたのだから。

星はそんな事を思い出し、これから朝廷の動向に思いを馳せる。次なる大きな戦乱。それは、朝廷がキツカケになるだろつと考えながら。しんのすけはそんな事を知る由もなく、シロと共に歩いていた。すると、シロが何かに気付いて足を止めた。

「お? どうした、シロ」

「キャンキャン」

シロが視線を向ける方向へしんのすけも視線を動かした。そこには赤い毛並みの犬がいた。だが他には誰もいない。星もしんのすけとシロの様子に気付き、視線を向けてその犬を見た。

「捨て犬……ではなさそつだな。人にどこか慣れている」

「じゃ、迷子?」

「かもしけん。どうだ、シロ。何か分かるか?」

星の言葉にシロは赤毛犬へと声を掛ける。それに向こうも声を返しシロへと近寄った。そして、一匹は会話するように声を掛け合つ。しんのすけと星はそれを眺めるだけ。ある程度そんな事をし、シロは一人へ視線を向けた。

それに一人は事情を聞き出したのかと思い質問をしていく。ここにはその犬だけで来たのかと聞けば、シロがそれを否定するように首を振る。飼い主とはぐれたのかと聞けば、肯定するように首を振る。そこから、星は散歩の途中ではぐれてしまつたのだろうと結論付けた。

「やはり飼い主とはぐれてここまで来たのか」

「でも、シロ良かつたね。お友達が出来たぞ」

「キャン！」

しんのすけの言葉に嬉しそうに答えるシロ。その声に、赤毛犬もシロへ楽しそうにじやれ付きだす。仲良くじやれ合つ一匹を眺め、しんのすけと星は笑みを見せる。すると、そんな一匹の声を聞いたのか一人の女性が近付いてきた。

女性は犬と同じ赤い髪をしていて、表情は無表情にも近い。だが、視線の先でシロとじやれ合つ赤毛犬を見て柔らかく微笑んだ。星はその相手の気配に気付き後ろを振り返つた。当然ながらその視線が交差する。

「……セキト、ここにいた」

「「セキト？」

女性の告げた名前を同時に繰り返すしんのすけと星。それに女性は頷いてセキトと呼ばれた犬へ手を伸ばす。それにセキトは駆け寄つた。そして女性はセキトを抱え上げるとそのままを見つめて告げる。

「勝手に離れちゃ、駄目」

女性の言葉にセキトは分かつたとばかりに頷いた。それを見てしんのすけと星が感心する。シロと同じように言っている事を理解したからだ。女性はそれに頷き返し、視線をシロへと向けた。

そしてしんのすけと星へ視線を移し、少しの間何かを考えるよう

に黙り込んだ。それに星は妙な感覚を感じ、しんのすけはシロを女性と同じように抱き抱えその目を見つめ続けた。

「……その子、名前は？」

「お？ シロだぞ。で、オラは野原しんのすけ」

「シロ……いい名前……」

女性はしんのすけの言葉にそう返し微かな笑みを見せる。それにしんのすけは声も出さず魅入るのみ。独特の雰囲気に喋り方。大人のようで子供のような空気を感じさせむ相手に、しんのすけは何とも言えない気持ちになっていた。

星はそんなしんのすけを横目で見て苦笑しつつ、女性の隙の無さに驚いていた。出会つてから一度として隙が見えないので。そして、薄つすらではあるが思う事。それは相手がかなりの武人だろう事だ。

「失礼ですが、お名前を聞いてもよろしいですか。私は趙雲。字を子龍と申す」

「恋の名前は呂布。字は奉先」

「つー？」

星は相手の名前に息を呑んだ。呂布奉先。それは黄巾の乱で三万もの軍勢をたつた一人で打ち倒したと言われた武将の名だったのだ。そんな星の反応から呂布は彼女も武人である事を理解し、視線をしんのすけへ向けた。

果然と自分を見つめるしんのすけに不思議そうに小首を傾げる呂布。するとシロがそこでしんのすけに声を掛け、やっと彼は我に返

つた。今まで彼は呂布の不思議な雰囲気に魅入っていたのだ。

「あ、その……オラのお名前は呼んでくれないの？」

「？」

「だつてさつと、シロだけしかお名前呼んでくれなかつたから……」

どこか寂しそうにしんのすけが言つと、呂布はそれに少し困った顔をした。その表情から何となく星は呂布の困惑する理由を察した。おそらくシロの名前を尋ねたので、それしか聞いていなかつたのだろ？ なので、もう一度しんのすけへ名乗るよう告げる。

それにしんのすけは、自分と同じで一度では覚えられなかつたのだろうと思い頷いた。だから、もう一度呂布の目を見て自分の名を教える事にした。ただ、先程と違いどこか真剣な眼差しだつたが。

「オラは野原しんのすけ。字はないぞ」

「……しんのすけ？」

「変わつた名ですが、そうです。好きに呼んでくださいって結構ですぞ」

「も～、星お姉さん。それはオラのセリフだぞ」

しんのすけの軽い文句に星は笑つてすまんと返す。それにしんのすけがなら許すと言つと、シロがやや脱力するように頃垂れた。そんな光景を見て呂布は小さく笑う。だが何かをそこで思い出したのか呂布はしんのすけ達へ背を向けた。

それにしんのすけ達が気付いて視線を向けると、呂布は朝食の時

間だからと告げた。そしてそこから歩き出す。去り際、一度だけしんのすけの方へ顔を向けて。

……またね、シロ、しんのすけ……

と言い残して。それにしんのすけとシロも畠布とセキトへ声を返し見送る。星はその離れていく背中を見つめ密かに微笑む。噂に名高い飛将軍。それがまさかあんな人物だったとは、そう思ったのだ。

立ち去る前に凄い人物と出会えたものだと考えながら、星はしんのすけとシロへ歩き出すよう促す。それに頷き歩き出すしんのすけ。シロをその腕に抱えたままで。

次の目的地は江東。そこにいる孫策と会うために星はその方法を考えるのだが、ふとしんのすけへ視線を向けて苦笑した。下手な事をせず、気ままに動いた方がいいような気がしたのだ。

これまで出会いのキッカケや原因になっていたのはしんのすけ。その行動に委ねてみるのも手かと、そう考えたのだ。

「次に目指すは江東だ。距離がかなりあるから氣を引き締めて歩け」

「ほーい。次はどんなお姉さんがいるのかなあ……？」

「クウーン……」

「女の事しか頭にないのか、お前は。やうシロが言つているな

「チツチツチ、分かつてないなあシロ。オラは、男として正しい道を歩いてるんだぞ！」

そんなしんのすけの答えに笑い出す星とため息を吐くシロ。自信満々で告げられた言葉は、どう聞いても褒められたものではない。しかし、確かに男としては正しいかもしない。そんな風に思いながら星は視線を前へと向けた。街を抜けた先には当然地平線が広がっているのだが、そこに予想だにしない光景があった。

それは一台の馬車と大勢の兵士達。どこかの諸侯でも洛陽に来たのだろうか。そう思い、星はしんのすけを自分の傍へと引き寄せた。そしてその一団が過ぎていくのを待つ。星はその編成に騎馬が多い事から涼洲の者達ではないかと察しをつけていた。

(騎馬で有名な涼洲の者達だらうか？　しかし、そんな辺境の者が何故この洛陽に……？)

そんな事を考え、星はその通り過ぎた者達を見つめていた。しんのすけはそれとは違ひ目の前を過ぎていく者達を大口を開けて見つめていた。その威容に感嘆の声を上げながら。

そしてそこを馬車が通り過ぎた。馬車の窓は開いていて、そこから白い肌の少女が外を眺めていた。その視線が丁度馬車を見上げていたしんのすけの視線と交わる。

(かわいいぞ……しかも馬車に乗ってるなんて、お姫様みたいだ……)

(子供と子犬？　旅人かな……？)

頬を染め呆然とその少女を目で追うしんのすけ。それに少女も気付き微笑むと手を振った。しんのすけはそれに驚き、シロを慌てて下ろして手を振り返す。その微笑ましさに少女も笑顔を浮かべた。そのまま馬車は遠ざかる。それを見送りしんのすけは手をゆつぐ

り下ろした。あの少女がどうして洛陽に行くのかは分からない。だが、それがあまり良くない気がするのだ。あの街に対する印象のせいもある。だが、どこかそれだけではない気がしんのすけにはした。

何だろ……？ 嫌な予感がするぞ……

そんな咳きをするも星が行くぞと声を掛けたために、しんのすけは後ろ髪を引かれる思いで歩き出すのだった……

「どうしたの、月？ 急に手なんか振つて」

「うん、外に真っ白な犬を抱えた子供がいたんだ。それで目が合つたら、ずっと私を見てたから何だか可愛くて……」

「そう」

月と呼ばれた少女は、向かいに座る眼鏡の少女の言葉に笑顔で答えた。その表情に相手も嬉しくなったのか笑顔で返事を返す。だがそもそもそこまで。眼鏡の少女はすぐに険しい表情に戻り、今後の事へ思考を巡らせる。

今はまだいいかもしない。しかし、絶対にこれから自分達を良くない事が襲うだろうと思つていた。朝廷の権力抗争へ関るのだから。自分はそれによる危険から何とか月を守り切るつもりだ。自慢ではないが頭の回転には自信がある。しかし、それでも全てを見通せる訳ではない。想定した事態以上の脅威や状況に陥る事もある。そこまで考え、少女は拳を握り締めた。

(何弱気になつてゐるのよ、賈文和！　僕が月を守るんだからー。)

眼鏡の少女　　賈駆はそう心に言い聞かせ、これから待つだらう状況を考え、一人誓う。何があつても月を守り抜くのだと……

しんのすけが洛陽を去つた日、洛陽に入った者がいた。その名は、董卓。この日から、静かに洛陽が混迷を深める事となる。それを知らず、しんのすけは行く。自身の感じた予感もすぐに忘れて。穏やかだつた大陸の風。それが再び荒れ始める日は近い……

洛陽編終了。放浪編も後呂と袁術を残すだけ。何とか頑張ります。

第九話

「雪蓮！ 雪蓮っ！」

「駄目ですねえ～。もういなくなつてますよ～」

「へつ……相変わらずだな、この素早さね」

眼鏡をかけた褐色肌の女性はそう言って大きくため息を吐いた。
その隣の眼鏡の女性は対照的に白い肌をしていて、大きな目の胸部を
揺らしながら周囲をキヨロキヨロと見渡していた。

一人は仕える主を捜していた。というのも、その主はよく仕事から逃げ出してしまつのだ。なので、こうして見張りをしなければならないのだが、今日はどうやらその動きさえ予測していたように消えていたのだ。

(まつたく……勘をこんな時にまで使わないで欲しいわ)

主君であり親友である相手の事を思い出し、女性はもう一度ため息を吐いた。すると、もう一人の女性が机の上に置かれた竹簡を見つけ出して苦笑した。

「冥琳様あ、これ見てください」

「……雪蓮らしいな」

冥琳と呼ばれた女性は竹簡の文面を見ると、そう言って小さく笑みを見せた。それは諦めの笑み。隣の女性はそれに同意するような笑みを浮かべていた。

そこにはこう書いてあつた。何か面白い事が起きそうな気がするから街へ行く。仕事は自分でなければ駄目な物以外は冥琳と妹の蓮華に任せると。その奔放且つ他人任せな内容に一人は揃つて息を吐いて仕事に戻るのだつた……

洛陽から歩く事しばらく、しんのすけ達は江東の地に足を踏み入っていた。今まで活気のある街を見てきた彼ら。だが、その活気が街毎に違う事を認識し表情に驚きを混じらせていた。

南皮はただその土地の豊かさで、陳留は治める者の力で、そしてここは住まう者達自身の力で活気を生み出している。そんな風に星には見えた。袁術の客将でしかない孫策。それが治めるこの街が活気付いている事に、星は孫策の人望を感じ取つていた。

「こつちはあつたかいね」

「南に近いからな。食べ物なども幽州とはかなり違つた

「お~、それは楽しみですね」

「キャンキャン」

しんのすけの言葉にシロも同意するように声を出し、楽しそうに歩いていく。星も笑顔でその後を追う。まずは宿の確保をして、軽く街を見て回る。そんな事を話し合しながら彼らは歩く。南方原産の野菜や果物、魚などを見たりしながら街の者に宿の場所を尋ねる星。

しんのすけとシロはそんな星の後ろをついて歩きながら、周囲をキヨロキヨロと見渡していた。威勢のいい声や食欲をそそる匂い。市場ならではのそれらに意識を奪われつつ歩いていたのだ。

その速度は徐々にゆっくりとなり、星から離れていくのは当然といえた。シロは嗅覚で感じ取れたため、しんのすけへ声を掛けて急ぎ目にその後を追つた。しんのすけもその声に視線を動かし、星から離れている事に気付いて少し走り出す。

と、そこで入ごみの中から出てきた誰かにぶつかった。咄嗟に避けようとしたが、それでも完全に避け切る事は出来なかつたのだ。何せ市場は人が多い。下手に動けば別の人ぶつかる事になると思つたからだ。

「さやいんつ！」

「あら？『じめんね、坊や。怪我はない？』

しんのすけが自分の足に引っ掛けたて転んだ事に気付き、そのまま手は少し不思議そうな表情のまま声を掛けた。彼女としんのすけの位置関係では完全衝突しかなかつたはずだつたからだ。そんな相手の声にしんのすけは起き上がりつて土を払うように手で服を叩いた。そんな光景を見て相手は少し意外なものを見たかのような反応を見せた。幼い子供が平然と立ち上がり、何事も無かつたようにしているのが珍しかつたのだろうか。しんのすけはそんな相手に気付かず、服を叩きながら返事を返す。

「……つと、へーきだぞ。オラ、男の子だし」

「やう……」

「あ、ぶつかつて」めんぐれこ

「あはは、いいのよ。私も少し気を抜いてたし」

しんのすけの言い方に少し面白いものを感じたのか、相手はややおかしそうな声を返した。それにしんのすけは顔を上げて、初めて相手を見た。褐色の肌に桃色の髪。露出度が高めの服装に魅力的なスタイル。目には力があり、曹操とはまた違った強さを感じさせるものがある。

しんのすけはそんな相手に見とれた。すると、相手はそんなしんのすけの反応に小首を傾げる。ああは言つたが、どこか強く打つたのだろうかと思いながらしんのすけへ近付く女性。

「えつと、どうしたの？」

しんのすけの前にしゃがみ、声を掛ける女性。それにしんのすけは我に返り、顔をにやけさせた。

「おねいさん、今一人？ よければオラとじ飯でもどう？」

「えつと、お誘いありがとう。でも……遠慮しどくわ」

（奇妙な子だわ。しかも、この歳で女を口説くとはねえ……世も末かしら？）

しんのすけの子供離れした言葉に女性は若干苦笑しながらもそう考えた。しかし、何かが彼女に訴える。この子供を放つておいてはいけないと。これまで彼女が頼りにしてきた勘。それが何故か目の前の子供に強く反応していた。

故に彼女は初めて自分の直感を疑つた。どうしてそんな風に思う

のかと自問をする女性へ、しんのすけがお決まりの事を問い合わせる。
「そつ名前だ。

「そつか。ねえねえ、じこで会ったのも何かのじ縁だし、お姉さん
のお名前教えて。オラ、野原しんのすけ。あざなはないぞ」

「そひ、野原が姓で名がしんのすけってところ。私は孫策よ。字は
伯布」

変わった名前だと思いながらも、孫策は笑顔で名乗りを返す。そ
れを聞いてしんのすけは響きから違和感を覚える。そう、それはこ
こへ来る前から星に聞いた名だったのだから。しかし、それまでは
思い出せずにしんのすけは頭に両手の人指し指を当てて考え込む。

「そーさく……？ あれ？ ビーかで聞いたお名前だ」

「ふふつ、やうなんだ。それと、そーさくじゃなくて孫策よ。……
ま、確かによく搜されるけど」

そのしんのすけの仕草に微笑みを浮かべ、孫策はそつ言つた。だ
が、それが最後には苦笑に変わる。よく自分を親友が検索している
事を思い出したためだ。その言葉を聞いてしんのすけが不思議そう
に問いかける。

「え？ お姉さんは迷子？」

「違うわよ。にしても、私を知らないって事はしんのすけはこの街
の人間じゃないのか」

しんのすけが自分の事を知らない事で旅人だと理解する孫策。す

るとそこへ星とシロが戻つて来た。あまりにもしんのすけが遅いのでシロと共に来た道を戻つっていたのだ。

傍にいる孫策の只ならぬ雰囲気に内心疑問を抱くも、星はしんのすけの姿に安堵した。シロもそれは同じだつたらしく、嬉しそうにしんのすけへ駆け寄つたのだから。

「「」にいたのか、しんのすけ」

「キヤンー！」

「お、星お姉さんとシロ」

「あら、可愛い犬。それと、どうやらそいつは保護者みたいね。気をつけた方がいいわよ。」この市場は結構賑わつてゐるから

孫策はそう星へ告げると手を振つて歩き出す。目を離さないようになど、そう言い残して。それに星は礼を述べ、しんのすけの手を掴んで反対へ歩き出した。しんのすけは星に謝りながら、視線を去つていく孫策へ向け手を振つた。だが、その時しんのすけが言った言葉に星は呆気に取られる。

バイバイ、そーさくお姉さん。

それに星は足を止め、勢い良く振り返つた。しかしそこにはもう孫策の姿はない。

「……孫策と名乗つたのか、先程の女性は」

「うん、そうだよ？」

「そつか。本当にお前という奴は……」

洛陽を出る時抱いた希望。それを本当に叶えた事に星が呆れたような笑みを浮かべるも、しんのすけはその理由が分からず不思議顔。だが、星が笑顔ならそれでいいと思つたのだろう。

しんのすけは平然と道を歩き出す。それに軽く引っ張られるようになりながら星も歩みを再開した。シロはそんな二人の近くをトテと歩いてついて行く。目指すは宿だ。

しかし既に星としては、孫策が平然と街を出歩いている事を知れただけでも収穫があつたといえる。街の様子を知る事。それは暮らす者達の事を知ろうとしているのだろうと考へたからだ。そのため、その表情は少し嬉しそうだつた……

(しんのすけ……ねえ)

孫策は先程会つたしんのすけの事で気になつた事があつた。まず名前。この大陸では珍しい呼び名である事がまず一点。次は去り際に聞いたばいばいとの聞いた事のない言葉。最後は自分の直感が反応した事。

保護者として現れた女性も自分から見て武人だろうと感じた事もあり、しんのすけへの興味が孫策の中で少しずつだが強くなつていったのだ。また会えるだろうかと思いながら孫策が歩いていると、視線の先に見慣れた顔があつた。

「祭？ ああ、今日は休みだつたつけ」

そこにいるのは祭　　黄蓋だった。孫策の宿将である彼女は孫策にとって家族にも近い。そんな彼女は酒屋から出て来たところだつたようで、手には酒が入っているだろう入れ物があった。

「祭！」

「ん？　おおつ、策殿か」

「何？　日も高い内からお酒？」

孫策がどこからかうようにそう言つと、黄蓋は大きく口を開けて笑つた。そしてこう言つたのだ。孫策だけには言われたくない。それに孫策も確かにと笑つて返す。だが、その話はそこで終わった。あまり言い過ぎると一人して苦手としている相手の事を思い出しそうだと、そう無言の内に感じ取つたのだ。

そこから話題を変えて話す二人。その話題は孫策が先程会つたしんのすけの事だ。色々な意味で気になる子供だったとの言葉に、子供が苦手な黄蓋も興味を持ったのか詳しくと告げると、孫策は視線を酒瓶へ向けて不敵に笑つた。

「むう、いいでしょ。ただし、内容によつては新しい物を買って頂きますぞ」

「やつたあ」

孫策の言いたい事を理解し、黄蓋はやや悔しそうにそつ告げる。それに孫策は嬉しそうな笑みを見せて口笛を吹き出した。その子供のような振る舞いに黄蓋は少し呆れながらも、どこか好ましく思つ

て笑みを浮かべる。それは、ビートル母のよつとも見える笑みだった

……

宿に着き星は荷物を置くと、早速とばかりにしんのすけとシロを伴って街へ戻った。向かう先は宿の主人から聞いた食事処。そこで食事がてら情報収集を考えたのだ。集める情報は鏡と孫策の事だ。相手が街を出歩いているのは知つた。なら、どこか良く現れる場所でもあればとそう考えたのだ。しんのすけを連れて行けば、もしかすれば話を出来るかもしない。そう思ったのもある。

「孫策殿ともう一度会えるといいのだが」

「お？ そー やくお姉さんに会いたいの？」

「お前……たては私の本来の旅の目的を忘れたな？」

星のその言葉にしんのすけは忘れていないと返した。だが、孫策が世の中を救つてくれるのかと問い合わせたのだ。それに星はそれを見極めるために会いたいのだと告げる。

そうして、星は昼食を食べるための店に入つて思わず言葉を失つた。そこには孫策と黄蓋がいたのだ。しかも酒を飲んでいるらしく、表情は楽しそうだ。それを見てしんのすけが声を上げて孫策を指差した。

あー、そー やくお姉さんだ！

それに孫策達も振り向いてしんのすけ達を見た。孫策は意外そうな表情をした後、笑みを浮かべて手を振った。

「あら、また会つたわねしんのすけ」

「ですなあ。オラとおねいさんは赤い糸で結ばれてるのかも～」

嬉しそうな表情で孫策へ近付くしんのすけ。その物言いに黄蓋が少し驚き、納得したかのように頷いた。孫策に聞いていた通りの奇妙な印象を受けたからだ。子供が物怖じしないと知っていても、ここまで軽々しく口を利いてくる事には驚きを禁じ得ない。

この街の子供達でさえ、孫策にこんな事を言つたりはしないのだ。黄蓋がそんな風にしんのすけへ驚きを感じていると、星がそんな彼女へ近付いて一礼した。

「失礼。私は旅の者でしんのすけの面倒を見ている趙雲と申す者。しんのすけは故あって幼くして親と別れたため、以来私と旅ばかりしてあるのです。それ故奔放になつたはいいのですが、あまり礼儀を知らぬ子になつてしまいまして……」

「そうか、幼くして親と……いや、分かつた。趙雲とやら、そなたも大変じやつたろう」

星の嘘ではないが眞実でもない説明に黄蓋は納得した。基本礼儀を教わるのは周囲から。だが、旅の日々ではそれも中々身に着かないだろうと。それに礼儀を知らぬとしても、子供だと思えば仕方ない。そう思い、黄蓋はしんのすけへ視線を向けた。

孫策相手に口説き紛いの事をしている彼を見て、黄蓋は呆れた。実際に板についていたからだ。その彼女の視線にしんのすけも気付いたのか顔を動かした。絡み合う二人の視線。するとしんのすけが黄

蓋を見て一際大きな声を出した。

「おおっ！ おねーさん、スゴイボインだ！」

その言葉に星以外が疑問符を浮かべた。何を言つたのだろ？
星はそんな周囲に気付き平然としんのすけへ注意した。

「ひらしんのすけ。あれ程異国の言葉を使うなど書つただろう？」

「え？ ……あ、ほこ。」めんくわい

星の視線が黙つて頷いておけと言つてゐるよつに思え、しんのすけはそう返して頭を下げた。一方孫策は星の書つた単語に反応を示した。

「異国の言葉？」

「ええ。しんのすけの父はどうも学者だつたらしく、異国文化を調べていたようなのです。それで、時々異国の言葉を無意識に使つてしまつて……おそれく幼い頃に聞いていたためでしょ？」

「やうか。となると正しい意味は分からんのか」

星の説明に感心したような表情を見せる孫策と黄蓋。その疑問の言葉に星は頷いて、本人も感覚で言つてゐるのでと告げた。だが、何となく状況から大きいと言いたかったのではないかと告げた。

それにしんのすけもそんな感じと返し、黄蓋は納得したように頷いた。しかし何故か一度自分の胸へ目をやり、しんのすけへ再度視線を向けると愉快だとばかりに笑つた。

「小僧、お前は儂の乳を見て驚きよつたか」

「だつて、オラそんなにおムネ大きい人初めて見たもん」

「わつはつはつは！ 正直な奴じや。ん？ そういえればお主、先程儂の事をお姉さんと言いおつたか？」

「そーだよ？」

何故そんな事を聞くのだろう。しんのすけはそう思つて黄蓋を見つめる。すると、黄蓋は嬉しそうにまた笑い出し、しんのすけの頭へ手を置いて告げる。自分はもつかなりの高齢なのだと。しかし、それを聞いてもしんのすけは信じられないとばかりに小首を傾げる。黄蓋はどう見ても綺麗なお姉さん。そうとしかしんのすけには見えなかつたのだ。それが母であるみさえ以上の年齢だと言われても、納得出来るはずがないのだから。そんなしんのすけの反応に好ましいものを感じる黄蓋。世辞などではなく、本心から言つていると分かつたからだ。

「中々見所のある奴じや。それにしても、まあ驚くのが胸とはのつ。その歳で男として目覚めておるのか？」

「え？ オラ、寝てるみたいに見える？ ほーら、ちゃんと起きてるぞ」

黄蓋の問いかけにしんのすけは意味が分からないとばかりにそう返して、自分のまぶたを指で広げて見せた。それに黄蓋は呆気に取られてから笑い出す。更に孫策と星だけでなく周囲の客達も笑い出した。そんな笑い声の響く中、しんのすけだけは状況がよく分からぬが楽しそうに笑うのだった……

あれから一人に星が自己紹介をし、しんのすけは黄蓋の名を聞いて「一かいさんと呼ぶ事にした。その呼び方に黄蓋がどこか嬉しそうな表情を見せた。

本当ならばそこにお姉さんとの呼び方が続くはずだったのだが、その呼び方は恥ずかしいので止めてくれと黄蓋が頼んだためにそうなった。ちなみにそんな彼女の様子を見て、孫策は密かに笑つていた事を記す。

そして二人と共に食事を済ませたしんのすけ達は、妹に会わせてみたいとの孫策の思いつきにより彼女の城へと招かれていた。だが、孫策は城門前に潜んで待ち構えていたお団子で髪を纏めた鋭い目つきの女性に連行された。

抵抗しようとした孫策だが、その女性が何事かを耳元で囁くと頃垂れたように大人しくなり、しんのすけ達へまた後でと告げて疲れたような表情のまま城の奥へと消えていった。黄蓋はそれに苦笑しながらしんのすけ達を案内するよう歩き出したのだ。

「先程の者は甘寧と言つてな。権殿 つまり孫權様の傍付きのような役目も負つておる」

「孫權殿ですか。確か孫策殿の妹君でしたな。成程、それであの身のこなしを」

星は少しだけだが見た甘寧の動きを思い出し、感心したように頷いた。護衛をするために気配を殺す術を身に着けているのだろうと

思つたからだ。それを察したのか黄蓋も嬉しそうに頷くが、まだまだ未熟よと言うのを忘れなかつた。だがその声はどこか嬉しそうだつたので、星はさつと黄蓋由慢の者なのだらうと思つた。

しんのすけはそんな会話を聞き、自分が見た甘寧の感想を黄蓋へ告げた。

「あのお姉さん、スゴク速かつたぞ。オラ、いつ出て来たか分かんなくてびっくりした」

「ははは、それは当然じや。お前に見えるよつでは孫家の武将とは言えん」

「あんな事出来る人、他にもいる?」

「やうじやな。もう一人あるぞ」

「おおつー。スゴイね!」

しんのすけの素直な驚きに黄蓋は楽しそうに笑う。その会話で出て来た孫家との響きに星はやはりと思い、内心である予感を強めていた。それは、この孫策達がいつか独立するだらうといつもの。

袁術の密将で燐り続けるはずはない。もし仮にそつなら、わざわざ孫家などとは言わずただ武将と言えばいいはずだ。それに孫策自身の器や黄蓋の雰囲気、そして先程の甘寧の動き。星から見ても天下を狙えるだけのものがあると思わされた。更にこれから出会う孫策の妹達も孫策に負けず劣らずの器であったのなら、それは確實といえるだらう。そんな風に考え、星は歩く。

一方、しんのすけはシロを抱えて城の廊下を歩きながらキヨロキヨロしていた。この城に入つた時から何か妙な声が聞こえていたのだ。だから黄蓋へあんな事を聞いたのだが、ふとしんのすけは足を止めた。その聞こえてくる言葉を信じてある事を試そうと。

シロはそんなしんのすけを見上げた。星と黄蓋はそのまま歩き続けているので、シロは声を掛けて追いかけよつと告げる。だが、しんのすけはそれに構わずシロを下に置いて誰にでもなく告げた。好きに触つていいよと。だが、当然何も起きない。なので、しんのすけはなりぱとシロへ告げる。

シロ、わたあめ。

くうへん……？

疑問に思いながらも体を丸めるシロ。その瞬間、突然そこに何かが現れた。

「はうあ！ 可愛いのです！ もふもふなのですー！」

「あ、やつぱり誰かいた」

しんのすけがシロを抱えて歩いている途中、たまに聞こえていたのだ。誰かが微かな声でもふもふしたいと言つているのを。最初は空耳かと思ったのだが、あまりにも聞こえてるので試しにとシロのわためをやってみせる事にしたのだ。

黄蓋に聞いた言葉もその判断を後押しした。甘寧のよつと姿を消す事が出来る者がいる。もしかしたらそれが自分の聞いてる声の相手かもしれない。結果は、覧の通りだったという訳だ。

「はううううう

シロを抱え、満足そうに表情を緩める黒髪の少女。それを見てしんのすけは頷いて問いかけた。

「ね、満足した？」

「え……？　はうあー！？」

しんのすけの声に我に返ったのか、少女は驚くとびくつと体を震わせた。だがそれに構わずしんのすけは再度問い合わせた。満足したのかと。それに少女は戸惑いながらも頷き返す。しんのすけはその答えに納得したように頷いて、次の質問を出した。

「お名前は？　オラ、野原しんのすけ。名前がしんのすけであざなはないぞ」

「あ、えつと……私は周泰。字は幼平です」

「ほへほへ、しゅーまいかあ。おいしそうですね」

周泰の名を聞き間違えるしんのすけ。その名前は普通人には付かないとは考えない。しかし、周泰はしんのすけが自分の名前を間違えたと気付き、やや慌てるように指摘する。

「え？　あ、いえ、周泰です」

「あ、そりなんだ。間違えて！」めぐれっこ。えつと……なら、しゅーちやんでいい？」

「周ちやん？　えつと、それは私の事ですか？」

しんのすけの呼び方にどこか意外そうな顔をする周泰。それにしんのすけは頷いた。駄目なら別のを考えると。それに周泰が理由を尋ねる。しんのすけはこっちの名前は難しい物が多く、間違える事が多いので簡単な呼び名を付けさせてもらつていると返した。

それに周泰も納得し、ならばとその呼び名を許可した。と、そうなつたところでそこへ星と黄蓋が現れた。ふと気がつけば、しんのすけがいなくなつたため捜しに来たのだ。すると一人は周泰の姿を見て同じように軽い疑問を抱く。星は単純に誰だらうとのもの。黄蓋はどうしてここにといつものだ。

「明命、何故お前がここにいる？」

「あの……実は先程仕事から戻つて参りました、そこでこのお犬様を見てしまい……」

少々言い難いそうに周泰はそう告げた。黄蓋はそれだけで事情を察して呆れたように息を吐いた。周泰は猫に目がない。そして同じように可愛らしい物に弱いのだ。そう、周泰は綿のようなシロを見て一目で虜になってしまった。それこそ任務の結果報告を忘れて追い駆ける程に。

黄蓋はそんな周泰へ叱りつけるかと思つて声を出さうとした瞬間、しんのすけがそれを遮るように手を発した。

「お犬様じゃないよ。シロだぞ、しゅーちゃん」

「え？」

「シロってお名前で呼んであげて欲しいぞ。な、シロ？」

「キャンー！」

しんのすけの声に応えるよつこシロは周泰の腕の中で元の姿に戻つた。周泰は綿のような状態では無くなつた事に少しだけ残念な顔を見せるも、すぐにシロが頬を摺り寄せてきたので再び嬉しそうに笑みを見せた。それには黄蓋も叱る気が失せた。

何せ、心から幸せそうな笑顔なのだ。そんなものを見て怒りを抱ける程、黄蓋は鬼ではない。しかも、これが仕事中などであればその限りではないが、今は仕事を終えた状態。なら多少は大目に見てやろうと考えたのだ。

「シロは大人しいのですね……」

「そうだよ。あ、しゅーちゃん。良かつたらシロのお友達になつてくれない？」

「いいのですか？！」

「おおっ！？ しゅーちゃん、ちょっと驚き過ぎ！」

思わず身を乗り出す周泰。それにしんのすけは若干驚いて距離を取る。それに気付いた周泰は少し恥ずかしそうに顔を赤めた。そして、一言謝り頭を下げた。それにしんのすけはそこまで気にしなくてもいいと告げ、シロへ視線を落としてからその頭を撫でる。

「それと、オラともお友達になつてくれると嬉しいぞ」

「お友達……はい、喜んでつーへえつと、しんちゃん、シロ、これからよろしくです！」

しんのすけの申し出は周泰にとつては嬉しいものだつた。彼女は本当は猫の方が好きなのだが、それに嫌われてしまつ事が多い。だが、シロはそんな自分が何をしても嫌がらずにしてくれる。しかも飼い主であるしんのすけと友人になれば、そのシロと遊ぶ事が簡単に出来るようになる。

それに、武将である自分と初めて友達になろうと子供に言われた事が嬉しかつた。そのため、周泰は笑顔でしんのすけとシロへ返事をする。それにしんのすけは頷いた。

「よひしへ

「キヤン」

しんのすけはそう言つて周泰へ手を差し出す。それに倣うようにシロも周泰へ前足を出した。それが握手を誘つていると理解し、周泰はその手で交互に優しく握つた。それを眺め星は黄蓋へ告げる。しんのすけは友人を作るのが上手いのだと。それに黄蓋は心から納得するように笑つのだつた……

一回任務の報告に行く周泰と別れ、しんのすけ達は黄蓋の案内である部屋の前まで来ていた。そこに孫策が会わせよつと思つた妹がいるらしい。黄蓋は扉の前に立つとそこから中へ声を掛けた。

「小蓮様、策殿が会つて欲しい者達がいると言つておりましてな。今、ここにその者達を連れて参りました」

孫家の末娘の彼女は、姉達に会いたくてお忍びで遊びに来ていた。まあ、彼女だけならいざ知らず、かなり目立つ存在を伴つて連れて来たため、それを姉達に叱られたので「ひして城に軟禁状態となつている。

それを思い出し、孫策はしんのすけを彼女に会わせようと思つたのだ。自由奔放な性格で子供らしさも残す彼女。ならば、しんのすけと会う事で友人にもなれば。そう思つたのだ。

「雪蓮お姉ちゃんが？ ふーん……じゃ、入つてもうひとつ」

丁度退屈だつた事もあり、少女は気晴らしになるかと思つて返事をする。その返つてきた声にしんのすけと星は同じ感想を抱いた。鈴々や許緒と同じぐらいの年頃だつた。

黄蓋が部屋の扉を開け中へ入る。それに続くようにしんのすけ達も中へ入ると、そこには孫策と同じ髪の色をした少女がいた。褐色の肌で背丈的にも鈴々と同じぐらい。しんのすけはそんな彼女を見て反射的に告げた。

「おー、かわいいけどワガママママそつ。

それに全員が呆気に取られた。だが、黄蓋はすぐに立ち直るとおかしくて仕方ないとばかりに笑い出し、星は笑いこそしないが中々言い当てるかも知れないと思い、内心苦笑していた。当の言われた本人はその評価にわなわなと震え、しんのすけを指差して叫んだ。

「そんな事ないもん！ シャオは結構頑張るもんっ！」

更にそこから続けてこう言った。孫家の姫である自分を捕まえて可愛いと言つのはともかく、ワガママそつとは許せないと。それに

しんのすけが一度程餓を、更に叫びた。違つなり怒りなければいいと。

「ムーフー、あんた、初対面のくせに失礼にも程があるわよ」

「それほどでも~」

「ちょっと、褒めてないんだけど~。」

「あ、そりなんだ」

「そりなんだって……普通分かるでしょ？ も~、何か怒ってるシヤオが馬鹿みたい……」

「お？ よく分かんないけどお元気出して」

「誰のせいでいつなつたと思つてゐるのよ……」

そう言つてため息を吐いて頃垂れる少女。それに「めんくさい」と頭を下げるしんのすけ。そんなしんのすけの態度に面白さを感じる少女。それによくよく考えればしんのすけは自分を馬鹿にしてる訳ではないと気付いた。

だからだろうか、どこかでこのやり取りが楽しく思えた。それに比例するように怒りも消え始めたので、目の前にいる少年の事を知りうつと考えた。何せ姉が会つてみると連れてきた相手なのだ。

「ま、いつか。えっと、あなたの名前は？」

「野原しんのすけ。名前がしんのすけであざなはない」

「ふうん、しんのすけって言つんだ。変わった名前ね」

「みんなそーゆー。で、そつちのお名前は？」

孫家の姫を相手にしていると思えない程の態度。それにしんのすけの事を何も知らない少女は、彼は胆が太いのだと感じた。それと同時に自分を特別扱いしない事に好感を覚えた。

それはどこかで自分が友人に望んでいた態度。そう、友達が出来るのならこんな風に接して欲しい。そんな風に思つていたからだ。そこには、幼い頃から見てきた姉とその親友の姿が大きく影響している。

「シャオは孫尚香つて言つの。字が無いのはあんたと同じ。そうね……尚香つて呼んでいいわ」

「ショーリー？　ひめちゃんじゃダメ？」

「姫ちゃん？　どうして？」

「だつて、お姫様なんでしょ？　その方が覚えやすいし、可愛いぞ」

「成程……それもそつか」

しんのすけの告げた理由に理解を示し、尚香は笑みを見せて頷いた。それに、もう一つ尚香にはその呼び方を許す理由があった。それは、その呼び方が親しみを込めるためにつける愛称のようだ。たからだ。

そして尚香は、何故姉の孫策がしんのすけと会わせようとしたのかを自分なりに考えていた。自分の友人を作つてあげようとしたのではないかと。孫吳の姫である尚香には、当然ながら対等の関係で

接する友人などいない。姉である孫策には、幼い頃からの親友である周瑜がいる。もう一人の姉である孫權には、臣下として分を弁えているが友人のように支えている甘寧がいるのだ。

それを考えた時、自分にはそんな相手はいない事に気付いた。なのでそれを不憫に思つた姉が、市井の子供の中から自分に物怖じしない者を連れて来たのではないかと、そう尚香は考えた。

自分が姉達と共に暮らす日はまだ先だが、その時が来ればしんのすけとも仲良く遊んだり出来るだろうかと思つ尚香。その表情は少し嬉しそうに笑みを浮かべていた。

(えへへ、シャオにもお友達が出来るなんてね。雪蓮お姉ちゃんに後でお礼言つておこう)

「じゃ、しんの……ちょっと待つて」

「どうしたの?」

しんのすけへ呼びかけようとした尚香だったが、何かを思い出したように考え始めた。しんのすけはそれに不思議そうな声を返す。すると、尚香は一人納得するように頷いてこう言つた。

シャオが姫ちゃんだから、そっちはしんちゃんね。

あ、そんな事か。ほーい。

自分が親しみをもつて接しようと思つて告げた事に対するしんのすけの素つ氣無い返事。尚香はそれにどこか不満そうだが、しんのすけの性格をどこか理解したのか文句を言う事無く遊ぶために部屋の外へと出て行く。勿論しんのすけを誘つて。しんのすけはシロも

一緒に遊んでもいいかと尋ね、それに尚香は即答で許可を出す。

「ハしてしんのすけと尚香はシロと共に部屋を出て中庭へと向かって走り出す。その遠ざかる声を聞きながら、星は黄蓋へ視線を向けた。孫策に負けず劣らず自由奔放だと感じたためだ。すると、黄蓋もそう思つてゐるのだろう。互いに微笑みを見せ合い、二人は同時に笑く。

孫家の姫らしい御方だ。

そんな事を言われているとは知らず、尚香はしんのすけとシロへ自分の大事な家族でもあり友人もある者達を紹介していた。それは、パンダの善々とホワイトタイガーの周々だつた。それにしんのすけは恐怖するのではなく心から驚き、それに易々と乗つたり出来る尚香へ憧れるような眼差しを送つた。

シロは若干怯えていたが、一頭が敵意がない事を察してゆっくり近付きその手を舐めた。それに一頭も応じるようにシロへじやれるような接し方をしたのだが、やはり体格差のためかシロはどこか怯えたままだつた。

ね、ひめちゃん。オラも乗せて乗せてー

いいけど……周々に変な事しないでよ。

ほい。

その後、しんのすけはやや怯えるシロを尻目に、尚香と共に見事周々へ乗りご満悦だつた……

そのまま中庭で尚香達と遊んでいたしんのすけとシロだったが、そこにある者達が現れてそれを中断する事になる。それは一人の女性だ。

「ん？ あれは……シャオか」

「そのようです。傍にいるのは先程お話をした子供のようですね」

甘寧の言葉に女性は領き、視線を中庭へと戻す。そこで周々に乗つて何かを話しているしんのすけと尚香へ大きめの声をかける。

「シャオ、そこで何をしているのだ？」

「あ、蓮華お姉ちゃんだ」

「お？」

突然掛けられた声に尚香が反応し、しんのすけもそれにつられるように視線を動かす。そこには孫策や尚香と同じ髪色をした女性がいた。そしてその背後には孫策を連行した甘寧の姿もある。

だが、しんのすけはそれに構わず素早い動きで乗つっていた周々から降りると、蓮華と呼ばれた女性へ向かつて駆け寄った。その動きに尚香達は驚きの表情を浮かべる。唯一甘寧だけはそれに嫌な物を感じて、女性の傍へと近寄った。

「おねいさんのはひめひやんとそーわくおねいさんの家族？」

「そ、そーやく？　あ、雪蓮お姉様の事か。そつだけど……」

にやけた顔で自分を見上げる子供といつ異様な光景に、女性は普段の口調ではなく素の口調になつてしまつ。それに構わず、しんのすけはそのだらしない表情のまま頷いて、一際嬉しそうに言つた。

あはー、おねこさんもびじんさんだ～。

それに女性はどう反応を返せばいいのか戸惑つ。褒めてくれてありがとうと喜べばいいのか、なれなれしいと怒るべきなのかと。相手は子供。だが、自分は孫家の姫だ。

そつ思えど、やはり一度叱るべきか。そんな風に考える女性だったが、その相手であるしんのすけが突然何かに気付いたのか、視線を女性からその横辺りへ動かした。

そこにはやや鋭い目つきをした甘寧がいた。その表情はどこか怒りを秘めているように見える。

「お姉さん、わしあそーとくお姉さんを連れてつた人だよね？」

「やうだ。お前の事は雪蓮様から聞いている

甘寧の言葉にしんのすけは頷く。そこへ尚香もシロを抱えて近付いてきた。周々と善々もその後ろに控えるよつこーる。

「ね、しこひやんの事を雪蓮お姉ひやんは何て言つてたの？」

「はつ、礼儀知らずで異国の言葉を使つ事もある奇妙な名前の子供だと

甘寧の説明に疑問符を抱いたのだろう者達の声が返つてくる。しかし、何故かそれは二つではなく三つだった。

「「「異国の言葉?」」」

「お二人はともかく、本人のお前が問い合わせるな

「おおっ! 今のオラの事だつたのかあ。てつきりシロ辺りの事かと……」

「どうして犬の事を話さねばならん。それに犬は喋らんだろうが」

少しずつではあるがしんのすけの態度に怒りを強めていく甘寧。それを感じ取り、尚香がしんのすけの耳元へ口を寄せ軽く注意する。怒らせると厄介な相手だから少し大人しくした方がいいと。その忠告に頷き、しんのすけは甘寧を黙つて見つめた。

甘寧には先程の尚香の忠告が聞こえていた。だが、それを一々取り合つていては仕方ないと想い、何も言わずにしんのすけを見た。女性は、甘寧の鋭い視線を正面から受けてもこれといった反応を示さないしんのすけに違和感を抱き、それを問いかけた。

「お前は思春の睨みが怖くはないのか?」

「お? ししゃ……つと、危ないぞ」

孫權の告げた名を尋ねようとしたしんのすけだったが、視界の中に映る甘寧の視線が鋭くなつたのを見てある可能性を思い出し、何かと思い止まつた。それを聞いて甘寧が小さく頷き、孫權はしんのすけが自分達の名を知らない事を思い出した。

そして、もう少しどしんのすけが甘寧の真名を呼ぼうとしていた事にも気付き、彼がこの大陸の人間ではないのではと思った。珍しい名に真名と名の区別が瞬時に出来ない事などからだ。だが、しんのすけは孫権がそれを問いかける前に彼女の問いかけに答えた。

「えっと、母ちゃんの怒った顔の方がもっと怖いから」

「やうか……どうでも母は怖い者なのだな」

しんのすけの答えに女性はどうか懐かしむ田をして微笑んだ。それに尚香はやや寂しそうな表情をし、しんのすけがそれに気が付く。

「ひめちゃん、どうしたの？」

「え？ あ、何でもない。ねえ、それよりもしんちゃんのお母さんってどんな人？」

「オラの母ちゃんはみさつて言つて、お便秘に悩むおケチな主婦だぞ」

尚香がやや慌てるように誤魔化し、話題を変えようと返す。それを聞いたしんのすけは、彼女の反応を特に気にする事もせずに話し始めた。そんな中、孫権と甘寧は尚香の態度から何を考えていたのかを理解した。

特に孫権は妹が母の記憶をほとんど持たない事を思い出し、自分を軽く責めた。姉の孫策と自分は母である孫堅の事を覚えている。だが、歳の離れた妹である尚香はあまり共に過ごした思い出がないのだ。

戦に生きたと言つてもいい猛将だった孫堅。そのため、尚香が物

心つく頃は戦場を駆け回つてばかりいたのだかい。

(シャオには辛い事を思い出させてしまったわ。もつ少し氣をつけないと駄目ね)

そんな孫権の前ではしんのすけのみさえ話が披露されていた。その実の親をけなす発言を平氣である事に驚く三人だったが、その内容に次第に孫権と尚香の笑みが増えていく。

しんのすけがうんざりしながら語るお仕置き関係は、聞いているとくすりと笑える物からあまり笑えない物まであり、どれ程彼が問題行動をしているかを教える事になつた。甘寧はそんな内容に呆れるしかなかつたが。

だが、根底にあるしんのすけの母への思慕も伝わつたのだろう。最後には尚香や女性だけでなく、甘寧さえもどこか穏やかな表情をしていたのだから。

そんな話を終えて、しんのすけは忘れていたとばかりに女性と甘寧へ視線を向けて自分の名を告げた。それは相手の名前を聞くための行為。相手の名を聞く時は自分の名を名乗る事。それが基本だとこの大陸に来てから、しんのすけは自然と身に付けたのだ。

案の定、女性はしんのすけの名に珍しいと反応を返し、甘寧も確かに聞いた事がない名前だと同意した。そして、聞いたのだからと女性がしんのすけへ名を名乗り返す。

「私の名は孫権。字は仲謀だ」

「名は甘寧。字は興霸」

「えっと、つんけんお姉さんにかんでんお姉さんか。じびれそうだ

ぞ」

孫策の名前を間違えて覚えているしんのすけは、見事なまでに一人の名前を間違えた。それを聞いて思わず笑ってしまう尚香。一方孫権は苦笑し、甘寧は怒氣を漂わせる。

それすぐさま感じ取り、しんのすけは自分がまた間違えたと理解した。しかも、今回はかなり怒らせてしまったとも。なので、いつも以上に誠意を以つて謝罪の意を示した。

お名前間違えてごめんなさい。お願ひだから、間違えないようにもう一回お名前聞かせて欲しいぞ。

その申し出に甘寧は子供にしては丁寧な対応だと思つたのか、先程までの怒氣を消した。そして、もう一度ゆっくり名前を名乗る。それを聞いてしんのすけが甘寧の名を完全に理解した事を確認し、彼女は小さく頷き次はないと告げた。

それに苦笑いを浮かべる孫権だったが、自分の名も間違えている事を教えて正しく呼んでくれともう一度名を告げた。尚香は不敵な笑みを浮かべるも何か言つ事はない。それが甘寧にはどこか納得出来ないものだつたが、事を荒立てるつもりはないとばかりに無言を通した。

そんな風に三人が落ち着いたのを見計らい、しんのすけが孫権へこう切り出した。

ね、じゃあお姉さんの事をけんのお姉さんって呼んでもいい?

そのしんのすけの言葉に甘寧が若干眉を顰めるが、孫権がそれを抑えて理由を聞く。孫策と姉妹なら策と権で呼び分けたい。そう夏侯姉妹の名を例に挙げて告げると、それに三人が驚きを見せた。

「お、お前は夏侯姉妹と知り合いなのか？」

「そーだよ。もつちゃんともお知り合い」

「もつちゃん？」

「まさか、曹操の事か？」

しんのすけの告げたもうちゃんとの呼び方に首を傾げる孫權。だが、甘寧はどこか違つていて欲しいと思いながら予想される名を告げた。それにしんのすけが平然と頷くと三人は一際驚いた。

黄巾の乱で首魁張角を討ち取った英雄。それを子供がもうちゃんと呼んでいる。それが三人に与える衝撃は大きかった。本人はそこまで感じていないのだろうが、他の者がそんな呼び方をすればどうなるかは容易に想像がつく。子供だからとはいえそんな呼び方を許可した事が意味するのは、曹操がしんのすけを周囲に比べ優遇しているとしか思えなかつたのだ。

「お前は一体何者だ？」

「オラは野原しんのすけ。ビートでもいる五歳児だぞ」

「お前のような子供がどこにでもいてたまるか」

純粹な疑問をぶつける孫權。それに返したしんのすけの答えに甘寧が即座に突つ込んだ。そこには、曹操の事だけではなく孫權に向けた邪な視線なども関係している。

それを知るはずもない孫權と尚香はそれに苦笑した。言われた本人は甘寧の言葉に特別扱いされたと感じて、嬉しそうに反応を返し、

それにもう孫権と尚香が笑う。

「それにしても……けんのお姉さんに聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

しんのすけの問いかけに不思議そうな表情を返す孫権。しんのすけは視線をその頭部へ向け、指差した。そこには彼女独特の髪飾りのような物がある。ハンガーのように見えるそれが、しんのすけには気になつてしまふがなかつたのだ。

「それ、スゴイね。重くない？」

「これが？ まあ確かに多少は重いが気になる程ではないぞ」

「ほーほー。で、おいくらですかな？」

「ん？ 値段を聞いてどうするのだ？」

「何となく聞いてみただけ。でもそれ、オラだつたら首の骨折りそうだぞ」

「あははは。確かにしんちゃんは無理よ。お姉ちゃんだつて重いつて感じるんだし」

「こほん。シャオの言つ通りお前には辛いと思つぞ。それにしても……何となくで聞くのが値段か。本当に変わつているな」

楽しげな尚香と苦笑する孫権。しんのすけはそれにやけた笑いを返す。そんな彼にやや不機嫌な眼差しを向けている者がいる。甘

寧だ。

(「こつ、蓮華様に対しても馴れ馴れしそぎる。だが蓮華様自身が気になさつてない事を私が言つ訳にも……」)

しんのすけの態度に複雑な考えを浮かべる甘寧。すると、しんのすけが甘寧の方へ視線を向けた。ぶつかり合つ両者の視線。だが、しんのすけは何事も無かつたかのようにこいつ眞つた。

ねえ、かんねーお姉さん。どうして髪下ろさないの？　そしたらもうどびじんさんだぞ。

その言葉を甘寧はたつた一言邪魔になるからだと一蹴。だが、それにしんのすけは不思議そうに首を傾げた。ならばどうして切らないのかと返したのだ。すると、珍しく甘寧が少しだけ言葉に詰まつた。尚香と孫權はそんな甘寧に意外な表情を浮かべた。

甘寧はそれに気付いたのか、やや早口でこいつ返した。短く切るとまた伸びてきた時が鬱陶しく感じる。なので、ある程度髪が長いと伸びる速度が遅くなる事を利用し、いつも同じ長さで調整しているのだと。それにしんのすけは感心したよつて声を上げた。

「おー、そりなんだ。オラ知らなかつたぞ」

「そりが。なら、これで少しさは賢くなつたな」

「ほい。あ、教えてくれてありがとござります」

「……礼はいらん。そんなつもりは無かつたからな」

素直に頭を下げるしんのすけに甘寧はやや面食らつたものの、そ

う返した。礼儀がなつてないと思いや、他愛もない知識を教えてもらつた事にちゃんと礼を述べたのだ。その意外さに甘寧も少しだけ感心したのか、声には驚きが微かに混ざつていた。

そんなやり取りをし、尚香はシロをしんのすけへ返して部屋と戻つた。孫権が遊んでばかりいないで勉強をしろと言つたためだ。尚香は下手に抗うよりも従つた振りをした方がいいと考えたのだろう。それを見送り、孫権はしんのすけへ尚香と仲良くしてやつて欲しいと姉らしい言葉を掛け立ち去つた。当然甘寧はその後を追うのだが、その前にしんのすけへ一言劃こ残した。

蓮華様に邪な目を向けないよひにな。

よひしまはダメ？ ならたてしまならいいの？

その声に微かに警告めいたものを混ぜる甘寧だったが、それにしんのすけが気付くはずもなく平然とそつ返した。その言葉に呆れる甘寧だが、そういう事ではないと告げるとそれ以上何も言わず孫権の後を追つた。

時間の無駄だと踏んだのだろう。なので孫権とあまり離れない事を優先したのだ。遠ざかる甘寧へ手を振つて見送るしんのすけ。シロはそんな彼へため息を吐いた。ちやんと言われた事を理解しないとthoughtたからだ。

誰もいなくなつた庭で、しんのすけはシロへ視線を落としてどうするかと問いかける。それにシロは尚香の部屋の方を指差す。そちらへしんのすけが視線を向けると、星がじりりへ向かつてくねところだつた。

「あ、星お姉さん」

「尚香殿が戻ってきたのでな。勉学の邪魔にならぬよつこと部屋を
出て来た」

星はやつとてしんのすけを誘導するよつに動き出す。どうも孫策がしばらく動けそうにないので宿に帰る事にしたらしい。その旨を共に部屋を出た黄蓋に伝えたのでまた明日にでも来ればいい。星はそう言つて歩く。しんのすけはそれに頷き、シロと共に歩き出す。だが、しんのすけ達が城から出ようとした時だつた。後ろから呼び止める声が聞こえたのは。それに振り向くしんのすけ達。そこには息を弾ませた孫策がいた。

「ちよつと待ちなさいよ。挨拶も無しに帰るとは酷くない？」

孫策はやつとて少し怒りを見せる。どうも黄蓋がしんのすけ達が帰ろうとしている事を話したのだろう。だから急いで現れたようだ。星はやつ判断し、孫策へ氣後れする事もなく言葉を返す。

「無論挨拶に行こうとは思いましたぞ。しかし黄蓋殿が言つこは、おそれらく周瑜殿に見張られ仕事中だらうから今は行くだけ無駄だと」

「やうなんだ。あれ？ ジヤ、さくのお姉さんお仕事は？」

「クウ？」

星の言葉にしんのすけが納得がいったと頷き、ふと浮かんだ疑問を問いかける。シロもそれに続くよつに首を傾げて孫策を見つめる。そんな一対の視線に孫策が小さく呻く。

そう、彼女はある目的のために仕事を放棄してここへ來たのだ。そんな孫策の反応から星は逃げてきた事を悟り、不敵な笑みを浮か

べた。そして孫策の後ろを見て何かに気付いたように告げたのだ。

あ、周瑜殿が！」

「！？ って、騙されないわよ。

その言葉に驚愕の表情を浮かべた孫策だったが、それも一瞬だつた。すぐに不敵な笑みを浮かべそう告げたのだ。しかし、一応それとなく振り返つて確認するのを忘れない。無論そこには当然ながら誰もいない。そして、二つ指摘した。星が周瑜の顔を知らない事を。

（やはりこんな子供だましでからかうのは無理か……）

内心ため息を吐くも、こんな見え透いた手をする自分も自分かと思ひ、星は苦笑するしか出来ない。星はそのまま孫策に「冗談が過ぎたと謝罪してきたので、彼女としてもこの件に関してもあまりきつく言う事は出来なかつた。

「それにしても……趙雲、あなた中々面白いじゃない

「そうですか？」

「私を引っ掛けようとした事が十分面白いじゃない。惜しいなあ。母様が生きていれば將にでも取り立ててくれそうなのに

「ほつ。孫堅殿は流浪の私をしてくれるのでしょうか」

「多分ね。祭とあれだけ飲み交わす事が出来るし、私の勘が告げてるの。あなたがかなり強いだろ？って」

楽しそうに会話を交わす一人。だが、孫策の目がやや鋭くなっている。星はそれが武人ではなく猛獸の類に近いと感じ、虎の娘も虎かと思っていた。星の考えが分かつたのか、孫策も嬉しそうな表情を浮かべている。

そこから孫策は星へ一度手合させをして欲しいと告げるのだが、星としては正直どうするかを迷っていた。武人としては受けたい。だが、どこかで直感が告げるのだ。それは止めておけと。受けた事で何か自分の身が危険に晒されるような気がする。そう感じたのだ。

そんな風に星へ手合させを迫る孫策の後ろから一人の人物が現れた。しんのすけはそれに気付き、視線を動かした。そこにいたのは褐色の肌に流れる黒髪の眼鏡を掛けた女性だった。それにしんのすけが動き出すと、星はそれに気付いて止めようとすると、孫策が逃がさないとばかりに引き止める。

「ちょっと、私の誘いに対する答えは？　あ、もし良ければ私のところで働くかない？」

「いや、お誘いは嬉しいですし、応えたいとも思わないでもないのですが……」

「あら？　何か不満もある？」

孫策の目がゆっくりと細くなる。それに妙な威圧感を感じ、星はどうしたものかと思案した。下手な答えは要らぬ誤解を生みかねない。なので、丁寧に自分の旅の目的を話して理解してもらうのが一番と判断し、孫策へ語り出した。

一方、黒髪の女性は自分に背を向ける形で星と話す孫策を見た途端、大きくため息を吐いた。そして、冷徹な表情に変わり近寄ろう

としたのだが……

「へーー、そこの眼鏡のおねいさん。オラと一緒にお茶しない?」

その足元には、既ににやけ顔のしんのすけがいた。女性は見た事のない子供がいたために停止せざるを得なくなつたのだろう。そしてこの城にいる子供といつ頃で、彼女はしんのすけが孫策が連れてきた存在だと気が付いた。

「……お前がしんのすけか」

「あれ? お姉さん、オラの事知つてるの?」

「やはりそうか。雪蓮 孫策が連れてきたといつ話は聞いているからな」

その説明にしんのすけは納得したと頷いた。だが、すぐに女性へこう問い合わせる。名前は何と言つのかと。それに女性が教えようとして、何かを思い出したのか不敵な笑みを浮かべてどうして名乗る必要があるのかと尋ねた。ふと思つたのだ。孫策が変わった子供だと言つていたのを。それがどういう事かを確かめようと考えたのだるづ。

「オラはお姉さんのお名前知らないのに、お姉さんだけ知つてるなんであるござれ。お名前聞いたら教えるのがれーキじやないの。しつれーだぞ」

「ふむ、そうきたか」

意外にしつかりとした反論をすると思い女性は感心した。子供特有の感情混じりの言葉ではあるが、それでも屁理屈ではない。確かに相手の名を聞いて答えないのは礼を失する。さてどうしたものかと女性が考えると、しんのすけはそれに気付かずいつ続けた。

「それに、お姉さんが教えてくれないなら、オラが勝手に呼び方考えて呼ぶぞ」

「ほつ……どう呼ぶのだ？」

しんのすけの言つた言葉に少し興味が湧いた女性は、思考を中断してそう不思議そうに尋ねた。

「えつと……へき出し眼鏡わん

「なつ……」

「それか眼鏡のしつれーさん。後は……」

女性の要望に応えるようにしんのすけが告げる呼び名。それはとてもではないが許容出来るものではない。しかも、更にそれがエスカレートしそうだったので、女性がそれに気付いて止めるように言葉を遮った。

これ以上何かを言わせては、色々と厄介な事になりかねないと思ったのだ。何せ、少し先には孫策がいる。今の呼び名を聞いていれば必ず後でからかいで呼び始める事は請け合いだ。もしここでしんのすけの声が大きくなれば、確実に気付く。

「すまん。私が悪かった。名乗るからその呼び名は止めもらえるか？」

「お？　いいけど、だつたら最初から教えて欲しいぞ」

女性が急に素直になつたように思い、しんのすけはビック不思議に感じながらもそう言つた。それに女性は小さく苦笑。まさか子供にそんな事を言われるとは思わなかつたのだろう。中々良い性格をしている。そんな風に思いながら、女性は自分の名を告げた。

「私は周瑜。字は公瑾だ」

「ショーゆ？　変わつたお名前だね。じゃ、どこかにソースさんもいるのかな？」

「そうす？　何を言つていろか分からんが、私の名は周瑜だ」

しんのすけの言つたソースとの単語に周瑜は少し眉を動かすが、それをすぐに消して名前を再度告げた。それにしんのすけが頷いて片手を上げて口ひ返した。

「ほーほー。じゃ、分かりにくからしょーのお姉さんつてことで」

しんのすけがそう言つと周瑜は何かを言おつとしたのだが、それよりも早く何かが彼女へ抱きついてそれを阻止する。それは孫策。星は先程と同じ位置で安堵の息を吐いている。今まで孫策の妙な威圧感の中で説明をしていたのだ。それだけではない。説明が終わつた後も、ならせめて手合させだけでもと執拗に迫られていたのだから。

う。

そんな星を横目で見てだが、孫策の表情が楽しそうに笑つている。仕事から逃げていたために周瑜を警戒していたにも関わらず、孫策が

笑つていられる訳。それに周瑜は氣付いてやや暗めるような顔をする。

それを見て孫策が不敵な笑みに変わり、少しひ告げた。子供相手に文句を言わないと。それに、また間違えられるのとどうやらがマシと言われてしまえば、周瑜としても強く言い返す事は出来なかつた。しかし、すぐに氣を取り直して孫策へやや鋭い目を向けるのを忘れない。

「で、雪蓮？ 用を足しに行つた割には大分遠くまで来ているな」

「あー、ちゃんと戻つて続きをわよ。だからお説教は勘弁して」

「まつたく……いいだろ？。では早速戻るぞ」

「はーい。じゃ、またね。趙雲、しんのすけ」

ため息と共に歩き出す周瑜と苦笑いを浮かべてしんのすけ達へ手を振つてその後に続く孫策。それにしんのすけは手を振り返し、シン口も声を掛ける。星はそれを見送り、しんのすけへ自分達も宿に戻るぞと呼びかける。

それに返事をして走り出すしんのすけ。星はそんなしんのすけに笑みを浮かべ歩き出す。星の隣へ並び、しんのすけは速度を落として歩きへ変える。そして、先程の周瑜とのやり取りを星へ教えて笑いを取る。そんないつもの雰囲気のまま、しんのすけ達は宿へと向かうのだった……

「どう？」

「ああ。あれは間違いないこの大陸の者ではないな」

執務室へ向かう廊下。そこで孫策と周瑜はやや真剣な表情で話し合っていた。孫策の直感が感じたしんのすけへの警戒心。放つて置いてはいけないとのそれ。その正体を孫策はある昼食の際である程度察しつけたのだ。

異国の言葉を話す事。孫家の者である自分を相手にしても平然とし、礼儀などをあまりにも知らない事。そして、聞いた事のない姓と名。そこから少なくともこの大陸の者ではないのではないかと。それ故に彼女は自分の予想を周瑜に告げて、ある事を手伝つてもらう事にした。予想を確かめてもらおうと思つたのだ。

そのため、黄蓋から星の伝言を聞いた孫策は如何にも仕事を抜け出してきたように装い、しんのすけ達を呼び止め星を引き付けたのだ。しんのすけの行動をある程度知つた彼女は、周瑜が現れればそちらへ意識を向けて動くと踏んで。

自分は星を引き止め、しんのすけの方へ行けないようにした。そう、先程のようにしんのすけの言動を制御する事が出来ないように。そして周瑜は更にこう続けた。大陸の者だとすれば腑に落ちない点が多いと。

「そおすなどと書つ聞いた事のない言葉を話していた。趙雲とやらの話が事実としても、しんのすけの両親が調べていた異国とは五胡ではないな。あまりにも聞き覚えがなさ過ぎる。少なくとも西涼よりも西か、もしくは私達が未だ知らない国だろう。現実的にはかなり怪しいがな」

その言葉に孫策がどうしてと言つ顔をした。それはローマ辺りな

らば有り得る話ではないかとでも思つたのだろう。そう取つた周瑜はそれにこう答えた。

仮にそうだとしても、その情報を得る事は難しい上に確かめるにも時間がかかり過ぎる。更には、どれだけの資金がいるかも分からぬ。そう告げると孫策も納得したかのように頷いた。それを確認し、周瑜は最後とばかりにこう告げた。

「それに、お前が動いた直後に思春からも報告があった。しんのすけは思春の真名を言いかけたらしい」

それを聞いて孫策は成程と言うように頷いた。そして、周瑜はこう締め括った。もし仮に大陸の者だとするのなら一番の問題点がある。それは、真名で呼ばれている星がしんのすけの事を名で呼んでいる事。つまり真名がない事だ。

そこまで聞いて孫策はまさかという顔を見せた。だが、すぐに獲物を捕らえたような表情へ変わる。そのまま、孫策は周瑜へ問い合わせた。

「……そつか。じや、冥琳、結論を聞かせてもらえる？」

「お前と同じだと思つがな」

孫策の面白そうな声に周瑜も同じ声で返す。そして、二人は視線だけで頷き合うと同時に告げた。

しんのすけは天の御遣いだ。

- - - - -
孫吳編前半。次回は穏を絡ませて、それで現状の孫吳勢は全部です。

次回で孫吳編は終わり。そして蜂蜜姫にでも会わせます。

翌朝、しんのすけと星はシロを連れて街を歩いていた。朝食を食べるためになんだが、宿で聞いた店ではなく市場へと向かっていたのだ。昨夜は宿で聞いた店を利用したので、朝は自分達の勘を頼つてみようかと思つたのだ。

昨日孫策と出会つた場所を通り、様々な屋台が並ぶ所に出たしんのすけ達。色々な匂いが漂い、威勢の良い声があちこちから聞こえてくる。どこにしようかと星がしんのすけへ意見を求める。するとしんのすけは足元のシロへ視線を向け、どこがいいと尋ねた。

「キャン」

「あ、あそこだつて」

「ふむ、ならシロの選択を信じてみるか」

シロが声と共に動き出した屋台へ歩き出すしんのすけと星。シロは屋台の前で尻尾を振つていた。主人はその姿を見て一瞬野良犬とも思ったのか怪訝な表情をしたもの、首輪をしている事と後ろから現れた二人に気付き、そうではないと理解したようで一人頷いていた。

そこは魚介類を専門に扱うようで、今は大きめの貝を網に載せ焼いていた。そこへ魚醤らしき物を掛ける。それが貝から零れ独特の焦げる匂いを出す。それにしんのすけが食欲をそそられ、星も期待出来そうだと笑みを見せた。

「主人、まずはその貝を一つもらえないか。後、もしあれば犬用に何かもらえると助かるのだが」

「へい、分かりやした」

星の注文に主人は返事をすると小皿に焼けた貝を載せていく、同時に隣の屋台に声を掛けて豚の骨らしき物をもらつてきてくれた。それをシロへ与え、しんのすけは貝の熱さに苦戦しながら息を弾ませている。星はそれを見て笑みを浮かべつつ、貝を口に入れる。

その熱さに彼女もしんのすけ同様息を弾ませるもの、その味に頬が緩んでいた。一度噛むと貝の旨味とたれの旨味が混ざり、口中にやや癖はあるが美味しい」と言えるスープが溢れる。それだけではなく貝の身の甘さも感じるし、噛めば噛むほどにスープが出てくるのだ。それをしつかりと味わいながら、星はしんのすけと同時にそれを飲み下した。

「 「 …… つまいつ！」 」

「 ありがとうござこやす 」

二人して笑顔で告げた評価に主人は嬉しそうに笑みを返す。二人は貝殻に残った汁も啜り、頷いた。この屋台は当たりだと言わんばかりの視線を互いに向け合い、足元で骨をかじるシロへ笑顔を向けた。

「 やるな、シロ 」

「 大当たりだぞ 」

「 キヤンキヤン 」

一人の言葉にシロは嬉しそうな声を返す。星はそれに笑みを返し、

主人へ何かオススメはあるかと尋ねて注文をしていく。しんのすけはその間シロの頭を撫で、この屋台を選んだ功績を褒めるようになっていた。

その後は魚を野菜と共に蒸した物と魚介の出汁で作ったスープのラーメンを食べ、満足したしんのすけと星は上機嫌で屋台を後にした。シロも少しではあるが魚をもらい、しんのすけ達は市場を後にしようとしたのだが……

「あ、あれ、さくのお姉さんだ」

「何?」

しんのすけが指差した方向へ星も視線を動かす。そこには確かに市場の者達と親しげに話す孫策の姿がある。それを見て星は孫策がどれ程街の者達から慕われているのかを知つた。

おそれべくのように街を歩く事は珍しい事ではなく、よくある事なのだろう。民の上に立つ者でありながらその暮らしを実際に見て回るだけでなく、その民達と親しくする。

それは確かに君主となるべき者からすれば少し問題なのかもしれない。だが、星は民の暮らしを知らずに政治をする者達よりも上に立つ者らしいと感じた。

(桃香殿と近いものがあるかもしけんな、孫策殿は。まあ、孫策殿の方は好戦的でもあるから似てない部分もあるが)

きつと桃香も同じような事をしているだろうと考え、星は一人笑みを浮かべる。しんのすけはそれに気付かず孫策へ向かつて手を振りながら呼びかけていた。するとその声に気付いた孫策が視線をしのすけ達へ向けた。

その視線が一瞬だけ鋭くなつた気がして、星は違和感を感じた。だが次の瞬間には笑みを浮かべて近付いてきていたので、自分の気のせいかと思う事にした。

「おはよー、しんのすけ、趙雲」

「キヤン」

「じめん、シロもね。忘れてた訳じゃないのよ。」

孫策が挨拶をしてくれなかつたと思ったのか、シロが声を出す。それに孫策は苦笑して、しゃがんでシロの頭を撫でながらそう返した。それにシロが嬉しそうに声を返したので、孫策も頷き賢い犬だと改めて思い笑みを浮かべた。

「それで孫策殿は何を？」

「ああ、散歩みたいなものよ。それとこいつって街のみんなから話を聞いてるってこと」

星の質問に孫策は楽しげに言葉を返す。聞かれると思っていたのだろう。その理由も簡単に説明した。暮らしている者達が何を思い、何を望んでいるのかを知らないと、とてもではないが政など出来ない。故にこうして直接聞いているのだ。

自分で聞くのは途中で意見が歪んでしまったり、取り違えてしまわぬように。人を介するとその可能性が上がってしまうから。それにこうして自分が話を聞く事で、街の者達に孫家の者は自分達の意見に耳を傾けてくれると思わせる事が出来る。

それを聞き、星は成程と頷いた。孫策が何も善意だけではなく、

自身の行動を政治に利用するためにしている事に感心した。これが桃香であればそういう打算無くするだろう。それはそれで素晴らしいが、やはり孫策の方が治める者としては上のよつて星は感じた。

「さすがは孫家の長と言つたといいですね。起草の事を良く考えておられる。執務から逃げた方とは思えない」

「あはは、それは言わないでよ」

星の言葉に笑顔で応じる孫策。そんな彼女へ星は不敵な笑みを返し、いつづけた。

「ですが、いいのですか？ そんな風に自分の行動理由を話して」

「いいわよ。聞かれて困る事じゃないわ。みんな、そんな事どこかで気付いてるだろ？しね」

星の言葉に孫策は苦笑して答えた。それに星も頷き返すが、孫策へ静かに近寄りこつ眩いた。

袁術の下にいるのが信じられないですね。貴方の方が政を上手く出来るだらう。△

それに込められたのは、紛れも無い本心。孫策はそんな星の言葉に内心でやはりと思った。自分達の中にある気持ち。それを星は感じ取っている。何故なら、その星の声にはどこか期待するような響きがあつたからだ。

星の性格を何となく理解している孫策だったが、それでも念には念を入れるべきかと思い、昨夜抱いたある気持ちもそれを後押しする。少しだけ星には悪いがそうさせてもらおうと決意して、

孫策は密かにある事を周瑜に相談しなければと思つ。だがそれを表情には出さず、じつ笑顔で問いかけた。

「ね、趙雲。」の後はざつざつとつむり？

「やうですな。少し探している物があるので、それを調べようかと思つています」

「調べ物？ なら城に来なさいよ。書庫を使わせてあげる。それとうちの知患者を一人紹介するわ。冥琳は仕事だから無理だけど穩なり……あ、陸遜って言うんだけど、今日非番でかなり物知りな子がいるのよ」

孫策の申し出に星はどこか意外に思いながら感謝を述べた。孫策が自分としんのすけを気に入ったのは感じている。それでも、何か妙な感じがしたのだ。まるで、曹操の時と同じで嫌な意味で興味を引いてしまつたような。

だがそんな要素は無かつたはずと、そう星は思つてまだそこまで警戒する事はないかと考える。しかし、最低限の警戒はするべきかもと思い、孫策へしんのすけ達と共に後で城を訪れると告げ、その場を後にした。

その後姿を眺め、孫策は小さく呟いた。気付いたのだ。星が自分の申し出に裏があるのでと感じた事を。

「やっぱり趙雲も只者じやない、か。出来る事なら穩便に進むといんだけど……」

孫策が手を回しておいてくれたのか、それとも門番が覚えていたのか。しんのすけ達はあっさり城の中へ入れてもらえ、廊下を歩いていた。すると周泰が突然現れ、星を書庫へ案内するよつこと孫策に頼まれたと告げた。

それに星が感謝を述べると周泰は笑顔で気にしないでいいと返す。そして視線を動かし、周泰は案内が終わった後シロと遊んでもいいかとしんのすけに尋ねた。今日は休みらしく、シロを一日中もふもふしていたいとの事。

「駄目でしょうか？」

「いいよ。シロ、しゃーちゃんに遊んでもらえるって

「キャンキャン」

「ふむ、シロも異論はないようだ。では周泰殿、案内とシロの事を頼みます」

「はいっ！」

星の言葉に心から笑顔を返す周泰。こうして周泰の案内でしんのすけ達は書庫へと向かう。星は中へと入り、しんのすけはシロを周泰へ預けた。周泰はしんのすけもと誘つたのだが、それを彼は断つた。少し考えたい事があるとらしからぬ理由で。

それを聞いて周泰も違和感を感じたが、それならとシロを抱えて素早くどこかへと消えた。それを見送り、しんのすけは自分はどうするかと考え始めた。星は調べ物をするだらうから邪魔は出来ないし、周泰とシロの邪魔もしたくなかったのだ。

自分達がここに滞在するのはおそらく数日。であれば、周泰がシロと過ごす事が出来るのは限られた時間しかない。それを考え、しんのすけは今日は遠慮する事にした。周泰と友達になつたからこそ、彼女の望む事を出来る限りしてあげたいと考えたのだろう。

しかし、する事がないのも事実。なので、尚香に会いに行こうと動き出そうとしてその視線が廊下へ動いた。すると……

「お？」

そこには一人の女性がいた。小さめの眼鏡を掛け、大きな胸を揺らしている白い肌の女性だ。女性はどうも書庫へ行こうとしているのだが、何かを抑えるように悶えていた。実は彼女はかなり知識欲が旺盛で、知る事に異常な興奮を覚えてしまつという変わった人物だったのだ。

そんな彼女にとつて書庫は魅惑の場所。今日、彼女は孫策に星の調べ物について協力するよう言われた。非番だったため出来れば遠慮したいと考えた彼女だったが、孫策が書庫に行つてもいいと言つと即座に了承した経緯がある。

「どうしましょー。書庫に行くだけでも興奮するのに、雪蓮様の話だと趙雲さんつて旅をしている方ですしこ……私の知らない事を沢山教えてくれるかも……」

そこまで考へ、女性は大きく身震いをして体を左右に動かす。

「ああん！ 困っちゃいますー！」

その声の艶っぽい事と言つたら無い。それに声を掛けようとしていたしんのすけが立ち止まり、同じように体を左右に動かして叫ん

だ。

ああん！ オラも田のやつ場に困りやがへーーー。

それに女性が気付き、視線を動かした。そこには彼女の揺れる胸を見てニヤニヤしているしんのすけがいた。

「あら？ もしかして貴方がて……オホン。しんのすけさんですかあ？」

「？ そーだよ。オラが野原しんのすけ。お姉さんは？」

思わず天の御遣いと言ふことになり、軽く咳払いをする女性。それにしんのすけは不思議そうな表情をするものの、名前を聞かれたので肯定するように名乗る。

そして女性へ問い合わせるも忘れない。もう手馴れた感さえあるやり取りだが、しんのすけにとっては綺麗なお姉さんの名前を知る事は大切なので、声は普通でも意味合い的には重要だ。

女性はそんなしんのすけへ笑みを返し、明るい声で名乗り返す。

「私は陸遜。字は伯言ですよ。よろしく～」

「ローソン？ オー、それはそれは……カラアゲ君一つお願いします」

「からあげ君？ どなたの事ですかね？ それとも、私の名前は違うんですね陆遜ですよ～」

「つくそん？ また間違えたや。」めんくさこ

毎度のように頭を下げるしんのすけ。それに陸遜はまだどこか不思議そうにしていたが、もう気にしてないからと返して頭を上げさせた。その間延びする特徴に気付き、しんのすけは小さく頷くと……

「じゃ、オラ気にしないぞ~。」

と、同じように間延びしたような声で返すしんのすけ。陸遜はそれに苦笑して、しんのすけにある事を尋ねた。それは呼び方に関する事。既に尚香からしんちゃんと呼ばれている事を聞いた陸遜としては、自分もそう呼んでいいかと尋ねたのだ。

それにしんのすけは即応。彼にとつては呼び方よりも、その相手と仲良くなれる方が大事。なので、そこまでこだわりはない。陸遜はしんのすけがすぐに許可を出したので、その名に対する考え方の片鱗を感じ取ったのか意外そうにした。

「ね、ならオラはりくちゃんって呼んでもいい？」

「陸ちゃん、ですか？　うん……せめて陸お姉さんにしたいですね~」

「りくお姉さんか。それでもいいぞ。呼び易いし」

「では、それでお願いしますねえ」

子供であるしんのすけにちゃん付けは抵抗があつたのか、陸遜は別の呼び方を提案。それをしんのすけはそういう呼び方もあつたかと納得し頷いた。陸遜もその反応に頷いて笑顔で返す。

そして、しんのすけを連れ立つて書庫へと向かう。だが、書庫に入った陸遜は、懸念していた症状に陥る暇もなく星から鏡の話を聞

いて考え込んだ。不思議な伝承の残る鏡。そんな物に心当たりがなかつたものある。しかし、一番はその星の雰囲気についた。

（不思議な鏡。一体何の目的で探しているのでしょうか……？　もしかして、それは趙雲さんの探し物ではなく shinちゃんの探し物なのでは～）

天の御遣いと聞いているからこそ、陸遜は星の探し物がしんのすけに関係するのではないかと思った。星の話す袁紹が探している物との理由は、もう一つの袁家の事を知る彼女としても納得出来るものだつた。それを星が探す訳は世話になつたための礼みたいなものとの話も。だが、星の雰囲気からそう察した。

星が袁家のために探すような相手に見えなかつたのもあるし、もし仮にそつなら袁紹を通じて袁術へ働きかけているはずなのだから。だが、陸遜はそれを口にする事は無かつた。下手な警戒心を与える訳にはいかないからだ。そう、今孫策達は何とかしんのすけを仲間にする事が出来ないかと考えているのだから。

天の御遣い。それを手元に置く事がどれ程の力になるかを知らない周瑜や陸遜ではない。今は袁術の密将となつてゐるために大っぴらには出来ないが、時が来ればそれを有効に活用し乱世に名乗り出る事が出来る。

孫吳復興。そのために孫策を始めとする一部の者は、しんのすけと趙雲をどうするかを考えていた。出来る限り穩便に事を運びたい。袁術に悟られる事無く、自分達の下に置くために。孫策と周瑜、それに陸遜しかこの事は知らない。他の者達に教えると氣付かれる可能性があるとばかりに伏せられている。

陸遜はそんな事を思い出しながら、平然と星の問いかけに答えた。

「そうですねえ……大陸に残る伝承の類にはそういう物もありますが、もしかすると趙雲さんの探す鏡はそういう物ではないかもしません」

「と云うと？」

「例えばあ、まだ見つかっていない物という事も考えられます。それに、袁紹さんはお告げで聞いたのですよね？　なら、もしくは……」

陸遜は少しだけ探りを入れる事にした。これで何か反応を見せれば、自分の感じた事が正しいと自信を持つ事が出来ると。そんな事も知らず、星は陸遜の言葉を待つた。袁紹の夢話にしたのを少しだけ悔やみながら。

天界に関連している物だと考える事も出来ますし。

その言葉に星は一瞬息を呑んだ。だが、それを下手に誤魔化すのではなく、自分が恐れ多い物に手を出そうとしている事に気付いた風に装つた。それは陸遜がある種の予想を抱いていなければ通用したかもしれない。もしくは、彼女が平凡な者ならばそのまま信じただろう。

しかし、それを陸遜は見て確信した。星の探す鏡。それが天の御遣いであるしんのすけに大きく関わる物だらうと。故に、そこからは鏡の話を天界から少し遠ざける。夢のお告げ 자체があやふやな事もあるし、それだけで天界と結びつけるのも早計かもしれないと笑いながら言つて。

「それにこの話。私もですけど趙雲さんも疑つてますよね？」

「まあ、袁紹殿の夢ですからな」

「なら、有りもしない可能性もありますから。とにかく、私や冥琳様ではお役に立てそうにありませんね～」

少し申し訳なさそうに陸遜は締め括り、星へ視線を向けて軽く頭を下げる。星はそんな陸遜に感謝で返し、資料に使った書庫の本を戻すべく動き出す。しんのすけは一人の話を聞いていたのだが、段々退屈して今は机に突っ伏して眠っていた。

それを見て陸遜が小さく笑みを浮かべた。天の御遣いといつてもそこらの子供と変わらない気がしたからだ。そして少しだけその頬を突いた。その柔らかい感触に陸遜は笑みを深めた。

「しんちゃん、起きてください。趙雲さんが本を片付け終わったら、私達になくなっちゃいますよ～」

「う～ん……一人は嫌だぞ……」

陸遜の言葉にしんのすけは寝ぼけながらもその手を掴んだ。その意外な程強い力に陸遜は驚いた。まるでその手を決して離すまいとしているようだつたのだ。陸遜は知らない。しんのすけがどれだけ孤独を恐れているかを。

今の彼を支えているのは星とシロだ。しかし、厳密にはそれだけではない。今までの出会いと思い出もその力にしている。だがそれでも、それでも奥底にある寂しさはなくならない。

両親と妹から離され、親しい友人達さえいない状況。それは初めてではない。だが今までの冒険では、必ずどこかで助けに来てくれる存在。その存在との長期の別れがしんのすけの心にどれだけの影

を与えていたのか。それを知る者はいない。やがて、彼自身さえもそれを完全に理解してはいないのだから。

「片付け終わりましたぞ、陸遜……おや？」

「あ、趙雲さん。」れ……」

片付けを終えたと報告しようとした星だったが、陸遜へ向けた視線が捉えた光景に不思議そうな表情を見せる。それに陸遜がやや困ったような表情を返す。しんのすけの手がしっかりと陸遜の手を掴んでいる。

それを見て星は小さく苦笑し、しんのすけを揺さぶって声を掛けた。起きないと置いていくぞ。そんな風に優しく声を掛ける星。それが姉のよつにも母のよつにも聞こえ、陸遜はどうだけ星がしんのすけを大事に思っているかを理解した。

やがてしんのすけも田を覚まし、星はすぐに陸遜の手を離すように告げた。しんのすけはその言葉に視線を動かし、自分の手が陸遜の手をしっかりと掴んでいる事を把握すると、嬉しそうに顔をにやけさせて一人を苦笑させた。

「つくおねいさん、このままでもいい？」

「うーん、それはちょっと困りますね～」

「しんのすけ、陸遜殿は休みを使つて話を聞いてくれたのだ。早く自由にせねば申し訳ないぞ」

その星の言葉にしんのすけは本当かと視線を陸遜へ向けた。それに陸遜が頷き、すまないがそうして欲しいと告げるといしんのすけは

分かつたとばかりに手を離した。そうして三人は揃つて書庫を出た。陸遜はどこか後ろ髪を引かれる思いだったが、客人であるしんのすけと星に痴態を見せる訳にもいかないと強く言い聞かせる事で我慢した。

そのまま陸遜は一人と別れ去つて行つた。星は陸遜が言った言葉を思い出し、前提が間違つているのかもしれないと思つていた。鏡はこの大陸のどこにあるのではなく、しんのすけが帰るべき時にならないと現れないのではないかと。

もしそうだとすれば自分達がしなければならない事は鏡を見つける事ではなく、しんのすけが役目を終えたと天に判断されるようになる事。つまり、乱世を止める事ではないのか。そう考え、星は小さく息を吐いた。それはため息ではない。自分の役目が分かつたと思つたのだ。

(私はしんのすけと出会い、この大陸を救うために戦う事を宿命として生まってきたのだな。この槍の才は、そのための天からの授かり物だつたか)

星は視線をしんのすけへ向ける。初めて出会つた時はただの子供としか思わなかつた。だが、話をする内にその異常さに気付き気にかけるようになった。他人でしかなかつた自分と凜や風を強く結びつけ、正義の意味をもう一度見つめさせてくれた。

それだけではない。自分だけでは出会えなかつただらつ多くの縁。それを導き、繋いでくれたのだ。星はそう思い、しんのすけの頭へ軽く手を置いた。それにしんのすけが不思議そうに視線を向けた。

「どーしたの？」

「何、私はお前と出会つた時に天命を授かっていたのだと気が付いた

のだ

「てんめー？　お店の名前なんでもらったの？　オラの名前使つ
もつなら、しょーじょーこちおくまんえんいただきます」

しんのすけの言つた内容に星は心から楽しそうに笑う。金額が分
からんと言しながら星は歩き出す。しんのすけがそれもそうかと頷
き、こちではどう言えばいいのかと考え始める。その様子を眺め、
星は柔らかい笑みを浮かべて空を見上げる。

広がる青空。それをどこかで見ているだらうたいりく防衛隊の仲
間達を思い出し、いつかその輪が繋がる事を想像して星は苦笑する。
愛紗と稟が口煩くしんのすけを注意し、それを桃香と風が眺めて笑
い、白蓮がしんのすけを噛める。鈴々はシロと一緒にになって遊び、
自分はそんな周囲を見て酒を飲む。そんな平和な光景を。

……稟、風、お前達は今どこにいる？

その何気ない弦きは、江東の風に乗つて空へと消えた……

書庫を貸してもらつた事と陸遜を動かしてくれた事に感謝するべ
く、星はしんのすけと共に孫策の執務室を訪れていた。そこでは、
孫策が周瑜に睨みを利かされながら結構な量の竹簡と戦つていた。
それに桃香の姿を思い出して星は小さく笑つた。ここまで似ている
部分があるとは。そんな風に思つたのだ。

「少しよろしいですか？」

「ん？」

「あ、趙雲じゃない！ しんのすけも。いいところに来たわ」

星の声に周瑜が視線を動かし、孫策が助かつたと言わんばかりの声を出す。

「何か用か？」

「いえ、書庫や陸遜殿の事で礼をと思いまして」

「あは、律儀ね。ま、貴方らしいかも」

星の告げた内容に嬉しそうに笑う孫策。周瑜も同意するように笑みを見せた。だが、すぐに一人はそれを消すと星へ視線を向けたまま、こう切り出した。大事な話があると。それに星は何事だろうと思いつ、しんのすけを自分の手元に引き寄せて聞く姿勢を取った。それに孫策が苦笑しつつ、しんのすけの事を考えたその対応は正しいと告げる。すると周瑜もそれに続くように苦笑した。そしてまずは孫策が口火を切った。その言葉に星は絶句する事となる。

しんのすけは天の御遣い。それに間違いないわね？

一瞬何を言われたのか星は理解出来なかつた。それだけ孫策の告げた一言は強烈だつたのだから。そんな驚愕の表情を浮かべる星を見て、孫策がやや落ち着かせるような声で続ける。

「あ、私達に事を荒立てるつもりはないわ。まず、話を聞いてくれ

ない？

「信じましょ、う」

「そう言つてくれて助かる。最初に言つておくが、我々としてはしんのすけを利用しようとは思つていない」

星の言葉に周瑜がそう返すと、孫策も同意するように頷いた。星はそれに安堵した。一人の目は真剣だった。嘘を言つていない。そう星へ誓うような眼差しだったのだから。

そこから始まる話は至つて単純だった。しんのすけ共々自分達の仲間になつて欲しい。それだけだ。星はその直球の申し出にやや拍子抜けしたものの、表情を崩す事無く問い合わせる。

「申し出は分かりました。ですが、何故私だけではなく利用するつもりがないしんのすけも仲間にしようとも？」

「シャオの事を考えてね。あの子、しんのすけを気に入つたみたいなのよ」

「そういう事ですか。しんのすけ、良かつたな。尚香殿に気に入られたそうだぞ」

孫策の微笑みに星は納得しながら視線をしんのすけへ向けた。彼は話が長くなりそうなのを感じ取り、やや退屈そうにしていた。それを見ていた星達が揃つて苦笑する。

力巴のような大口を開けて欠伸をしたのだ。それはもう見事な程の大欠伸を。その光景が実に子供らしく思え、三人は笑つたのだ。そんな三人に気付いたしんのすけは、口を閉じると視線を彼女達へ動かした。

「何？ 三人してオラに何かご用？」

「聞いていなかつたのか。まつたく、お前は」

「本当に自由気ままね、しんのすけは」

「お前と似ているな、雪蓮」

周瑜が笑いながらそう言うと孫策が小さく呻き、星が笑つた。しんのすけはそんな孫策を見て小首を傾げる。何故呻いたのかが分からぬのだ。そんな和やかな雰囲気のまま、話は進む。

もし仲間になれないのなら、せめてここで見聞きした事を袁術へ知られないようにして欲しい。こちらもしんのすけの正体については他言無用とするから。そう周瑜が締め括ると、星はふむと顎に手を当て少し考える振りをする。

答えは決まつているのだ。今は仕官出来ない。それにしんのすけが出す答えを待つている星としては、ここで自分の意見を告げるつもりはなかつた。

(孫策殿達はいつか袁術から独立するはずだ。それを持つてからでも遅くはないだろう。しかし、袁家に気取られないようにしているのは分かるが……ここまでとはな。つまり、あの袁家相手にそれだけ慎重になつてゐるといつ事か……)

念には念をとの事なのだからと結論付け、星は息を吐いて頷いた。そして告げる。仲間になる事は出来ないが、孫策達の事で気付いた事などは決してどこかで話したりしないと誓つと、そつ星は言い切つたのだ。

更にそれだけでは信頼度に欠けると思ったのか、自分の槍としんのすけに誓うとまで言つた。それに孫策と周瑜は呆気に取られたが、やがて小さく笑みを浮かべた。その様子を見て、それまで退屈そうにしていたしんのすけが口を開いた。

ね、もう終わった？

その言葉に三人が揃つて顔を見合させ、すぐに笑い出した。ぶれないなと星が言えば、どこもぶれてなどいないとしんのすけが自分の体を見てから返した。それに周瑜がそういう事ではないと言えば、孫策がある意味でそういう所だと言つてカラカラと笑う。

そんな風に場の空気が一層和んだところで、しんのすけが三人へこう言つた。喉が渴いたと。それはお茶が欲しいとの言外の要求。その言葉に孫策が笑い、周瑜が苦笑しながら用意させようとした告げて動き出す。

星は小霸王と美周郎相手に普段通りの態度を取るしんのすけを見て小さくため息。しかし、しんのすけは子供。故に二人も許してくれているのだろうと思い、その寛大さに感謝した。

「申し訳ありませんな。中々礼儀を覚えてくれないもので」

「えつへんつー。」

「あはは！ 威張る事じやないわよ。ま、礼儀正しいしんのすけって何か違和感がある氣がするからいいけどね」

「だが、少しぐらいは覚える努力をしろ。礼儀を覚えて損な事はないぞ」

星の言葉に対するしんのすけの反応。それにそれぞれの意見を告げる一人。そんな中、孫策は思い出す事があった。それは昨夜の事。夕食時に尚香とした会話だ。

そこで妹である尚香から聞いたしんのすけと過^ハした話があまりにも微笑ましかつた。それに、尚香が親しげにしんちゃんと言つていたのもそれに拍車をかけた。自分の初めての友人だと嬉しそうに語る妹の笑顔。それを見て孫策は思つたのだ。

実は孫策も最初こそ天の御遣いであるしんのすけを利用しようと考へた。だが気付いたのだ。自分は幼い子供を利用しなければ独立出来ない訳ではないと。

妹の友人を道具にする程、自分達は落ちぶれてはいない。そう考えたからこそ、孫策は周瑜へ告げた。鋭い星が自分達から気付いた事に対する口止めにしんのすけの事を持ち出そつと。

その裏にあるものをどこかで察したのか、周瑜は大きくため息を吐くと分かつたと返した。彼女としても、しんのすけの利用価値の低さを理解していたのだ。そのため、一番いい利用法はそれしかないと判断したので、今の現状に至るのである。

「しんのすけ、ちょっとといいかしら?」

「なーに?」

「またいつかシャオに会いに来てくれる? あの子、友達がいな
から」

「ほい!」

孫策は一人の姉としてそう告げた。孫家の長ではなく、妹を思う

姉の顔で。それにしんのすけは力強く返事を返す。それが安心させるように聞こえ、孫策は笑みを返す。星は孫策の天の御遣いに対する考え方をどことなく察して、小さく息を吐いた。

利用しようと思つたが、それが難しいと判断したと。星達でもヘルメットやファイギュアが無ければ同じ事を思つたのだから、そういうのだろうと結論付ける事が出来たのだ。

「そういうえば趙雲、次はどこへ行くつもりだ？」

「そうですね。一度平原に行こうかと思つています」

「平原？ 刘備が治めている所よね？」

「ええ。実は……」

孫策の問いかけに星が答えようとしたのだが、それを遮るようにしんのすけが勢い良く割り込んだ。

桃香ちゃん達に会いに行くのー？

それが劉備の真名だと氣付いて、孫策達はしんのすけと星が彼女と深い仲だと察した。星はそれに苦笑しながら、お聞きの通り知り合いなのでと締め括つた。その間もしんのすけは桃香達と再会出来るのかと嬉しそうにしていた。

孫策と周瑜はそんなしんのすけに笑みを浮かべるも、星へ桃香の事を尋ねた。どういう人物なのかと。それに星は少し考え、不敵に笑つてこいつ言つた。

孫策殿と氣の合ひそうな方ですな。一度会つてみる事をオススメしますぞ。

それに孫策が楽しそうに頷き、周瑜が気の合ひやつといふ部分でやや嫌そうな表情を見せた。その対照的な二人に星は浮かべた笑みを深める。しんのすけは話も終わつたと見て尚香の部屋へ行つてもいいかと孫策達へ尋ねた。

それには周瑜が勉強をしていたら邪魔をしないように戻つてこいと告げた。それに元気良く返事をし、しんのすけは執務室を出て行く。それを見送り、星は孫策へこう言つた。

仲間になつて欲しいと言われた事は忘れません。もし縁があれば、その時に……

それに孫策は嬉しそうに笑みを見せて待つていると返すのだった

……

翌日、街を出るために歩くしんのすけ達の姿があつた。次の目的地を桃香達の元に設定し動き出したのだ。これには、鏡に対する星の仮説が関係していた。今はない可能性がある物を探し続けるより、乱世を止めるための力を 絆を手に入れるべきではないかと。

曹操達の話で桃香達の下には新しい者達がいると分かつた。その者達は軍師をしているので、そこからも情報を得る事が出来るかもしれないと考えたのもある。

孫策達への別れは昨日の内に済ませた。尚香と周泰は寂しそうにしていたので、しんのすけがまた必ず来ると言つとシロがそれに同調するように声を出した。すると、周泰がシロを抱きしめその感触

を忘れないようにさせて欲しいと告げた。

一方、尚香は姉達と共に暮らす事になつた際は一緒に遊べると思つていた分、余計にしんのすけとの別れが残念だった。それを雰囲気から察したしんのすけから、今度は色々な遊びを教えると約束されると、それに尚香は嬉しそうに笑顔を返す事が出来た。

孫權はたつた一日しか滞在しなかつたにも関わらず、尚香達と仲を深めていたしんのすけとシロに驚きを見せるも、次に来る時があればもう少しゆっくりしていってくれと告げた。それが妹に出来た友人への姉としての言葉だったのだろう。しんのすけはそれに嬉しく思い、力強く頷いた。

甘寧は、孫權の言葉に素直な反応を見せるしんのすけに頷き、今後もそういう対応を心掛けろと告げた。それにもしんのすけが素直に返事を返すと、少しだけだが甘寧も視線を和らげて頷くのだった。

一方星は、黃蓋から飲み仲間が出来たと思いもう少し楽しめると考えていた事を告げられた。それ故に早すぎると思われ、苦笑。なのでいつか必ず共に飲もうと約束を交わし、笑みを見せ合つた。

周瑜と陸遜からは、今度はしんのすけから聞いた天の話を聞かせてくれと頼まれ、機会があればだけ返した。それに一人は待つていると楽しみにするような声を返して笑つた。

では、孫策殿。色々とありました、明日にはこの街を去りますので。

でも、きっとまた来るわ。

キャン。

ええ、待ってるわ。その時はお互いに忘れない日になることを願つてゐる。

孫策はそう締め括り、最後までしんのすけ達を見送った。もつとも、その後すぐに周瑜によつて執務室へと連れて行かれたが。

そんな事を思い出して星が苦笑すると、しんのすけがそれに気付いてどうかしたのかと問い合わせた。それに星が昨日の孫策の様子を思い出したと言うと、しんのすけもそれを思い出して頷いた。愛紗に連れて行かれる桃香みたいだったと表現するしんのすけ。それに星が同じような事を考えるものだと思い、嬉しそうにそうだなと声を返す。

晴れ渡る空の下、彼らは歩く。次はあの三人と再会を果たすためにと思いながら。だが、その再会は望む形で果たされる事はない。次に訪れる街。そこで出会う者が彼らの余裕を無くす事をするからだ。

その名は袁術。そして、次なる戦乱を起こすキツカケとなる存在。彼女との出会いこそが、しんのすけに決断を迫る事となる……

孫吳編終了。次回は蜂蜜姫。放浪編最後となります。Arcadi aと同じく魏ルートを書くが、それとも蜀ルートにするか迷っています。よければご意見ください。

第十一話

孫策達の治める街からそう離れていない場所。そこを星は一応訪れる事にした。そこは袁術が治める街。平原へ向かう通り道に近い事もあり、一日だけの滞在も決めていた。

その理由は、そこを見る事で袁術と孫策の違いをはつきりさせておこうと思ったのだ。しんのすけはそんな事は知らず、シロと共にそこの様子を見てある事を思い出していた。

「……あの街とビリが似てるわ」

「クウ～ン……」

しんのすけの感覚に同意するよつシロも声を出す。眼前に広がる光景。通りを歩く者達はどこか元気がなく、表情は明るいとは言いかれない。道行く兵士達はやや威張っているように見え、街全体の活気がそこまでない。

それは、あの洛陽をどこか彷彿とさせるものがある。だが、あれ程荒れてはいない。何故なら人々は怯えてはいけないからだ。ただ、疲れているように見える。しんのすけがそんな風に思つていると、星が先導するよつに歩き出す。

「しんのすけ、シロ、今は宿を探すぞ」

話はそれからだと言外に星が告げる。それをビリかで感じ取つていふのだろう。しんのすけとシロはそれに続くよつに歩き出した。ここでもあの洛陽と同じ事が起きているのだろうかと、そんな不安を抱きながら……

「エリを治めているのは、孫策殿達の主人に当たる袁術だ」

「主人？ ビーウー事？」

宿の部屋に入り、寝台に腰掛けた話すしんのすけと星。シロは床に大人しく座っている。星が告げた内容が理解出来ず、首を傾げるしんのすけ。星は無理もないかと思い、簡単に説明するべくこう言った。

孫策達は訳あつて袁術の下で働いている存在。かつての白蓮と自分の関係と同じ扱いなのだと。その説明にしんのすけは納得したと頷いたのだが、ふとある事に気付いた。

「ね、よーじゅつせんはよいしょーさんのお知り合い？ 何かお名前の感じが似てるぞ」

「確かに親戚だったはずだ。ふむ……そういう事が」

しんのすけの言い間違いを訂正するのも面倒だと思い、星はそう答えた。しんのすけがどうしてそんな事を聞いてきたのかを予想したのだ。袁紹と同じ系統とすればしんのすけにとつてはお得意様だ。もし会えるのなら何か言いたい事でもあるのだろうと。

しんのすけは星がそう尋ねると、即座に頷いた。このままではこの街が洛陽のようになってしまつ。それを出来る事なら阻止したいと考えているのだ。そうしんのすけが告げると、星は頼もしそうに笑みを返した。

「やうだな。確かに会えるのなら、それについて注意を喚起するべ
らいはしたいものだ」

「お城へは行けないの？」

「無理だな。袁紹殿に頼む事が出来れば分からんが、今は何も手
が無いに等しいから門前払いが妥当だらう」

星がそつ平然と告げる。しんのすけはそれにやや残念そうに肩を
落とすも、何かに気付いたのかすぐに顔を上げた。それに星がどう
したのだろうかと視線を向けると、しんのすけは少し外を見てきて
いいかと尋ねた。

星はその理由を聞こひとして、それを理解した。外から子供達の
楽しそうな声が聞こえるのだ。そのため、星は苦笑して周囲に氣を
つけて遊びと言つて送り出した。シロはどうじようか迷つたものの、
きっと弄ばれると判断して床に伏せて目を閉じる。

「お？ シロは来ないの？」

「じつやら早めの寝癖のよつだ。では私もこゝに残つて槍の手入れ
でもするか」

シロの行動理由をじこか察して星は笑つて、槍を手に取りそう告
げた。しんのすけはならばと部屋を出ようとする。その背中を見て、
星が待つたをかけた。そして、壁に立てかけてあつた護身用の木刀
を手に取り、しんのすけへ投げ渡す。

「しんのすけ、これを忘れるな

「あ、そうだった」

「まあ必要ないと思つが一応な。それと、これとなつたら逃げてくれるんだぞ?」

「ブツ、ワジヤー」

星の言葉にそつ返してしんのすけは急ぎで部屋を出て行く。その離れ行く足音を聞きながら、星はふと笑つ。しんのすけの場合、いざとなつた時に逃げなによつた気がすると。やつ者え、星は小ちく笑う。

そんなんのすけだからしん、自分は支えたいと思つたのかもしない。危ないとしても、そこに助けを求める者がいるのなら最後まで手を伸ばそうとするだらう彼を。

さて、しんのすけの答えはこいつ出してもらひえるのだらうか……?

それが今は心から楽しみだとばかりに、星は嬉しそうに笑みを浮かべるのだった……

宿の外に出たしんのすけは、聞こえていた声が遠ざかっていることに気付いて急いでそちらへと向かつて走り出す。だが、その途中で裏路地を歩く変わった格好の少女を見つけ、急停止。

「今の子……よしょーさんみたいな髪の色してた……」

あまり見ない髪の色。それに格好も珍しかった事もあり、しんのすけはこのまま声を追い駆けるか裏路地へ行くかを迷つた。しかし、ある事を思い出して裏路地を選んだ。声は少なくとも三人以上はある。だが、少女は一人だった。ならばそちらに行こうと思ったのだ。

一人は寂しい事を今のしんのすけは誰よりも知つていて。自分しかしない状態では笑つている事さえ難しいと。なので、しんのすけが孤独な少女を選ぶのは至極当然と言えた。

裏路地へ入り、しんのすけは視線を動かす。そこには煌びやかな服を着た金髪の少女がいた。その後ろへ静かに近付いていくしんのすけ。少女はそんな事も知らず、トボトボと歩いていた。その足取りは重い。

「ここは薄暗いの。うー……やはり退屈じゃからと城を抜け出すのではなかつたか」

少女はそんな事を呟きながら肩を落としながら歩いている。しんのすけはその後ろへ近付き、そつと手を伸ばした。

「ねえ」

「ん？ なん……」

肩に手を置かれ、少女は振り返ろうとした。だが、その頬が軽く凹む。しんのすけの指が突き出されていて、それが頬の一部を押しだからだ。微かに流れる沈黙。何が起きたのか理解出来ない少女と相手の反応待ちのしんのすけ。

そんなお見合いがしばしあつて、やつと少女が自分の状況を把握して我に返つた。見も知らぬ子供が自分の頬を突いている。故に少女はしんのすけの指をどけようと手を伸ばした。だが……

「ほい」

「なつ……」

その手はむなしく空を切る。しんのすけが指を引っ込んだのだ。それが馬鹿にされたように感じられ、少女は悔しくなつてまた手を伸ばす。それをしんのすけは手を上に上げて避ける。また悔しくなつて少女が手を動かす。それをしんのすけがかわす。

そんなやり取りを延々繰り返す一人。最初こそ悔しさから動いていた少女も次第にそんな事も忘れてしまつたのか、途中からは楽しそうにしんのすけの手を捕まえようとしていた。その原因の一つはしんのすけが楽しそうに笑っていたからだ。その笑みに少女もつられるように笑顔になつていき、気持ちがそれに追随していったのだ。

「むへ……中々掴めんのじやー」

「はつはつは……そんな事じゃ、オラの動きにはつこてこれないぞ」

「そんな事ないわ。妾の本気を見てみよー」

少女はそう言つてもう一度とばかりにしんのすけの手を掴もうとする。それをしんのすけはさせじとかわす。それをまた数回繰り返し、少女が何かを思いついたのか動きを止め、視線と共に指を空へ向けて叫んだ。

「なんじや、あれはー!?

「え?」

「今なのじゅー...」

子供騙しの手だったが、しんのすけには効果てき面。遂に少女はその指を掴む事に成功した。すると、しんのすけが少し頬を赤めてしまをする。その意味が分からず、不思議そうに小首を傾げる少女。しんのすけはそんな彼女へこう告げた。

「わ、だいたんなんだから……

その言い方に一瞬言葉を失う少女だったが、すぐにその奇妙さがおかしくなったのか笑い出した。

「まつまつま……お主は中々愉快な奴じやな

「まつまつま……それほどもあるべ」

「自分で言ひとまの。いむ、氣に入つたぞ。お主、名を何と言ひのじや？」

しんのすけの笑い声を聞いて、袁術は楽しそうに笑みを見せるも名前を聞いていない事に気付いて興味津々で聞いかけた。それにしんのすけは、忘れていたとばかりに手を打ち名乗りを始めた。

「おおつー、オラ、野原しんのすけ。名前がしんのすけで、あざなはないだ」

「しんのすけと言ひのか。変わった名じやな……？ まあよいが。
妾は袁術。字が公路じや」

胸を張るような姿勢で叫げる袁術。それは、当然ながらしんのす

けが自分を知つていると考へているからだ。この街にいる者ならば知つてゐるだらうが。確かにそれは正しい。しんのすけは袁術の名を知つていた。だが、それは決して彼女の望むような意味で知つていた訳ではない。

しんのすけは袁術の名乗りを聞いて、理解するよひに頷いたところではたと動きを止めて考へ込んだ。そつ、当然袁術の名に聞き覚えがあつたために。そしてそれを見て袁術は、しんのすけが名前を思い出してゐるのかどうや期待に満ちた眼差しを向ける。

「えつと……」

「何じや?」

「お前、もつ一回聞こてもいい?」

「? よこだ。妾の名は袁術と言ひのじや。しかと覚えるとよこだ。
ふはははは

しんのすけの信じられないといふ表情を不思議に思いながらも、袁術は改めて名乗る。最後の高笑いはどこか袁紹に通じるものがあるのは、やはり袁家の血の成せる業だらうか。ともあれ、しんのすけは袁術の再度の名乗りに確信して頷いた。

やして、楽しそうに笑う袁術へこう問いかけた。それは確認。目の前の少女がこの街を治めているのかと。それを袁術は坦々と肯定してみせる。それにしんのすけは頷くと、目の前の相手がこの街の現状と洛陽が近い事を知つているかどうかを問いかけた。

ねえ、えんぢやんは知つてゐる? いい、みやうつひとじゆうと同じになつてきてゐる?

その問いかけに袁術は理解出来ないと、うなづいて自分が治める街が洛陽と同じになるのだろうと。そんな風に困惑する袁術を見て、しんのすけは安堵するように息を吐いた。そう、それは袁術が知らないと分かったからだ。

分かつてないなら分かつてもらえばいい。そう考え、しんのすけは戸惑う袁術へ自分が見た洛陽の話を聞かせる。更に自分が経験したあの出来事も。それを聞いて袁術は驚いた。洛陽が衰退し始めていて、尚且つそれに自分が治める街が近付きつつあると言わされたのだ。

「し、しんのすけ……それは嘘であろう？　この街が荒れ始めてあるといつのは」

「ううん。オラには何でこうなったかは分からぬけれど、街の人達がお元気ないんだ。他の街は……ええっと、よいしょーさんとか、もうひげやんとか、さくのお姉さんの街はもつと元氣だったよ」

しんのすけの告げた名前の中、一つは袁術も誰かは分からなかつた。しかし、最後の一つはすぐに分かった。孫策の事を言つてゐる。故に驚く。自分の密将である孫策の方が自分よりも良い街づくりをしていると言われたのだから。

袁術の中に悔しさが生まれる。だが、それをじうじうする前に袁術には聞かねばならない事があった。それは、どうすれば自分が孫策に負けない街づくりを出来るかだ。

「しんのすけ、教えてたも！　どうすればこの街を孫策の街に負けぬ街に出来るのじゃ！」

「そうだなあ……まずは、兵隊さん達をもつと優しい人にする事だぞ」

「兵士達を……？」

「街のみんなを守るのが兵隊さんだぞ。だから、もひと兵隊さんが街の人を大切にするようにしなきや」

そう言つと、しんのすけは袁術の手を掴み歩き出す。それに袁術も素直に歩いていく。しんのすけは裏路地から大通りへ出て何かを探す。するとすぐにそれは見つかった。しんのすけは袁術へ指示すようにそれを一人の兵士を指差した。そこには、どこか我が家顔で歩く兵士の姿があつた。

それを見て街の者達がどこか避けるように動いている。表情は皆一様に怖がっていた。それを確認し、袁術は言葉がない。そんな彼女へ普段と同じ声でしんのすけはこう叫びた。

「あんな風にしちゃダメって事。みんなが笑つていられるようになこと」

「本当なのじや……これでは守るべき兵士が民を苦しめておるようなものではないか」

袁術は初めて見る由らの領地の姿に深い驚きと悔しさを感じていた。今まで彼女は政を全て下の者達に任せ、自分は自由気ままに振舞つていたのだ。しかし、それは無責任だからではない。誰も彼女に政治をさせようとしなかつたのだ。

本人がしようと思わなかつたというのもあるだろう。だが、それでもこの光景の責任が自分にないとと思う程、袁術は愚かではなかつた。自分がちゃんと少しでも意見していれば、少しでも現実を知りうとしたのなら。そんな仮定が浮かんでは消える。

(妻は何も知らうとしなかった。何もしようとしなかった。ただ、毎日が楽しく蜂蜜水だけ飲めればそれでよいと思つておつた……)

彼女とて簡単な教育は受けている。袁紹程ではないが、それに近い程度には知識もある。それ故、自分の暮らしを支えているもののが何であり、どこから来るものかも知つてゐる。

だからこそ、この光景がいづれ何を呼ぶかを理解した。破滅。それは自分が送つてゐる生活が最終的には出来なくなる事。それだけではない。自分の配下である孫策に負ける事も意味すると。それを考え、袁術は強く拳を握り締める。自分が負けるなどあつてなるものかと。

「……しんのすけ、妻がする事はこれだけでよいのか?」

「後はね、たまにでいいから街を歩いてみる事だぞ」

「ん? 何故じや?」

「さくのお姉さんがやつてたぞ。それで街の人の声を聞くんだって

それが袁術に与える効果は大きかつた。孫策は街を歩いて住人の話を聞いたり、または意見を取り入れる事でその不満を解消し要望に応えている。しんのすけはそう屋から簡単に聞いた孫策の話を聞かせた。

「だから、えんちゃんもそうするといよいよ

「……のび、しんのすけ。ビツして孫策は、妻にこの事を知らせなかつたのじやろ?」

この街を通りて孫策は袁術に会いに来る。もうそれは何度もあった。にも関わらず、孫策は自分へ何も言つてはくれなかつた。それが袁術には不思議で仕方なかつた。聞いている限りは民を重んじる孫策。それが、何故か自分の街の事は一言として話さなかつた事に袁術は疑問を抱いたのだ。

袁術のそんな疑問にしんのすけは考える。彼は知らない。孫策がいつか袁術へ復讐し、独立を考えているなど。なので、彼が思いつく結論は当然……

きっとえんちゃんに自分で気付いて欲しかつたんだぞ。人に頼つてばかりじゃダメだよつて。

その言葉は、孫策が誰に対しても優しいお姉さんと思つてゐるしんのすけだからこそ。袁術はそれを聞いて一際驚いたように目を見開き、意外に思いながらゆつくり頷いた。孫策が自分の成長を促そうと想えていたと受け取つたからだ。

密将といふ事で軽い扱いをする事もあつた相手だつた孫策。それにも関わらず、自分をそこまで思つていてくれた。そう袁術は勘違いをした。故に密かに誓つ。今後は出来る限り忠臣と思い接しようと。

(孫策がそんな風に妾の事を案じていたとは……意外だつたのじゃ。七乃に言つて、これからは孫策達への扱いを改善せねばならんかの)

きつと自分へ感謝するだらうつと思い、袁術は嬉しそうに笑う。その笑顔を見て、しんのすけは何か良い事でもあつたのだらうかと思うのだが、それを尋ねる前に一つの音が鳴り響いた。

「お腹すいたぞ……」

「妾もなのじや……」

同時にお腹を押さえる一人。だが、袁術はそれが気恥ずかしかつたため、照れを隠すようにしんのすけへこう告げた。何か食べ物を持つて参れど。それにしんのすけが少し考え、懐へと手を入れた。するとそこから小さめの袋が出て来た。それは、幽州での日々で得た給金が入っている物。星や白蓮に無駄遣いするなど厳命されているそれ。しんのすけはそれをしばし見つめ、袁術へ視線を動かした。それに袁術が小首を傾げる。何を見ているのかと思ったのだ。

「何じゃ？ 妻の顔に何かついておるのか？」

「うふと……何でもないぞ」

お腹を空かせている女の子へ何か買つぐらいはいいだろう。そう思い、しんのすけは小さく頷いた。そして、そう言ってしんのすけは袁術の手を掴んだまま歩き出す。だが、何故か袁術は手を振り解こうとした。思わず足を止めて振り向くしんのすけ。そんな彼に袁術はまつかりと言い切った。

「もう妻は歩きたくない。ここ待つ

「どうしても？」

「どうしてとも？」

「はあ……分かったぞ。オラは男の子だから、えんちゃんのために動くな

「うむー。早う持つてきてくれたも」

しんのすけがトボトボと歩き出すのを見送り、袁術は満面の笑みを浮かべていた。そして、その背中がある程度離れたところで気付く。自分が先程からちゃんと付けで呼ばれていた事に。だが、それが氣にならなかつたとも気付き、袁術は不思議な気持ちになった。

今まででは様付けでしか呼ばれた事のない彼女。それが庶民の子供から略称で呼ばれる事になるとは思わなかつたのだ。不快に思つてもいいはずの呼び方。しかし、それがそう思えないのは何故だろうかと袁術は考える。そこから出た答えは、至つて単純なものだつた。

妾の事を友人のように接してくれたからじゃな……

名族たるが故に幼くして君主となつた袁術。それは、彼女に子供らしからぬ状況を押し付けた。それでも彼女はその自由気ままな性格を失う事無く振舞つていた。しかし、そこには当然対等の立場の存在はいらない。全てが下。自分が頂点だつたのだから。

だからこそ、しんのすけの態度が新鮮に映つたのだ。権力に媚びる事もなければ、気にする風でもない。その態度は、彼女のの中ではあまり見ないものだつた。孫策はそれに近いものの、どこか礼儀的に臣下として振舞つている部分もあつたのだから。

そんな事を袁術が考へていると、そこへ肉まんを一つ持つたしんのすけが戻つてきた。そしてそれを袁術へと差し出す。それを反射的に受け取り、袁術は早速とばかりに食べようとしてふとその動きを止めた。

「しんのすけは食べぬのか？」

「オラはいいよ。まだ我慢出来るぞ。えんちゃんは食べて」

しんのすけは無駄遣いをしないようにと言ひ聞かせ、袁術の分だ

けにした。星もそれならぱきっと許してくれるだらうと思つたからだ。一方、袁術はそんなしんのすけの言葉に食べる事が出来なくなつていた。

普段食べている食事よりも質素で安いだらう肉まん。それが急に高価な物に見えてきたのだ。袁術とて子供がそこまでお金を持つていないと知つてはいる。それを思い出し、しんのすけが買つてきたこの肉まんがどんな意味を持つかを感じ取つてしまつた。

(……妻は、何をしておるんじや。これでは今までと同じではないか)

自分がワガママを言つて誰かを動かす。それが誰かを困らせる事になる。そう気付いた袁術は、手にした肉まんを少し眺めて頷くと、しんのすけへ声を掛けた。

「しんのすけ」

「お?」

「これはそなたの物じや。妻は食べる事が出来ぬ」

そう言つて袁術は肉まんをしんのすけへ差し出した。それをしんのすけは見つめ、袁術へ視線を動かした。袁術は早く受け取れとばかりにしんのすけへ視線を向けていた。それにしんのすけは頷き、その肉まんを手に取る。袁術がそれに満足そうに頷いた。

すると、しんのすけは手にした肉まんを半分に割り、片方をもう一度袁術へ差し出した。それに袁術は声を失つた。しんのすけが何を思つてこうしたのかをすぐに理解したからだ。

ほい、これでオラもえんちゃんも食べれるぞ。

い、いいのかや？

と一ぜん！　くまつた時はうがい手洗いだぞ。

…………どういう意味か分からんが有難く頂くとするか。礼を言ひつぞ、しんのすけ。

困った時はお互い様。そんな言葉を言いたかつたしんのすけ。しかし当然のようにその言葉は滅茶苦茶だ。袁術も結局理解する事は出来ず、不思議そうに思いながらも差し出された肉まんを受け取り、嬉しそうに笑つてみせる。

「熱いから気をつけてね。ヤケドするかもだぞ」

「わ、分かつておる……」

そして、二人同時に肉まんへがぶりつく。餡から溢れる肉汁にハフハフと口を動かして冷ますしんのすけ。それを見て袁術も真似をし、二人は同時に息を吐く。そしてどちらともなく笑い出す。

道行く者達が袁術に気付いてどこか驚きを浮かべるも、最後には微笑みを浮かべながら通り過ぎて行く中、二人はずつと笑顔で肉まんを食べ続ける。それは、とても仲の良い子供同士に見えた……

しんのすけが袁術と肉まんを食べ合っている頃、星は少し不安そうな表情でシロを連れて街を歩いていた。昼時になつたため、しん

のすけを迎えたが、子供達が遊んでいた場所にはいなかつたためだ。

念のためにあちこちで聞き込みをしているし、シロに匂いを辿らせているので心配はそこまで強くない。裏路地に入った事は確かに、先程シロが強い反応を示した場所もあった事から、どうもそこで少しの間留まっていた事も分かった。

なので、今はそこから先へ向かっていたのだが、一つだけ気にある事があった。それは、シロがそこで不思議そうな反応も示した事。なので、別の誰かと共にいると星は判断した。そこには、シロもそれを肯定するように返事を返した事もそれを後押ししていたが。

「ん？」

星の視界の先に白い服装の女性がいた。しんのすけが見ればガイドさんと呼んだだらう外見だ。見た目からそれなりの物と分かる事から、それなりの地位にいる者だらう。

星は服装からそう結論付けて、疑問符を浮かべた。そんな者がどうして裏路地などを歩いているのだろうかと。しかも、女性は周囲をキョロキョロとしているのだ。まるで何かを探しているようだ。そこに自分と同じ雰囲気を感じ、星は声を掛ける事にした。

「いかがしました？」

「ちょっと人を捜してまして……これぐらいの小さくて可愛らしい女の子なんですがー」

女性は星の方を振り返る事もせず、捜しながらそう答えた。だが、その行動に星は正直目を疑つた。女性は道の端にある大きめの石を持ち上げたり、或いは家の裏などを覗き込んでいた。明らかに人が

隠れる事が出来ないだらう場所ばかりを狙い、捜すその光景に星は呆れた。

「出てきてくださいよ、お嬢さまー。かくれんぼは終わりにして、蜂蜜水を飲みませんか？」

「……もしよろしければ手を貸しますぞ。何かその子の匂いがする物でもあれば、このシロが辿ってくれるので」

「え？ ……あれ、まだ居たんですね。てっきり呆れていなくなつちゃつたと思ってました。物好きですねー」

星の申し出に女性は初めて振り向き、意外そうに呟ついた。その言い方から、星は女性がわざと先程の理解に苦しむ行動を取つていたのだと気付いた。しかしその理由が分からぬ。すると、女性が星の疑問に気付いたのだろう。

周囲を多少警戒するように星へ近寄り、その耳元で告げた。主君である袁術が城から抜け出し、それを捜しているのだと。それで星も納得がいったと頷いた。もしただの脱走ならいい。これが誘拐などになつていれば大問題だ。故に女性は周囲に遊びを装つていたのだ。

「もうでしたか。では、貴方は袁術殿の？」

「はいー。私、傍付きのついでに大将軍している張勲と言います」

(……これはまた癖のある相手だな)

肩書きとして上に来るべき方をついで扱いする事に、星は張勲をそう評した。そんな気持ちを表情には出さず、星は平然と言葉を返

す。

「張勲殿ですか。私は趙雲と申す者。それで、協力する前に一つ聞
きたい事があるのですが……」

「何ですか？　あ、報酬とかは無いですよー。仕官なら考えない事も
ないんですけど、あまりオススメはしませんからねえ。確かにお給金
はいいですし、仕事も楽ですけど、合わない人にはまったく合わな
いですよ、うひつて」

星がしんのすけの事を尋ねようとした途端、張勲は機関銃のよう
にべらべらと喋り出した。その速度は星でさえ思わず黙ってしまう
程だ。何よりも語る内容が酷い。主君である袁術を馬鹿にして貶す。
だが、それも全て含めて愛しいと言い切る張勲に星は軽く眩暈を感じた。

そり、張勲は袁術が問題だらけと知りながら、それを少しも是正
しようとしていないと分かったからだ。しかも性質が悪いのは、普
通主君の事を思えばそんな事は出来ないはずなのだ。だが張勲は、
主君を大事に思つからこそそのままがいいと考えていた。それが星
には理解に苦しむ部分だった。

話を終えて分かりましたかと尋ねる張勲へ、星は心から疲れたと
ばかりに息を吐いた。しかし、しんのすけの事を聞かねばと思う事
で何とか萎えた気持ちを立て直し、それは分かつたと返して問いか
けた。

「これぐらいの黒髪の少年を見ませんでしたかな？　背に木刀を差
しているのですが」

「うーん、見てませんねえ」

張勲は心当たりはないどばかりに答え、懐から何かの布を取り出してシロへ差し出した。

「で、これがお嬢さまの手拭いです。これで居場所は分かりませんか？」

シロはその匂いを嗅ぎ、一度不思議そうに首を傾げてもう一度嗅ぎ直す。そして、驚いた表情へ変わって星へ何度も声を掛けた。それだけで星はシロの言いたい事に気付いた。

「じんのすけと共にいる相手と同じ匂いなのか？」

「キャンキャンー！」

「えつと……ぢりこひの事ですか？」

「私の搜す者と袁術殿が一緒にいるところの事です。た、行きましょ

う

事情が飲み込めないという張勲へ星はそう答へ、シロを先導に動き出す。それを見て張勲もとりあえずは追い駆ける事にしたのだろう。星とシロに置いていかれないようその後を追う。こうして星達はじんのすけ達がいる場所まで向かうのだった……

「だからオラ達は、こつかみやここにこる悪い奴をいじりはじめたい

んだ

「やうなのか。しんのすけ達は偉いの……」

先程の場所から少し移動し、一人は地面に座つて話をしていた。最初は地面上に座る事に抵抗があつた袁術だったが、しんのすけが何の躊躇もなく座つてしまつたので、ならばと隣へ座つたのだ。砂や小石の感触に違和感を覚えた袁術だが、しんのすけの思い出話が始まつてしまえばそんな事さえ気にならなくなり、現状に至る。

今はしんのすけが洛陽で抱いた決意を聞かせていた。それを袁術は聞いて、大陸の民が望んでいる事はそれではないかと思っていた。都である洛陽。そこが一番住み良い街になる事こそ、この大陸の平穏に繋がるのではと。

しんのすけが更に詳しく語つたその現状。それは袁術でさえ酷いと思うものだつた。だから、袁術は氣付いた。この街だけではなく、そんな洛陽を自分が率先して変えようとすれば、誰もが自分が成長したと考えてくれるのではないかと。

（今の洛陽は、何進が死んで十常侍が驅逐されたらしいと七乃が言つておつたの。ならば、動くとすれば今しかないのじゃが……）

つい最近入つた情報を思い出し、袁術は考える。何か洛陽へ軍を動かす方法はないかと。今動かなければ、また誰かが何進や十常侍のような振る舞いをしないとも限らない。しかし、洛陽は大陸の首都。おいそれと軍などを向ける事は出来ないのだ。

袁術は結局良い案が浮かばず断念した。だが、しんのすけから聞いて知つた様々な事実が袁術へある変化をもたらした。袁術の中にあつた僅かな誇り。それが変化して生まれた小さな、けれど確かな正義感。その灯は消える事なく、燃り続ける事となる。

「えんちゃんはこれからどうするの？」

「やつじやな……まずは兵達を叱る事にしてよつかの。それから、街の者達へ今まで気付かずいた事を詫びねばならぬし」

しんのすけの問いかけに袁術はそう答えた。自分が未熟だったと気付いた以上、これからは領主としてしつかりしなければ。そんな思いが彼女を動かしていた。そんな気持ちからの発言に、しんのすけが心底感心したとばかりに声を出した。

「おおっ！ みんなに謝るつて、えんちゃんHライゼー！」

「そ、そつかの？」

「うん。オラ、そつ教えられたよ。自分が悪い事したらちやんと謝れる人はすぐHライ事なんだよつて。だから、えんちゃんはエライぞ」

「つむ……つむつむ……妻は偉いか！」

「うん、えんちゃんはHライゼー よつ！ えんちゃんスゴイ！
だいどーつよーー！」

「わはははは！ 言ひてる事はよく分からぬが、もつと褒めてたもー！」

ここに孫策がいたのなら呆れた事だろつ。何せ、その一人の会話はどこか張黷とのやり取りを彷彿とさせたのだから。違ひと言えば、袁術がちゃんとした理由で褒められてる事だらうか。いつもは悪

口のような表現でそんな流れになつていいのだから。

そんな風に一人が盛り上がりしているところへ星達が姿を見せた。そして高笑いする袁術とそれを離し立てるしんのすけを見て、星は呆れ、シロは突っ伏し、張勲はどこか悔しそうにしていた。

「やはり心配するまでもなかつたか……」

「クウ～ン……」

「お嬢さまをあんな風に乗せるなんて……やりますねえ」

そんな三人に気付かず、二人はそのまま盛り上がり続けるのだった……

「じめんぐさい」

「手間をかけたの」

一人が落ち着いたのを見計らい、星と張勲はそれぞれを叱り付けた。しんのすけへは本来と違う行動を取つた事を星が、袁術へは城を抜け出した事を張勲が注意した。それに二人は素直に頭を下げて反省の意を示したので、星も張勲もそれ以上何か言う事はなかつた。シロはここまで働きを星に褒められ、張勲にも軽く頭を撫でられ嬉しそうにした。しんのすけはシロを袁術へ紹介し、その得意技であるわたあめを披露して楽しませた。そんなやり取りをし、袁術は張勲と共に城へと帰つたのだが、その去り際に……

しんのすけ、妾と……その……

何？

と、友達になつて欲しいのじゃ！……駄目かの？

いいよ。じゃ、お友達の握手だぞ。

命令ではなく要望の形にしたのは、袁術の本心だったのか。それとも、その時ばかりはただの人として接したかつたのかは分からない。とにかくこの出来事を通して、しんのすけと袁術は友人となつた。張勲はそんな袁術にどこか意外そうな表情を見せていたが、最後にはその笑顔を見て嬉しそうに表情を輝かせていた。

「しんに来て良かったか、しんのすけ」

「そうだね。えんちゃんとお友達になれたし、この街をみやこみたいにはしないって言ってくれたぞ」

「ふふつ、そうか。それは良かったな」

「キャンキャン」

食事をするために歩く道すがら、そんな会話をするしんのすけ達。少し頂点から下がり始めた日差しを浴びながら、その姿は通りの雑踏の中に消えるのだった……

その頃、袁術と言えば……

「え？ 洛陽へ向けて軍を動かす方法ですかー？」

「つむ。何か手はないかの、七乃」

城に戻るなり、兵士達へ街の者達を怖がらせる事無く警備をする
ように厳命しろと言い出した袁術。しかも、他にも何か街の者達が
不満に思っている事や問題になつてている事はないか調べるようにと
くれば、張勲と言えど色々と思つ事もある。最たるもののが孫策達へ
の待遇改善指示だ。それにはさすがに張勲もどうかと意見したのだが、袁術は孫策こそ忠臣であると取り合わずに張勲が折れる形とな
つた。

それらに違和感を感じながらも、張勲はそのために同僚である紀
靈を始めとした重臣達にその旨を伝えた。その矢先、とどめとばか
りにそう言われれば、間違いなく原因はしんのすけと思おつものだ。
だが、それによる変化で袁術に対する気持ちが失せるような張
勲ではない。むしろ自主的に動いて空回るだろう袁術を見たいと思
い、愛すべき主君のためにとその普段は眠っている能力を使い、要
望を叶えるために考えを巡らせていぐ。

「……袁紹さんを利用しましょつか

「麗羽を？」

「ええ。今の洛陽は荒れると聞いたんですよね？」

張勲の言葉に頷く袁術。しんのすけから聞いたから間違いないと。それに張勲は頷いてこう告げたのだ。袁紹を動かして諸侯を全て巻き込もうと。袁術だけでは動けないし、不安もある。しかし、そこに袁紹を始めとする連合軍を作り洛陽へ侵攻すればいいのだと。それに袁術が良い案だと褒めるのだが、すぐにある事に気付いた。それは大義名分がない事だ。何の理由もなく諸侯が動く訳がない。そう袁術が言うと、張勲は指を左右に動かし、任せろとばかりに告げた。

「洛陽が荒れてるのが事実ですから、それを大義名分にする事は簡単ですよー。それに誰もが名を上げる機会を窺つてるでしょうから。で、その機会を与えるこれは、絶対上手く行きますしー。まあ、さすがに朝廷が悪いとは言えませんからねえ。なので、肝心の原因をそこにいる人のせいにすれば、その人を倒して洛陽の人達を助けようって名目が出来ます」

「おおー！ わすが七乃じや！ 褒めてつかわすぞ！」

「ああん、勿体無いお言葉ですよー、お嬢さまあー

袁術からの言葉に表情を緩める張勲。その笑顔は眩しいぐらいだ。その笑顔を見て袁術も笑みを返しも、表情を若干曇らせて気になつた事を問いかける。

「でもよいのか？ 一体誰は知らんが、そんな相手に仕立て上げても……」

「何言つてるんですか、お嬢さま。戦いに犠牲は付き物ですよ」

「そんなものか？」

「はい。犠牲を恐れて戦争は出来ないですからねー」

袁術の疑問に張勲はそう断言した。それから袁術へ袁紹が参加するだろう理由を告げた。この時、袁紹は十常侍を暗殺している。そこから考えても袁紹が洛陽に関する事を拒否するはずはない。そう張勲は考えていた。後はその気持ちを後押ししてやるだけ。それも単純な袁紹が即座に反応するような内容で。

だがこの頃、袁紹はまだ洛陽を治める形になつた董卓へそこまで関心を払つていなかつた。しんのすけと出会い、自分が天の御遣いと同等であると言われたため、余裕を持つていたためだ。十常侍を暗殺した理由は、単に振る舞いが優雅ではないので気に入らなかつたからなのだから。

それを張勲は知るはずがない。それでもその性格を理解している張勲は、どこか納得出来ないような表情をしている袁術へ自分の段取りを説明していく。悪役を仕立て上げる事に疑問を抱いていた袁術も、張勲に洛陽を救う決意をした事を褒められてしまえば、意識をそこから逸らしていくのが当然で……

「さすがお嬢さま！ 全ての諸侯を巻き込むなんて、私達には出来ない事を平氣でやつてのける。そこに痺れる憧れるぅ！」

「あはははは！ あまり褒めるでないぞ、七乃！」

「しかも汚れ役を他人に押し付け。よつ！ 汚い！ さすがお嬢さま汚いつー！」

「わははははー！」

最後の内容は張勲発案なのだが、それに気付いて突っ込む程袁術は鋭くない。いや、一度乗せられてしまえば、だろうか。褒め言葉と皮肉の違いも分からず、歓声と罵声さえ取り違えるのだから。

そうして張勲は袁術を乗せ続け、上機嫌で高笑いを続ける彼女を一しきり堪能した後、一人今後のための動きを起こすべく袁紹宛ての手紙を書き始める。勿論、袁術の代筆といつ形で。

今の洛陽が荒れ始めているという噂がこの街へも聞こえてきた。その原因は、幼い皇帝を仕立て上げ朝廷を蔑ろに自分勝手に動かして政治を行う存在がいるからと民達が口々に言っている。名族袁家として、それを正すために正義の軍勢を以つて洛陽へ攻め入るべきではないか。

ちゃんと途中には、自分で役不足であり、袁紹しかそれを諸侯へ伝え動かせる者はいないとおだてるのを忘れない。こうして張勲は、単純に言えばそんな内容を書き上げ、最後に倒すべき相手の名を書き記すべく筆を下ろそうとして、その手を止めた。

「ええっと……確かに今の洛陽を占拠してるのは……」

そこで張勲は少しだけ難しい顔になる。以前聞いた情報を思い出すためだ。現在、洛陽で懸命に何進や十常侍が原因で起きた事態を收拾しようとしている者。本来であれば、責められる事などない相手である存在の事を。

少しの間の後、その名前を思い出した張勲は一人満足そうに頷いてこう締め括った。

逆賊、董卓を討つために……

しんのすけと出会い、無能な君主ではなくなるうとし始めた袁術。だが、その気持ちが逸り過ぎる事で次なる戦乱を呼ぶ。動き出す大

陸を覆う次なる嵐。それは、予言通りしんのすけがキッカケで起るもの。

さあ、開幕の鐘は鳴られた。動き出した乱世の風に立ち向かうは、平和を願う幾多の想いと嵐を呼ぶ少年。かくして外史の流れは変わり出す。激しく静かな渦巻いて……

放浪編終了。次回は幕間で反董卓連合結成までの流れとしんのすけへ迫られる決断を。

袁術の要望から生まれた張勲の計画。その洛陽侵攻を正当化するための策は着実に動き出した。張勲の書いた手紙を読むや否や、袁紹はその文面に踊らされるように各地の諸侯へ檄文を送るよう指示を出す。

曹操、孫策と言った名だたる者達へ送られるそれ。ある者はその行動が本来持つはずだった裏に気付いてため息を吐き、ある者はこれこそ自分達の待ち望んだ機会とばかりに笑い、ある者は素直にその内容を信じて義憤に燃える。

それを知らず、しんのすけ達は行く。目指すは桃香達がいる平原。だが、その旅路は思わぬ中断を余儀なくされる。それは、とある街に立ち寄った際の事。

洛陽で董卓という者が私欲のままに朝廷を牛耳っているらしい。

そんな噂と共に聞こえてくる反董卓連合の話。袁紹を筆頭に各地の有力諸侯が次々と参加を表明しているとのそれ。星はその話を聞いて、自分が待ち望んだ時が来たと悟った。義勇兵としてその連合に参加し、洛陽に巣食う悪の芽を正々堂々と摘み取る事が出来る。そこまで考え、星はしんのすけへ問いかけた。それはその連合に参加した時の事。おそらくそこには、この旅で出会った者達がほとんど顔を揃えている。ならば、そこでしんのすけの決断を聞こうと思つたのだ。

「しんのすけ、少しいいか?」

「なあ」「？」

「洛陽の悪を成敗出来る機会が出来た。私はそれに参加しようと思つたが、そこにはおそらく桃香殿達もいる」

「おー、そういうんだ。じゃ、桃香ひやん達に会いにやこへ行ーー」

星の告げた内容の半分しか理解していないしんのすけ。しかし、星はそれでもいいと思ったのだろう。それに頷き、続きを語る。そこには曹操達などもいるだろうから、そこでしんのすけが誰を救うかを決める事は出来ないかと。それにしんのすけはやや考え込むよう腕を組んだ。

星からの申し出を受けるか否かを決めていなかつたのもあるが、やはりまだ決めかねている部分が多いのだ。そのため、しんのすけはこう返した。その場へ行き、もう一度それぞれの顔を見て決めたいと。それに星は頷いた。

そしてしんのすけ達はその街でその連合が集合している場所を聞き出し、そこへ向かつて急ぎ田に行動を開始した。たいく防衛隊としての行動を起こすために。だが、星にはふと思いつく者達がいた。

「張遼殿達は……おそれく相手側か

「どーしたの?」

「へ? ?」

「いや、何でもない」

しんのすけへはまだ言わない方がいいだろ。そんな風に考え、星は何事も無かつたかのように歩き出す。その横をついていくよう歩くしんのすけとシロ。向かつ先で待つのは一体何か。あの盜賊との戦い以来となる乱世の顔。それをしんのすけが見る事になる日は近い……

「これは参加するべきだね」

「ですが桃香様、あまりにも情報が……」

桃香の言葉に諸葛亮はそう言い難そうに声を出した。主君として仰ぐ桃香の性格は彼女とてよく知っている。袁紹から送られてきた檄文の内容からして、必ずそう言うとは思っていた。しかし、この文には情報が少なすぎるのだ。

洛陽が荒れ果て、そこに住まう民が苦しんでいる。その原因は朝廷を意のままに動かす董卓だ。それだけしか情報がなく、しかも真偽も定かではない。それを諸葛亮が指摘するのだが、それでも桃香はそれを承知していくこう答えた。

「それでも、洛陽が荒れて住んでる人が困つてるのは事実だと思つ。火の無い所に煙は立たないって言つ」

「……桃香様らしいです」

「では、我らは連合に参加して洛陽の民を救つと?」

桃香の迷い無い言葉に諸葛亮が軽く苦笑して返せば、それを聞いて愛紗がそう桃香へ確認を取る。それに桃香は頷いた。大陸の民を救う事。それが自分のすべき事だからと、そつ言い切つて。

それに愛紗と諸葛亮が頷き、鈴々は頷くも何かを思い出したのか嫌そうな顔をした。それに隣にいた鳳統が気付き、不思議そうに問い合わせた。

「どうしたの？ 鈴々ちゃん」

「またあの春巻きと会つかもしれないのだ。わざ思つたら、少し行くのが嫌になつたのだ」

「許緒ちゃんでしたね。あの怪力は鈴々ちゃんといい勝負でしたか
うら」

「にも関わらず仲はあまりよくなかったな。歳も近からう……」

諸葛亮の言葉に続くように愛紗が呆れつつそう告げた。それに桃香も鳳統も苦笑した。曹操軍と共に行動していた時、鈴々は許緒と喧嘩ばかりしていたのだ。力を張り合つ事などしそうちゅうだつたのだから。

それを思い出し、鈴々以外が懐かしむように笑う。もうあの黄巾の乱から時間も経つた。政治にもある程度の成果が出始め、やつと色々と形になつてきた矢先、再び戦乱を告げる檄文が来た。それに対し桃香が思つのは、しんのすけの事。

(しんちゅうさん、わづ白蓮ちゃんの所にいないもんなあ。星さんと旅をしてるわしこいけど、今、どこで何をしてるんだろ？)

少し前に送つた手紙で知つた事實を思い出し、桃香は思いを馳せ

る。きっとこの檄文の事を知ったのなら参加するだらう少年へ。そんな彼にもう一度会いたい。そんな風に思いながら、桃香は檄文に記された期日に間に合わせるために動き出すべく指示を出す。

諸葛亮と鳳統が主になり、愛紗と鈴々は軍を整える。それを眺め、桃香はふと胸騒ぎを感じた。この戦いが自分が一番望まない状況への第一歩になるような、そんな予感を……

白蓮は後悔していた。それは何も袁紹からの檄文に共感し、連合に参加した事ではない。あまりにも早く着き過ぎた自分の残念さにだ。何故ならば、そのために彼女は、袁紹と一緒にきりで他の諸侯を待つはめになつたのだから。

「どうしましたの、白蓮さん。何か元気ありませんわね」

「いや、まあ……ちょっとな」

袁紹から軽く心配されるという珍事を経験し、白蓮は少しだけ意外に思いながらため息を吐く。それでも、先程の会話に比べればそこまで驚く事は無かつたが。

（まさかしんのすけの事を言つて当てるとはなあ……）

そう、袁紹は白蓮へ話したい事があると言つて自分用の天幕へ呼び出したのだ。そこで、しんのすけが天の御遣いだろうと袁紹から言われた。それに白蓮は驚いたが、それを利用しないと言われたのはもつと驚きだった。

袁紹はそんな白蓮にこつ言つた。しんのすけが天の御遣いだとしても、それは何の役にも立たないだろ。何せしんのすけには威儀も無ければ神秘性もない。つまり、天の御遣いと周囲へ知らしめる手段が無さ過ぎると。

白蓮はそれに同意した。そんな白蓮に袁紹は最後にひづ告げた。

それに、子供を利用するなんて優雅ではありませんわ。

それに白蓮は思わず笑つてしまつた。理由が袁紹らしいと思つただけではない。その言葉がどこか以前自分が星へ告げたものと同じに聞こえたからだ。

天の御遣いなんて端から当てにしてないぞ。それに、大人の尻拭いを子供に押し付ける気はない。

故に自分が知る袁紹ではない何かをそこに感じ、白蓮は察した。しんのすけが袁紹に影響を『えて』いつた事を。

「でも麗羽、よく洛陽の事をどうにかしようと思つたな。お前ならそんな事に構わないと思つてた」

「お~つほつほつほ! 私も最初はどうでも良かつたんですけど、美羽さんから来た手紙にあつたんですね。民達に正義を示すのが名族の務めだと」

「正義、ねえ……」

袁紹の言葉に白蓮は苦笑した。袁紹は、正義などという言葉が似合わない相手だったからだ。これが星や桃香辺りならそうは思わなかつたからだ。これが星や桃香辺りならそうは思わなかつたからだ。

かつただろうが、袁紹には違和感しかない。白蓮はそんな事を考え、ふと高笑いをする袁紹へこう告げた。

袁紹の所から離れた後、しんのすけはびくへ行つたのかと。それに袁紹は高笑いを中断し、少し思い出すように腕を組んだ。そしてすぐに思い出したのかこいつ答えた。

「華琳さんの所でしたわね。私が紹介状を書いて差し上げたから間違いないですわ」

「曹操か。また氣難しい相手の所だなあ。あいつ、何か変な事してなきやいいけど……」

そんな事を白蓮が呟くと、そこへ顔良と文醜が入つて來た。顔良の手にはお盆があり、そこには茶器が二つ載つている。

「麗羽様、白蓮様、お茶をお持ちしました」

「それと、まだ他の軍は現れません」

「ありがとう斗説さん。にしても、揃いも揃つてノロマですわね」

「まあ、仕方ないだろ。私はすぐにあれが届いたけど、他はそれなりに遅いだらうからな」

袁紹の言葉に白蓮は宥めるよつに答えた。それに顔良も同意するよつに頷き、文醜はそんな言葉に何かを思い出したのか、ぶつぶつ言い出した。それを見て顔良がどうかしたのかと問い合わせた。すると、文醜は少しだけ不満そうにこいつ答えた。

「いや、きょつちー達はもう來てもおかしくないと思つてさ。あた

しらが直接行つたんだし

「色々と準備してゐるんだよ。曹操さんはかなりしつかりした人だか
ら」

顔良はそう言って苦笑した。曹操が参加すると言つた時、彼女は意外に思つたのだ。確かにこの檄文は断る事が出来ない内容だ。しかし、それでも即決するとは思つていなかつたのだから。それが曹操は意外にもあつさり参加を告げた。

その理由は色々と考える事が出来るが、顔良としてはそこに何故かしんのすけが関係している気がしていいたのだ。それは、曹操に聞かれた言葉が原因。

しんのすけは麗羽とどういう関係なの？

迂闊な事は言えないと瞬時に判断した顔良は、それに自分は知らないと答えた。袁紹しか知らない事の一点張りで。疑われても構わないと思つて答えたのだが、曹操はそれに納得したのかそれ以上何も聞いては来なかつた。

文醜に聞かれていたらどうなつていたかは分からなかつたが、顔良はその時ばかりは同僚の頭の巡りの悪さに感謝した。それを知つている曹操だつたからこそ、自分へと尋ねたのだろうから。そして、そこから顔良は曹操の考え方ある程度推測していく。

(曹操さんが、もししんちゃんの正体を知つているとすればあんな事は聞かないはず。きっと、曹操さんはまだしんちゃんの事を変わつた子供ぐらゐにしか思つてないんだ)

それでも気になるからこそ、その正体を探ろうとしてるのだろう。そう顔良は結論付けてため息を吐く。今、この大陸で強い勢力にな

りつつある曹操。そこがしんのすけの正体を知った時どうなるかを考えたのだ。

利用するしかない。しかも、それはしんのすけの望むと望まざるに関らず曹操のためにその存在を使われる。それは顔良からしても許せる事ではない。袁紹はそれを優雅ではないと断言し、自らほしないと告げた。

「……しんちゃんは誰の物でもない。この大陸に遣わされた平和の使者なんだもんね」

そう咳き、顔良は考える。曹操が本当にそうするかは顔良には分からぬ。だが、その可能性がある以上、絶対にそれを教える訳にはいかない。白蓮と袁紹はしんのすけの正体を知りながらも利用しないと決めた。だから、そうと考へる相手と分からぬ内は警戒しき続けよう。そんな風に思い、顔良は密かに頷いた。

そんな彼女の横では、文醜が一人大きく伸びをしながら天幕の外に向かつて叫んでいた。

「早く来いよ、きょっちいいいい！」

「くしゅん！」

「季衣、どうしたの？ 風邪？」

突然くしゃみをした親友を心配して問い合わせるショートカットに

大きなリボンの少女。それに許緒は何でもないとばかりに笑い、手を左右に動かした。

「違うと思つ。多分いつちーが早く来ないかなつて噂してゐんだよ、
流琉」

「あー、あの時の人か。確かに文醜さんだつたよね」

典韋がそう思い出すように言つと許緒がそれを肯定するように頷く。曹操に直接反董卓連合の誘いをしに来た顔良と文醜。その一人はまず、城ではなく街の中にある一軒の料理店へ足を運んだ。実はそこへ案内したのは許緒。街の警備をしている兵に屋台街を教えてもらい、そこへ案内された一人と許緒が出会つたのだ。

性格が似てゐるからか文醜と軽い喧嘩になつた許緒だったが、夏侯淵が薦めていた店に連れて行つたのだ。そこは典韋が働いていた場所だつたため、再会した許緒と典韋が軽く揉めた。それをその場にいた顔良と文醜が止めに入つた経緯がある。そのため、二人にとつては忘れられない人物となつていたのだ。

そう、揉めた原因は許緒からの手紙にある。それによつて陳留に來た典韋だったが、城で働いているとの許緒の言葉を鵜呑みに出来ず、その近くで働いていると勘違い。そのため料理自慢の腕を活かして城近くで働きながら、一人許緒を捜していたのだ。

つまり、その事をちゃんと信じられるように書かなかつた事を責める典韋と、自分が嘘を吐いた事がないのに信じなかつた事を責める許緒が喧嘩したという訳だつた。

「それにしても、趙雲さんが負けたのがいつちーだったとは思わなかつたなあ」

「趙雲さんつて、春蘭様と互角に渡り合つたってみんなが言つてた人だよね？」

許緒の言葉に典韋が確認するように問いかけると、それを聞いていたのかそこへ割つて入る声があつた。

「そうだ。まあ、原因は文醜自身から聞いたので納得はしたがな」

「うむ、まさか姉者と同じく試合中に意識を乱したからとはな。道理でしんのすけの言葉に動じないはずだ」

夏侯惇の言葉に夏侯淵が続くよつに告げた内容に一人も頷いた。夏侯惇と互角の者が負けた原因。それが試合中に文醜がやつた命がけの行動に対して、星が動搖したからだと言われたのだ。

それを聞いて、曹操達は揃つて星が何故あの時動じなかつたかを理解した。同じ轍は踏まないという事だったのだと。しかし、それを話した文醜はこつも言つた。

それにあの時、趙雲はわざと避けなかつたんです。なので、あたいは本当に勝つたなんて思つてないですよ。

その言葉に誰もが文醜を少しだけ意外そうに見つめたのだ。格上に勝つたと喜ぶ事無く、その勝利を自分でさえ拾わせてもらつたものと考えている。それがどこか文醜の性格からすれば意外に思えたのだ。

その時の事を思い出したのか、樂進が噛み締めるように呟いた。同じ武人として星と真剣勝負を出来た文醜への羨望と、その結果の受け止め方に感心していたのだ。

「私も文醜殿のように趙雲殿と戦つてみたかった……」

「でもお、凪ひやんは何度か手合わせしたんでしょ？」

「せや。早朝に稽古つこでござつた聞いたで」

于禁の疑問を込めた言葉に李典が乗つかるよつて告げる。それに樂進は頷いてみせるのだが、こう答えた。早朝にやつていたものはあくまで軽いもので本気の手合させではなかつた。しかもしんのすけへの稽古もあつたため、結局一度として全力での試合は出来なかつたと。

それを聞いていた周囲に混じつて樂進へある事を問い合わせる者がいた。曹操だ。曹操は興味深そうに樂進へ尋ねた。しんのすけの稽古は何をしていたのかと。それに樂進はあつさり答えた。

「ひたすら趙雲殿の攻撃をかわす訓練をしていました」

「かわすだけ？」

「はい。趙雲殿が言つては、しんのすけには戦う術ではなく生き残る術を教えておきたいのだとか」

「生き残る術……か」

曹操は樂進の言葉に以前の結論を思い出していた。星から主君のよつな扱いを受けているしんのすけ。それはどうしてか。荀?と共に考えた結果、ある結論が出て來たのだ。

「桂花、やはり間違いなさそつね」

「そのようです。まあ、あまり信じたくはありませんが……」

曹操の楽しそうな声に荀？はやや嫌そうに答えた。しんのすけに乱世を生き残る術を教える。それ自体は何もおかしくない。だが、戦うのではなく生き残る事に重点を置いた点から、曹操と荀？は自分達が出した結論に納得を与えた。

戦場に出ても自ら戦うのではなく、いざと言つ時に生き残れるために鍛えられる。それは武人の生き方ではない。そう、それを望まれるのはもっと違う者達。どんな時でも生き残る事を望まれる存在。それは君主だ。

だがしんのすけには治める國などない。とすれば、残る可能性はただ一つ。と、そこまで考え、曹操は視線を自分の後方へ向けた。そこには一人の人物がいる。ある事がキッカケで曹操が呼び寄せた者達だ。

「どうやら趙雲にとつて、しんのすけは余程死なれては困る存在のようね。貴女達も同じ気持ちなのかしら？」

「それは……」

曹操の問いかけに一人はどう答えるべきかと判断に迷う。曹操がしんのすけの正体に薄々気付きつつあると感じているからだ。なので、隣の親友はどうするとと思い視線を動かす女性。だが……

「……ぐう~」

「「寝るなっ！」」

「おおっ！ いやー、あまりに答え難い問い合わせだったのでー」

寝た振りをする相手を軽く叩いて起こす女性と怒りをぶつける荀？。それに相手は目を開けてそつそらりと言いのけた。その答えに曹操は小さく笑う。答えを言わないまでも、一人の反応だけで大体の答えになつていたからだ。

しかし、今ここでそれを周囲に教える必要はないと思い、曹操は前を向いて空を見上げた。そこには青空が広がっている。それに微笑みを浮かべると、そのまま後ろで揉め始める荀？達へ視線を向けて告げた。

「とにかく、今はこの戦を利用して今後のための動きをするとしますよ。桂花、稟、風。お前達の知略、見事活かしてみせよー。」

その揃つた返事に曹操は頷き返し、更に夏侯惇達へ視線を動かす。

「春蘭、秋蘭。お前達の武勇、大陸中に響かせよー。」

「「はいっー。」

「季衣、流琉。この戦で十分経験を積み、次なる戦に備えよー。」

「「はいっー。」

「凪、沙和、真桜。此度の戦にて、我が軍の武将として恥ずかしくない戦いをせよー。」

「「「御意（なの）っー。」」

その返事を聞き、曹操は凜々しい表情のまま告げる。それは、この戦いだけではなくこれからを見据えた言葉。

行くぞ！ こゝの戦を我が霸道の始まりとするつ！

袁紹が待つ連合の集合地点を目指して動く袁術軍。その中に孫策達孫呂勢の姿があった。その中心人物である孫策は、親友であり軍師である周瑜と共にやや困惑した表情をしていた。

「ね、袁術ちやんの態度なんだけど……」

「ああ。最近妙だと思っていたが、納得した。原因があいつならばな」

「やつぱり？ まさかの忠臣扱いにいきなりの待遇改善。最初は何事かと思つたわよ」

孫策はそう言つて楽しそうに笑う。今回の檄文について参加の意思を持つた孫策は、一応の主君である袁術の許可を取るうつと思って出向いたのだが、そこではつきりさせたのだ。自分達に対する対応の急激な変化。その原因を。

「こゝからを油断させるためかと思いましたが、よもやあの小僧が袁術めに変な事を吹き込んだとは」

黄蓋も一人の会話に参加し、しみじみとそう告げた。それに周囲

も同意するよに頷き、同時に苦笑した。そう、孫策が袁術へ尋ねたのだ。どうして急に扱いを変えたのかと。それに対する袁術の答えは実に単純だった。

妾の友人が教えてくれたのじゃ。お前こそ真の忠臣じゃと。
感謝するよいぞ、わはは！

袁術の友人など孫策の知る限りいない。ましてや、自分の事を袁術に忠臣と言う者などいるはずがない。そこまで考え、まさかとう考えがよぎったのだ。それに変な勘違いをしたのか、張勲が孫策へ呆れ気味に答えた言葉が全てを理解させた。

背に木刀を背負つた妙な子供が袁術へ色々と吹き込んだらしいと。その表現だけで孫策は全てを理解した。しんのすけが袁術と出会い、何かを教えて誤解させたのだろうと。だが、彼女達としてはそれに感謝したいぐらいだった。何故ならそれは……

「おかげで袁術がこちらへ警戒心を向ける事はなくなりましたね~」

「まさか結果的にはいえ、独立のための援護をしてくれるとのはな
……」

「小蓮様が聞けば喜ばれるでしょうね~」

陸遜の言葉にやや嬉しそうに孫權が続くと、周泰が笑顔で締め括る。しんのすけと友人となつた尚香。今は元居た街へ戻り退屈な時間過ぎしているだろうが、再会出来た時にはこの事を話さないといけないと、そんな風に思う周泰。

そんな彼女を見て、甘寧はやや憮然としていた。彼女にとつてしんのすけは幼いにも関わらず女性に色目を使い、孫權達へ礼儀もなっていない子供なのだ。それが知らぬ所で自分達の助けをしていたな

どと聞いて、不覚にも一いつ思つてしまつたのだ。やはり只者ではなかつた。

「ですが、まだ油断は出来ません。袁術はともかく、張勲は警戒している可能性があります」

「わうだな。思春の言つ通りだ」

甘寧の言葉に周瑜が頷き、周囲もそれに同調するように頷いた。これまで通り慎重に事を進めよう。そんな風に誰もが思ったのだ。だが、唯一孫策だけは少し迷うような表情を見せていた。

（袁術ちゃんがあそこまで変わるとは思わなかつたわ。私の真似して街を見て歩いてるらしくし、積極的に民達の意見を聞いて政に活動そうとしてる……）

憎いだけだった相手。それが少し変わつたある。民を思い、良き領主を目指す存在に。そう考えると、孫策といえど今までのように躊躇もなく殺せる相手と言い切る事が難しい。以前のままならば、周囲に操られる暗愚として一瞬たりとも迷う事無く処断出来た。それが今までいけば、名君とはならぬだろうが領民から慕われるぐらゐの者にはなつてしまつ。そうなれば、袁術を殺した孫策達の評判はあまり良くはならない。ならば、方法は一つ。袁術が領民達から慕われるようになる前に独立してしまうか、或いは……と、そこまで考え孫策は小さく息を吐いた。

まったく、困った事をしてくれたわね。これじゃ、有難いんだか迷惑なんだか分からないわよ……

孫策は誰にも気付かれる事無く小さく呟いた。その声には、しん

のすけに対する複雑な思いが込められている。そんな呴きは、静かに大勢の者が立てる足音の中に消えるのだつた……

孫策達から離れる事少し。そこに袁術と張勲の姿があつた。張勲の操る馬に乗り、袁術は意氣揚々としていた。

「この戦で妾達が大勝し洛陽の者達を助ければ、天下に妾の名が轟くの！」

「そうですねえ。しかも、諸侯の間でも更に名前が知れ渡るでしょうから色々と有難いですし」

大陸中に名を轟かし、しかもそれが善政のために戦つたとなれば、民の間での評判は天井知らずとなる。つまり、そんな存在を倒そうとする者は、余程の理由があるか袁術以上の人気者でない限り民達の不評を買つ事になる。張勲はそう考え、現状でそんな事が許される相手を考える。

その数はあまり多くはない。だが、この戦でそれが変わる可能性がある事は重々承知している。だからこそ、張勲は孫策達を何とか利用しようとしていた。袁術には悪いが、張勲はあまり孫策達を信用していいのだ。

（お嬢さまは忠臣だつて言ひけど、以前はたまに凄い怖い目をしていたんですね。今は待遇良くしたせいか、そんな目をしなくなりましたけど……）

孫策の視線を思い出し、張勲は小さく震えた。その震えに気付いた袁術は、視線を上に向けて不思議そうに小首を傾げた。

「ん？ 七乃、どうしたのじゃ？」

「はい？」

「いや、顔色があまり良くないよう見えたから。風邪でも引いたかや？」

その言葉に張勲は、先程自分が思い出していた事が原因で袁術に心配をかけてしまったと理解した。なので、嬉しそうに笑みを見せつそれに何でもないと答える。その張勲の顔がいつものように戻つたため、袁術もそれに納得して視線を前へ戻した。

しんのすけと出会い、聞いた洛陽の現状。それを何とかしたいと告げたしんのすけの気持ちを尊いと思い、自分がそれを代わりに成してみせようと思い立つた今回の戦。そう、袁術は初めて自分の意思で自分の行動を決めたのだ。そう考え、袁術はふと思つた事があった。

「のう七乃」

「何ですか？」

袁術がどこか不安そうな表情を見せたため、張勲はどうしたのだろうと思ひながらも返事を返す。それに袁術は恐る恐る問い合わせた。

「しんのすけは今の妾を褒めてくれるかの？」

「当たり前じゃないですか。仮にお嬢さまの友人なんですから、

「いいで褒めな」で「あらうてござりますよ」

「やうか！ 妻は褒めてもらえるか！」

「はい！ よつ！ さすがお嬢さま！ 友人に褒めてもらつためだけに戦を起こすなんて、誰もが呆れ果てるぐらいの前代未聞の大馬鹿者です！」

「わははは！ それほどでもないぞ！…」

張勲の言葉に満面の笑みで答える袁術。それを見て張勲は益々嬉しそうな表情へと変わっていく。それは、まさしくいつもの光景。常人には入り込めない雰囲気がそこにある。実に恐ろしい事に、そんなやり取りは日が暮れるまで続くのだった……

「袁紹が発起人となつた連合軍はかなりの規模になりそうね」

「まつたく、こちらの事を何も知らん癖に！」

賈駆の言葉に華雄が忌々しげに机を叩いた。洛陽にある王宮。その一角にある会議室。そこに董卓を含む主だった者達が集まつていた。議題は当然ながら彼らを逆賊扱いして集結しつつある連合軍に対する事だ。

「色々とバタバタしとるといふに戦とはなあ。袁紹はそないに用が憎いんやろか？」

「どうよりは、おそらく洛陽の実権を握っている事が気に入らないのですよ。実際はそんなにいい物でもないのですが……」

張遼の言葉に背の低い黒い帽子を被った少女が答えた。彼女の名は陳宮。呂布の軍師をしている少女だ。

「ねねの言つ通りね。出来るべらりなら押し付けてやりたいべらり上」

「それで詠ちゃん、どうすればいいの？」

賈駆の呆れ声にそれまで黙っていた董卓が口を開いた。平和的な性格をしている彼女は、出来る事なら戦う事無く全てを終わらせたいと考えている。それを賈駆も知っている。知っているが、それが出来ない事も理解していた。

連合の目的が洛陽から董卓を追い出す事ならば何とかなる。だが、おそらく追い出す事だけでは済まない。大陸中に自分達の正当性を訴えるためにその首を欲しがるはずだ。つまり、董卓を死なせずに戦を終わらせる方法はない。

「一先ず徹底抗戦しかないわ。？水関と虎牢関を有効活用すれば、どんな大軍相手でも何とか出来るから」

「時間を稼いでどないする気や？」

賈駆の告げた内容に張遼はそう切り出した。その裏にある目的を問い合わせるために、一つの閑を使えば確かに連合軍を相手にしても戦える。だがそれはあくまで防衛。

しかも、兵数で圧倒的に不利な今の状況では、一時的な優位には

立てるだろうが最終的な勝利を掴む事は難しい。だからこそ聞きたかったのだ。時間を稼いでどうするのかと。それには賈駆ではなく陳宮が答えた。

「万が一のために、逃げる準備をするからですぞ」

「……逃げるの？」

「ええ。この戦いは勝つ事が難しいし、負ける確率の方が圧倒的に高い。でも、それは大局的にはあって、戦略的には楽に勝てるの。それは、月を無事に洛陽から逃がす事。月がここから逃げ出せば、後は僕が何とかするわ」

呂布が言った言葉に賈駆が答える。本音を言えばそれでは勝てない。董卓が生きているとなれば、必ず捜索隊が結成されてしまう。つまり、董卓を逃がすだけではなく、誰かが董卓として死ぬ必要があるのだ。それもあって、後は自分が何とかすると言ったのだから。

だが、それを賈駆は言つつもりはない。言えば、必ず董卓がどうするかが分かるからだ。幸いにして、諸侯に董卓の顔は知られていない。董卓の事を知っていた者達は揃つて今回のごたごたで死んでしまった。故に偽装は簡単なのだ。董卓と同じように顔を知られない誰かが洛陽に残り、董卓と言い張つて殺されればいいのだから。

そこまで考え、賈駆は周囲を見渡した。呂布に張遼、華雄の猛将に軍師の陳宮と自分がいる。たつたこれだけだが、その力がかなりのものだと賈駆は知っている。

そして、その五人が董卓の事を助けたいと思っているのだから。ならば、結末は一つでしか有り得ない。そう思い、賈駆は董卓へ視

線を向けた。

「月、心配しないで。絶対上手く行くから」

「詠ちゃん……」

「大丈夫よ。さ、早速だけど？水関には霞と華雄に行つてもりうわ。虎牢関は恋とねねが守つて」

董卓の不安そうな声に笑顔で返し、賈駆はすぐに軍師の顔へ戻るとそれぞれへ指示を出す。そんな姿を董卓は頬もしく思ひ反面、どこか心配で仕方なかつた。いつも自分のために動いてくれる親友。それが今もまた無理をしようとしている感じたからだ。

しかも、どうも今回はそれだけで終わらない気がする。そう感じて董卓は自分の手を強く握り締める。何か力になれる事はないだろうかと。いつも自分は誰かに頼つてばかりだった。だから、何でもいいから自分がやれる事が欲しかつたのだ。

(詠ちゃん達に任せただけじゃ駄目だ。私も何かお手伝い出来る事があるはず……)

「詠ちゃん、私にも何かやれる事はない？」

「……じゃあ、いつでも逃げ出せるように準備をしておいて。まあ、それが無駄になるようこじてみせるナビ」

董卓の言葉に賈駆はそつすまなそつに返すと、最後には笑みを浮かべてみせた。それに董卓も笑みを返し頷いた。それを見て、賈駆は周囲へ視線を動かして鋭く告げる。

「いい？ この戦いは防衛戦よ。余程がない限りこちらから仕掛けたりはしない事」

「分かつた」

「了解や」

「……うん」

「分かつてますぞー」

それぞれが賈駆の言葉に答えていく。静かにだが、そこには明確な闘志がある。それを感じ取り、賈駆は頷いた。自分の大切な親友を守るために戦い。それが今始まつたのだと、そう心から思いながら。

だが、その一方で張遼と華雄はある者の事を思い出していた。それは、この連合の事を聞けば参加するだらう者の事。そう、洛陽の民のために朝廷へ喧嘩を売つてみせた星の事だ。

（あの趙雲の事や、きっとこの話に乗つてくるはず……戦うんを楽しみになんて言つたら、賈駆つちに怒られるか。ま、こんな形ではやりあいと一なかつたけどな……）

（趙雲の奴ならば、おそらく連合側に付くな。だが、それは我々と戦うためではなく洛陽の民のためにだろ？ が……やりきれんな）

あの時交わした約束が嫌な形で果たされると想い、やや複雑な表情を浮かべる二人。出来る事なら眞実を教えて手を貸して欲しいが、それが出来るぐらいならもうやつているのだ。既に大陸中で董卓は悪人と仕立て上げられてしまっている以上、それを覆すにはかなり

の時間と労力がいる。

そして、そのための手段を講じられる程の余裕が今の董卓軍はない。それを重々承知しているからこそ、張遼も華雄も覚悟を決めていたのだ。武人として、人として守りたいと思つたもののために戦おうと。

「この戦い、絶対負けないわよっ！」

そんな一人を現実に戻すような賈駆の言葉が部屋中に響く。それに全員が一斉に頷いた。絶望はしないと、そう言わんばかりに力強く。こうして運命の輪が動き出すのだった。

天の御遣いによつて繫がれた縁が静かに結ばれ、一つの流れを生み出していく。これは正義無き戦いとは知らず、しんのすけは行く。迫る決断の時を迎えるように。たいりく防衛隊の絆。それがもうすぐ目に見える形になろうとしていた……

幕間。名陣営の思惑や動き。そして真と風の参戦。

次回で共通は完全終了。その後、個別ルートへ入るのでよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0708v/>

嵐を呼ぶ園児、外史へ立つ

2011年10月9日13時04分発行